

一般国道 253 号

上越三和道路関係発掘調査報告書 15

下割遺跡Ⅶ 第10次調査

2024

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道 253 号

上越三和道路関係発掘調査報告書 15

^{しも} ^{わり}
下 割 遺 跡 VII 第 10 次調査

2 0 2 4

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 253 号上越三和道路は上越市寺と上越市三和区本郷を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る一般国道 253 号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域快速道路は、上越地域と魚沼地域の交流を促進するとともに、北陸自動車道を合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指しています。これにより産業・経済・文化の広域的な交流が活発になり、地域の活性化を促進するものと期待されています。

本書は、上越三和道路建設に先立ち、2022（令和 4）年度に実施した下割遺跡第 10 次発掘調査の報告書です。下割遺跡は、縄文時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代、中世を中心に、長期間にわたって営まれた大規模な遺跡で、2002（平成 14）年度から順次、発掘調査を実施しています。このたびの発掘調査においても、縄文時代から中世の遺跡が重なって発見されましたが、なかでも調査事例の少ない飛鳥時代の遺跡が、良好な状態で発見されたことは大きな成果です。

発掘調査で得られた資料や本書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待します。

最後に、この発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた上越市教育委員会並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで、格別の御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して、厚くお礼申し上げます。

2024（令和 6）年 3 月

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長 野 上 文 敏

例 言

- 1 本書は、新潟県上越市米岡・北田中に所在する下割遺跡の発掘調査記録である。下割遺跡の発掘調査は多年度にわたることから、調査年度ごとにローマ数字を連番で付して通称しており、第10次となる今回の発掘調査を「下割遺跡X」とした。なお、下割遺跡の7冊目の発掘調査報告書であることから、本書の書名は「下割遺跡VII」となる。
- 2 発掘調査は一般国道253号上越三和道路の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）・新潟県観光文化スポーツ部文化課（以下、新潟県とする。）の調整を経て、国土交通省高田河川国道事務所（以下、国交省とする。）からの委託を受けた公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする。）が2022年度に実施した。
- 3 埋文事業団は発掘調査・整理業務・関連工事等の一部業務を、株式会社ノガミに委託して実施した。
- 4 整理作業及び報告書作成に係る作業は2022年度に行い、編集作業・印刷刊行を2023年度に行った。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して新潟県が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の注記は、略号を「22下ワリ」とし、出土地点や層位等を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 本書に掲載した遺物番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・遺物図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 引用・参考文献は著者及び発行年（西暦）を本文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第VI章自然科学分析については、各節ごとに掲載した。
- 9 調査成果の一部については、現地説明会資料、広報紙「埋文にいがた」第120号、『2022（令和4）年度新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』、『企画展3 発掘！新潟の遺跡2022』、『新潟県考古学会連絡紙』第134号、『新潟県考古学会第35回大会 研究発表会発表要旨』等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 自然科学分析はパリオ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果（第VI章1～3）は赤堀岳人・金井慎司・田中義文・斉藤崇人・井上哲人・東澤翔が執筆した。また、粒度分析・テフラ分析（第VI章4）は、新潟大学災害・復興科学研究所 ト部厚志教授から玉稿を賜った。
- 11 遺構図・遺物実測図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 12 本書の執筆は加藤 学・中島愛理（以上、埋文事業団）、湯原勝美・細田尚克・高尾得矢・斎藤泰洋（以上、株式会社ノガミ）が当たり、編集は加藤が担当した。執筆分担当は以下のとおりである。なお、第II章は、上越三和道路・上信越自動車道建設に伴い当事業団で作成した既刊の報告書の内容を加筆・再構成し、一部変更したものである。

第1章、第III章、第IV章2A・2D、第VIII章2……加藤	第IV章2B……中島
第IV章1A、第VIII章1……湯原	第IV章1D……湯原・斎藤
第IV章1B、第V章1・2B……細田	第IV章1E……斎藤
	第V章2A……斎藤・高尾
- 13 図書館等（著作権法第31条第1項に規定する図書館等をいう。）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまでに、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 五十音順）

ト部厚志	金田拓也	坂井秀弥	高橋 保	寺崎裕助	古澤要史	綿田弘実	上越市教育委員会
上越市北田中町内会	鶴町町内会	米岡町内会	関川水系土改改良区	長野県栄村教育委員会			

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	3
C 整理作業	5
3 調査・整理体制	6
A 試掘確認調査	6
B 本発掘調査・整理作業	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	9
第Ⅲ章 調査の概要	13
1 グリッドの設定	13
2 記述の方針	13
A 分層・土層注記の方法	13
B 遺構記述の方針	14
3 基本層序と遺構検出面	16
A 市道区	16
B 東 区	20
4 調査の概要	20
A 市道区	21
B 東 区	23
第Ⅳ章 市道区の調査	24
1 遺 構	24
A 第1面 (IVb～Va層上面 / 中世)	24
B 第2面 (Va層上面 / 平安時代)	27
C 第3面 (Vb層上面 / 平安時代)	30
D 第4・5面 (VI層 / 飛鳥時代)	33
E 第6面 (X～XI層上面 / 縄文時代後期)	39
2 遺 物	40
A 中 世	40
B 平安時代	40
C 飛鳥時代	44
D 縄文時代後期	46

第V章 東区の調査	51
1 遺構	51
A 上層(中世)	51
B 下層(古墳時代)	54
2 遺物	54
A 中世	54
B 古墳時代	56
第VI章 自然科学分析	58
1 下割遺跡Xにおける自然科学分析	58
A はじめに	58
B 遺跡周辺の古環境について	58
C 結果	59
D 考察	61
2 木製品の用材選択	62
A 試料	62
B 分析方法	62
C 結果	62
D 考察	64
3 動物利用	64
A 試料	64
B 分析方法	64
C 結果	64
D 考察	66
4 下割遺跡10次調査における基本層序の粒度組成と火山灰層	68
A はじめに	68
B 試料分析	68
C 粒度分析結果	68
D 火山灰層(火山灰質試料)の分析結果	71
E 考察	71
第VII章 まとめ	72
1 飛鳥時代の土器祭祀	72
2 遺跡の形成過程	75
A 周辺地形と遺跡立地	75
B 遺跡調査からわかる堆積環境	75
C 遺跡の消長	77
D 遺跡が累積した背景	81
《引用・参考文献》	82
《観察表》	85

挿 図 目 次

第 1 図	上越三和道路の路線と調査遺跡の位置	1	第 23 図	東側平行溝群と SB8252 の主軸方向	33
第 2 図	下割遺跡 試掘確認調査トレンチ位置図	2	第 24 図	建物の主軸方位図	35
第 3 図	高田平野の地形分類図	8	第 25 図	飛鳥時代の建物域と祭祀域	35
第 4 図	高田平野における遺跡分布	10	第 26 図	SX8804 出土礫の大きさ	39
第 5 図	発掘調査で使用了竹ペラ	14	第 27 図	SX8804 出土礫の形状	39
第 6 図	混入物の含有率	14	第 28 図	第 9 次調査出土の縄文土器	47
第 7 図	遺構番号の付し方	14	第 29 図	方形区画溝 変遷図	51
第 8 図	遺構の形態分類	15	第 30 図	下割遺跡の方形区画溝と樋田遺跡の 周溝状遺構（基壇状遺構）	52
第 9 図	遺構埋土の堆積形状	15	第 31 図	掘立柱建物の等桁行方向	53
第 10 図	第 10 次調査のグリッド設定図と 基本層序の位置（東区）	16	第 32 図	井戸・土坑の規模	53
第 11 図	第 10 次調査のグリッド設定図と 基本層序の位置（市道区）	16	第 33 図	井戸・土坑の深度・断面形比較図	54
第 12 図	第 10 次調査の基本層序（柱状図）	17	第 34 図	暦年校正結果	60
第 13 図	水田の南北軸方位図	25	第 35 図	珪藻分析および花粉分析プレハート内の 状況	61
第 14 図	中世の水田配置図	25	第 36 図	木材	63
第 15 図	溝 C 類の主軸方位図	26	第 37 図	出土骨	65
第 16 図	中世の溝配置図	26	第 38 図	各試料の粒度組成	69
第 17 図	Va 層上面の遺構検出状況	27	第 39 図	各試料のメディアン値、粘土・シルト 含有率	70
第 18 図	Va 層上面検出の溝の長軸方位図	28	第 40 図	SX8503 の遺物出土平面図	73
第 19 図	Va 層上面で検出した溝と Vb 層上面で 検出した掘立柱建物の位置関係	28	第 41 図	SX8503 の出土遺物配置模式図	73
第 20 図	SD8177 出土の炭化米	29	第 42 図	SX8503 の想定軸方位と周辺の地形図	74
第 21 図	掘立柱建物の構造と主軸方向	31	第 43 図	上越三和道路関連調査で発見された 遺跡の深度	76
第 22 図	溝の主軸方向	33			

表 目 次

第 1 表	周辺の主な遺跡	11	第 7 表	花粉分析結果	61
第 2 表	市道区の基本層序	18	第 8 表	樹種同定結果	63
第 3 表	縄文時代後期前葉の石器組成と石材組成	49	第 9 表	検出分類群一覧	64
第 4 表	放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析 試料一覧	58	第 10 表	骨同定結果	65
第 5 表	放射性炭素年代測定結果	60	第 11 表	粒度分析結果	68
第 6 表	珪藻分析結果	60	第 12 表	SX8503 の出土遺物一覧表	72

図 版 目 次

【図面図版】		図版 7	市道区第 1 面（中世） 遺構分割図 5
図版 1	調査区全体図	図版 8	市道区第 2 面（平安） 遺構分割図 1
図版 2	市道区遺構全体図	図版 9	市道区第 2 面（平安） 遺構分割図 2
図版 3	市道区第 1 面（中世） 遺構分割図 1	図版 10	市道区第 2 面（平安） 遺構分割図 3
図版 4	市道区第 1 面（中世） 遺構分割図 2	図版 11	市道区第 2 面（平安） 遺構個別図
図版 5	市道区第 1 面（中世） 遺構分割図 3	図版 12	市道区第 3 面（平安） 遺構分割図 1
図版 6	市道区第 1 面（中世） 遺構分割図 4	図版 13	市道区第 3 面（平安） 遺構分割図 2

図版 14 市道区第 3 面 (平安) 遺構分割図 3
図版 15 市道区第 3 面 (平安) 遺構分割図 4
図版 16 市道区第 3 面 (平安) 遺構分割図 5
図版 17 市道区第 3 面 (平安) 遺構分割図 6
図版 18 市道区第 3 面 (平安) 遺構分割図 7
図版 19 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別図 1
図版 20 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別図 2
図版 21 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別図 3
図版 22 市道区第 4 面 (平安・飛鳥) 遺構分割図 1
図版 23 市道区第 4 面 (平安・飛鳥) 遺構分割図 2
図版 24 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構分割図 1
図版 25 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構分割図 2
図版 26 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構分割図 3
図版 27 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別図 1
図版 28 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別図 2
図版 29 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別図 3
図版 30 市道区第 6 面 (縄文後期) 遺構分割図
図版 31 市道区第 6 面 (縄文後期) 遺構個別図
図版 32 東区上層 (中世) 遺構全体図 1
図版 33 東区上層 (中世) 遺構全体図 2
図版 34 東区上層 (中世) 遺構分割図 1
図版 35 東区上層 (中世) 遺構個別図 1
図版 36 東区上層 (中世) 遺構分割図 2
図版 37 東区上層 (中世) 遺構分割図 3
図版 38 東区上層 (中世) 遺構個別図 2
図版 39 東区上層 (中世) 遺構個別図 3
図版 40 東区下層 (古墳) 遺構全体図
図版 41 東区下層 (古墳) 遺構個別図
図版 42 市道区出土遺物 中世・平安時代 1
図版 43 市道区出土遺物 平安時代 2
図版 44 市道区出土遺物 平安時代 3
図版 45 市道区出土遺物 飛鳥時代 1
図版 46 市道区出土遺物 飛鳥時代 2
図版 47 市道区出土遺物 飛鳥時代 3
図版 48 市道区出土遺物 飛鳥時代 4
図版 49 市道区出土遺物 縄文時代後期 1
図版 50 市道区出土遺物 縄文時代後期 2
図版 51 東区出土遺物 中世
図版 52 東区出土遺物 古墳時代

【写真図版】

図版 53 市道区・東区 遠景
図版 54 市道区第 1 面 (中世) 全景・検出状況
図版 55 市道区第 1 面 (中世) 全景・遺構個別写真 1
図版 56 市道区第 1 面 (中世) 遺構個別写真 2
図版 57 市道区第 1 面 (中世) 遺構個別写真 3
図版 58 市道区第 1 面 (中世) 遺構個別写真 4
図版 59 市道区第 2 面 (平安) 完掘状況・遺構個別写真 1
図版 60 市道区第 2 面 (平安) 遺構個別写真 2
図版 61 市道区第 2 面 (平安) 遺構個別写真 3
図版 62 市道区第 2 面 (平安) 遺構個別写真 4
図版 63 市道区第 2 面 (平安) 遺構個別写真 5、第 3 面 (平安) 完掘状況
図版 64 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 1
図版 65 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 2
図版 66 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 3
図版 67 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 4
図版 68 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 5
図版 69 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 6
図版 70 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 7
図版 71 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 8
図版 72 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 9
図版 73 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 10
図版 74 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 11
図版 75 市道区第 3 面 (平安) 遺構個別写真 12
図版 76 市道区第 4 面 (平安・飛鳥) 遺構個別写真 1
図版 77 市道区第 4 面 (平安・飛鳥) 遺構個別写真 2、第 5 面 (飛鳥) 全景
図版 78 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 1
図版 79 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 2
図版 80 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 3
図版 81 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 4
図版 82 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 5
図版 83 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 6
図版 84 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 7
図版 85 市道区第 5 面 (飛鳥) 遺構個別写真 8、第 6 面 (縄文後期) 完掘状況・遺構個別写真 1
図版 86 市道区第 6 面 (縄文後期) 遺構個別写真 2
図版 87 市道区・東区 基本層序
図版 88 東区上層 (中世) 合成写真・遺構個別写真 1
図版 89 東区 遠景、上層 (中世) 完掘状況・遺構個別写真 2
図版 90 東区上層 (中世) 遺構個別写真 3
図版 91 東区上層 (中世) 遺構個別写真 4
図版 92 東区上層 (中世) 遺構個別写真 5
図版 93 東区上層 (中世) 遺構個別写真 6
図版 94 東区上層 (中世) 遺構個別写真 7、下層 (古墳) 合成写真・完掘状況
図版 95 東区下層 (古墳) 遺構個別写真
図版 96 市道区出土遺物 中世・平安時代 1
図版 97 市道区出土遺物 平安時代 2
図版 98 市道区出土遺物 平安時代 3・飛鳥時代 1
図版 99 市道区出土遺物 飛鳥時代 2
図版 100 市道区出土遺物 飛鳥時代 3
図版 101 市道区出土遺物 飛鳥時代 4
図版 102 市道区出土遺物 飛鳥時代 5・縄文時代後期 1
図版 103 市道区出土遺物 縄文時代後期 2、東区出土遺物 中世 1
図版 104 東区出土遺物 中世 2・古墳時代

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

上越魚沼地域振興快速道路(延長約60km)は上越市と南魚沼市を結び、両地方の交流を促進するとともに、高規格幹線道路の北陸自動車道と関越自動車道とあわせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成する地域高規格道路である。同道路の完成により、上越～十日町～六日町間の通行時間は大幅に短縮され、日本海と首都圏を結ぶ最短経路となり、広域的な交流が活発になるものと期待される。

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路の一部で、上越市寺から同市三和区本郷までの全長7.4kmで(第1図)、1998(平成10)年度に整備区間に指定され、2000(平成12)年度に都市計画道路に決定された。

これを受けて国交省は、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団は、2001(平成13)年4月18日～20日に計画予定地の上越市寺から同市三和区本郷の法線内を対象に分布調査を実施した。調査の結果、19か所で中世以前の遺物が採集されたため、ほぼ全域にわたり試掘確認調査を行い、遺跡の有無を確認する必要があると報告した。

2001年3月、国交省から試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、調査を埋文事業団に委託した。2001年3月、埋文事業団は上越市米岡地内にて調査を開始した結果、法線北側に隣接する岡知の下割遺跡が計画予定地内に拡がるのが判明した。その後、2001～2003・2008年の試掘確認調査を経て、下割遺跡の本発掘調査必要面積は94,827m²(上層55,327m²、中層25,500m²、下層14,000m²)となり、



第1図 上越三和道路の路線と調査遺跡の位置
(国土地理院「高田東部」1:50,000原図平成19年発行)

2002・2003・2008・2009・2010・2011・2015・2020・2021年度に本発掘調査（下割道跡Ⅰ～Ⅹ）を行った。

第10次調査となる2022（令和4）年度の本発掘調査（下割道跡Ⅹ）は、2021（令和3）年度の国交省・県教委・埋文事業団による三者協議を経て、実施することとなった。令和4年3月1日付け国北整高二調第49号で県教委に4,900m²の本発掘調査を依頼し、県教委は令和4年3月4日付け教文第1384号で埋文事業団に調査を依頼した。これを受け、埋文事業団は同年4月から調査を開始した。

2 調査の経過

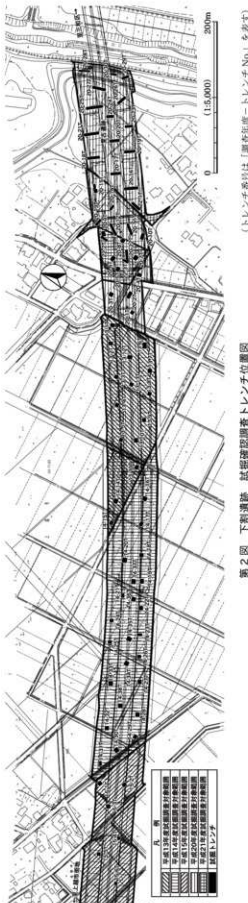
A 試掘確認調査（第2図）

試掘確認調査は、用地取得の関係や調査対象面積が広範囲に及ぶことなどから、2001～2003・2008年度の4か年にわたり行い、2010年度には本発掘調査の延長で補足的な調査を実施した。上層（古代・中世）、中層（古墳時代）、下層（縄文時代）の3層を確認したが、下層は深部に存在するため、上層・中層の本発掘調査終了後に試掘確認調査を実施した部分もある。トレンチは任意に設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを観察・記録した。

2001（平成13）年度 調査対象範囲は市道米岡荒屋線の東側で、法線センター杭No.205～219間で、14,000m²にトレンチ13か所を設定した。調査の結果、上層（現地表下20～30cm）では、すべてのトレンチで古代～中世の遺物が出土し、多くのトレンチ（H13・4・6～8・11・12T）で遺構を検出した。中層（現地表下120～150cm）では、H13・1・2・4・6～10・13Tで古墳時代の遺物が出土した。このような状況から、調査対象範囲の東側13,000m²（上層6,500m²、中層6,500m²）について本発掘調査が必要と判断した。

2002（平成14）年度 4月～5月と10月に2回にかけて調査を実施した。

1回目の調査対象範囲は、2001年度調査未了範囲とその隣接地、本線センター杭No.190～210間で、



24,150m²にトレンチ 25 か所を設定した。調査の結果、上層ではすべてのトレンチで遺物または遺構を検出した。中層では、H14-27・28・33・34T で古墳時代の遺物が出土した。下層（現地表下 380～420cm）では、H14-30・33～35T で縄文時代後期の遺物が出土した。この結果と 2001 年度の調査結果を加味し、面積 36,550m²（上層 24,150m²、中層 12,400m²）を本発掘調査必要範囲とした。下層は深部のため十分な精査・観察ができなかったことから、上・中層の本発掘調査終了後に試掘確認調査を行うこととした。

2 回目の調査対象範囲は、2001 年度に本発掘調査必要範囲とした法線センター杭 No.209～219 間の 6,500m²である。上層の本発掘調査が終了した範囲を対象に、トレンチ 4 か所を設定し、下層の確認調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物は認められず、本発掘調査不要と判断した。

2003（平成 15）年度 調査対象範囲は、下割遺跡の西側に当たる法線センター杭 No.70～190 間で、16,700m²にトレンチ 140 か所を設定した。このうち下割遺跡に係するトレンチは H15-1～6T である。調査の結果、上層（現地表下 20cm）では H15-1～4T で古代～中世の遺物が出土し、H15-1・3・4T で遺構を検出した。中層（現地表下 130cm）では H15-1・3・4T で古墳時代の遺物が出土した。下層（現地表下 340cm）では土器を伴わないものの、H15-3T で径 20cm の柱根が出土した。このような状況から、13,200m²（上層 6,600m²、中層 6,600m²）を下割遺跡の拡大範囲とした。下層は深部のため、上・中層の本発掘調査終了後に再度、試掘確認調査を行うこととした。

2008（平成 20）年度 調査対象範囲は法線センター杭 No.219 から飯田川の間で、22,700m²にトレンチ 30 か所を設定して調査した。調査の結果、遺構・遺物の検出層は上層の 1 面で、H20-1・2・8～10・15・17・19～21・23～30T から古代～中世の遺物が出土し、H20-1・2・4・10～16・19～21・23～27T で遺構を検出した。また、これらは法線センター杭 No.219～221、225～228、230～235 にまとまる傾向が見られた。このような状況から、調査対象範囲の西側 7,967m²を下割遺跡の拡大範囲とし、東側 11,006m²を新発見の堂古遺跡とし、本発掘調査が必要と判断した。

B 本発掘調査

当初依頼範囲の調査 第 10 次発掘調査の対象範囲は、市道区と東区の 2 か所に分かれる。このうち市道区は掘削深度が深いので、鋼矢板を打設して調査することとなった。4 月上旬から機材等の搬入を始め、4 月 20 日から鋼矢板施工を開始した。鋼矢板の施工中は市道区の調査を行えないため、その間を利用し、東区の調査を行うこととした。また、土地改良区からの要望により、幹線水路をまたいだ排土搬出を行うことができなかったため、東区を 3 分割して、順次、調査することとなり、4 月 22 日から表土掘削を開始した。中世の遺構調査を進め、第 1 工区は 5 月 19 日、第 2 工区は 5 月 31 日、第 3 工区は 6 月 9 日に終了確認を行い、東区の調査が完了した。その後、埋戻しを行い、6 月 16 日に国交省に現地を引き渡した。

東区の調査を行っている間に鋼矢板の施工が進行したため、5 月 18 日から安全を確保できる範囲について表土掘削を開始し、調査を本格化させた。複数の遺構検出面の最上位に当たる第 1 面（中世面）から調査を開始し、水田遺構等を調査し、6 月 24 日に終了確認を行った。その後、第 1 面の残務を進めるとともに、下層の深度と内容を確認するための部分的な調査を行った。また、第 1 面は中世の遺構検出面とされていたが、同面に平安時代の遺構が部分的に混在することが明らかになった。この検出面は、これまでの調査で平安時代とされた面より明らかに上位に当たり、第 1 面から平安時代とされていた遺構面

との間に埋没していることが明らかになった。この検出面を第2面とし、第1面から続く溝のほか、小型の掘立柱建物、炭化米や二次焼成を受けた土器類が多数出土した窪地の調査を行った。7月11日に空撮し、終了確認を行った。その後、補足調査を行い、第2面の調査が完了した。

西側は第2面の広がり不明瞭であったことから、7月4日から第3面（これまでの調査で平安時代とされてきた検出面）までの間層を重機で掘削し、順次、畑作溝や掘立柱建物等の遺構調査を行った。東側については第2面の調査終了後、7月22日から間層を重機で掘削し、大型掘立柱建物等の調査を行った。西側については、この調査面の遺構が最も多く、埋土の判断が困難で、かつ切り合い関係も複雑であり難航した。トレンチ調査や検出面の掘り下げなどを行いながら西側→東側の順に調査を進め、西側は8月3日、東側は8月30日に空撮、終了確認を行い、その後、第4面の調査に向け、間層を重機で掘削した。

第4・5面は、飛鳥時代の遺構面である。第3面の調査中に、飛鳥時代の遺構・遺物が埋没していることが明らかになったため、当初の予定にはなかったが調査を行うこととなった。間層掘削を開始すると、遺物が局所的に多数出土し、周溝をもつ建物や祭祀遺構を検出した。遺構検出面が複数存在することが明らかになり調査が難航したが、第6面（縄文時代後期の遺構面）の調査が必要な範囲の調査を優先的に進め、9月27日に終了確認、9月30日に空撮を行った。その後、第6面の調査対象範囲外に当たる大型建物S18502の補足調査を進め、10月27日に空撮を行い、第4・5面の調査がすべて終了した。また、9月30日には、新潟市立歴史博物館 坂井秀弥館長から飛鳥時代の調査成果を中心に現地指導をいただいた。

第6面は、縄文時代後期の遺構面であるが、現地表下約4mと深部にあり、内容と広がり不明瞭であった。上層の本発掘調査終了後に確認調査を行って取扱いを決める計画であったが、状況を早めに把握するために前倒しで順次実施した。安全確保のために軽量鋼矢板を併用しながら、7月20・21日（22-1T）、8月23・24日（22-2T）、9月5・6日（22-3T）、9月13・14日（22-4T）に調査を行った。トレンチ内での作業に危険を伴ったため、包含層相当層の土壌を地表に取り上げ、遺物の有無を確認することとした。その結果、①西側の22-3・4Tで遺物が出土したこと、②遺構が検出されている範囲より標高が低く、遺物の出土点数が少ないこと、③東側に向かって遺物密度が低くなること、④2002年試掘確認調査の14-28Tでは遺物が出土していないことから、第5面の調査対象範囲は西側の380㎡に限定することとなった。

深部に当たる第6面の調査に当たっては、自立の鋼矢板のみでは強度を保てないため、10月1日から切梁施工を行ったうえで、10月13日から間層掘削を開始した。遺物包含層は3層（X-1・2・3層）に分かれることから、包含層掘削と遺構検出を繰り返し、最終的な遺構検出面であるXI層上面まで掘削を進めた。その結果、前年度の調査範囲より遺構検出面の標高が40cm以上低く、遺構・遺物とも検出数が少ないことが明らかとなり、遺跡が調査対象とした範囲より東側に広がらないことを確認した。11月12日に最終掘削面の空撮を行い、11月14日に文化課による終了確認を行った。その後、11月16日まで補足調査を行い、市道区の調査が完了した。また、11月8日には、新潟大学災害・復興科学研究所 ト部厚志教授から堆積過程に関する現地指導いただいた。

追加依頼範囲の調査 国交省から、6月16日の東区の現地引渡しの際、年度当初の要望にない東区の南側隣接地の追加調査の実施について打診があった。その後も継続的に要望があり、新潟県を含めて対応について協議した。当初依頼範囲の調査の進行状況を踏まえ、市道区の鋼矢板切梁施工の期間などを利用して、追加調査に応じることとなった。ただし、当初依頼にある市道区の調査を優先することとし、要望範囲すべてに対応できない可能性があることを条件とした。令和4年9月13日付け国北整高二調第25

号で新潟県に1,408m³の本発掘調査を依頼し、新潟県は令和4年9月26日付文第1053号の2で埋文事業団に調査を依頼した。これを受け、新潟県と協議しながら9月21日から表土掘削を開始した。

東区南側の調査は、表土直下で検出される中世の遺跡が対象である。東区と同様に場外に排土を搬出できなかったため、西側半分の調査を実施することとなった。調査の結果、中世集落の一部を検出したが遺構密度は低く、10月23日に終了確認を得て、10月27日に空掘を行い調査が終了した。なお、市道区の調査を優先させるため、追加依頼範囲のうち東側半分については、着手しないこととした。

中世の井戸の調査中、壁面に黒色層を検出し、古墳時代の遺物が含まれることを確認した（下層）。これを受けて10月31日・11月1日に確認調査を実施した結果、古墳時代の遺物が多数出土したが、斜面地で本発掘調査必要範囲は200m²程度と考えられた。この結果について新潟県と協議し、引き続き下層の調査を行うこととなった。11月1日から間層掘削を開始し、包含層掘削・遺構調査を行い、11月12日に空掘、11月14日に新潟県による終了確認を得た。その後、補足調査を行い、11月17日にすべての調査を終了し、12月16日に国交省へ現地を引渡し協議を行った。

以上により、第10次調査は終了し、その後、機材等の搬出を進めた。12月17日～19日にかけての大雪で交通網が麻痺したため作業が滞ったが、1月6日に撤収を完了し、現地を引渡した。調査面積は、市道区4033.83m²（第1面：995.68m²、第2面：224.01m²、第3面：995.68m²、第4面：435.42m²、第5面：995.68m²、第6面：387.36m²）、東区1402.35m²（当初依頼範囲：605.47m²、追加依頼範囲上層：565.86m²・下層231.02m²）で、合計で5,436m²となった。

なお、普及活動は3件に対応した。10月12日には、地元の諏訪小学校34名（生徒28名、引率教員6名）の見学・体験発掘を受け入れた。10月22日には現地説明会を開催し、105名の参加があった。また、10月23日には、地域の諏訪地区公民館からの依頼を受け、調査成果を踏まえた地域の歴史について講話し、24名の参加があった。

C 整理作業

整理作業は、現地調査開始前から開始した。事前に調査方針を定め、遺跡周辺的环境（第Ⅱ章）などの原稿執筆を進めた。発掘調査開始後は、現地事務所にて遺物の洗浄、図面整理、各種台帳等の基礎整理を行い、7月29日からは株式会社ノガミ亀田営業所にて、遺物の注記・分類・接合・復元作業を行った。現地調査終了の目途がついた11月中旬からは、遺構図面・写真の整理・観察表作成、遺物の接合・復元・実測・写真撮影を本格的に開始した。その後は、年度内に整理作業を完了させる方針のもと作業を進めた。また、縄文土器の評価を検討するため、12月13・14日に長野県栄村歴史文化資料館、3月15日には阿賀野市整理室にて資料調査を行った。2023年3月までに、遺構図面図版の編集業務を完了し、それ以外の原稿・図版等については入稿データをすべて揃えた。その後、2023年度に入り、5月から編集業者に原稿を入稿し、3月に印刷・刊行した。

3 調査・整理体制

A 試掘確認調査

下割遺跡は東西 950m にも及ぶ広範囲であり、試掘確認調査は 4 年間にわたり断続的に進められた。調査体制は、以下のとおりである。

調査期間	2001 年 3 月 4 日～8 日	2002 年 4 月 15 日～5 月 8 日、10 月 7 日～8 日	2003 年 5 月 6 日～6 月 17 日、7 月 15 日、12 月 18 日・19 日	2008 年 8 月 27 日～29 日、11 月 17 日～24 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越嶺一）			同左（教育長 武藤克己）
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団			
総括	須田 益輝（事務局長）	黒井 幸一（事務局長）		木村 正昭（事務局長）
管理	長谷川司郎（総務課長）		長谷川二三夫（総務課長）	斎藤 栄（総務課長）
庶務	椎谷 久雄（主任）	高野 正司（班長）		長谷川 靖（班長）
調査総括	岡本 郁栄（調査課長）		藤巻 正信（調査課長）	
調査指導	寺崎 裕助 （公団担当課長代理）	高橋 保 （国土交通省担当課長代理）	田海 義正 （国土交通省担当課長代理）	田海 義正 （試掘・確認担当課長代理）
調査員	澤田 敦（教育庁文化行政課主任調査員）	尾崎 高宏（班長）	田海 義正 （国土交通省担当課長代理）	田海 義正 （試掘・確認担当課長代理）
	小田由美子（主任調査員）	田中 一徳（嘱託員）	尾崎 高宏（班長）	高野 義昭（主任調査員）
	小林 芳宏（主任調査員）		田中 一徳（嘱託員）	
	後藤 孝（主任調査員）			
	渡辺 弘（主任調査員）			
	田中 一徳（嘱託員）			

B 本発掘調査・整理作業

本発掘調査・整理作業		整理作業	
調査期間	2022 年 4 月 21 日～11 月 17 日	整理期間	2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日
調査主体	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 （理事長 妹尾 浩志）	調査主体	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 （理事長 野上 文敏）
総括	松田 英世（事務局長）	総括	松田 英世（事務局長）
管理	五十嵐大介（総務課長）	管理	高橋 智浩（総務課長）
庶務	伊藤 雅美（総務課班長）	庶務	伊藤 雅美（総務課班長）
調査総括	荒川 隼史（調査課長）	整理総括	荒川 隼史（調査課長）
調査指導	石川 智紀（調査課長代理）	整理指導	土橋由理子（調査課長代理）
調査担当	加藤 学（調査課専門調査員）	整理担当	加藤 学（調査課専門調査員）
支援	株式会社ノガミ 現場代理人 吉澤和幸 調査員 蒲原勝美 細田尚克 高尾将矢 斎藤泰洋 補助員 石山幸恵 江堀純子 近藤里子 高橋充子 平野貴之 星 芳子 吉澤広美	支援	株式会社ノガミ 調査員 高野恒一 補助員 石山幸恵 江堀純子 近藤里子 高橋充子 星 芳子 吉澤広美

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

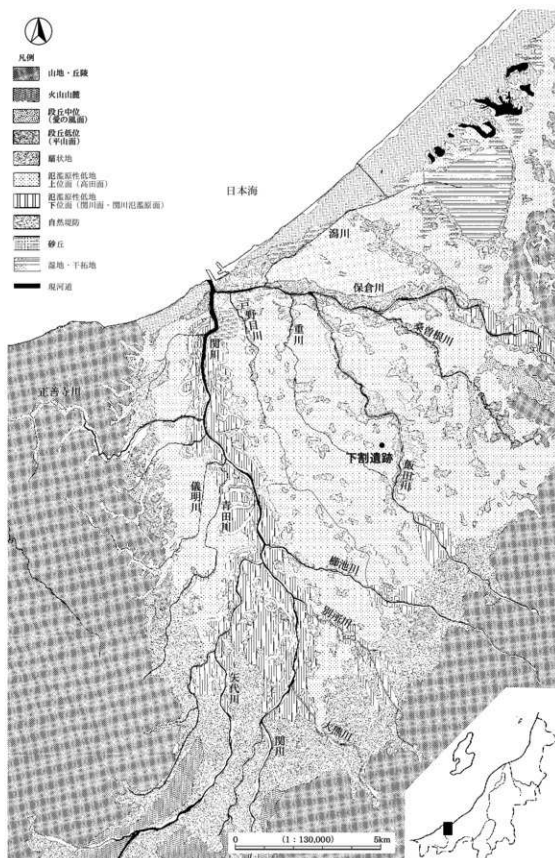
下割遺跡が立地する高田平野は、新潟県南西部に位置する沖積平野である（第3図）。その形状は上越市五智、上越市柿崎区竹鼻、妙高市小出雲を頂点に不等辺三角形を形成し、面積は約280万m²及び、海岸部には延長約20km、最大幅3kmに達する潟町砂丘が発達し、海岸と平野部を隔てている。

東辺から南東辺には、東頸城丘陵が広がり、柏崎平野・越後平野・十日町盆地・長野盆地と高田平野を隔てている。東頸城丘陵北端には、米山を主峰とする米山山地、南東部には信越国境をなす関田山脈、南端には斑尾山がそびえている。西辺には西頸城丘陵が広がっている。この丘陵は、海岸に沿って西方に延び、糸魚川市の平野部と高田平野とを隔てている。西頸城丘陵南方には西頸城山地が連なり、その北端には青田難波山、南端には主峰の火打山（2,462m）がそびえている。さらに、その南には、富士火山帯の北端をなす焼山（2,400m）及び妙高山（2,454m）の両火山がそびえ、平野南端は、妙高山の岩屑流、火砕流により形成された丘陵と接している。

平野には、これら周辺の山地・山脈、丘陵から多数の河川が流入している。平野最大の河川である関川は、火打山・妙高山及び長野県との境をなす高妻山・乙妻山の地域を水源とし、平野を西偏しながら北流し、日本海に注いでいる。途中、妙高山から白田切川・大田切川など、西頸城山地から矢代川・青田川など、西頸城丘陵から儀明川・正善寺川などが関川に合流する。また、東頸城丘陵や関田山脈からは、大熊川・別所川・柳池川・飯田川・保倉川などの中小河川が関川に合流する。平野の北東部では、東頸城丘陵・米山山地を水源とする吉川・大出口川・柿崎川などが平野に流れ出し、直接日本海に注いでいる。

北東部から南西部にかけて、関川や矢代川をはじめ、大熊川・別所川・柳池川・飯田川などにより形成された扇状地が発達している。

高田平野の沖積低地は高田面、関川面、関川氾濫原面に区分でき、沖積段丘を形成する。下割遺跡をのせる高田面は、主に礫・砂・シルトの互層からなる高田層によって形成された堆積面で、その分布は平野の大部分を占める。平野の中央部において高田面の表層地質や珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかになった〔高田平原団体グループ1962〕。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなっている。平野に分布する遺跡の時代を検討した結果、高田面は古墳時代初期から段丘化し始め、数回に及ぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている〔高田平原団体研究グループ1981、岡本1999〕。しかしながら、下割遺跡から約3km西に位置する狐宮遺跡では、縄文時代後・晩期の土器が出土したことにより、少なくとも縄文時代の後半には人々が居住し得る環境が整っていた可能性があり、高田面の形成年代について検討が必要であろう〔飯坂ほか2007〕。飯田川と関川の間には、小規模な自然堤防が点在し、その分布は一定の方向性をもって配列している。その配列に従って灌漑水路が通り、戸野目川・重川のような小河川が流れているので、かつてはここに丘陵地から流れ出した川が流れていたのではないかと推察される〔高野2002〕。このような自然堤防上の微高地に、現集落が成立している。



第3図 高田平野の地形分類図
 (〔飯坂・高橋ほか2011〕を一部改変の上転載)

2 歴史的環境

縄文 高田平野周辺においては、蛇谷遺跡（第4図・第1表2）などで旧石器時代の遺跡が発見されているが数少なく、縄文時代以降に多くの遺跡が出現する。

草創期の遺跡は、旧石器時代から引き続き数少ない。山屋敷1遺跡（3）で尖頭器・局部磨製石斧が出土しているほかは尖頭器が単独で出土しているのみであり、断片的な情報しかない。また、沖積地に立地する狐宮遺跡（4）では草創期の尖頭器2点が出土しているが、後世に人為的に搬入された可能性が高い〔加藤 2023〕。早期・前期も遺跡数は少なく、小規模な遺跡が点在する状況にあるが、前期には埋没段丘上の八反田遺跡（5）や砂丘上の鍋屋町遺跡などで集落が認められるようになる。中期になると山屋敷1遺跡（3）などで拠点的な集落が築かれるようになり遺跡数も増加するが、その立地は丘陵上や砂丘上に限られ、沖積地の遺跡は発見されていない。なお、中期の土器は北陸系が主体を占め、その中に中部高地・北信系が混在する状況にあり、海岸に近い高田平野の地域性がよく表れている。

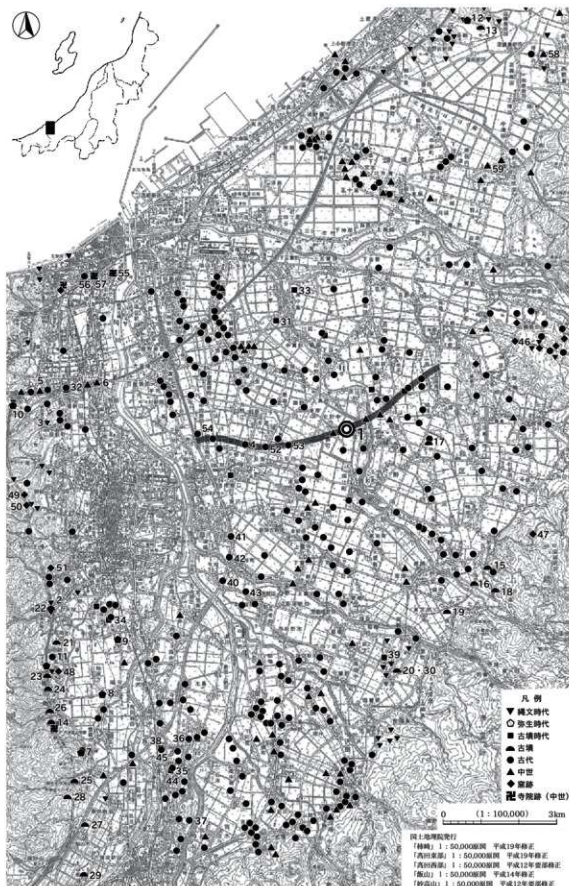
後期以降も丘陵上や砂丘上の遺跡分布が中心であるが、沖積地に立地する遺跡が出現する。下割遺跡のほか、狐宮遺跡（4、後期前葉・晩期）、八反田遺跡（5、後期後葉）、池田遺跡（6、晩期中葉）で後期・晩期の遺物が出土しており、「沖積地埋没型」〔寺崎 2002ab〕の遺跡立地が認められるようになる。全国的に低地利用が盛んになる後期以降、高田平野においても沖積地の利用が始まったことを示している。下割遺跡で地下4mから発見された後期前葉の遺跡は、その脈絡で理解することができる。

弥生 弥生文化の伝播を考えると、日本海側の北陸ルート、東海・信州ルートの結節点に当たる高田平野は重要な位置にあり、それを裏付ける遺跡が調査されている。西頸城丘陵縁辺から平野部にかけての半径約1.5kmという狭い範囲には国史跡 斐太遺跡群（斐太遺跡（7）・吹上遺跡（8）・釜蓋遺跡（9））が存在し、弥生時代から古墳時代にかけての拠点集落が展開する。中期に玉作が盛んに行われた吹上遺跡の規模が縮小する時期に高地性環濠集落である斐太遺跡への集住化が図られ、斐太遺跡の縮小と吹上遺跡の一時的な廃絶とほぼ同時に環濠集落である釜蓋遺跡が成立する。いずれも、青田川の扇状地で水田耕作に適していたこと、日本海側と長野方面を結ぶ交点だったことから地域間交流の拠点であったと考えられており、様々な地域に由来する遺物が出土している。西頸城丘陵には、ほかにも高地性環濠集落である裏山遺跡（10）・下馬場遺跡（11）などの重要な調査事例もある。

渦町砂丘の後背湿地に形成された渦湖周辺にも弥生時代の遺跡が多数存在し、巻遺跡（12）でクリス形石、坂の下で銅鏃、長崎・吉崎間で石刀が収集されている〔室岡 1981・1983〕。稀有な資料が集中的に存在することは、この地域の重要性を物語っている。また、丸山古墳（13）の墳丘盛土下からは後期後半の竪穴建物が検出されている〔小野¹⁵ 1988〕。

古墳 高田平野は県内最大の古墳集中地域であり、平野縁辺の丘陵上を中心に中・後期の群集墳が密集する。群集墳以前の古墳は、観音平古墳群の前方後円墳（（14）4号墳・2号墳）〔佐藤 2004〕などがあるが少数である。また、近年は東頸城丘陵の町田古墳群が発見され〔高橋 2021〕、新たな研究の展開を見ている。

中期以降になると、丘陵の縁辺に群集墳が構築される。東頸城丘陵の飯田川・柳田川流域には水古古墳群（15）、水科古墳群（16）、大野古墳群（17）、宮口古墳群（18）、高土古墳群（19）、菅原古墳群（20）が、西頸城丘陵では黒田古墳群（21）、灰塚古墳（22）、南山古墳群（23）、稲荷山古墳群（24）、観音平古墳群



第4図 高田平野における遺跡分布

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	下畑	縄文・古墳～中世	21	黒田古墳群	古墳	41	子安	弥生・古墳・古代・中世
2	蛇谷	旧石器・縄文・古代・中世	22	灰塚古墳	古墳	42	下新町	古代
3	山原Ⅰ	縄文	23	南山古墳群	古墳	43	本長寺原廃寺	弥生・古墳・古代
4	狐宮	縄文～古代	24	崎崎山古墳群	古墳	44	栗原	奈良
5	八反田	縄文・弥生・古墳・平安・中世	25	天神堂古墳群	古墳	45	東沖	古墳～平安
6	池田	縄文・平安・中世	26	青田古墳群	古墳	46	木野宮跡	平安
7	斐太	弥生	27	梨ノ木古墳群	古墳	47	日向宮跡	平安
8	吹上	弥生・古墳・平安・中世	28	谷地林古墳群	古墳	48	下馬場古宮跡群	飛鳥
9	渡瀬	弥生・古墳	29	小丸山古墳群	古墳	49	滝寺古宮跡群	古代
10	嵐山	弥生	30	菅原古墳群31号墳	古墳	50	大貫古宮跡群	古代
11	下見場	旧石器・縄文・弥生・古代	31	津倉田	古墳・飛鳥・奈良	51	向橋古宮跡群	古代
12	巻	縄文・弥生・古墳	32	一之口	古墳・古代・中世	52	三角田	古墳・平安・中世
13	丸山古墳	縄文・弥生・古墳	33	北新	古墳	53	延命寺	古墳・飛鳥・奈良
14	観音平古墳群	古墳	34	荒町南新田	弥生・古墳・古代・鎌倉・室町	54	越前	古墳・平安
15	水吉古墳群	古墳	35	月岡	古墳・平安・中世	55	平池寺跡	室町～安土桃山
16	水科古墳群	古墳	36	倉田	古代	56	御影跡	戦国
17	大野古墳群	古墳	37	宮ノ本	縄文・古墳～中世	57	安国寺	南北朝～安土桃山
18	宮口古墳群	古墳	38	杉明	平安	58	樋田	縄文・中世
19	高土古墳群	古墳	39	岡塚	平安	59	水久保	中世
20	菅原古墳群	古墳	40	今池	古墳・古代・中世			

第1表 周辺の主な遺跡

(14)、天神堂古墳群(25)、青田古墳群(26)、矢代川流域では梨ノ木古墳群(27)、谷地林古墳群(28)、小丸山古墳群(29)が存在し、菅原古墳群31号墳(30)が前方後円墳であるほかは円墳である。また、潟町砂丘上に立地する丸山古墳(13)は方墳である。丸山古墳が中期、初期群集墳である黒田古墳群が中期～後期であるほかは後期～終末期に位置づけられている〔滝沢・田中2019〕。

下割遺跡を考える上で、飯田川の上流域に位置する国史跡 水科古墳群・宮口古墳群の評価は大きな意味を持つ。両古墳群では、後期後半の後期群集墳から発展的に終末期群集墳に展開している。水科古墳群の埋葬施設の変遷は有袖横穴石室(追葬可能)→無袖小型横穴石室(追葬可能)→竪穴小石室・木植直葬(追葬不可)→火葬墓と畿内における薄葬化の流れ〔安村2008〕が認められ、頸城郡衙設置へとつながる律令体制整備への萌芽を示すとされる〔滝沢・田中2019〕。下割遺跡における飛鳥時代の前夜に位置づけられる古墳群であり、その評価は重要である。

集落遺跡は、主に沖積平野に展開する。前期は、下割遺跡(1)、津倉田遺跡(31)、一之口遺跡(32)、北割遺跡(33)、荒町南新田遺跡(34)など関川、保倉川の自然堤防上に多く展開している。津倉田遺跡(31)・下割遺跡(1)では畿内系タタキ甕や布留甕が出土し、特に下割遺跡では多くの畿内系タタキ甕が確認されている。中期になると月岡遺跡(35)、倉田遺跡(36)、北割遺跡などが確認されているが、その数は減少する。後期以降は増加に転じ荒町南新田遺跡(34)、宮ノ本遺跡(37)、杉明遺跡(38)、岡塚遺跡(39)などが平野南西部の段丘上や扇状地周辺で確認できるようになる。

古代 頸城郡は、大宝2(702)年に古志郡、魚沼郡、蒲原郡とともに越後国に編入される以前は越中国に属していた。越後国に編入後、頸城郡に国府が設置されていたことが『和名類聚抄』に「国府在頸城郡」と記載されており、頸城郡への移転時期は出羽国が分立した養老5(721)年の後と考えられる。

国府の位置については諸説あるが、今池遺跡(40)、子安遺跡(41)、下新町遺跡(42)、本長寺原廃寺(43)からなる「今池遺跡群」が有力視されている〔相沢2004〕。今池遺跡では、8世紀前半～9世紀前半の東西棟の掘立柱建物が多数検出され、円面硯・瓦片・近畿地方からの搬入土器が出土した〔坂井ほか1984〕。子安遺跡は今池遺跡の衰退後に遺構数が増加し、当地域の中核となる遺跡である〔坂井ほか1984、野村ほか2009〕。本長寺原廃寺(43)は伽藍配置や今池遺跡との関連性から国分寺であった可能性が高いとされる〔小島1984〕。

また、栗原遺跡(44)は頸城郡衙に関連する遺跡とされる。8世紀初頭～中葉の遺跡で、関川と矢代川の間の段丘上に立地する。基壇跡や大型の掘立柱建物群が検出され、「郡」と墨書された土器や帯金具が出土している〔坂井ほか1982〕。周辺には、同時期の月岡遺跡(35)、倉田遺跡(36)、東沖遺跡(45)がある。倉田遺跡では、規格性のある建物群が検出され、その配置には計画性が認められる。栗原遺跡と同種の瓦片が出土しており、栗原遺跡との関係性が推定されており、曹司の一角と推測されている〔佐藤2013〕。

高田平野周縁の丘陵部には須恵器を生産した窯跡が分布する。東頸城丘陵には未野窯跡(46)、日向窯跡(47)など、西頸城丘陵には下馬場古窯跡群(48)、滝寺古窯跡群(49)、大貫古窯跡群(50)、向橋古窯跡群(51)などが分布する。高田平野の須恵器生産は7世紀末に下馬場古窯跡群で開始され8世紀に盛んに生産されるようになるが、9世紀中葉に佐渡国の小泊窯群産が流通するとともに衰退していく〔笹澤2002〕。

下割遺跡周辺の8～9世紀の遺跡は、狐宮遺跡(4)、三角田遺跡(52)、延命寺遺跡(53)、越前遺跡(54)などがある。三角田遺跡では8～9世紀にかけて集落が営まれ、それに伴う畑も検出された。自然堤防とその周縁において断続的に居住・生産活動が行われた遺跡と推定されている〔沢田ほか2006〕。延命寺遺跡では出挙・具注層・売券などの内容が記載された木簡が出土し、その中に現在の地名との関係が想定される文字が記されているものもある。また、一度使用した木簡を削り再利用していることや、暦の使用などから官衙的性格を持つ遺跡と推定されている〔山崎ほか2008〕。越前遺跡では自然水路に沿って計画的に配置された遺構が検出され、律令祭祀具や大量の墨書土器が出土したことから公的機関または富裕層に関わった遺跡と推定される〔笹澤2003〕。

中世 中世には直江津地域が中世都市として発展する。直江津地域には守護所と考えられる至徳寺跡(55)、上杉氏の居館である御館跡(56)や安国寺(57)などが立地している〔戸根2003〕。御館跡は弘治年間(1555～1558年)に上杉謙信によって造営されたが、謙信の跡目を景勝と景虎が争った「御館の乱」では景虎側の拠点となり、天正7(1578)年に落城したことが知られている。至徳寺跡は11世紀～13世紀前半・14世紀末～16世紀初頭・16世紀末～17世紀前半の遺物が出土した。遺構は、中世前期では饗宴に用いられたと考えられる大量の土器が出土した土坑などがあり、中世後期には幅6～8mの堀が構築される。堀間の距離は約250mで、全周していると考えると一辺が2町を超える。守護所に比定する説が有力であるが、至徳寺との関係など、不明瞭な部分も多い〔鶴巻・水澤2003〕。

集落遺跡の調査事例は、樋田遺跡(58)、水久保遺跡(59)、子安遺跡(41)、下割遺跡(1)などがある。これらの遺跡では、溝が建物群を区画し、複数の屋敷地が集合しており集落を形成している。高田平野における集落遺跡は、居住に適した自然堤防上に一貫して築かれ、自然堤防から外れた低地は生産域として利用されている。集落が一定の距離を置いて点在し、その間に生産域が展開する景観は、現在の高田平野に通じるといえる〔山崎2017〕。

慶長2(1597)年の米沢上杉家伝来の「越後郡絵図」には、下割遺跡の周辺には水田が広がり、村落が点在している風景が描かれる。絵図の割書には村の石高や家や人数などの詳細が記されている。下割遺跡に近い米岡村の石高は534石余、隣村の石高は四辻村が155石、西原村が108石と記されており、米岡村はかなりの石高であることがわかる。そのため、村名の下に水田の等級を表す「上」の字が記されている。等級は「上」「中」「下」「下々」の4段階で構成され、米岡村は最上位の等級である〔市村2004〕。このことから、下割遺跡周辺の水田は中世末期の段階で既に高い生産力を保持していたことがわかる。下割遺跡の広範囲で検出された中世～近世の水田は、このような背景によるのであろう。

第三章 調査の概要

1 グリッドの設定 (第10・11図)

グリッド方向と区割りは、第1次調査から国家座標軸(日本測地系)と一致するように設定している。グリッドは大小2種類あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドはそれを2m四方に25等分したものである。大グリッドの名称は、北東隅の杭を基点に東西方向(東→西)を算用数字、南北方向(北→南)をアルファベットとし、両者を組合せて表示している。また、小グリッドは1～25の算用数字で表し、北東隅を1、南西隅を25とした。グリッドの表記は「47W1」のように呼称した。なお、グリッドの呼称は第5次調査で変更しており、以降はこれを踏襲している。グリッド杭(グリッドの北東隅)の座標は、市道区の47W杭でX=125610.514、Y=-16770.303、東区の32S杭でX=125800.514、Y=-16290.303である。

2 記述の方針

A 分層・土層注記の方法

第10次調査では6名の調査員が配置されたことから、観察視点を共有する必要があった。そこで各調査員が分層を行い、調査担当者がすべての断面を確認したうえで土層注記を行った。それにより、分層を複数名で確認することができ、また統一的な表現で記載することとした。記載に当たっては、分層理由を担当調査員と確認し、上下の相対的な違いを表現するよう留意した。

色調 削った土を農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』と日陰で比較して、色調を決定した。なお、色調は乾燥の度合い、空気に触れた後の酸化の進行等によって著しく変化する。できるだけ水分を含んだ新鮮な状態で色調を判断するよう留意した。また、『標準土色帖』の分類上、同じ色調に分類された場合、上下の土層との相対的な違いを表現するため、「より明るい」「より暗い」等と併記した。

堆積物の分類 ウェントワースによる粒度区分に基づき「礫・砂・シルト・粘土」に区分し、粒度標本との対比により堆積物を分類した。本遺跡の堆積物は、主に中粒砂(1/2-1/4mm)、細粒砂(1/4-1/8mm)、極細粒砂(1/8-1/16mm)、砂質シルト(1/16-1/32mm)、シルト(1/32-1/64mm)、粘質シルト(1/64-1/256mm)、粘土(1/256mm以下)から構成される。

しまり・粘性 埋蔵文化財調査における「しまり」「粘性」の記載は、硬度計や粘度計によって計測しているわけではなく、感覚的な要素によるところが極めて大きい。特に沖積地における調査では、乾燥の度合いによって状態が大きく変化することから有効な記載内容とはいえず、粒度分類に基づく記載をもって替えることとする。ただし、上下の土層との相対差を示すうえで、特に有効と判断した場合には別途記載することとした。

なお、高田平野の沖積地では、粒径が細かな堆積物から構成され、総じて粘性が極めて強い。移植ごてなどの金属製道具で削割すると、土が剥がれず、作業に支障をきたすほどである。このような状況から、

大サイズの竹ベラ（第5図）を作成して掘削具とした。

混入物 遺物、ブロック土、礫、炭化物、植物遺体等の混入の有無について記載した。これらは、堆積過程を考えるうえで重要な要素であることから、ブロック土の混入の比率については、第6図に基づいて記載した。炭化物の含有については、おおむね500cm²（50cm×10cm=遺構内の1層をイメージ）当たり1点程度は「ごくわずか」、3点程度は「わずか」、10点程度は「多量」、20点以上は極めて多量とした。加えて、必要に応じて遺物の内容（時期・種別）、粒径、形状等を併記した。

鉄分の沈着 鉄分の沈着は二次的に生じた現象であるが、特定の層位や層面に特徴的に認められることがある。すなわち、層相の相違による透水の程度差を反映していることがあることから、観察時に着目することとした。

B 遺構記述の方針

1) 基本方針

遺構の記述は、本文（遺構各説）・観察表・図面図版・写真図版を用いた。すべての遺構について検出位置（グリッド・層位）・種別・計測値・出土遺物・切り合い関係等を記載した観察表を作成し、遺跡を評価するうえで必要なものについては、本文・図面図版・写真図版で補完した。本文では、各遺構の内容を網羅的に記載せず、現地調査・観察表作成で得た所見及びそれに基づく評価を中心に記載した。

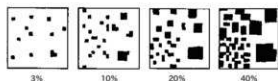
2) 遺構番号の表記方法

遺構種別は略号を用い、掘立柱建物を「SB」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝を「SD」、ピットを「P」、性格不明遺構を「SX」とした。

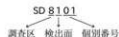
遺構番号は、第8・9次調査にしたがい、4桁番号（四の位：調査区、三の位：検出面、一の位・二の位：個別番号）で示すこととした。市道区を8000番台、東区を9000番台とし、検出面を示す三の位は、中近世を0、古代・飛鳥時代を1、古墳時代を2、縄文時代を3とした。下二桁は、遺構の個別番号であり、各検出面で100を超える遺構を検出した場合は、4以降を付すこととして調査を開始した。しかし、同一面に複数時期の遺構が混在することが明らかになったこと、遺構が想定以上に検出されことから、この方針で個別番号を付すことができなくなった。そこで、実際には第7図のとおり番号



第5図 発掘調査で使用した竹ベラ
（上から2番目の長さは50cm）



第6図 混入物の含有率（新版土色結から）



調査区	検出面	個別番号
A1区 : 0	0 : IVa層～Va層上面	中近世・古代 01
P1区 : 1	1～3 : Vb層上面～VI層	古代・飛鳥 02
P3区 : 3	5 : VI層	飛鳥
P4区 : 4	8 : X層	縄文後期
P5区 : 5		10
P6区 : 6		11
市道区 : 8		
東区ほか : 9		

第7図 遺構番号の付し方

号を付すこととなった。

3) 遺構の形態分類と計測方法

遺構の平面及び断面形態の表記は、第8図のとおりである。なお、土坑とピットの区別は、おおむね長軸が1mを超えるものを土坑とし、それより小さなものをピットとした。すなわち、サイズによる便宜的な区分であり、土坑が掘立柱建物を構成する柱穴となる場合もありうる。また、井戸と土坑の区別については、深度が長軸に比して1.2倍を超えるものを井戸としたが、それ以下であっても、構造や出土遺物の構成などを踏まえて井戸と判断したものもある。

平面規模は、長軸（最大長）と短軸（長軸に対する直交方向の最大長）を計測した。ただし、部分的に極端な張り出しがある場合は、全体の形状を考慮して残存状況の良い範囲で計測した。深度は、遺構検出面からの最深度を計測した。また、掘立柱建物の構造等を検討するうえで参考となる底面標高も記載した。



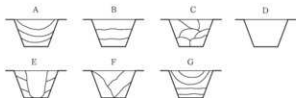
第8図 遺構の形態分類 [荒川・加藤 1999]

4) 埋没過程の分類

遺構埋土の断面観察をつうじて埋没過程について検討し、第9図により分類した。分類に当たっては、堆積の単位を把握しながら分類することに留意した。また、自然の作用による堆積物と、人為による堆積物の区別に注意を払った。その判断に当たっては、構成物の種類の不揃いや分級の悪さ、偽層の多さなどに着目した。

5) 切り合い関係の表記方法

遺構同士に切り合い関係がある場合、その前後関係の把握に留意した。観察表では、不等号「<」「>」「=」を用いて示した。「<P100」はP100に切られ（P100より古い）、「>P100」はP100を切っている（P100



A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B 水平	複数層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	覆土が単一層のもの。
E 柱状	柱状と思われる土層が堆積するもの。
F 階位	斜めに堆積するもの。
G 水レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第9図 遺構埋土の堆積形状 [荒川iss 2004]

より新しい)ことを示す。「=P100」は、P100との切り合い関係が認められるものの、新旧関係が不明であることを示す。

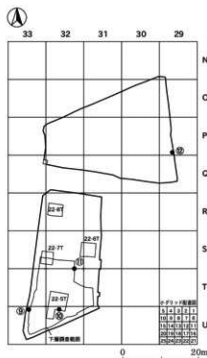
3 基本層序と遺構検出面

A 市道区

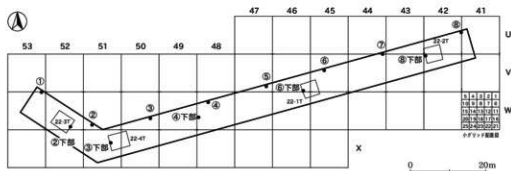
1) 基本層序(第10～12図・第2表)

市道区周辺の調査は断続的に行われており、また調査担当者もそれぞれ異なるため基本層序の捉え方が若干異なる。また、試掘確認調査時の名称を踏襲したため、記載内容と実際の対応を読みにくい部分があった。今回、確認した基本層序は、過去の調査と確実に対応できる部分もある一方、記載内容と異なる層位が存在し、これまでに発見されていない遺構検出面を確認した。このような状況にあったため、第9次調査以前の基本層序との対応が困難であった。

そこで、過去の調査と完全に一致する層位の名称は踏襲したが、対応関係が不明確であった層位については、ローマ数字による大分類を変更せず、細分類をアルファベット小文字で表記することとした(過去の調査における細分類はアラビア数字で表記)。あわせて隣接する8・9次調査の層名との対応関係を可能な限り示すこととした。各層の記載内容は、第2表・第10～12図のとおりである。



第10図 第10次調査のグリッド設定図と基本層序の位置(東区)

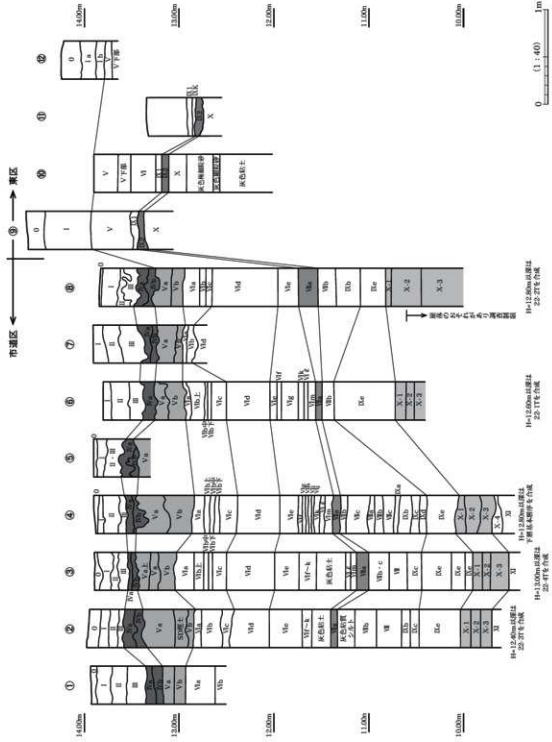


第11図 第10次調査のグリッド設定図と基本層序の位置(市道区)

2) 遺物包含層と遺構検出面

遺物包含層と遺構検出面の重複が複雑であるため、検出面を上位から第1面から第6面に整理する。

第1面 / M**b**層上面～Va層上面 中世の遺構検出面である。第8・9次調査でIV層面とされた検出面であり、標高は13.3m～13.4mほどである。IVb層を覆うIVa層が、この検出面に対応する遺物包含層



第 12 図 第 10 次調査の基本層序 (柱状図)

3 基本層序と遺構検出面

層名	色調	記載	8-9次調査との対応
0		盛土。	盛土
I	10YR4/1	表土、現代の耕作土。	I
II	2.5Y4/1	日本酒耕作土。2009年度に「農林二十一号」木簡が出たことから、現代の耕作土と判断。鉄分の沈着が著しく、炭化物をわずかに含む。	II
III	2.5Y4/1	近世ころの本田耕作土。日耕りや中耕、炭化物をわずかに含む。炭酸鉄を多く含む。	III
IVa	2.5Y3/1	中世の遺物包巻層。中世～近世の遺物包巻層とされているが、今回の調査では中世以前の遺物しか出土しなかった。出土遺物は、中世の遺物も少なからず確認に含まれた。また、平安時代の遺物を多数含むが、Va層と互いの明確性によるものである。黒耕りも著しく、粘性が強く、炭酸鉄がほとんど含まない。炭化物をわずかに含む。	IV
IVb	N5/1	中世の本田耕作土。本田遺構の遺物包巻層が良好な場合は、IVb層上で検出されたが、Va層層上で覆層して検出された遺構が大半である(第1層)。耕作による種や部内置きにより、IVa層(70～75%)とIVb層(30～40%)が混ざる。IVa層層の強い段層の耕作土と見られる。中世～近世の耕作土とみられた。近世の遺物の出土が見られないことから、中世の遺構検出面と判断した。	V-1
Va 上層	10YR5/1	平安時代(9世紀後半)の遺物包巻層。上層は中世の遺構検出面(第1層)。遺物を多く、炭化物をごくわずかに含む。下層は第2面の遺構検出面。調査表裏層では、本層を破壊せず、黒耕りだけでVa層を覆出した。ここでは中世と平安時代の遺構が混在したが、平安時代の遺構は上層に中世の本田耕作土が覆っており、両者の切り合い関係は不明である。すなわち、後世時代の遺構が、同一面から検出されたことになる。一方、平安時代の遺構は内側に向かいVa層の中に埋没していることを確認した。そこで、Va層層上で検出した平安時代の遺構を破壊する部分をVa層層上層として区別した。	V-2
Va	7.5Y6/1	平安時代(9世紀後半)の遺物包巻層。上層は東側のみで確認したVa層層を壊してとする平安時代(9世紀後半)の遺構検出面(第2層)。遺物を多く、炭化物をわずかに含む。調査区の広範囲で実地的に存在する。	V-2
Vb	7.5Y6/1	平安時代(9世紀後半)の遺構検出面(第3層)。上面で検出した遺構層上は、Va層をベースとするがIV層層と類似しており、見分けが非常に困難であった。炭化物をわずかに含む遺物が出したが、これは炭酸鉄が多くなった遺構層上と見られる可能性がある。	V-1
Vla	7.5Y6/1	炭化物を均質に、調査区西側に飛鳥時代1層部が検出した。本表のIVb層層上にあつたものが洪水層であるIVa層に比べて顕著されたものと見られる。その結果として、Vla層に含まれている可能性が高い。	V-1
Vlb 上層	10Y7/2	炭化物を均質に洪水層。飛鳥時代(7世紀初頭)～平安時代(9世紀初頭)の遺構検出面(第4層)。上面で検出した遺構は飛鳥時代が主体であるが、P8309では9世紀初頭の遺物が出た。平安時代の遺構も混在するが、第3面で検出した遺構より高く、新位階と調利である。また、Vlb層中にSX503等の紀元前遺物を混在するが、遺物の形制等はIVc層層上層と一致する。遺構層上に洪水層(Vlb層)が検出された結果、本層に遺物が含まれたと判断した。	V-1
Vlb 中層	7.5Y6/1	炭化物を均質に。	V-1
Vlb 下層	7.5Y6/1	炭化物を均質に。	V-1
※Vlb層上～下層に区分できるが、基本的には一連の遺構層と見られる。下層は砂質で、上部は粘り。他地点のVlb層は、Vlb層と対応。			
Vlc 上層	2.5Y4/1	原始的に灰白色シルトブロック30～30% (粒径小さい)。炭化物少ない。	V-1aまたはV-1c
Vlc	7.5Y3/1	飛鳥時代(7世紀初頭)の遺構検出面(第5層)。Vlc層層上でSX502・SX504・SX509。Vb層層下でSX877を検出したが、両者で見れば込みが明らかになる。Vlc層層下で検出した遺構は1基のみであることから、一括して扱ったが、原始的に時期差を認める。なお、出土遺物の時期差を判断できなかった。直径5mmほどのシルトブロック30%。炭化物極めて多い。上下に区分できず。上面は炭化物多量。色調がやや暗い。	V-1aまたはV-1c
Vlc 下層	5Y5/1	灰白色シルトブロック20% (粒径小さい)。炭化物極めて多い。	V-1aまたはV-1c
Vld	10GY5/1	細粒砂を基本とするがシルトが混在し互層をなす。	粗粒砂
Vle	7.5Y6/1	均質で炭化物なし。	V-3
Vlf	7.5Y6/1	炭化物なし。	V-4
Vlg	7.5Y6/1	炭化物なし。	V-4
Vlh	7.5Y6/1	黒耕りや中耕、炭化物をごくわずかに含む。	V-4
Vli	7.5Y6/1	黒耕りや中耕、炭化物をごくわずかに含む。	V-4
Vlj	7.5Y6/1	黒耕りや中耕、炭化物をわずかに含む。放射性炭素年代測定で4～6世紀の年代が得られており、上下の層の年代を区別する。	V-4
Vlk	7.5Y6/1	黒耕りや中耕、炭化物を含まない。	V-4
Vll	7.5Y6/1	炭化物をごくわずかに含む。	V-4
Vlm	7.5Y6/1	炭化物を多く含む。	V-4
※Vlj層～Vlm層は基本的に同質だが、炭化物を含む層相が異なる。			
Vla	10Y3/1	炭化物30%。炭化物極めて多い。遺物は出土していないが、8-9次調査の遺構検出面の位置に一致する。放射性炭素年代測定で3～5世紀の年代が得られており、この層は整合する。	V-1
Vlb	7.5Y4/1	炭化物なし。	V-3
Vlc	7.5Y6/1	炭化物をわずかに含む。やや白化しておりやや暗い。	V-3
Vld	7.5Y6/1	黒耕りも著しく、炭化物を含まない。	砂質シルト
Vle	7.5Y6/1	細粒砂が混在。	砂質シルト
Vlf	5GY4/1	粗オリブ灰色細粒砂。黒耕り・黒と混ざり、シルトブロックを含まない。	砂質シルト
Vlg	7.5Y6/1	細粒砂が混在。	砂質シルト
Vlh	2.5GY7/1	粗オリブ灰色粘土。粒子が極めて細かい。閉じた時点では、ややピンク色がかっていた。テフラを含む可能性あり。	
Vli	5GY6/1	粗オリブ灰色粘土。	
Vlj	2.5GY7/1	粗オリブ灰色粘土。ややピンク色を帯びており、テフラを含む可能性がある。Dd層より明確に肥能できた。	
Vlk	5GY6/1	細粒砂が混在。	
Vll	5GY6/1	細粒砂が混在。	
Vlm	5GY6/1	細粒砂が混在。	
Vln	5GY6/1	細粒砂が混在。	
X-1	10YR3/1	縄文時代後期前期の遺物包巻層。上面で後期後葉の遺物が出た。しまり極めて強い。炭化物を極めて多く含む。遺物を含むが、裏面にむかう遺物量が少なくなる。	X-1
X-2	5GY4/1	縄文時代後期前期の遺物包巻層。しまり極めて強い。炭化物を多く含む。遺物を含むが、裏面にむかう遺物量が多くなる。土中に含まれる明らかに明い色調で、開耕りある可能性を想定したが、第10次調査では最も多くの遺物が出た。	X-2
X-3	2.5Y5/1	縄文時代後期前期の遺物包巻層。しまり極めて強い。炭化物を多く含む。遺物は局所的に多く含む層があったが、全体的には希薄である。第9次調査では最も多くの遺物が出したが、第10次調査の比較的多かった。	X-3
X-4	2.5GY4/1	部分的に認められた縄文時代の遺構検出面。しまり極めて強い。X-3層と互層の層相。生成による種別が異なると思われる。	
X5	10G5/1	縄文時代後期前期の遺構検出面。しまり極めて強い。炭化物なし。	X5

第2表 市道区の基本層序

である。IV層は、平安時代の遺物包含層であるVa層が耕作により水田土壌化した層であるため、出土遺物の大半は平安時代のものであったが、珠洲焼甕（図版42-1）、青磁碗の細片が含まれるなど、中世の遺物が混在した。なお、過去の調査では、中・近世の遺構検出面とされてきたが、今回の調査で近世以降の遺物の混在は確認されず、中世の遺構面と判断した。また、第10次調査では、明らかに平安時代に位置づけられる遺構が、IVb層上面に混在することが判明した。年代の異なる遺構を、同じ層位で検出できるものの、切り合い関係から年代差を読み取ることができた。また、平安時代の遺構埋土の最上層を、中世の水田耕作土が被覆することを確認でき、両者で年代差があることを明らかにすることができた。

第2面 / Va層上面 平安時代（9世紀後半）の遺構検出面で、標高は13.2m前後である。第1面で検出した遺構のうち、平安時代の遺構のみが、西側に向かいVa層中に潜り込んでいき、中世の遺構と層位的に明らかに区別できたため、過去の調査では把握されていない新たな検出面と判断した（第17図）。平安時代の遺物包含層とされてきたVa層を細分し、遺構検出面を覆う部分を「Va層上部」として区別した。

第3面 / Vb層上面 平安時代（9世紀後半）の遺構検出面で、標高は13.0m前後である。過去の調査で平安時代の遺構検出面とされたV層面に対応し、これを覆う遺物包含層はVa層である。畑作溝群と、その分布の間で掘立柱建物を検出した。

第4面 / Vb層上面 飛鳥時代（7世紀初頭）～平安時代（9世紀初頭）の遺構検出面であり、標高は12.6～12.7m前後である。Vb層上面で検出された遺構は、飛鳥時代が主体である。Vb層を覆うVla層から飛鳥時代の遺物が出土しているが、これはVb層上面にあったものが洪水堆積層であるVla層によって被覆された結果と見られる。また、P8309では、9世紀初頭の遺物が出土しており、平安時代の遺構が混在することが明らかになった。これはVb層で検出した遺構よりも明らかに古い年代を示しており、層位関係と遺物の年代観が整合する。ただし、これに対応する遺物はほかに出土しておらず、柱穴の組み合わせから掘立柱建物を見いだすこともできなかった。柱穴を検出した範囲は、Vb層上面で掘立柱建物を検出した範囲と重複しており、Vb層上面で検出できなかった柱穴の一部をVb層上面で検出した可能性が高い。したがって、Vb層上面で検出した柱穴の多くは、本来、Vb層上面から掘り込まれた遺構と見られるが、飛鳥時代の遺構と識別することができなかった。

第5面 / Vc層上面・下面 飛鳥時代（7世紀初頭）の遺構検出面であり、標高は12.4～12.6m前後である。Vc層を挟んで、上下から遺構を検出しており時期差があるものの、下面の遺構分布は局所的であり、同一面として報告する。検出遺構は平地建物のみで、Vc層上面でSI8502・SI8564・SI8569、Vc層下面でSI8571を検出した。明らかに掘り込み層位が異なるが、遺物から年代差を把握することはできなかった。

第6面 / X層～XI層上面 縄文時代後期前葉の遺構検出面であり、標高は9.6～9.7m前後である。この時期の良好な遺跡が検出された第9次調査範囲と比べると、標高が50cmほど低く、遺構・遺物とも希薄であった。検出面を覆う遺物包含層であるX層は、X-1・X-2・X-3に細分される。X-1層上面から後期前葉の遺物が局所的に出土したほかは、各層から後期前葉の遺物が出土した。細分した層位間で時期差が存在することも想定したが、第10次調査範囲では把握できなかった。また、各層の間に遺構検出面が存在することを想定し、XI層上面のほかX-2上面、X-3層上面でも精査を行った。その結果、各面遺構を検出できたものの不明瞭であり、確実な遺構を捉えることができたXI層上面を遺構検出面としておく。

B 東 区

1) 基本層序 (第10・12図)

東区の基本層序は、隣接する第2次・第6次調査と一致することから、同じ層名を与え、本調査区での観察に基づいて記載を補足した。ただし、第10次調査では表土直下に遺構検出面V層があり、II~IV層は確認されなかった。

I a層 : 10YR5/1 褐灰色シルト 現代の耕作土。I b層より明るく、炭化物をごくまばらに含む。

I b層 : 10YR4/1 褐灰色シルト 耕地整理前の現代の耕作土。直径1-3cmほどの地山ブロックを20%含む。

V層 : 10YR6/1 褐灰色粘質シルト 上層(中世)の遺構検出面。均質でしまりが強い。遺構検出面の下位10cmほどになると、やや砂質となる。

V層下部 : 7.5Y7/1 灰白色粘質シルト 第2次・第5次調査のV層の一部と見られる。

VI層 : 7.5Y6/1 灰色粘土 炭化物をごくわずかに含む。第2次調査のVI層に対応すると見られる。

VII層 : 7.5Y4/1 灰色粘土 炭化物をわずかに、IX層ブロックを50%含む。低地のみで認められる。第2次調査のVII層に対応すると見られるが、記載内容は一致しない。

IX1層 : 10YR3/1 黒褐色粘土 炭化物を極めて多量に、灰色シルトブロックを30%程度含む。古墳時代前期の遺物をわずかに含むが、IX2層に由来すると見られる。

IXK層 : 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土 IX1層とIX2層に挟まれた間層。洪水堆積物と見られ、低地のみで認められる。

IX2層 : 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土 下層(古墳時代前期)の遺物包含層。遺物を多く含む。炭化物を多量に、直径5mmほどの灰色シルトブロックを30%程度含む。IX1層より粘性がやや強い。

X層 : 7.5Y5/1 灰色粘土 下層(古墳時代前期)の遺構検出面。均質で混入物は認められない。

2) 遺構検出面

以上のとおり、遺構検出面は上層と下層の2面が確認された。上層はV層上面で検出される中世の遺構面である。下層は、IX2層を遺物包含層とし、X層上面で検出される古墳時代前期の遺構面である。これらの層位関係は、隣接する第2次・第6次調査の成果と一致する。

4 調査の概要

市道区は、遺跡の西側に設定された幅8mの調査区である。縄文時代の遺跡が地下4mに埋没しているため、調査対象範囲995.68m²に鋼矢板を打設して調査を実施した。遺跡が洪水堆積物をさきみながら、遺跡が累積することが最大の特徴で、第10次調査では6面の遺跡を確認した。調査面積は、第1面:995.68m²、第2面:224.01m²(東側のみ)、第3面:995.68m²、第4面:435.42m²(西側のみ)、第5面:995.68m²、第6面:387.36m²(西側のみ)で、累計4,033.83m²である。出土遺物は、中世の陶磁器2点、平安時代の土師器・須恵器44箱、木製品8箱、飛鳥時代の土師器・須恵器19箱、縄文時代後期の土師器12箱、石器4箱(箱の内寸 浅箱54×30×10cm)である。

A 市 道 区

第1面

IVb層上面～Va層上面で中世の水田19枚、畦畔16条、井戸1基、土坑4基、ビット4基、溝24条等を検出した。第9次調査以前においても水田遺構を検出しており、中近世の検出面とされてきたが、第10次調査では近世以降の遺物の混在は確認されなかった。数少ないながらも中世の遺物が出土しており、中世の遺構検出面と判断した。なお、出土遺物の大半は平安時代のものであるが、耕作により下位の遺物包含層が攪拌された結果である。遺構の遺存状態は良好で、特に西側は畦畔や水田区画を明瞭に把握できた。なお、遺構の切り合い関係と主軸方位の検討を行い、3段階の遺構が累積することが明らかになった。

第2面

Va層上面で平安時代(9世紀後半)の土坑3基、溝26条、柱穴4基等を検出した。調査範囲東側では第1面をVa層上面で検出したが、そのうち平安時代の遺構のみが、西側に向かいVa層中(平安時代の遺物包含層中)に潜り込んでいくことが明らかになった。第1面の中世遺構との新旧関係は切り合いから明らかであり、かつ、第9次調査以前に平安時代の遺構検出面とされたVb層上面とは、明らかに異なる検出面であった。この所見を踏まえ、第10次調査で新たな遺構検出面と認識して調査した。遺構は、溝等を検出した。溝のうちSD8082は直線状に延びる区画溝で、多数の遺物が出土した。完形の須恵器杯・土師器碗が特定の範囲から集中的に出土しており、饗宴に伴う可能性がある。一方、SD8075・SD8177・SX8100でも多数の遺物が出土したが、焼け爛れた破損品が多量の炭化物や焼土とともに出土した。また、SD8177からは炭化米が塊の状態出土しており、中には鞘が付いた穂の付いたものもあった。炊飯時に誤って炭化したのではなく、保管時に火災により炭化した可能性がより高いと見られる。埋土に多量の炭化物を含むことも踏まえると、火災後の後始末で生じた廃棄物を含む土砂で埋め戻された可能性が考えられる。

第3面

Vb層上面で平安時代(9世紀後半)の掘立柱建物7棟、井戸1基、土坑7基、溝77条を検出した。掘立柱建物は、いずれも南北軸を意識して建てられており、4時期の変遷が明らかになった。このうち最も新しい段階に位置づけたSB8259・SB8306は、本来は第2面を検出面とする可能性が高い。なお、第2面で検出したSD8082は、SB8259・SB8306の間を縫うように位置しており、饗宴の可能性のある遺物はこれらの建物と接する範囲に当たる。溝は、平行して群をなしており畑作溝と見られる。調査区西側で掘立柱建物の範囲を避けるように検出しており、土地の使い分けを把握できた。また、出土遺物には漆工房に関する資料(漆パレット)、文字に関する資料(墨書土器・円面碗)が見られ、地域における中核的な遺跡であったことを示している。

第4面

VIb層上面で、飛鳥時代(7世紀初頭～前半)と平安時代(9世紀初頭)の遺構を検出した。飛鳥時代の遺構が主体であるが、建物の周溝などを検出した。飛鳥時代の遺構検出面は3面に細分できるが、その最上層に当たる。また、P8309で9世紀初頭の遺物が出土しており平安時代の遺構が混在することが明らかになった。これはVb層で検出した遺構よりも明らかに古い年代を示しており、層位関係と遺物の年代観が整合するが、本来はVb層上面から掘り込まれた可能性も考えられた。

第5面

VIc層上面及び下面から飛鳥時代(7世紀初頭から前半)の平地建物と祭祀跡を検出した。VIc層上面では、西側から平地建物3棟・溝1条・ピット5基、東側から祭祀遺構3基を検出した。VIc層下面では、西側から平地建物1棟を検出した。調査範囲の西側から建物、東側から祭祀跡を検出しており、土地の使い分けを明瞭に把握できた。また、第4面を含めた計3面の飛鳥時代の遺構検出面の間には、洪水堆積物が認められた。各層から出土した遺物に明確な時期差は認められず、短期間のうちに2度、洪水災害に遭遇し、復興したと考えられた。被災から復興に至る過程を把握できる点においても重要な成果といえる。

飛鳥時代の建物は、第4面で検出したSX8522も含めて検討したほうが理解しやすい。いずれも周溝を伴う平地建物で、大型(SI8502)と小型(SX8522・SI8564・SI8569・SI8571)の2種類からなる。周溝の外法は、大型が13.5m、小型が5.3～7mほどである。周溝は、大型が環状にめぐる(方形基調で一部途切れる)のに対し、小型は「コ」の字状で東側が開く。建物のプランはいずれも方形で、東西南北を意識して建てられているが、検出面ごとに軸方位が異なる。軸方位は、時間の経過とともに反時計回りに変化しており、検出面ごとに計画的に建物を構築している可能性が高い。SI8502・SI8564・SI8569の床面では、カマド・地床が検出した。建物の床面及び周溝からは壺・瓶・支脚が出土しており、カマドの利用が想定されるが、それを裏付ける痕跡は明瞭でない。SI8502の東辺で認められた床面の張り出し部分の内側には細長い火床面を検出しており、ここにカマドが設置されたと思われるが、カマド本体は検出されなかった。柱穴は、いずれの建物においても明瞭に把握できず、構造を明らかにできなかった。そもそも柱穴を持たない建物である可能性もある。

祭祀遺構は、建物域の東側で検出した。SX8503は、古墳時代中期・後期に認められる土器集積遺構に通じるものである。高杯を中心に土器が意図的に配置され、祭祀に使われたとされる手捏ね土器や白玉が出土した。飛鳥時代における同種の遺構は、県内では初例であり、古墳時代の祭祀が7世紀初頭まで引き継がれたと見られる。このほかにも建物の東側では須恵器甕が単独で出土するなど、居住とは異なる空間であった可能性が高い。また、飯田川上流域に築かれた水科古墳群・宮口古墳群との関係性も注目される。

調査区西端で検出した須恵器大甕の埋設遺構も注目される。大甕は、口縁部に細密な櫛歯波状文が施され、最大径67cmの球胴部には縦横に突帯が貼付されており、つくりが精良である。当時、頸城平野では須恵器生産は開始しておらず、外来の遺物であることは確かであるが、生産地は不明である。容易に入手できない大甕をあえて埋設した目的は、水などの液体の貯蔵、醸造などを想定できるが、覆屋などの施設を検出できておらず、具体像は明らかでない。

飛鳥時代の調査成果は、頸城部新設置につながる律令体制前後の頸城平野の状況を知るうえで重要な資料といえる。

第6面

X層中及びXI層上面で縄文時代後期前葉の遺構を検出した。XI層上面の標高は、現地地表下約4mの9.6～9.7m前後であり、遺跡の中心部と見られる第9次調査範囲より50cmほど低い。検出遺構は、遺物集積域と完形土器を埋設したP8807などがあるが希薄であり、遺跡の外縁部に当たると見られる。遺物包含層であるX層はX-1・X-2・X-3に細分され、X-1層上面から後期後葉の遺物が局所的に出土したほか、各層から後期前葉の遺物が出土した。後期前葉の土器は、堀之内2式併行のひんご2式が中心である。

信越国境付近の千曲川・信濃川流域に分布するひんご式土器が、高田平野にまで広がることが明らかとなり、当地域の編年を考える上で重要な資料となった。また、客体的に認められた越後系や北陸系の土器は、信州と日本海沿岸の接点に当たる高田平野の地域的特性をよく示している。

B 東 区

東区の調査は、上層（中世）と下層（古墳時代前期）の2層を対象に実施した。調査面積は、上層が1,174.33m²、下層が231.02m²で、累計1,402.35m²である。出土遺物は、中世の陶磁器1箱・木製品5箱、古墳時代前期の土師器4箱（箱の内寸 浅箱54×30×10cm）である。

上層

東区は、第1次調査及び第6次調査の調査区と隣接しており、それらの遺構配置を踏まえながら調査を進めた。第10次調査の調査区は、用水路をはさんで北側と南側に分かれる。いずれの範囲でも、表土直下のV層上面で中世（14～15世紀）の遺構を検出した。北側は、第6次調査で検出した中世集落の縁辺に当たり遺構密度は希薄であったが、井戸3基、土坑3基、溜井2基、溝10条、柱穴3基を検出した。特に注目されるのは、方形区画溝とした特異な遺構である。集落外縁で単独で検出しており、宗教的施設など、集落の共有施設であることが想定された。井戸はいずれも素掘りで、比較的小型である。南側では、掘立柱建物1棟、井戸6基、土坑1基、溝1条を検出した。掘立柱建物と井戸から構成される中世集落の外縁に当たる。掘立柱建物は、次年度調査範囲まで広がっており、全体像を把握できていない。井戸はいずれも素掘りで、鹿嶋儀礼に伴うと見られる遺物が多数出土した。中でもSE9032では陶磁器・漆器・曲物・砥石・火打石・火打金など多様な遺物が出土した。

下層

東区南西側の中世の井戸を調査していたところ、壁面に黒褐色の上層が水平堆積し、古墳時代前期の遺物が含まれることを確認した。これを受けて下層の確認調査を実施したところ、東区の南西隅に古墳時代前期後半の遺物包含層（IX2層）の存在を確認した。遺物包含層の深度は南西隅が最も高く、北東側に向かって傾斜しており、北側ほど泥炭質に変質していた。この状況は、調査対象地西側の第2次調査の所見と一致し、遺構の広がりは南西隅の微高地に限られることが推定された。泥炭質に変質している北側では遺物の出土数が少なく、231.02m²について本発掘調査の対象とした。調査の結果、微高地の頂部付近で古墳時代前期の土坑3基を検出したが、第2次調査で検出した遺構の広がりと評価できる。中でもSK9091から出土した丸底甕は、ほぼ完形であるが底部の一部を欠いており、供献遺物の可能性がある。

第IV章 市道区の調査

1 遺 構

A 第 1 面 (IVb ~ Va 層上面 / 中世 : 図版 3 ~ 7・54 ~ 58)

中世の遺構は、水田 19 枚、畦畔 16 条、井戸 1 基、土坑 4 基、ピット 4 基、溝 24 条、性格不明遺構 5 基を検出した。調査区のほぼ全域から水田が検出されていることや出土遺物が極めて少ないことから、当地は生産域であったと考えられる。調査区の地形はほぼ平坦であるが、中央西寄りの大グリッド 48・49・50 列付近だけがわずかに高くなっている。水田はこの微高地以外から検出されている。標高は、水田が分布する範囲が 13.30 ~ 13.40m、微高地のうちもっとも高い 49 列付近が 13.50m である。

微高地からは、井戸 1 基、用水路の可能性のある長い溝 2 条、短い溝 6 条、ピット 4 基を検出した。この微高地は、水田の営農にともなう諸々の作業を行う作業場的な場所であった可能性がある。

中世の層である IVa・b 層は、耕作により Va 層が水田土壌化した層である。このため IV 層から出土する遺物の大半は古代（平安時代）の遺物である。中世の遺物は、珠洲焼甕 (1) の肩部片、劃花文が施された青磁碗の細片が 1 点ずつ出土したのみで、各遺構の詳細な時期については不明である。なお、近世以降の遺物の出土は皆無であった。

1) 水 田

畦畔は、調査区のほぼ全域から 16 条検出した。いずれも疑似畦畔 B [斎野²⁶ 1987] で、IVa・b 層を土とする水田の間に V 層が帯状に残ったものを畦畔として認識した。なお、畦畔 8078 では部分的ではあるが疑似畦畔 B 上に V 層を基調とする盛土が確認されている。

水田は 19 枚検出したが、調査区の幅が狭く区画の全貌がわかるものはほとんどない。中世の水田は、近世以降の水田耕作 (III 層) によって大半が削平されており、作土層の下面に近い部分が遺存している状況であった。水口などは検出されておらず、利水の状況については不明である。

水田は区画の方位から南北方向の軸をもとに A ~ C 群の 3 つに大別した (第 13・14 図)。

A 群は、約 29° 東偏する水田群である。調査区の西側から 22 水田 15 ~ 19 の 5 枚を検出した。方形を基調とする水田群で比較的整然とした配置である。本群のほぼ中央には幅広い畦畔 8034 が南北に延びるが、北側中央付近から直径 28cm、厚さ 14cm ほどの扁平な円礫が 1 点検出された。畦畔に水平にめり込んだような状況で遺存していたもので、断面での観察も行ったが掘り込みなどは確認できなかった。ほかに同様の礫は検出されていないことから、何らかの目印として設置されていた可能性がある。位置的には丁字状に交差する畦畔 8034 と畦畔 8040 の交点付近にあり、北西へ約 2m 離れたところには SX8039 がある。SX8039 は地山である V 層を鳥状に高く掘り残したところと不整形に掘り下げたところからなる性格不明の遺構である。SX8039 を取り囲むようにしてある 22 水田 19 との関係については不明であるが、V 層を掘り残していることから 22 水田 19 に先行する遺構である可能性が高い。なお、22 水田 19 の西側にある畦畔 8030 の南北両側も、区画が判然としないが一段低いことから水田の可能性はある。

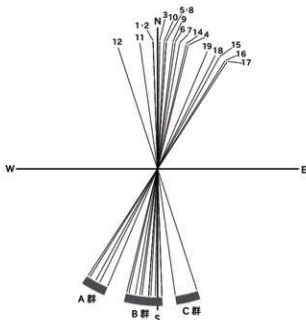
B群は、約6°東偏する水田群である。調査区の東側を中心に22水田1～10・14の11枚を検出した。東西に長い長方形の区画を含む水田群で、C群を切っている。遺物は、22水田14から珠洲焼炭(1)の胴部片が1点出土している。重複する水田の新旧関係は次のとおりである。

- (新) B群: 22水田4・5・6・7・8、22水田9>22水田10
 > C群: 22水田11(古)

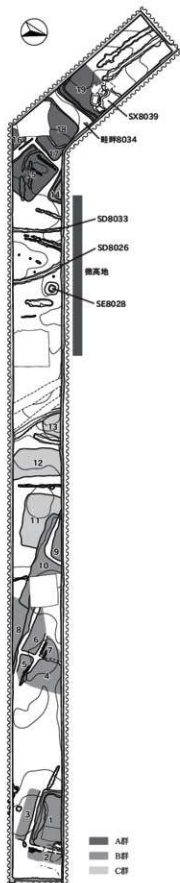
C群は、約13°西偏する水田群である。調査区の中央から22水田11・12・13の3枚を検出した。平面形は一定せず、配列にも規則性がない。水田間の畦畔に相当する部分も幅広く一定しない。いずれも計画性に乏しく個別に地表面を掘りくぼめて作った水田のようにみえる。本群の水田は、新潟市の細池遺跡・寺道上遺跡〔小池ほか1994〕で検出された凹状遺構に近似していることから掘込田〔能登1993〕である可能性が高い。本群はB群に切られていることから、もっとも古い水田群の可能性が高い。本群と軸方位が近い遺構として、微高地から検出された用水路の可能性のあるSD8033、短い溝SD8027・8029がある。

2) 井戸

井戸は調査区西側の微高地から1基検出した。SE8028は、微高地のほぼ中央、もっとも標高の高い49W区に立地する。素掘りの井戸で、規模は長径1.88m、短径1.70m、深さ2.20mである。遺物は出土していない。



第13図 水田の南北軸方位図



第14図 中世の水田配置図

3) 土 坑

土坑は調査区の東端を中心に4基検出した。

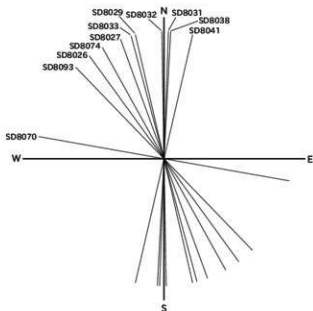
SK8062は、楕円形の浅い土坑で単層の埋土はIVb層を基調とする。畦畔8067と畦畔8068の交点に位置するが、主軸方位が畦畔とは約45°ずれる。SK8066は、円形の浅い土坑で埋土に炭化物を多く含む。SK8066の南西側には近接して性格不明遺構SX8087・8097がある。いずれも浅く不整形な形状で埋土に多量の炭化物を含んでいることから、これらは一連のものである可能性がある。SK8069は、楕円形のやや深い土坑で北側は調査区外となる。B群の水田である22水田1を切っている。主軸方位が22水田1とはほぼ同じであることから、同水田よりもわずかに新しい遺構と想定される。SK8073は、調査区中央の畦畔8238上にある楕円形の小さな土坑である。SD8072と重複して切られる。

4) 溝

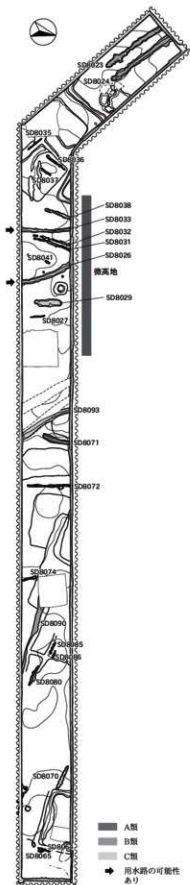
溝は調査区のほぼ全域から24条検出した。溝はその特徴からA～C類の3つに大別した(第15・16図)。

A類は、畦畔の中央にある溝である。SD8035・SD8071・SD8072の3条で、水田A・C群のうち幅広の畦畔の一部にみられる。

B類は、畦畔脇の水田内に延びる溝である。SD8064・8065・8080・8085・8086・8090・8036・8037・8023・8024の10



第15図 溝C類の主軸方位図



第16図 中世の溝配置図

条で、このうちSD8064・8065、SD8085・8086、SD8036・8037は2条一組となって平行する。区画が判然としないうちの水田とはしなかったが、畦畔8030の両側にあるSD8023とSD8024も浅く不整形な溝であることから本類の可能性はある。水田内の導水のための溝切りなどの可能性が想定される。水田A・B群でみられる。

C類は、前述した以外の溝である。SD8026・8027・8029・8031・8032・8033・8038・8041・8070・8074・8093の11条で、このうちSD8026・8033の2条は調査区外まで延びる長い溝で用水路の可能性はある。ともに微高地から検出されている。SD8093もこれに近いが現代の水路とほぼ同じ位置にあり、新しい時期の溝である可能性がある。また、微高地で検出した、平行するSD8031・8032・8038の主軸方位は水田B群、用水路の可能性のあるSD8033やSD8027・8029の主軸方位は水田C群に近似する。

5) 性格不明遺構

性格不明遺構としたものは調査区の東側と西側から5基検出した。

SX8039は、水田A群の22水田19の北側から検出した。地山であるV層を鳥状に高く掘り残したところと不整形に掘り下げたところからなる遺構である。埋土は水田作土と同じIVa層が堆積する。遺物は出土していない。22水田19との関係は不明であるが、V層を掘り残していることから22水田19に先行する遺構である可能性が高い。

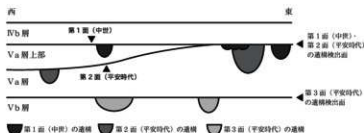
SX8045とSX8046は、平行して東西方向に延びる不整形な遺構で、掘り込みはなく、水田A群の22水田15の上面にIII層に近い色調の染み状の痕跡を検出したものである。新しい時期に上層からの影響で形成された可能性がある。

SX8087とSX8097は、調査区東端に近い南壁際から並んで2基検出した。浅く不整形な遺構で埋土には炭化物を多量に含む。北東側に近接するSK8066も近似した特徴をもつことから、これらは一連の遺構である可能性が高い。

B 第 2 面 (Va層上面 / 平安時代：図版8～11・59～63)

調査区東端では、Va層上面で中世と古代の遺構が混在するように検出した。過去の調査では、この面で検出した遺構すべてを中世以降に属すると評価してきたが、SD8082における遺物の出土状況(図版11)を鑑みると、平安時代の遺構が混在することは確定であった。また、平安時代の遺構と中世の遺構では、明らかな切り合い関係が認められた。平安時代の遺構埋土の最上部を、中世の遺構(水田)埋土が覆っていることを確認しており、同一面で検出しているものの、明らかな時期差を読み取れる。なお、中世と古代では、埋土の色調も明らかに異なり、分別することができる。また、平安時代の遺構検出面は、西側に向かいVa層中に潜り込んでいき、中世の遺構検出面と明らかな層位差をもって捉えることができた(第17図)。

以上の状況を踏まえ、両者を分



第17図 Va層上面の遺構検出状況

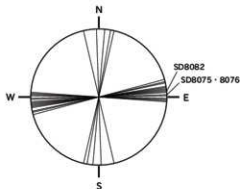
けて調査・報告することとした。このように遺構検出面を捉えられたのは、50グリッド以東で、これより西側では確認できなかった。

IVa層上面で検出した遺構は土坑3基、溝26条、柱穴4基、性格不明遺構1基である。土坑や柱穴は単独で検出されており、性格は不明である。この面で特徴的に検出したのは、溝である。出土遺物から、いずれも9世紀後半の遺構と考えられる。

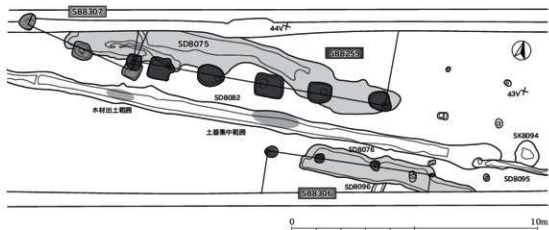
SD8051～8061・8063・8091(図版8)は、直線的な溝群である。長軸はおおむね東西方向にあり、77～89度東偏する8条と86～89度西偏する4条がある(第18図)。溝の規模や間隔等から畑作溝の可能性が高く、第9次調査では、この延長部分を検出している。これらは42グリッド以東に取まることから、耕地の縁辺に当たると見られる。

SD8095は、SD8082、SK8094と重複し、最も新しい。SD8082との重複部分付近では、円面視(34)が出土したが、本来はSD8082に含まれた可能性がある。

SD8075・SD8076は、Vb層の調査で検出したSB8259、SB8307、SB8306と重複する。須臾器(6・10)・土師器(7・8)・灰陶陶器碗(11)・羽口片(9)・鉄滓が出土したほか、SD8075では指頭大～拳大の炉壁と見られる焼成粘土塊や焼土粒が多量に出土した。近隣に鍛冶場が存在した可能性を示すが、その裏付けとなる遺物は、破砕されたような状態で出土した。したがって、これらは埋め戻し土に廃棄物として含まれた可能性を考えたい。また、調査後にVb層掘削後に検出したSB8259・SB8307・SB8306(図版12)の柱筋と、SD8075・SD8076の範囲が一致することが明らかになった(第19図)。SB8259・SB8307の柱穴は、大型建物としては検出面からの根入れが浅く、上屋を支えるのに十分な深さがなく、本来の掘り込み面をVa層上面と捉えたほうが妥当であるかもしれない。溝と掘立柱建物に関係性があるとすれば、SD8075・SD8076を建物建設時の布張りや、建物解体時の痕跡であることを想定できる。両者の可能性とも考え得るが、溝の形状が歪で深さが一定でないこと、埋戻し土に大量の廃棄物が含まれることを踏まえると、建物解体時に柱の抜き取り時に掘削された溝と考えたほうが妥当であるかもしれない。



第18図 Va層上面検出の溝の長軸方位図



第19図 Va層上面で検出した溝とVb層上面で検出した掘立柱建物の位置関係

い。なお、SB8259・SB8307では、礎板は出土しているが、柱根は出土していない。木製遺物が遺存する環境において、柱根が出土しなかった理由といえようか。

SD8082(図版8)は、SD8075とSD8076の間にあり、これらの長軸方向はほぼ平行する。SB8259・SB8306とも平行し、その間を縫うように位置する。(第19回)SB8259・SB8306との関係が想定されるが、溝が建物の範囲を超えて延びること、溝と建物が近接し過ぎていることから、偶然の結果である可能性もある。少なくとも雨落ち溝のような性格の溝ではない。断面形は箱状・台形状で、ほかの溝と比べて明らかに深く掘られている。また、東西両端は階段状の段をもつが、同様の特徴は南側に隣接するSD8084にも認められる。埋土中からは、多数の遺物が出土した。44V13・14グリッドでは、底面直上の埋土5層から大量の木材が出土した。端材が大平だが、箸状木製品(56・57)も含まれた。43V10・15、44V6・11グリッドでは、9世紀後半の灰軸陶器小瓶(33)、須恵器無台杯(14~16)・壺(18)、土師器無台椀(20~25・29)・小囊(32)、黒色土器鉢(31)などがまとまって出土した。特に、遺存状態が良好な須恵器無台杯と土師器無台椀が、特定の範囲から集中的に出土したことが注目される。饗宴後の一括投棄などを想定させる出土状況といえる。遺物が集中的に出土した範囲は、掘立柱建物と隣接しており、相互の関係性も想定される。また、遺物には転用硯(12・13)や墨書土器(14~17・30)も見られる。SD8095出土の円面硯も本来はSD8082に含まれる可能性があり、文字に関する遺物が多く出土した点も特筆される。

SX8100は、底面は全体的に大小の凹凸が目立つ性格不明遺構である。深さは浅いが、炭化物を多量に含む埋土に被覆されている。その東端に当たるSD8177の46W2・4グリッドからは、9世紀後半の灰軸陶器椀(39)、黒色土器有台皿(37)、黒色土器椀(38)、須恵器瓶(40~42)、土師器椀(35・36)、炭化米などが集中的に出土した(図版11)。須恵器の器面には、二次焼成による顕著な変質が見られることが特徴的である。炭化米は塊の状態出土しており、中には糊が付いた穂の状態のものも認められた(第20回)。炊飯時の事故による炭化ではなく、保管時に火災により炭化した可能性が高いと見られる。埋土に多量の炭化物を含むことも踏まえると、火災後の後始末で生じた廃棄物を含む土砂で埋め戻された可能性が考えられる。なお、第8次調査でも、多量の炭化米とともに焼け残った木材が出土している。

SD8025は、中世の水田遺構調査時に、西側で単独で検出した。周囲に比べ標高が0.1~0.15m高い位置で検出され、低地へ水を配水していた水路の可能性がある。埋土3層は中粒砂であり、水流の存在がうかがえる。南側の西側斜面から、9世紀後半の須恵器無台杯(3)、土師器無台椀(2)・囊(5)、黒色土器椀(4)が出土した。



第20回 SD8177出土の炭化米(右側は糊が付いている。)

C 第 3 面 (Vb 層上面 / 平安時代 : 図版 12 ~ 21・63 ~ 75)

Vb 層上面では、平安時代の遺物包含層である Va 層を埋土とする掘立柱建物 7 棟、井戸 1 基、土坑 7 基、溝 77 条を検出した。掘立柱建物は、南北軸を意識して建てられている。主軸方向の分類と遺構の切り合い関係の分析から、4 時期に分かれることが明らかになった。このうち最も新しい段階に位置づけた建物の本来の掘り込み層位は、Va 層上面である可能性がある。溝は、区画溝または用排水に伴う溝と耕作に伴う溝を検出した。耕作に伴う溝は、平行して群をなしており、東側と西側で顕著な集中域が認められた。これらは、出土遺物から 9 世紀後半に位置づけられる。

1) 井 戸

井戸は 1 基 (SE8123) 検出した。埋土上部には被熱した礫が多数含まれ、このような出土状況は、井戸の廃絶に伴う祭祀行為を示すとされる [駒見 1992]。また、3 層中には炭化物が顕著に含まれ、この炭化物も被熱した礫と同様に井戸の廃絶に伴う祭祀行為を示す可能性がある。遺物は 6 層から瓢箪、8 層から黒色土器無台椀 (45)、柄杓の柄 (58) が出土した。これらも、被熱礫と同様に廃絶時の祭祀行為による可能性がある。時期は、黒色土器の年代から 9 世紀後半と考えられる。

2) 土 坑

土坑は 7 基 (SK8129・SK8150・SK8188・SK8218・SK8233・SK8234・SK8236) を検出した。SK8129 は主軸を SB8251 とほぼ同じくすることから、SB8251 と同時期の遺構と考えられる。SK8188 は西側平行溝群 (48・49・50W, 49X) と平行し重複しないことから、西側平行溝群と同時期の構築と推定できる。SK8234 は西側平行溝群に切られることや主軸が SB8251 と一致することから、建物と同時期に構築された可能性がある。

3) 掘 立 柱 建 物

柱穴の検出 柱穴は調査区東側の 43・44V、46V、46W グリッド周辺 (以下、東側集中域) と調査区西側の 49・50W、49・50・51X グリッド周辺 (以下、西側集中域) で、集中的に検出した。遺構埋土の色調が淡く、Vb 層に類似すること、西側集中域では建物廃絶後の耕作に伴う平行溝群に切られていることから、認識が困難なものがあつた。また、柱穴の配置から掘立柱建物の存在が想定できたが、適当な位置に柱穴を確認できない場合があつた。その場合は、検出トレンチ状に下げて有無を確認し、検出漏れがないように努めた。

掘立柱建物の把握 102 基の柱穴の配置を検討した結果、7 棟の掘立柱建物を認識した。分布域は東側集中域 (43・44V、46V・46W) と西側集中域 (49・50W、49・50・51X) に分けられる。東側集中域は、建物を構成する柱穴以外の遺構が少なく建物の抽出は容易であつた。一方、西側集中域では、建物を構成する柱穴のほかにも多数の柱穴が存在しており、実際には 7 棟を上回る数の建物が存在したと考えられる。

構 造 掘立柱建物は高田平野の事例を中心に検討した春日真実 [2009] の分類にしたがい構造を検討する。検出した 7 棟の構造から、梁間 1 間型建物 (SB8252・SB8259・SB8305・SB8306・SB8307)、梁間 1 間型近接棟持式建物 (SB8308)、総柱型建物 (SB8251) に分類できる。

SB8252 は柱間寸法が P8310・P8214 間で約 3.0m、P8214・P8237 間で約 4.8m と大きな差があ

るが柱筋が通ることから組み合わせを認識した。柱穴の径は約60～100cmで他の建物と比較するとやや大きい。

SB8259は平面形が方形を呈する柱穴と楕円形を呈する柱穴が混在する。P8260は柱穴が径約60cmとSB8259の柱穴としては小さく、また柱間が約1.4mとほかの建物と比較しても極端に短い。柱間寸法は約1.9～2.5m、柱痕の径は18～30cmとばらつきがある。P8260を除く柱穴の径は、約100～110cmである。P8265から調査区の緑辺まで、4m近くあるが柱穴が確認できないことから、梁間1間型建物の可能性が高い。

SB8305の柱間寸法は約1.7～2.2m。柱穴の径は約20～40cmであり、他の建物と比較すると小さい。柱痕の径は8～18cmである。

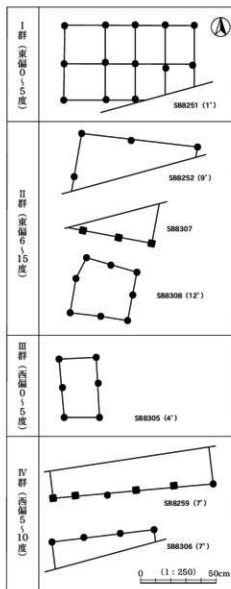
SB8306の柱間寸法は約2.1～2.3m、柱穴の径は約40～50cmである。そのうちP8257の柱穴の径は、約23cmとほかの柱穴の半分程度である。柱間寸法は約2.2mとほかの柱穴と大差がない。柱痕の径は8～23cmである。

SB8307の柱間寸法は約2.3～2.4m、柱穴の径は60～80cmである。P8278から調査区の緑辺まで3m近くあるが柱穴が確認できないことから、梁間1間型建物の可能性が高い。

SB8308、平面形がほぼ正方形を呈する建物である。西側の柱筋が乱れ中央部のP8293がやや柱筋から突出することから、棟持柱ありの梁間1間型建物の可能性がある。検出面からの柱穴の深さは17～26cmと他の建物と比較すると浅い。また柱穴の径も約20～30cmと小さい。柱間寸法、約1.5～2.7mとばらつきがある。

SB8251は西端の桁行1間分の柱間寸法が約2.7mと他の柱穴と比較しやや広い。ほかの柱穴の柱間寸法は約1.9～2.1mである。柱穴の径は80～100cm。柱痕の径は20～34cmである。

規模 掘立柱建物の規模に関して検討する。SB8251は桁行4間(8.1m)、梁間2間(5.0m)で面積は約40m²である。SB8305は桁行2間(3.9m)、梁間1間(2.4m)で面積は約9.3m²である。SB8308は桁行2間(3.5～3.8m)、梁間1間(3.3～3.8m)で面積は約13m²である。ほかの3棟の建物に関しては、桁行または梁間1列のみの検出で、大部分が調査区外に延びるため正確な建物規模は不明であるが、検出範囲の面積を示す。SB8252は2間1間(7.7×3.8m)を検出し、面積は検出範囲で約19m²である。SB8259は、桁行5間(10.6m)を検出し、面積は検出範囲で約31m²である。SB8306は桁行3間(6.8m)を検出し、面積は約9.2m²である。SB8307は桁行2間(5.6m)を検出し、面積は約8.0m²である。第10次調査で検出した建物は、面積により小型建物(SB8305・SB8307・SB8308)、中型建物(SB8252・SB8306・SB8251)、大型建物(SB8259)に分類できる。



第21図 掘立柱建物の構造と主軸方向

主軸方向と時期 検出した7棟の建物は東西南北軸を意識して構築されており、南北に桁行をもつ「南北棟」と東西に桁行をもつ「東西棟」に大別できる。南北棟はSB8305・SB8308、東西棟はSB8251・SB8259・SB8306である。

各建物の南北の柱筋を主軸とし、その主軸方向が示す南北方向に対する傾きにより、I群（東偏0～5°）、II群（東偏6～15°）、III群（西偏0～5°）、IV群（西偏5～10°）に分類した（第21図）。7棟の主軸方向は、SB8251が東偏1°、SB8252が東偏9°、SB8307が東偏10°、SB8308が東偏12°、SB8305が西偏4°、SB8259が西偏7°、SB8306が西偏8°である。主軸方向による建物の分類は、上越市仲田遺跡〔加藤・高階2003〕や用言寺遺跡〔加藤ほか2006、加藤ほか2007〕の検討事例で示されているように時間的相違を意味する可能性があることから、各群の時間的変遷を検討する。

SB8252と48・49Wグリッド付近で検出した東側平行溝群は、主軸方向を同じくするので（第23図）、同時期に存在した可能性が高く、建物とその周辺に展開していた耕作地であると考えられる。またSB8251は、48・49Wグリッド付近の平行溝群と重複しこれに切られるので、SB8252はSB8251より古い建物といえる。したがって、I群からII群への変遷を想定できる。またSB8259（P8260）は、SB8307（P8278）を切ることから、II群が古くIV群がII群より新しいと判断できる。

SB8251とSB8252の切り合い関係から、時間が経過するごとに主軸方向が東偏すると見られる。加えてSB8259（P8260）・SB8307（P8278）の切り合い関係から、建物は東偏→西偏への変遷を想定でき、III群→IV群へ変遷した可能性がある。これらを整理すると「①I群からII群へ変遷する。②III群からIV群へ変遷する。③建物の主軸方向は東偏から西偏へ変遷する。」と考えられ、I群→II群→III群→IV群への変遷を想定できる。建物に伴う遺物が少ないが、Va層出土遺物の年代を踏まえると9世紀後半と考えられる。

分 布 掘立柱建物の分布は、東側建物群（43・44V、46V・46Wグリッド）と西側建物群（49・50W、49・50・51Xグリッド）に大別できる。東側建物群はSB8259・SB8305・SB8306・SB8307・SB8308、西側建物群はSB8251・SB8252である。SB8259とSB8306は主軸が一致し柱筋も通ることから、併存した可能性が高い。ただし、両建物共に調査区外に延伸するため不明瞭な点が多い。

西側建物群SB8251・SB8252の主軸方位は、東偏することで共通するものの若干異なり、重複範囲も大きいことから、併存しなかったと考えられる。またSB8252は、柱穴が東側平行溝群に切られることや、耕作痕と考えられるSD8159・SD8160が建物内に展開すること、SB8251建物内にもSD8127・SD8128が展開することから、両建物の廃絶後は耕作地として使用されたと考えられる（第23図）。

また、SB8259・SB8306は、SD8082との有意な関係性が想定される。SD8082はVa層上面、SB8259・SB8306はVb層上面で検出した遺構である。検出面は異なるが、SD8082は主軸方向を両建物と同じくし、重複せず両建物の間を抜ける。両建物の柱穴は深さが約20～30cmであり、径に比較して浅く、本来は上層から掘り込まれた可能性が考えられる。加えて東側平行溝群と主軸方向が異なり、形状も異質である。また、SD8082で遺物が集中的に出土した範囲は、SB8259のほぼ中央南側に当たり、建物からの投棄を想定させる位置関係にある。したがって、SB8259・SB8306とSD8082は一連の遺構であれば、本来はVa層上面に検出面が存在した可能性がある。ただし、建物の範囲を大幅に超えて溝が延びること、溝と建物が近接し過ぎていることから、関係性については慎重に考える必要がある。

4) 溝

形態・分布・方向 溝は66条検出し、区画溝または用排水に伴う溝と耕作に伴う溝に区別できる。溝の主軸方向には、一定程度のまとまりが認められ、A群：N-3°~22°-W、B群：N-2°~25°-E、C群：N-55°~58°-E、D群：N-78°~98°-E、E群：N-62°~78°-Wに分類した(第22図)。これらの主軸方向分類は、一定程度は時期的なまとまりを反映しているものと考えられる。

性格 溝の性格、形態・規模・主軸方向・配置等から、ある程度推測できる。まず大型の溝(SD8108・SD8132)は形態・規模等から、区画溝または用排水路の可能性が高い。特にSD8132は埋土が粗粒砂で、下部にはラミナも認められた。このことから水流があったことが想定され、用排水路の可能性が高い。平面形態は、ほぼ直線的なもののみで、分岐するものや屈曲するものはほとんどない。それら直線的な溝が平行して分布する集中域が2か所存在する。西側平行溝群(52・53Wグリッド)と東側平行溝群(48・49・50W、49・50Xグリッド)である。これらの溝は規模・間隔等を考えると、畑作に伴う畝間溝または耕作痕の可能性が高い。主軸方向との関係を整理すると、A・B群の大型溝は区画溝または用排水路溝(SD8108・SD8132)、小型の溝は耕作に伴う溝、D・E群は耕作に伴う溝と考えられる。

年代・変遷 溝の年代観・変遷について、切り合い関係と出土遺物から検討する。西側平行溝群は、SD8119とSD8124で切り合いが認められるが前後関係は明瞭ではない。そのほかの溝では、切り合い関係が認められないことから比較的短期間の耕作であったと考えられる。

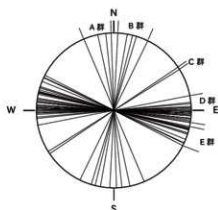
東側平行溝群についても、あまり切り合い関係が認められないが、一部切り合い関係が明確なものもある(SD8163~SD8164、SD8170~SD8169など)。複数回耕作が行われたと考えられ、西側平行溝群より存続時間が長いと見られる。埋土からの出土遺物は土器の細片が多く、それらからは時期差を見いだせないものの、上位を覆うVa層出土遺物からは、両平行溝群の年代を9世紀後半に位置づけることができる。

5) 性格不明遺構

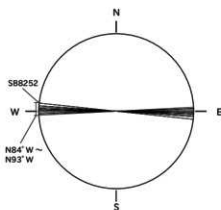
平面形状が不整形で底面が起伏に富むSX8151・8199を性格不明遺構として調査した。

D 第4・5面(VI層/飛鳥時代：図版22~29・76~85)

飛鳥時代の遺構はVI層から検出した。VI層はa・b・cの3つに分層でき、それぞれ遺構や遺物を検出した。VIb層上面が第4面(図版22・23・76・77)、VIc層上面及び下面が第5面(図版24~29・77~85)である。VIa層では、調査区の西端から土師器壺(63)が1点出土しただけで遺構は検出されなかった。こ



第22図 溝の主軸方向



第23図 東側平行溝群とSB8252の主軸方向

の土器は、VIb層上面にあったものが洪水堆積層であるVIa層によって被覆されたと推定されることから、本来はVIb層上面に帰属すると考える。VIb層上面では、調査区の西側から平地建物1棟、溝1条、ピット27基、性格不明遺構2基を検出した。VIc層上面では、西側から平地建物3棟、溝1条、ピット5基、東側から祭祀遺構3基を検出した。VIc層下面では、西側から平地建物1棟を検出した。

出土遺物は、いずれも7世紀初頭ころのものと考えられることから、当地は比較的短期間のうちに2度洪水による被害を受けたと推定される。その間、調査区の西側では繰り返し平地建物が構築されるが、東側ではピット数基を除けば掘り込みを伴う遺構はない。そのかわり、VIc層上面から須恵器類などの土器が地表面に置かれたような状態で出土するなど、祭祀的な状況がうかがえる遺構を3基検出した。

上記の状況から、該期においては、調査区の中央付近を境に西側は建物域、東側は祭祀域といった空間区分があった可能性が高い。

1) 平地建物

平地建物は調査区の西側から5棟検出した(第25図)。検出面は3面あり、VIb層上面からSX8522、VIc層上面からSI8502・SI8564・SI8569、VIc層下面からSI8571を検出した。いずれも周溝をともなうが、このうち大型のSI8502はほぼ全周する幅広で深い溝、ほか4棟は東に向かって開口する「コ」の字状の溝によって区画される。区画内からは建物本体を構成する柱穴などは検出されなかったが、床面からカマドの火床部または地床炉とみられる焼土が見ついている。第24図は建物の東西軸方位を示したもので、これを見るとVIb層上面では東南東、VIc層上面では東、VIc層下面では東北東と、検出面ごとに建物の軸方位が異なっていることがわかる。

SX8522 (図版23・77・83)

VIb層上面で検出した。溝の一部を検出しただけで大半は調査区外にあるが、検出状況から判断して、本遺構は平地建物にともなう東に向かって開口する「コ」の字状の周溝の一部である可能性が高い。平地建物としての規模は外法で東西5.70m以上、周溝SX8522は幅1.34～1.68m、深さ0.22mである。周溝の埋土は3層に分層したが、このうち3層からは建築部材の可能性ある多量の炭化物とともに土師器灰や把手付の甎(65)などが出土している。

なお、本遺構の周囲から東側にかけてピット27基を検出したが、いずれも有意な配列は確認できなかった。このうちP8505・8557の2基は本遺構を切っている。VIb層上面で検出したピット群については、本来、VIb層に帰属する平安時代のピットが含まれている可能性がある。

SI8502 (図版24・28・29・78～80)

洪水堆積物(VIb層)を除去したところ、VIc層上面で土師器の甎(89・90・91)・甎(92)・壺(93)が面的に出土した。周辺を精査したところ、遺物の他に焼土や周溝とみられる大型の溝が検出された。このことから建物であると判断し、調査を進めた。

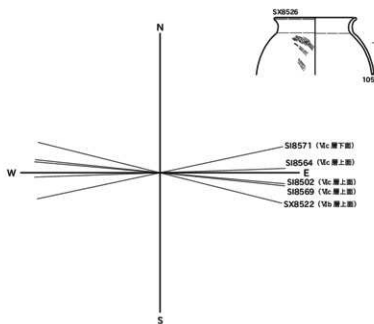
検出作業の段階で隔丸方形形状のプランを確認した。当初、竪穴建物の埋土である可能性を想定して断ち割り調査を行ったが掘り込みは存在せず、平地建物の床面であると判断した。規模は東西方向で7.46mであり、東端中心がやや外に膨らむ。床面の周囲からは北西西にめぐる周溝SD8552を検出した。規模は、幅2.3～3.5m、深さ0.5～0.6mである。床面の北西隅では周溝が浅くなり、開口部のようになっている範囲があり、出入口であった可能性がある。また、調査区外に当たり確認できなかったが、南側に開口部が存在する可能性もある。

建物の規模は溝の外法で東西 13.5m、内法で東西 7.4m である。南側の一部が調査区外に広がっているものの、遺跡内で検出された他の建物と比べても突出した大きさであり、集落内の中心的な建物であったことが伺える。

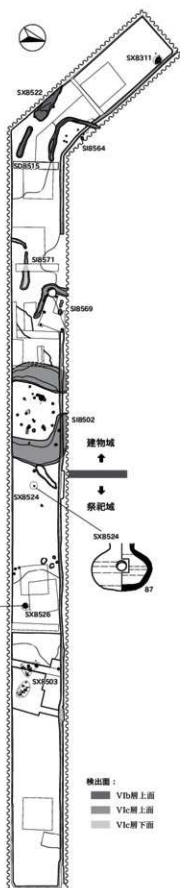
SI8502 の特徴の一つに貼床がある。断ち割り調査の際に偽壁の存在を確認しており、一度掘削した後に粘質シルトを 0.10 ～ 0.24m 貼り付けたと見られる。また、床面中央には灰色粘土を貼り付けた硬化面を確認した。硬化範囲は 5.3m ほどの円形プランであり、生活空間をより入念に造作した可能性がある。

床面から焼土範囲 5 か所が、散在するように検出した。SF8543 ～ SF8546 は規模がまばらで長径 0.16 ～ 0.69m、短径 0.10 ～ 0.59m であり、いずれも細礫(円礫)が特徴的に含まれる。床面の被熱が顕著でないことから二次堆積の可能性もある。SF8542 は他の焼土範囲と異なり床面が強く被熱しており、建物東側に東西方向に細長く広がる。規模は長径 0.76m、短径 0.29m の楕円形である。袖の痕跡等はみつかっていないが、床面形状との位置関係、床面出土の遺物構成からカマドの火床部であった可能性が高い。

柱穴については、床面形状と同様に方形に配置されることを想定して調査を進めたが、貼床と遺構の埋土の境界が不明瞭であり、検出が困難であった。そのため、検出作業を段階的に行った。柱穴の検出作業は、貼床上、貼床中で 5cm 程度の面下げしながら 2 回、貼床下、地山を 5cm 程度掘削した後の計 5 回行った。各面においても明瞭な柱穴は確認されなかったが、ピットは建物内で 16 基検



第 24 図 建物の主軸方位図



第 25 図 飛鳥時代の建物域と祭祀域

出した。これらは硬化面の周囲に、円形に配列されているようにみえるが、いずれも小規模で柱穴とは考えられない。そもそも上屋を柱で支えない平地建物である可能性も考えられる。類例として、古墳時代中・後期の南魚沼市六日町藤塚遺跡〔田中^中2022〕の平地建物 SI50 を挙げることができる。また、建物北東にある P8581 から出土した板柱 (109) は、間仕切りの一部ではないかと推察される。

遺物は、炊飯に関係する土器類が硬化範囲外縁の東西 2 か所で潰れたような状態で出土した。東側は SF8542 の西側に当たり、カマドと考えた場合、焚口付近に当たる。西側では土師器甕 (89～91)・土師器瓶 (92)・支脚 (95)・高坏 (88)、東側では土師器壺 (93)・支脚 (94)、SI8502 床面のやや上位では短い支脚 (107) が出土した。SF8542 からは魚類の鱗鱗等が焼けた状態で出土しており (第 VI 章 3)、当時の食生活を反映する可能性がある。また、SI8502 を覆う VIb 層中からウマの上顎第 2 後臼歯 (第 VI 章 3) が出土した。床面の若干上位からの出土ではあるが、建物との関係も想定される。

SI8564 (図版 26・83)

VIc 層上面で検出した。東に向かって開口する「コ」の字状の周溝をもつもので、北東側は調査区外となる。規模は、内法で東西 5.90m、南北 4.80m 以上、外法で東西 6.44m、南北 6.10m 以上である。周溝 SD8562 は幅 0.50～0.92m、深さ 0.20m である。周溝内には柱穴など建物本体にかかわる遺構はないが、中央やや西寄りから焼土 SF8563 を検出した。床面が強く被熱したもので、規模は長径 0.46m、短径 0.32m である。遺物は、床面から土師器高坏や甕 (99) などが出土した。このうち南側から出土した土師器甕の底面には、支脚に載っていた痕跡をススの付着範囲から確認できる。

SI8569 (図版 25・83・84)

VIc 層上面で検出した。東に向かって開口する「コ」の字状の周溝をもつもので、北側は調査区外となる。規模は、内法で東西 4.20m、南北 3.60m 以上、外法で東西 5.30m、南北 4.80m 以上である。周溝 SD8565 は幅 0.60～1.04m、深さ 0.28m で、底面は凹凸が目立つ。区画内には柱穴など建物本体にかかわる遺構は見つからなかったが、床面から焼土 3 基を検出した。SF8566 は土師器甕片 (102) とともに焼土がまとまって出土したもので床面の被熱痕ではない。SF8567 は中央西寄りにある長径 96cm、短径 36cm の被熱痕である。2 つの被熱痕からなるもので、一部重複して東西方向に並んでいる。SF8568 は中央にある長径 74cm、短径 50cm の大きな被熱痕で、火床面上にある 1 層からはわずかに微細な焼骨片が出土した。焼土の重複状況や大きさからみて、いずれも地床炉である可能性が高い。遺物は、床面から土師器甕 (103) や黒色土器高坏 (100・101) などが出土した。

なお、建物の柱穴を探る過程で、東側から P8570・8572・8573 のビット 3 基を検出したが、配置などからみて建物本体にかかわる遺構ではないと判断した。

SI8571 (図版 25・83・85)

VIc 層下面で検出した。東に向かって開口する「コ」の字状の周溝をもつもので、南側は調査区外となる。規模は、内法で東西 6.60m 以上、南北 1.80m 以上、外法で東西 7.00m 以上、南北 2.40m 以上である。周溝 SD8556 は幅 0.20～1.00m、深さ 0.16m である。周溝の埋土は 4 層に分層したが、このうち 2 層からは土師器甕片 (104) のほか多量の炭化物と灰、魚類の焼骨片が多数出土した。細片が多く、種類を同定できたものは少ないが、スズキ属? とサケ科が検出されている (第 VI 章 3)。区画内からは柱穴など建物本体にかかわる遺構は検出していない。

2) 祭祀遺構

祭祀遺構は調査区の東側から3基検出した(第25図)。いずれも周囲に遺構や遺物がないところから唐突にはぼろ形の土器がVIb層中から出土した。どの土器もVIc層上面に接地していることから、本来、VIc層上面にあったものが、洪水堆積層であるVIb層によって被覆されたと考えられる。遺物の性格や出土状況から、これらは祭祀的な意図をもって地表面に置かれていた可能性が高い。

SX8503 (図版24・27・81・82)

東西5.00m、南北2.20mの範囲から25点の遺物が出土した。内訳は、土師器鉢1点・高杯3点・壺1点・甕4点、黒色土器杯1点・高杯3点、須恵器杯身1点・高杯1点、手捏ね土器8点(内1点は土師器甕を転用)、白玉2点である。土器は、横位で出土した土師器壺・甕や須恵器高杯を除き、潰れながらも基本的には正位で出土している。いずれも完形または完形に近いものであったと推測されるが、風化による細片化が進み、復元が困難な個体もあった。これらの遺物は、平面的なまとまりから東側と西側で2群あることがわかる。

東側からは、土師器鉢1点(72)・高杯1点・甕1点、黒色土器高杯2点(71)、手捏ね土器4点(67～70)、白玉2点(73・74)を検出した。鉢と高杯は南東・北西方向に一直線に並び、手捏ね土器もややずれて並列する。手捏ね土器は3点並べて、そのほぼ延長上にもう1点を配している。なお、この延長上にある手捏ね土器(70)は黒色土器の杯を模したものである。白玉は径4mmほどの小さなもので、土師器鉢に付着した土の中から2点見つかった。

西側からは、土師器高杯2点(81・82)・壺1点(86)・甕3点(85)、黒色土器杯1点(79)・高杯1点(83)、須恵器杯身1点(80)・高杯1点(84)、手捏ね土器4点(75～78)を検出した。このうち須恵器杯身1点と土師器高杯2点は、早い段階でVIb層の包含層遺物として小グリッドで取り上げたが、出土した位置と遺物の内容から、西側の土器群の一部と判断した。横位で出土した土師器壺・甕のうち底部と口縁部がわかる北西側の3点は、そろって南西から北東へ向かって倒れている。後述する手捏ね土器の列と同一方向であることから、祭祀を行ったあとで意図的に倒している可能性がある。同じく横位で出土した須恵器高杯は、北西から南東へ向かって倒れた状態で検出した。ほかの高杯はすべて正位で出土していることから、細長く不安定な器形のため自然に倒れた可能性もある。手捏ね土器は南西・北東方向に直線的に並び、3点並べた延長上にもう1点を配している。なお、手捏ね土器とした4点のうち北東から2番目の土器(75)は土師器甕の底部を転用したものである。

東側と西側で遺物の出土状況を比べてみると、西側のほうが土器の遺存率が高く、東側では土器片の散らばりが大きく遺存率も低い。東側のほうが土器の風化が顕著であることから、両群は同時ではなく、東側が先行して祭祀が行われた可能性がある。

SX8524 (図版24・82)

単独で出土した須恵器壺(87)である。正位で出土したもので口縁部を欠損する。大型の平地建物SI8502から東へ約2.7m離れた地点から出土した。

SX8526 (図版24・82)

単独で出土した土師器甕(105)である。ほぼ1個体分が横位で出土したが、風化が著しく復元は一部のみ可能であった。単独での出土でもあり祭祀としての評価は難しいが、周辺に遺構や遺物がまったくないことから、日常とは異なる意図をもって置かれたものと解釈した。

3) 溝

溝は調査区の西側から2条検出した。

SD8515 (図版 23・76・83)

V1b層上面で検出した直線的に延びる溝である。主軸方位は西側に近接する平地建物 SX8522の軸方位に近い。SX8529と重複して切られる。埋土は3層に分層したが、このうち1層からは多量の炭化物とともに土師器杯(64)などが出土した。調査区の南壁際から検出したもので南側の状況は不明であるが、規模的には平地建物にともなう周溝の一部である可能性もある。

SD8559 (図版 24・25)

V1c層上面で検出した短い溝である。平地建物 SI8502の周溝 SD8552を切っている。遺物は出土していない。同面の建物群とは主軸方位が異なることから、新しい遺構である可能性が高い。

4) 性格不明遺構

性格不明遺構としたものは調査区の西側から2基検出した。いずれもV1b層上面で検出した。

SX8529 (図版 23)

小さな楕円形の遺構である。単層の埋土には焼土と炭化物のほか径2～10mmの細礫(円礫)が大量に混入する。ほかに同様の円礫が混じる埋土をもつ遺構は、SI8502の床面で検出したSF8543～SF8546がある。SD8515と重複して切る。関連性は不明であるが、西へ約1.5m離れたところに平地建物 SX8522がある。

SX8311 (図版 23・76)

V1b層上面に正位で据えられた大型の須恵器甕(66)である。下半は約40cm地面に埋まっている。垂直方向に潰れた状況で検出したが、口縁部は平安時代の畑作溝が重複したことによって失われている。甕の大きさは、器高63.5cm以上、胴部最大径66.5cmで、頸部に櫛歯波状文、肩部に横位突帯1条、頸部から肩部にかけて縦位突帯5条を加飾する。何らかの貯蔵用の機能が想定されるが、周囲に建物などは見つからない。なお、本遺構の約1.8m西側から土師器壺(63)が1点出土している。ほかに付近から遺構や遺物が検出されていないことから本遺構との関連性がうかがわれる。

5) 柱 穴

V1b層上面で検出した柱穴は、切り合い関係からも飛鳥時代の遺構より新しいと見られる。中でもP8309では9世紀初頭の遺物が出土し、V1b層上面の遺構に平安時代の柱穴が混在することが分かった。これはVb層で検出した遺構よりも明らかに古い年代を示しており、層位関係と遺物の年代観が一致する。しかし、P8309以外に遺物を伴う柱穴はなく、掘立柱建物の構成を把握できなかった。柱穴を検出した範囲は、Vb層上面で掘立柱建物を検出した範囲と重複しており、V1b層上面で検出できなかった柱穴の一部をV1b層上面で検出した可能性が高い。したがって、V1b層上面で検出した柱穴の多くは、本来、Vb層上面から掘り込まれた遺構と見られるが、飛鳥時代の遺構と明確に識別することができなかった。

E 第 6 面 (X～XI層上面 / 縄文時代後期：図版 30・31・85・86)

縄文時代後期の遺物包含層X層は、X-1・X-2・X-3に細分でき、各層から遺物が出土した。遺物の時期は、X-1層上面で後期後葉の土器が出土したほかは、各層から後期前葉（ひんご2式段階）の遺物が出土した。遺構は、X-2層上面でピット2基、X-3層上面で遺物集中範囲1か所と倒木痕、XI層上面でピット2基と遺物集中遺構を1か所検出した。明瞭な遺構は数少ないが、鉢の完形品が出土したP8807も確認しており、遺構が皆無という状況ではない。

1) ピ ッ ト

X-2層上面でX-1層を埋土とするP8801・8808、XI層上面でX-3層を埋土とするP8806・8807を検出した。いずれも検出面直上の遺物包含層に由来する埋土としている。遺構の密度は極めて希薄であり、柱穴の組み合わせを検討することのできるものはない。

P8807 (図版 30・31・86)

XI層上面で検出した。遺物集中範囲SX8804の中央付近に位置しており、ほぼ完形となる鉢(110)が正位の状態で出土した。掘り方の大きさは、土器より一回り大きい程度であり、埋設された可能性もある。性格は明らかでないが、SX8804との関係性をうかがえる。

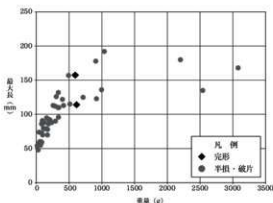
2) 遺物集中範囲

SX8803 (図版 30・86)

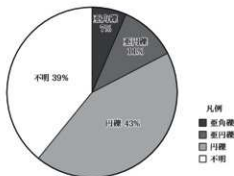
X-3層上面で、ほぼ完形となる鉢(111)が破損状態で単独出土した。およそ30cmの範囲からまとまって出土したが、これと関係すると見られる遺構は周囲から検出されていない。

SX8804 (図版 30・31・86)

XI層上面で、土器片(細片が大平)、磨製石斧(149-150)、ヒスイ製敲石(151)、ヒスイ原石(157)、磨石類、礫が、径約5mに点在する円形プランを検出した。完形土器が出土したP8807は、その中央付近に当たる。一方、竪穴建物状の掘り込みは伴わず、周囲からこれと有意な関係と推定できる柱穴なども確認されなかった。また、遺物の分布は、南側に集中しており、調査区外へ広がる可能性がある。遺物の出土点数は56点ある。56点のうち46点は礫であるが、大きさは様々であり、特定の形のものが集積された様子は認められない(第27図)。破損品が圧倒的に多いことも特徴で、完形が2点であるほかは、半損が1点、



第 26 図 SX8804 出土礫の大きさ



第 27 図 SX8804 出土礫の形状

破片が43点である(第26図)。被熱痕跡が認められるものも多く、赤化したものが42点あり、そのうち11点にはタールが付着していた。被熱により破砕したものが大半と見られる。石材は、粗粒の安山岩が45点、礫岩が1点である。中には角閃石を多く含む安山岩が9点あるが、大田切川で採取可能なものと類似しており、妙高山麓で産出した可能性がある。円礫が多く、河川で採取されたものが多いようであるが、板状に割れた特徴的なものは相泉A遺跡〔荒川・加藤1999〕など、妙高山麓の縄文遺跡で石器石材に多用されるものと共通する。石材の構成からは、妙高山周辺を起源とし、関川流域で採取されたものが多いと考えられる。

3) 倒 木 痕

X-3層上面から「C」字状のブランを4か所検出した。いずれも断り割り調査を行い、地層の逆転現象を確認して倒木痕と判断した。それぞれの倒木痕からは遺物が比較的多く出土した。SX8802(図版30・31・86)は、IX~X-1層がブロック状に含まれ、かつ地層の逆転を明瞭に観察できた。出土遺物は、土器片(117・134)がある。SX8809(図版30・31)は、X-3層をベースとする溝が不整形の円環状にめぐる。遺物は、X-3層に相当する層位から注口土器の注口部(123)、深鉢の底部(136)、楔形石器(144・145)などが出土した。

2 遺 物

A 中 世 (図版42・96)

中世の遺物は、珠洲焼甕、劃文が施された青磁碗の細片が1点ずつ出土したのみである。1は、珠洲焼甕の肩部である。外面の叩き目が粗く、中世後期(V期前後)の資料と見られる。

B 平 安 時 代 (図版42~44・96~98)

1) 須恵器・土師器

平安時代の遺物は、主にV層から出土した。遺物の種類は須恵器・土師器・黒色土器・灰軸陶器・土製品・木製品がある。中川〔2019〕による須恵器・土師器の編年と対比するとVI期(9世紀後半)が大半でIV・V期もわずかに含まれる。

須恵器の器種の器種構成は杯蓋・有台杯・無台杯・壺類・甕・瓶類・円面硯がある。瓶類では長頸瓶や長胴瓶がある。また、須恵器無台杯は9世紀後半以降に盛行する佐渡市小泊産が目立つ。土師器の器種構成は無台碗・甕である。無台碗の口径は11.5cmから14.4cmまで幅が広いが、12cm台のものが大半を占める。平底で高台を持たず、丸みを持って立ち上がるものを鉢とした。甕は口径が10cm以上の小型のものとして20cmを超えるものがある。このほかに、黒色土器や灰軸陶器も出土した。黒色土器では碗・無台碗・有台皿・鉢があり、灰軸陶器では有台碗・無台碗・瓶・皿があるが、数は少なく断片的なものが多い。

須恵器の胎土は、春日〔2019〕の分類にしたがった。

A群 石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。阿賀北の須恵器窯で多く確認できる。

B群 軟質の白色小粒子を定量含む。佐渡市小泊産。胎土のきめが細かいものと砂質の強いものがある。

C群 小型の長石・石英を少量含む粘土質の強い胎土。表面に光沢があるものが多い。新津丘陵・長岡市東部の東山丘陵及び高田平野東部の丘陵で多く確認できる。阿賀北北部の窯にも一部見られる。

D群 砂質が強くやや粗い胎土。海綿骨針・やや大型の白色の礫が確認できることが多い。三島郡出雲崎町、長岡市の信濃川左岸の須恵器窯で多く確認できる。

E群 砂質もしくはシルト質で均質な胎土。高田平野西部の丘陵で多く確認できる。

F群 黒色の小さな吹き出しが多く確認できる粘土質の胎土。糸魚川市西角地窯で多く確認できる。

本遺跡から出土したものはB群が多く、C群・E群が一定数認められ、佐渡市小泊産を中心に在地の東頸城丘陵産・西頸城丘陵産から構成される。また、著しく焼き歪んだ大甕の破損品も出土した(図版98-189)。焼成時の明らかな失敗品であり、近隣の東頸城丘陵の窯跡との関係が想定されるが、本遺跡に持ち込まれた背景は不明である。

【第2面 / Va層上面】

SD8025

須恵器は無台杯(3)、土師器は無台碗(2)・甕(5)、黒色土器は無台碗(4)があり、9世紀第2四半期に位置づけられる。SD8025は、9世紀後半の遺物が出土した遺構より上位で検出された溝であり、これらの遺物は下位の遺構に由来すると考えられる。3は、須恵器無台杯である。口縁調整で底部は回転糸切り技法により切り離されている。胎土はE群。2は無台碗で、底部の回転糸切痕跡は明瞭である。4は黒色土器の無台碗である。緩やかに内湾しながら立ち上がる。内面は横方向のミガキが全体的に施されており、部分的に縦方向のミガキを施す。5は、土師器甕の口縁部～胴部である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部に面を形成する。内面に同心円の当て具痕、外面にたたき目が強く残る。

SD8075

須恵器は壺(6)、土師器は無台碗(8)・小甕(7)、土製品は羽口(9)があり、9世紀後半に位置づけられる。須恵器壺6は口縁部片であり、外反しながら口縁部はラッパ状に開く。口縁端部の中心がわずかにくぼみ上方へ摘みあげている。内面外面ともに自然軸が付着している。胎土はC群。7は土師器小甕の口縁部～胴部である。胴部はほとんど膨らまず、口縁部は外反する。口縁端部は上方に摘み上げて面をつくる。口縁部内面にスガが付着する。8は土師器の無台碗である。器高が高く、器壁は比較的薄い。9は、土製品の羽口である。ガラス質が付着している。同遺構から鉄滓も出土している。

SD8076

須恵器の無台杯(10)、灰軸陶器の有台碗(11)があり、9世紀後半に位置づけられる。10は須恵器の無台杯である。胎土は白色粒子が多いB群。11は灰軸陶器の有台碗である。三日月状の高台をもつ底部で、つくりは精良である。

SD8082

SD8082出土遺物は須恵器・土師器の無台杯が多く、特定の範囲(43V10グリッド周辺)からまとまって出土した。須恵器は無台杯(12～17)・長頸壺(18)・長胴瓶(19)がある。胎土は全てB群である。土師器は無台碗(20～29)・小甕(32)がある。一部、古相の特徴をもつ可能性のあるもの(20)も含まれるが、一括資料のまとまりとして判断した。佐渡市小泊産須恵器を多く含み、9世紀後半に位置づけられる。

12～19は須恵器である。12～17は無台杯で、底面には回転ヘラ切りが観察される。また、12にはヘラ起こしも認められる。全体的に白みを帯びた色調で、軟質の白色粒子を少量含む佐渡市小泊産(B群)

である。また、SD8082 出土の無台杯のうち 4 点 (14～17) は墨書土器である。墨書は全て側面にあり、15 の墨書の一部は底部にまで及び、墨書の文字は「ワ」字状に見えるが、不明である。長頸壺 18 は小型・薄手であり、胴部には明瞭な稜線がある。長い頸部を持ち、口縁部を欠く。ロクロ成形され、外面は自然軸が付着する。19 は長胴瓶である。ロクロ成形で口頸部がラッパ状に開き、肩部より下を欠く。内面頸部は強いヨコナデが見られ、頸胴部界には、頸部を後付けした痕跡が残る。

20～29・32 は土師器である。20～29 は無台碗である。口径は 11.5cm～14.4cm で、12cm 台が多くを占める。いずれもロクロ成形で作られ、右回転系切りで切り離される。器壁は比較的薄いものが多いが、20 は器高が低く、器壁はやや厚い。小甕 32 はロクロ成形されており、外面は全体的にスス、内面は口縁部を中心にコゲが付着している。口縁は 10.3cm と小さく、「く」の字状に外反し端部は内傾する。口縁部が内傾する傾向は北信系に共通すると見られる。30・31 は黒色土器である。30 は碗であり、底部を欠損している。口縁部内面は横方向のミガキが施されており、外面(側面)には「大」の墨書がある。31 は鉢で、厚手なつくりである。内面上部には横方向のミガキが認められる。33 は灰軸陶器の瓶の頸部である。小型でつくりは良好で、内外面ともに施軸される。

SD8095

須恵器円面硯 34 は硯部と脚台部を一連に成形したのち、外堤部を貼り付けている。脚台部には円形の透かし孔があり、周辺には斜格子文状の線刻を施す。陸部は使用痕が顕著で、極めて平滑である。海部は比較的浅いが、墨の痕跡がわずかに残る。

SD8177

須恵器は長胴瓶 (40・41)・把手付長胴瓶 (42・43)・突帯付四耳壺 (44)、土師器は無台碗 (35・36)、黒色土器は有台皿 (37)・碗 (38)、灰軸陶器は碗 (39) がある。9 世紀後半に位置づけられる。

40～44 は須恵器である。40 は長胴瓶の頸部である。ロクロ成形でラッパ状に開き口縁端部の上端部はわずかに引きあがる。41 は長胴瓶の底部から胴部である。胴部上位に最大径があり、高台をもつ。40・41 とともに胎土は白色粒子を含み、胎土は E 群。42・43 は把手付長胴瓶である。42 は胴部上位に最大径があり、高台をもつ。把手は胴部最大径より下から付けられているが、上部は欠損している。また、頸部には接合痕が残る、口縁端部の上端部はわずかに引きあがる。胎土は C 群。43 は胴部上位に最大径があり、肩部は丸みを帯びる。把手は肩部に付けられており比較的小さい。胎土は E 群。44 は突帯付四耳壺の肩部である。横位の突帯の上に方形の耳が付けられるが、遺存部分に孔はない。外面はカキメとタタキが施され自然軸が付着する。胎土は C 群。

35・36 は土師器の無台碗である。口縁端部は、35 は薄手に、36 は丸く収まるように仕上げられる。右回転系切りで切り離されている。37・38 は黒色土器の有台皿と碗である。いずれも内面が黒色処理されている。37 は有台皿で、強く外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。高台は欠損している。口縁部内部から底部にかけて横方向のミガキを施す。38 は碗で、口縁部と胴部の境界に稜線が認められる。39 は灰軸陶器の碗である。口縁端部はやや外反する。底部外面を除いて内面外面ともに施軸されている。

【第 3 面 / Vb 層上面】

45 は SE8123 から出土した黒色土器の碗である。口縁部内面は横方向、底部にかけて縦方向にミガキを施す。9 世紀後半に位置づけられる。47 は P8200 から出土した土師器甕の頸部である。「く」の字状に外反し、口縁部は内傾する。外面内面ともにカキメが認められる。46 は P8229 から出土した須恵器の杯蓋である。つまみ部分は擬宝珠形である。また、端部は短く垂下し中心部がわずかに屈曲する。胎土

はE群。48はSD8117から出土した須恵器長頸瓶である。底部から外反し肩部は張っており、高台を持つ。胎土はC群。49はSD8156から出土した土師器無台椀であり、比較的器壁が厚い。口径14.4cmであり無台椀の中では最も大きい。50はSD8188から出土した無台杯の胴部である。ヨコナデが強くややまっすぐに外反し、口縁端部はわずかに内湾する。胎土はB群。

遺物包含層であるVa層からも、遺物が多数出土した。51は灰軸陶器の段皿である。ロクロ成形で「く」の字状に外反し、口縁端部は丸い。胴部の一部を除き外面内面ともに施軸されている。52は瓶である。長い頸部をもち、口縁端部は上方に摘み上げる。外面内面ともにロクロ成形で自然軸が付着する。胎土はC群。53は無台椀の底部である。ロクロ成形で作られ、内面は漆が多量に付着し、外面・割れ口にも少量の漆が付着しているため漆パレットと判断した。この資料の存在から、漆工場の存在が想定される。また、円面硯(34)や墨書土器(14~17)の存在も考えあわせると、官衙的な性格を想定できるかもしれない。54は無台杯の底部である。ロクロ成形で底部は右回転糸切を施す。底部外面は墨書で「成人」と書かれている。胎土はE群。また、須恵器焼成時の失敗品(図版98-189)も出土した。火影れにより著しく歪み、重ね焼きた杯蓋が溶着している。近隣の東頸城窯との関係性を示す遺物と考えられるが、搬入の目的は不明である。一方、窯との関係性を示す資料といえ、本遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。

これらの時期は、48が8世紀末~9世紀初頭であるほかは、9世紀後半に位置づけられる。

【第4面/Vb層上面】

P8309から、有台杯(55)が出土した。高台は低く、立ち上がり急である。底部外面は墨書で「人」が書かれており、加えて刻書で「卅」と刻まれている。胎土はC群。9世紀初頭に位置づけられる。編年的に古い資料が下位のVI層から出土しており、層位と遺物の年代観が整合する。

2) 木製品

【第2面/Va層上面】

56・57は、SD8082から出土した片口箸である。57の樹種はスギである。断面が六角形になるように側面を加工しており、先端部分が細く加工されている。饗宴に伴う可能性がある遺物とともに出土しており、関係性が想定される。60はP8098から出土した柱根である。樹種はスギである。板状の柱で表裏にほぞ穴の可能性がある穴が表裏に2対ある。ほぼ直線状に位置しているが、表側の穴の位置が交差しており、腐食により形成された孔の可能性もある。

【第3面/Vb層上面】

58はSE8123から出土した棒状木製品で、柄杓の柄と見られる。樹種はスギである。遺存状態は良好であるが、鋼矢板施工時に折損している。切り止めの断面は多角形で、端部は炭化しており斜めに削ぎ落している。反対側の断面は丸く厚さが先端にいくほど細く作られており、水を汲む合の部分と接合すると見られる。なお、瓢箪と一緒に出土したことから組み合わせて使用された可能性がある。61はP8205から出土した柱根である。樹種はトネリコ属である。伐採後、切り残し痕を削り落としており、底面は平坦に仕上げられている。62はP8244から出土した柱根である。樹種はクリである。柱根の下面部は腐食で不明瞭であるが、平坦であることから切り残し痕を除去し加工していると見られる。なお、この柱根は本遺跡で最も大きい。59はP8262から出土した礎板である。樹種はスギである。板材を転用したと推定される。中央で破損しているが、柱の加重による圧迫で折損したと見られる。

C 飛鳥時代 (図版 45～48・98～102)

Ⅴa層・Ⅴb層・Ⅴc層から飛鳥時代の土器・土製品・木製品が出土した。記載に当たっては、器種分類は春日 [2019]、土師器の時期区分・年代は中川 [2019]、須恵器は田辺 [1981] (以下、田辺編年)、中村 [1978・2001] (以下、中村編年) を参考にした。出土した須恵器は、中村編年Ⅱ型式 5 段階 (TK209 型式) ～ 6 段階に位置づけられ、これに伴う土師器も 7 世紀初頭～前半のものと考えられる。

1) Ⅴb層出土遺物

53W2 グリッドから土師器の壺 (63) が出土した。胴部中位に最大径をもつ球胴で、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。底部は平底で外面にはミガキ、内面はヘラナデを施す。Ⅴa層は洪水堆積物と見られ、他に遺物の出土が認められない。Ⅴb層上面に帰属する遺物が、洪水堆積物に被覆された結果、Ⅴa層に含まれた可能性が高い。

SX8311 から突帯付の甕 (66) が出土した。上半部に横位突帯 1 条、縦位突帯 5 条が加飾される。口縁部には細密な櫛歯波状文を施す。外面にタタキメ、内面に同心円状の当具痕が確認できる。器壁は薄く精良な作りで底部は丸底である。類例に乏しく明確な年代は不明瞭だが、Ⅴ層中出土の遺物の年代を踏まえると 7 世紀初頭～前半頃のものと考えたい。

SD8515 から土師器の杯 A (64) が出土した。外面のナデ調整はやや粗いが、内面は丁寧なナデ調整を施す。口縁部は外反し立ち上がり、口縁部外面に煤が付着する。口径はやや大振りで深さもあり、高杯と比べると厚手である。

SX8522 から甕 b (65) が出土した。胎土はきめ細かく精良な作りで、口縁部はやや外反して立ち上がり、底部は筒状である。ナデ調整を施した牛角状の把手を胴部上半に左右対称に張り付け、根本にハケメ調整を施す。胴部上半から底部まで途切れることなく一度でハケメ調整を施す点が特徴的である。外面に煤が付着しておらず、カマドで使用したと考えられる。

2) Ⅴc層出土遺物

SX8503

祭祀遺構である SX8503 は、出土状況から東側のまともりと西側のまともりに分けられる。時期は須恵器の年代から 7 世紀初頭頃と考えられる。

【東側】

手捏ね土器 (67～70)・黒色土器高杯 (71)・土師器鉢 (72)・白玉 (73・74) が出土した。67～70 は手捏ね土器である。いずれも平底で、指頭圧痕が残る。67 はほかと比較すると底径がやや大きい。68～70 には成形時の指頭圧痕が観察される。72 は土師器の鉢 (鉢 A) である。平底で胴部は丸みがあり、胴部は垂直に立ち上がり上半に稜をもつ。口縁端部はやや外反する。白玉 2 点 (73・74) が出土したが、72 の洗浄時に発見したため出土位置が鉢内部か外部かは不明である。71 は黒色土器の高杯である。脚は短脚で端部が外反し、脚内側に接地面をもつ。杯部はやや外反しながら立ち上がり、胴部中位に稜をもつ。内面は丁寧なミガキ調整を施すが、身・脚の外面の調整はやや粗い。内面は黒色処理される。杯部は杯蓋模倣である。73・74 は白玉である。73 は平坦で、74 はやや丸みをおびる。直径 4mm であり、白玉の中でも小さな資料である。いずれも斜め方向の側面研磨を施す。石材は滑石である。

【西側】

手捏ね土器(75～78)・黒色土器杯(79)・須恵器杯(80)・土師器高杯(81・82)・黒色土器高杯(83)・須恵器高杯(84)・土師器長甕1点(85)・土師器壺1点(86)が出土した。75～78は手捏ね土器である。75は底部が上げ底状で、甕底部転用と考えられる。76は口縁径と底部径をほぼ同じくし、垂直直みに立ち上がる。77は外反しながら立ち上がり、78は口縁部がやや内傾する。76・77には指頭圧痕が残る。これらの手捏ね土器は、東側と比較すると形態差が大きい。79は黒色土器の模倣杯である。底部は丸底で胴部は丸みをもつ。口縁部はやや外反して立ち上がり、内面は黒色処理される。80は須恵器杯Hの身である。口縁部にはかえりがあり、底部は回転ヘラケズリを施す。田辺編年のTK209型式、中村編年Ⅱ型式第5段階と考えられる。81～83は土師器・黒色土器の高杯である。83は内外面にヘラミガキ、内面は黒色処理される。杯部は鉢の模倣で東側出土の72と器形が類似する。81は杯部が外反して立ち上がり、口縁部が大きく広がる。82は脚部が屈曲し、杯部に稜をもつ。84は須恵器の高杯である。杯部は直線的に立ち上がり、脚内側に接地面をもつ。上下2段の透かしが2単位ある。田辺編年のTK209型式、中村編年Ⅱ型式5段階と考えられる。85は長胴甕である。口縁部が外反し広がる。内面はコゲの付着が認められないので、湯釜として使用されたと考えられる。86は壺である。胴部上半は垂直に立ち上がり、最大径は上部にある。口縁部は直立した後外反する。

SX8524

壺(87)1点が、大型建物SI8502の東側で単独出土した。胴部上半に最大径をもち、底部はヘラケズリを施す。口縁部を意図的に打ち欠いており、祭祀儀礼に伴うと見られる。SX8503よりも若干新相の中村編年Ⅱ型式第6段階に位置づけられる可能性がある。

SI8502・SD8552

大型建物SI8502に床面から、高杯(88)、長胴甕(89～91)、甕(92)、壺(93)、支脚(94・95)が出土した。88は黒色土器の高杯である。立ち上がりはやや緩やかで、脚内側に接地面をもつ。杯部はヘラミガキ、脚内部はハケメを施し、内面は黒色処理される。89～91は長胴甕である。90は89と比較するとやや胴が張り、91は胴部下半部が膨れる。頸部に明瞭な屈曲をもつ。いずれも口径が小さく、外面にハケメ、内面にヘラナデを施す。内面はコゲの付着が確認できないことから湯釜として使用されたと考えられる。92は甕である。底部は筒抜けて中央部に一条の棧を設ける。棧は外面に粘土張付し、棧の断面は隅丸方形である。胎土は粗く細礫の混入が目立ち、内外面はハケメ調整を施す。北関東系の甕と見られる。93は土師器の壺で上半部に最大径をもち、下半部は極端にすぼまる。頸部胴部に明瞭な段が設けられ、口縁部は屈曲し外反し立ち上がる。94・95は支脚である。いずれも中央部がくびれる。中心部に孔をもち、軸棒に粘土を巻き付けて製作したと考えられる。94は断面が楕円形、95は円形で被熱による破損が顕著である。周溝SD8552からは黒色土器高杯2点(96・97)が出土した。96は外面のミガキは内面と比較すると調整はやや粗い。口縁部はやや外反して立ち上がる。97は96と比較すると口縁部の外反がやや弱い。SI8502の床面で検出したP8682では板材(109)が立てられた状態で出土した。底部は平坦で一方向からの連続した加工痕跡が認められる。樹種はクリの柾目材である。

SI8564・SF8563

SI8564の床面に設置されたSF8563からは高杯(98)が出土した。杯部は丸みをもたずに立ち上がり、口径は小さく、ほかの高杯とは形態を異にする。99は長胴甕である。外面はハケメ、内面はヘラナデを施す。底部は上げ底状で、ススの付着範囲から支脚の当たりを確認できる。カマドで湯釜として使用したと考え

られる。

SI8569

SI8569の床面から黒色土器高杯(100・101)・土師器長胴甕(103)、床面に設置されたSF8566から土師器長胴甕(102)が出土した。100・101は黒色土器高杯である。100は脚内側に接地面をもち、口縁部が外反する。内外面ヘラミガキ、内面は黒色処理される。101は杯部の広がりが大きく、内外面ヘラミガキ、内面は黒色処理される。102・103は長胴甕である。102は底部が上げ底状で、口縁部の外反がほかの長胴甕と比較すると弱く頸胴部界に段をもつ。外面はハケメ、内面はヘラナデを施す。103はやや小型で胴が張り、口縁部が外反し広がる。外面はハケメ、内面はヘラナデを施す。

SI8571

SI8571の周溝であるSD8556から長胴甕1点(104)が出土した。やや小型の甕である。口縁部はわずかに外反して立ち上がり、胴部の張りはやや弱い。口縁部から胴部上半にススが付着し、湯釜として利用されたと考えられる。

SX8526

SX8526から壺1点(105)が出土した。肩は張る球胴で口縁部は外反し、外面はヘラミガキを施す。

P8505

P8505を検出したVIb層上面では、平安時代の遺構が混在することが明らかになっている。明確な飛鳥時代の柱穴は検出できておらず、平安時代のものである可能性がある。P8505からは柱根(108)が出土した。樹皮を剥いだ丸木をそのまま使用する。下端部は外縁から中央部に向かい2方向の伐採痕が認められる。樹種はトネリコ属である。

遺構外

遺構外からは、支脚(106・107)が出土した。106は下側がやや幅広く、断面形はやや方形基調である。SI8571に近接する49X8グリッドVIb層からの出土であり、SI8571に帰属する可能性が高い。107は上端がつば状に広がり、断面形は円形である。VIc層からの出土であるが、SI8502直上の47W15グリッドからの出土であり、SI8502に帰属する可能性が高い。SI8502出土の支脚2点(94・95)と比較すると2点(106・107)とも短い。周辺では上越市津倉田遺跡[上越市教育委員会1999]でも長い支脚と短い支脚の出土が確認でき、カマドでの設置条件の違いを想定できる。

D 縄文時代後期(図版49・50・102・103)

1) 土 器

第10次調査で出土した土器は、器形を復元できたものは数少なく、破片資料が大半である。帰属時期は、後期前葉と後期後葉の2時期に分かれるが、大半は後期前葉の資料である。後期前葉の資料(110～136)は、X-1・X-2・X-3層から出土したがX-2層からの出土がやや多い印象である。なお、層位間の時期差を土器から読み取るのは難しい。後期後葉(138～141)の分布は、53W13グリッドに限られ、調査範囲全体に広がらない。後期前葉を包含するX-1層上面のみで出土した一方、X-1・2・3層中から後期後葉の土器は出土しなかった。後期前葉の資料と出土層位(レベル)に明瞭な差を認めることができる。

後期前葉

後期前葉の資料は、いずれも堀之内2式段階に位置づけられる。長野県栄村ひんご遺跡出土資料を標識とする堀之内2式系の「ひんご2式」[鈴木2018、綿田2018・2021]を主体とし、堀之内2式によ

り近い資料(114)を部分的に含む。器種は、鉢、深鉢、浅鉢、注口土器が認められるが、出土数量に比べて注口土器が多いことが特徴的である。

本報告資料で特筆されるのが鉢である。ひんご1式と比べると、薄手のつくりで、沈線が細線化している。文様は、渦巻文を横方向に連続させ、その間に三角形の文様を埋め込むことを基本としているが(110)、三角形の区画を省略するものもある(111)。頸部界に貼付した隆線上に刻みを入れ(110・111)、8字文を重ねている(110)。いずれも渦巻文による区画内に磨消縄文(原体:LR)が施される。

112は、わずかな波状口縁をもつ浅鉢である。内面に楕円形の区画が横方向に連続的に設けられ、その中を1条の沈線で区画している。外面は無文である。

113～117は深鉢、118～121は深鉢または鉢である。口縁部に貼付した隆線上に刻みを入れ、これに8字文を重ねている(113・114・115)。文様は、鉢(110)と同様に、渦巻文を横方向に連続させ、その間に三角文を埋め込んでいる(115)。磨消縄文(原体:LR)は、横方向の沈線の区画(113・114・116・117・118・120)、渦巻文による区画(110・111・119)、三角文による区画(121)に認められる。117・118は隆帯状に縄文を施文し、その中央に直径1mmほどの小さな刺突を連続させる特徴的な施文方法がとられる。

注口土器が多数含まれることも特徴的である。緻密な胎土を用いた精良なつくりの小型品(125・126)と、やや粗い胎土を用いたより中・大型品(122～124・127・128)から構成されるが、バラエティーに富む。小型の125は、残存部に文様は認められないが、表面に漆が塗られている。126は、渦巻文が施文された突起下に三角文が配され、その下に注口部が設けられる。注口部は欠損しているが、アスファルトと見られる付着物が認められる。122～124は注口部のみである。123の胴部との接合部でもアスファルトと見られる付着物が認められる。127・128は把手であり、渦巻文が施文される。



第28図 第9次調査出土の縄文土器

ひんご 2 式のほかには、少数ながら越後系の南三十稲葉式 (129 ~ 132) や、北陸系と見られるもの (133) が認められる。南三十稲葉式は、元屋敷類型 [鈴木 2018] と見られるもので、いずれも深鉢である。いずれも口縁部の破片で、129・132 は突起、130・131 は波状口縁である。129・132 の突起同士は 1 条の沈線でつながれ、129 の突起上面観は 8 字状をなす。130・131 の口縁部には円形の刺突列が刻まれ、その下位に縦方向の集合沈線が細密に施される。131・132 は、口縁無文帯の下位に横方向の集合沈線が施される。これらは、南三十稲葉式新段階 [金子 2002]、南三十稲葉 2 式 [金内 2013] に相当する。近年、当該期の調査事例が増加している新潟県北部地域と比べると、南三十稲葉式の組成率は明らかに低いことが特徴的といえる。

133 は、口縁部から胴部にかけて条が縦走する縄文が特徴的に見られる北陸系土器とみられる。縄文原体 LR が特徴的に採用される本遺跡においては明らかに異質な存在である。口縁部には縄文 (原体 RL) 施工後に 3 条の横走沈線が施されるが、最上段は突起部の接続部分で互い違いとなる。沈線は、幅広く浅いが、細線を多用する本遺跡においては、この点においても異質といえる。なお、気屋式に対比できる可能性を想定したが、特徴とされる三角形刺突はない。

無文の深鉢 (134 ~ 136) の破片が多数出土したことも特徴的である。ひんご遺跡で「軽白胎土土器」と呼ばれた特徴的な胎土で製作されており、千曲川流域との関係性が想定される資料である。ただし、ひんご遺跡の軽白胎土土器と比べると比重がやや大きい印象である。また、ひんご遺跡では鉢形土器等にも使われているが、本遺跡では深鉢のみであり、この点においても異なる。

以上の後期前葉の資料は、当地域の土器編年を考える上で極めて重要な資料といえる。標識遺跡であるひんご遺跡では、堀之内 1 式併行のひんご 1 式と、堀之内 2 式併行のひんご 2 式が存在するが、本報告資料に混在はない。ひんご 2 式段階の様相を端的に示しているが、遺跡の縁辺から出土した断片的な資料である。先行して調査した第 9 次調査資料が最も良好であり (第 28 図)、それらを含めてひんご 2 式の実態を明らかにする必要がある。

ひんご式は類例に乏しく、その分布は信越国境付近の千曲川・信濃川流域に限られるが、本報告資料は、その分布が高田平野にまで広がることを示している。下湖遺跡とひんご遺跡の間には関田山脈が横たわることが、直線距離で 25km しか離れていない。遺跡の東側を流れる飯田川を遡ると、関田山脈を越える峠道も存在しており、両地域の往来を想定できる環境にある。両遺跡に多くの共通点が認められることは自然な状況といえる。また、ひんご式を中心とする一方、越後系・北陸系が客体的に認められる状況も確認された。このことは、信州と日本海沿岸の接点であることを示しており、高田平野の地域的特性をよく示すといえる。

後期後葉

後期後葉の資料は、いわゆる瘤付土器段階の資料である (138 ~ 141)。138 と 139 は同一個体の可能性がある。波状口縁をなす深鉢であり、「C」字を向かい合わせる文様の中央に配置し、その左右に弧線文を施す。140 と 141 は同一個体の可能性がある。深鉢の胴部片で、瘤を中心に三角形の文様が配し、磨滑縄文 (原体: RL) が施される。これらは瘤付土器新段階の大波状口縁深鉢 D 類 [古澤 2012a・b]、瘤付土器第三段階 [小林 2008] に相当する。なお、上越地方における瘤付土器は、数遺跡で確認されているものの稀有な資料である。

2) 土製品

137は、X-3層から出土した土製垂飾類である。盤状の素材に長軸方向を貫くように穿孔されている。表面が山なり、裏面がより平坦に作られた機頭のような形で、表面には細沈線で渦巻文が描かれる。川添[2015]による後晩期の土製垂飾類の分類でいう6類に相当する。

3) 石器・石製品

X層から出土した石器組成・石材組成は、第3表のとおりである。出土した石は全点を取り上げ、洗浄後に人工品であるか否かを判別したが、石器・石製品と判断したものは35点と少ない。器種の構成は、楔形石器6点、磨製石斧4点、敲石1点、磨石類5点、石皿4点、石冠1点等からなる。なお、X-1～3層の層位間で、相違は認められない。

	チャート	玉髓	蛇紋岩	ヒスイ	輝緑石	硬砂岩	安山岩	合計
楔形石器	6							6
剥片	12	1						13
磨製石斧			2		1	1		4
敲石				1				1
磨石類							5	5
石皿							4	4
石冠							1	1
磨石				1				1
合計	18	1	2	2	1	1	10	35

第3表 縄文時代後期前葉の石器組成と石材組成

遺跡内での石器製作は頻繁に行われていないようであるが、チャートを用いた剥片石器の製作が特筆される。中でも楔形石器(142～145)が比較的多く出土しているが、素材の厚さを減じる過程で製作されたもので、石織の製作過程を示す資料の可能性はある。使用されたチャートは、いずれも青灰色で極めて良質(緻密で節理面が少ない)なものである。近隣に石材産地が存在する可能性を想定し、飯田川上流部の調査をしたところ、同質のチャートの存在を確認できた。これを利用して石器製作が行われた可能性がある。ひんご遺跡でも同質のチャート製石織が多数出土しており、注目すべき共通点といえる。ただし、ひんご遺跡では黒曜石の多用も認められ、様相を異にする。チャート以外の石材を用いた剥片石器の製作は、玉髓の剥片1点(146)が認められるが少数である。

磨製石斧は4点出土したが、大型または中型品(149・150)と小型品(147・148)に大別できる。前者は輝緑岩製(149)と硬砂岩製(150)、小型品は蛇紋岩製(147・148)2点である。147～149は刃部を破損している。また、147は、大型または中型品の破損時に生じた剥片を転用したものである。石材原産地から離れた石材利用を反映している。また、磨製石斧の製作過程で使用されたと思われるヒスイ製敲石(151)も出土したが、大きく破損している。遺跡内で、磨製石斧製作が部分的に行われた可能性がある。

磨石類(153～155)は、多様な形態であるが、凹部を持ち、磨面が部分的に伴うものが多い(153・154)。石材は、いずれも粗粒の安山岩で、円礫～亜円礫を素材とする。石皿は、20cm以上の比較的扁平な円礫を素材としている。片面または両面を磨面が設けられているが、中でも152の使用の進行は顕著である。石材は、いずれも粗粒の安山岩であるが、角閃石を特徴的に含むものもある(152)。これは、大田切川に特徴的に存在しており、妙高山麓に起源をもつと見られる。

また、節理面が発達し、板状に割れる安山岩が5点出土した。本遺跡では、二次加工が施されたものは存在しないが、妙高山麓～高田平野の縄文遺跡では刃部のみを簡易に作出して使用されている。特に和泉A遺跡下層では、一見、石器と認識しにくいものが膨大な数量出土しており、妙高山周辺に原産地が存在することが想定される[荒川・加藤1999]。本遺跡においても、これと同質の石材が一定数出土したことは、縄文人が資源として認識していたことを示している。

石製品は、安山岩製の石冠（156）が1点出土した。端部の3分の1ほどのみの出土であるが、入念な研磨により、断面三角形に整えられている。ひんご遺跡で三角場形石製品として報告されているものと同じ形態である。加工はされていないが、ヒスイの原石（157）が1点出土した。表面が平滑な亜角礫で、海岸漂石と見られる。敲石の素材としては小さく、玉の素材として搬入された可能性がある。

第V章 東区の調査

1 遺 構

A 上 層 (中世：図版 32～39・88～94)

1) 溝

溝は、11条検出した。北側で10条、南側で1条である。うち4条は、過去の調査で検出した溝の延長部分である。SD17 (図版 34, 12・13)・SD21 (図版 34, 12・13) は、第1次調査 [山崎ほか2003] で検出した道路状遺構の側溝であり、SD21からは越中瀬戸焼 (173) が出土した。中世以降に構築された可能性が指摘されているが、近世に下る可能性がある。SD9005 (図版 34, 14)・SD9015 (図版 34) は第6次調査 [石川ほか2012] で検出したSD1023とSD1022の延長部分に当たるが、いずれも対応するかは明らかでなかった。今回の調査で新たに検出した溝は、方形区画溝と呼んだ溝の集合体などがある。

方形区画溝

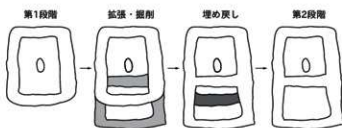
31・320・Pグリッドでは方形にめぐる溝の集合体と、これに囲まれた土坑を検出した。ここでは方形区画溝と呼ぶこととする。全体の平面形は「目」の字状だが、各溝の切り合い関係と深さの検討から、2段階に分かれると考えた (第29図)。

第1段階は西辺をSD9000、北・東辺をSD9001、南辺をSD9003とした「口」の字状を呈する。大きさは、芯々で計測すると南北方向に約6.18m、東西方向に約5.25mの隅丸長方形であるが、南辺は北辺より長く、

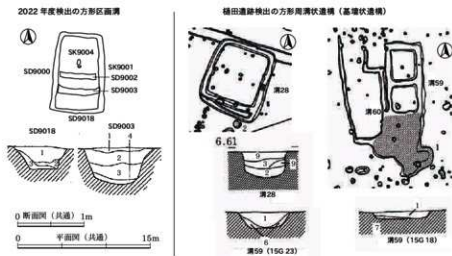
やや外側に張り出し弧を描く。深さは、検出面から0.55mほどで、底面標高は13.30m前後である。出土遺物は平安時代の須恵器、土師器のみで、遺構の年代を示すものは出土していないが、SD9003の底面から1361 (康安元) 年の新潟焼山から噴出したテフラを検出した (第VI章②)。この年代が、第1段階の年代の年代を反映すると考えられる。

SK9004はSD9001北辺とSD9003の中間に位置する土坑である。SD9001北辺から南へ約3.12m、SD9003から北へ約3.30mに位置し、長軸は2度西偏する。南側は浅くテラス状の段をもち、北側が深い (深さ0.21m)。遺物は出土しておらず、性格は不明である。第1段階の区画のほぼ中央に位置することから、これに伴う施設と見られる。埋土は地山ブロックと黒褐色シルトブロックの混土で、人為的に埋められたと見られる。

第2段階は、SD9001北辺とSD9003の間にSD9002を掘削し、SD9000とSD9001を南へ約2m延長し、両端をSD9018で結び全体の南辺とした段階である。また、SD9003は埋め戻されたと考えられ、「日」の字状を呈する。芯々で計測した規模は、南北方向約8.29m、東西方向約5.55mである。この段階での溝の深さは検出面から約0.33～0.40mで、底面標高は約13.41～13.52mである。前段階に比



第29図 方形区画溝 変遷図



第30図 下割遺跡の方形区画溝と樋田遺跡の周溝状遺構（基礎状遺構）

べ10～20cmほど浅い。第1段階と第2段階の底面標高の差は、第1段階の埋土最下層（3層）の厚さとおおむね対応する。

方形区画溝は、中世集落の外縁で単独で検出したことを踏まえると、宗教的な施設など、集落内の共有施設の可能性がある。周辺地域における類例は、上越市吉川区樋田遺跡〔室岡ほか1990・1991〕がある（第30図）。溝28は、「南北6.8m、東西6.0m、巾50～100cm、深さ30～40cmで、南辺部に掘り直されたとみられる細く浅い溝がある。」「遺物は珠洲焼など5点しか出土していない」とされる。規模や遺物の出土状況、周囲で検出された他の遺構の様子などが近似する。溝59は、「巾約80cm、深度20～40cm」で、「1辺約350cmの2つの方形基礎状遺構を囲む」とある。2基の方形基礎状遺構を「日」の字状の溝が囲っており、本遺跡の第2段階に近似する。遺構検出面の直上が近世以降の耕作土で削平されており、上部構造が明らかでないが、樋田遺跡の事例を参考に性格を判断できるかもしれない。

SD9005

直線的で規模は幅2.48m、深さ0.61mと大きい。溝の南岸には幅約2.2mにわたって、地下茎による攪乱や足跡が見られない範囲が、溝と平行するように確認された。盛土の存在がうかがえ、溝の掘削土で盛土した可能性がある。また、30O18・23グリッド付近の溝の底面で検出したSK9008・SK9009は、断面観察から溝と併存したと考えられ、溜井の可能性を考えた。

その他の溝

SD9015は、切り合い関係にあるSD9016より新しいが、埋土に大きな差が見られないことから近接する時期の可能性はある。1層から簀が出土しており、近世以降の遺構と判断した。SD9020は、直線状に伸び、78度西偏する。周囲には近世以降の溝（攪乱）が多数存在するが、それらと埋土が異質である。

2) 掘立柱建物

SB9052（図版37・39・89・90）は、東側が調査区外のため全容は不明瞭だが、建物の南西角に当たる部分を検出した。検出範囲では、桁行2間（4.05m）、梁行2間（3.81m）を確認した。桁行の主軸方向は、N-37°-E方向である（第31図）。なお、P6とP9073はほかの柱穴に比べ底面標高が15～20cm高いことから東柱の可能性はある。

SB9052の南西側ではP9063～P9067を検出した(図版37・39・94)。検出部分は桁行・梁行ともに1間で、建物の北西角部分と見られる。桁行2.17m、梁間1.82mで、建物の北西角部分と見られる。北西角のP9065と南東側のP9063を結んだライン上にP9064、南西側のP9067を結んだライン上にP9066がある。桁行の主軸方向は、N-60°-W方向でSB9052とは異なる(第31図)。検出部分が限定的であるが、柱筋が通ることから建物の可能性を想定した。

両者の主軸方向を第5・6次調査の成果[石川ほか2012]と比較すると、SB01(N-59°-W)・SB02(N-60°-W)が近く、出土遺物から17世紀前半の掘立柱建物とされている。

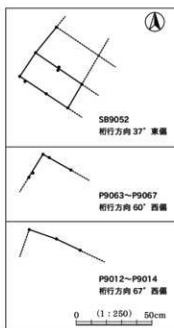
北側の30・31Qグリッドでは直線状に並ぶP9012・P9013・P9014を検出した(図版34・35)。建物の北辺を構成する柱穴の一部と見られる。柱筋はN-67°-Wで上述の2棟とは異なる。第5・6次調査の成果と比較すると17世紀後半から18世紀前半の近世陶磁器が出土したSB13(N-66°-W)と近似した主軸方向である。

第10次調査で検出した掘立柱建物は、出土遺物がなく詳細な時期は明らかでないが、周囲には中世の井戸や溝があり、これらに近い時期の遺構と考えられる。

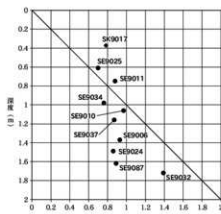
3) 井戸

井戸は9基(北側3基・南側6基)検出した。33U杭周辺にSE9032・SE9034・SE9037・SE9087が集中するほかは調査区内に散在する。平面形は、隅丸方形のSE9024を除けばすべて円形で、断面形は箱状が多い。SE9087は、側壁が崩落して断面形が袋状になったと見られる。すべて素掘りで、井戸枠や底部に曲物を設置するなどの構造物は確認されなかった。また、北側で検出したSE9006とSE9011の2基では、昇降時の足掛けのための小穴が側壁に掘られていた。井戸の大きさは、平均で長径0.90m、短径0.80m、深さ1.11m、底面標高12.66mである。直径1mほどの小型の井戸が多いことが特徴的である(第32図)。深さは0.6m～1.7mと様々であるが、地下水位は比較的高く、その時々で必要な深さまで掘削した可能性がある。

SE9024・SE9032の埋土には、径3～5cmほどの礫を大量に含むことが特徴的で、SE9032からは400点以上が出土した。礫はすべて洗浄し、加工や墨痕を確認したところ、火打石1点が含まれていた。また、埋土中にはヨシも多く含まれており、廃絶儀礼の痕跡と見られる。SE9032は遺物の出土数が多く、珠洲焼(160・161)、青磁(159)、越中瀬戸焼(158)、砥石(164)、漆器(162・163)、曲物(167)、火打金(166)、火打石(165)などが出土した。遺物の内容や構成は、ほかの井戸と比べると明らかに異質である。なお、越中瀬戸焼は近世の遺物であるが、埋土の上位から出土しており、遺構の年代を反映しない可能性が高い。



第31図 掘立柱建物等の桁行方向

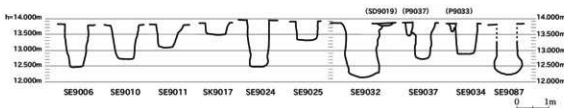


第32図 井戸・土坑の規模

4) 土 坑

土坑は6基検出した。方形区画溝の中央に位置するもの(SK9004)、溝の底面に掘られた溜井と見られるもの(SK9008・SK9009)のほか、SK9017・SK9007・SK9027がある。

SK9017は、長径0.78m、断面形状が台形状を呈する。井戸と比べると深さが0.37mと浅いことから、土坑と判断した(第33図)。破断面に漆が付着した珠洲焼片口鉢底部片(174)が出土した。SK9007・SK9027はいずれも掘り込みが浅く、断面は弧状である。SK9027は、平面形は楕円形で底面に凹凸が顕著である。



第33図 井戸・土坑の深度・断面形比較図

B 下 層 (古墳時代: 図版40・41・94・95)

下層の遺構は、古墳時代前期の遺物包含層Ⅹ2層を埋土とし、Ⅹ層上面で検出した。今回の調査範囲は南西隅から北東隅に向かう斜面地に当たる。標高は南西隅で13.30m、北東隅で12.60mであり、下り勾配は約3.8%である。検出した遺構は少ないが、微高地周辺で土坑を3基(SK9088・SK9091・SK9092)を検出した。第2次調査では「遺構の多くは自然堤防上、特に標高13m以上の地点に立地する傾向」があるとされており[山崎ほか2004]、おおむねこの状況と整合するが、SK9091・SK9092は、これより若干低い位置にある。なお、これより標高が高い自然堤防の中心は調査区外に当たる。

SK9091は、平面形は楕円形、断面形は弧状である。ほかの土坑と比べると大型で深い。4層から出土した小型丸底壺(176)は底部の一部を欠いているがほぼ完形の状態で出土しており、供献土器の可能性が高い。ほかに甕(177・178)が出土したが破片資料であり、小型丸底壺とは別に評価したい。SK9088・SK9092は、浅い窪地のような土坑であり、出土遺物は土師器の細片のみである。

2 遺 物

A 中 世 (図版51・103・104)

上層では、中世陶磁器(珠洲焼・青磁)、木製品(漆器・楕円形曲物・曲物底板・折敷底板)、金属製品(火打金)、石製品(砥石・火打石)、近世陶器(越中瀬戸焼)が出土した。中世後期の遺物が大半で、近世が一部含まれる。また、表土から平安時代の須恵器が出土したが、これに伴う遺構は検出していない。なお、遺物の大半は、井戸から出土しており、特にSE9032からの出土が多い。記載に当たっては、珠洲焼は吉岡[1994]、青磁焼は上田[1982]、越中瀬戸焼は宮田[1997]・相羽[2009]、漆器は水澤[2019]、火打石・火打金は白鳥[2005]の論考を参考とした。

SE9032

SE9032では、最も多くの遺物がまとまって出土した(158～169)。158は越中瀬戸焼皿の底部である。口縁部から体部は欠損しており、内底面には二重菊の印花が押される。低くシャープな高台が付く。16世紀末～17世紀初め頃のものであり、遺構内出土のほかの資料より新しい。埋土上部からの出土であり、遺構の年代を示さないと見られる。159は青磁焼の底部であり、高台外端を面取りしている。底径は5.4cmである。軸は一部畳付にまわるが、これを削り取っており、外底は無軸である。14世紀後半～15世紀前半ころのものであろうか。160・161は珠洲焼の片口鉢で、卸目は放射技法によって施される。口縁部を欠損しており、時期の詳細は明らかでないが、160の卸目は11条1単位と稠密で、珠洲V期ころのものと考えられる。底径は13.2cmである。161は卸目9条1単位であり、静止糸切痕の後に整形している。底径は19cmである。破断面には漆が付着しており、漆継ぎが行われたと見られる。162・163は漆器である。162は有台椀で、口径は10cmである。163は無台皿で、樹種はケヤキである。口径10cm、底径7.4cm、器高1.8cmである。いずれも柁目木取りで内外面に黒漆が塗布される。厚さは162が約3mm、163が約4mmで、162のほうが薄手で精緻なつくりである。いずれも器高が低く扁平である。

167は楕円形曲物である。樹種は底板がスギ、側板がヒノキ、籠がヒノキであり、法量は径30.3cm、高さ18.4cmである。籠は3条めぐり、側板と底板は木釘で4か所を固定する。打ち合わせは右前であり椀皮で綴じる。右前は中世以降一般的になるとされる〔西村1985〕。底板の内面全面に漆が塗られており、側板の底板内面との境界付近にも部分的に漆が確認される。長方形のヘギ板が側板と籠の間に、実測図正面に2枚、裏面に1枚が挿入される。西村〔1985〕は「帯を有する曲物では、側板と帯の間に緩みが生じれば、その間に長方形の薄板を縦方向に挿入し、楔とした個体がある。また補強材の目的をもって挿入する場合もある。この板を「ヘギ板」といい、大型で器高の高い製品にみられる技法である。」と指摘しており、本例も補強材として用いられたと考えられる。南〔1982〕の集計から算出された曲物における楕円形曲物の比率は、約1.7%と極めて少ない。楕円形曲物の民俗例は、折敷や面通(弁当箱)があるが〔岩井1994〕、本資料とは形態を異にする。南〔1982〕は、口径16～20cmの小型品を「水用」、口径26～30cmの小型品を「食用」、口径38cm以上の中型・大型品を「運搬用」に分類しており、本資料は食用用と考えられる。

168は円形曲物底板で、樹種はスギである。木取りは柁目で、表面左側の中央に3～4mmの孔が2か所あり、左側面には4か所の木釘孔が認められる。169は折敷底板で樹種はスギである。木取りは柁目で、残存する左辺は角切りされており、左辺上部・下部付近に1～2mmの孔が2か所認められる。

164は凝灰岩製の砥石である。四面に砥面があり、厚さは2cmほどで扁平である。165は火打石と見られる。緻密なチャートの垂角礫を用いており、実測図上端側に剥離痕が集中する。表面は平滑であるが、手擦れによる可能性がある。SE9032では400点以上の礫が出土したため、全点を洗浄・観察したが、本資料以外は粗粒な安山岩等であった。本資料のみが明らかに異なる存在である。明瞭な剥離痕が観察されたこと、火打金(166)が同遺構から出土したことから積極的に評価したい。166は火打金である。山形で端部が屈曲し、上方に小さく突出する。打撃部の厚さは2mm程度であるが、打撃部から頂部にかけて薄くなっている。

SE9087

170は鎌身と見られる。樹種はモクレン属で、木取りは柁目である。方形の柄孔が認められ、刃部側が平坦に整形されている。171は折敷底板である。樹種はスギで、木取りは柁目である。残存する右辺

は角切りされており、二孔一対の孔が実測図右端に2か所、上端に1か所あけられている。172は円形曲物底板で、樹種はスギである。木取りは柃目。木釘孔は認められず、断面形は台形である。

SD21

173は越中瀬戸焼広口壺または鉢鉢の底部である。調整は内面、外面ロクロナデで、内面のナデは粗く、凹凸が顕著である。底面は回転糸切りであり、内面、外面には鉄軸が施される。内底面は円形に軸が剥離しており、重ね焼きの痕とみられる。相羽[2009]のいうA類であり、17世紀に位置づけられる。SD21は、第1次調査で検出した道路状遺構の側溝であり、遺構の年代を示す可能性が高い。

SK9017

174は珠洲焼の片口鉢であり、卸目は放射技法によって施される。卸目は7条1単位であり、外面はロクロナデ、内面は使用痕が顕著にみられ平滑である。底部外面に指頭正痕、破断面には漆継ぎの形跡がみられる。底面は静止糸切りで、底径は15.2cmである。卸目の稠密さから珠洲V期ころの所産と考えられる。

遺構外

175は青磁碗である。底部内面には劃花文が施され、高台外端を面取りしている。軸は一部豊付にまわるが、これを削り取っており、外底は無軸である。また、全周をめぐる求心状の剥離が観察され、破損後に加工円盤としている。12世紀後半～13世紀初頭ころのものであろうか。

B 古墳時代(図版52・104)

下層から出土した遺物は、古墳時代前期後半の土師器と軽石製研磨具がある。西側に隣接する第2次調査範囲から連続する遺跡であり、土師器の記載に当たっては、報告書の時期・器種分類[山崎^{10a}・2004]にしたがい、滝沢[2019]の編年観を参考とした。なお、遺構埋土・遺物包含層とも出土資料の大半が破片で、器形の全体を復元できる資料は少ない。第2次調査では、「傾斜地からは多くの土器が出土しているが、自然堤防上で生活し不要なものを廃棄した結果」[山崎^{10a}・2004]としているが、2022年度調査成果はこの所見と整合する。

下層から出土した古墳時代の土師器は176～187である。176・177・178がSK9091出土であるほかは、遺物包含層(IX2層)からの出土である。176は、SK9091の4層から出土した丸底の直口壺であり、頸部は比較的短いと見られる。完形に近い状態で出土しており、供献土器の可能性が高い。底部付近が欠損していたが、意図的な破損であるか判断できなかった。器壁は薄く、頸部は外反して立ち上がる。なお、軟質な胎土であるため、洗浄時に表面が溶けてしまい、調整痕は観察できない。177・178は、4層から出土した甕A類の口縁部である。177は断面形状が「コ」の字状の口頸部で、口唇部には面をもつ。178は断面形状が「く」の字状を呈し、口唇部には明瞭な面をもたない。

179・180・181は甕である。179は甕A類の口縁部である。「く」の字状の単純口縁で、頸部は直線的に立ち上がる。180は甕の口縁部～体部である。外面は全体的に煤が付着する。頸部は短く直立気味に立ち上がり、口唇部はやや外反し、器壁は薄い。181は口縁部～体部である。口頸部は直線的でやや外傾気味に立ち上がる。182は小型甕である。鉢にも似た器形であるが、外面には煤が付着し、内面にコゲと見られる変色が確認されたことから、甕と判断した。183は二重口縁壺の口縁部である。体部は出土していないが、球胴を呈すると見られる。184は直口壺の口頸部である。器壁は薄く直線的に立ち上がる。185は平底の小型鉢である。口頸部がないため器形の全容は不明瞭だが、鉢G類に近似す

る。186・187は、高杯G類の脚部である。186は器壁が薄く、直線的で、端部は屈曲すると見られる。187は186に比べ器壁は厚手で、中央部が膨れる。

これらは、下割Ⅱ期（滝沢編年6段階）を中心とする時期に帰属する。ただし、甕177のように口縁端部に面をもち肩部が張り気味なものは古相で、下割Ⅰ期に相当する可能性がある。また、高杯の脚部形状は下割Ⅲ期に共通点が多い。したがって、2022年度調査で出土した資料は、下割Ⅱ期の資料を中心とするが、その前後の資料も含むものと評価する。

188は、軽石製研磨具である。研磨面は1面で、2条の平行する線状痕が認められる。線状痕の幅は1mm、深さ1～1.5mmである。長い線状痕の断面形はV字であり、金属製の刃物を研磨した痕跡と見られる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡からの出土例あり、高田平野周辺では弥生時代後期の裏山遺跡〔小池₂₀₀₀〕や下馬場遺跡〔尾崎₂₀₀₅〕で類例がある。

第VI章 自然科学分析

1 下割遺跡Xにおける自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

A はじめに

下割遺跡（新潟県上越市米岡に所在）は、飯田川左岸の沖積地（標高約14m）に立地し、洪水堆積物をはさみながら縄文時代後期・古墳時代・飛鳥時代・平安時代・室町時代の遺跡が累積する複合遺跡で、高田平野の形成過程を知る上で重要な資料である。今回、年代に関する情報を得るために放射性炭素年代測定を、遺跡周辺の環境復元を行うために珪藻分析・花粉分析を、木製品の用材選択について検討するために樹種同定を、動物資源の利用や食生活を考える資料を得るため骨同定をそれぞれ実施する。

分析番号	試料番号	採取地点	層位	時代	試料採取日	年代測定	珪藻分析	花粉分析
1	5	49W17	VIc 上部	飛鳥時代	20221110		○	○
2	16	49W17	VIj	不明	20221110	○	○	○
3	20	49W17	VIa	古墳時代?	20221110	○	○	○
4	35	49W17	X-1	縄文時代後期	20221110		○	○
5	36	49W17	X-1	縄文時代後期	20221110		○	○
6	37	49W17	X-2	縄文時代後期	20221110		○	○
7	38	49W17	X-2	縄文時代後期	20221110		○	○
8	39	49W17	X-3	縄文時代後期	20221110		○	○
9	40	49W17	X-3	縄文時代後期	20221110		○	○
10	42	49W17	XI	縄文時代後期以前	20221110		○	○

第4表 放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析試料一覧

B 遺跡周辺の古環境について

1) 試料

試料は、49W17のVIc 上部～XI層にかけて採取された10点（分析番号1～10）である（第4表）。これら全点について珪藻分析、花粉分析を実施する。この内、分析番号2（VIj層）、分析番号3（VIa層）の2点について放射性炭素年代測定を実施する。試料は、いずれも灰色系統を示すシルト～粘土よりなる。

2) 分析方法

a 放射性炭素年代測定

炭化材は小片を採取し、周囲を削り落として土などの不純物を取り除き、50mg程度に調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理AAA: Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}C$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点と

した年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma: 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での報告に従う [Stuiver & Polach 1977]。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

b 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4～5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュワラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数する (化石の少ない場合は、この限りではない)。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt [1930-1966]、Krammer and Lange-Bertalot [1985-1991]、Desikachary [1987]、Lange-Bertalot [2000] などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。

c 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 [1973]、中村 [1980]、藤木・小澤 [2007]、三好ほか [2011] 等を参考にする。

C 結 果

1) 放射性炭素年代測定

結果を第 5 表、第 34 図に示す。同位体補正を行った値は、VIj 層の分析 No.2 が $1640 \pm 20\text{BP}$ 、VIIa 層の分析 No.3 が $1735 \pm 20\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、北半球の陸域試料では IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いる。2 σ の値は、分析 No.2 が calAD380 ~ 535、分析 No.3 が calAD250 ~ 402 である。したがって、VIj 層には 4 ~ 6 世紀頃の、VIIa 層には 3 ~ 5 世紀頃の腐植が供給されていると考えられる。

2) 珪藻分析

分析結果を第 6 表に示す。分析した 10 試料のほとんどが無化石である。わずかに分析番号 3 (VIIa 層) から、

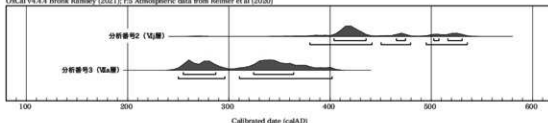
1 下湖遺跡Xにおける自然科学分析

分析No.	地点 層位	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正)	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代			Code No.	
						年代値	標準差	確率%		
2	49W17 VI層	土壌中の 植物遺体	AAA (1M)	1640 ± 20 (1641 ± 21)	-24.76 ± 0.35	1σ	cal AD 404 - cal AD 435	1546 - 1615 cal BP	51.0	YU- 17693 pal- 14572
							cal AD 465 - cal AD 474	1485 - 1476 cal BP	5.6	
							cal AD 502 - cal AD 507	1448 - 1443 cal BP	2.6	
							cal AD 516 - cal AD 530	1434 - 1430 cal BP	9.1	
						2σ	cal AD 380 - cal AD 441	1570 - 1509 cal BP	63.2	
3	49W17 VIIa層	土壌中の 植物遺体	AAA (1M)	1735 ± 20 (1734 ± 21)	-16.32 ± 0.48	1σ	cal AD 450 - cal AD 479	1500 - 1471 cal BP	21.1	YU- 17694 pal- 14573
							cal AD 494 - cal AD 535	1456 - 1415 cal BP	21.1	
							cal AD 254 - cal AD 286	1696 - 1664 cal BP	29.6	
							cal AD 324 - cal AD 364	1626 - 1586 cal BP	38.7	
						2σ	cal AD 250 - cal AD 296	1700 - 1654 cal BP	35.5	
	cal AD 310 - cal AD 402	1640 - 1548 cal BP	59.9							

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
 3) 校正した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
 4) AAAは、酸・アルカリ・酸塩基を示す。
 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用
 6) 暦年の計算には1射目まで示した年代値を使用
 7) 校正データセットはIntCal20を使用。
 8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行えないように、1射目を左の意でない。
 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、2 σ が95.4%である

第5表 放射性炭素年代測定結果

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r5 Atmospheric data from Reimer et al (2020)



第34図 暦年較正結果

種類	生態性		埋没 指標	49W17										
	塩分	pH		Wc上部	Vj	Va	X-1	X-1	X-2	X-2	X-3	X-3	X3	
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
海水生種				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種				0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
豆蔻化石総数				0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

凡例

- 塩分：塩分濃度に対する適応性 pH：水素イオン濃度に対する適応性 流水：流水に対する適応性
 Euh : 海水生種 al-bi : 好アルカリ性種 l-bi : 真正水性種
 Euh-Meh : 海水生種～汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
 Meh : 汽水生種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
 Ogh-Meh : 淡水生種～汽水生種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
 Ogh-hil : 好塩好塩性種 ac-hil : 好酸性種 r-bi : 好流水性種
 Ogh-ind : 好塩不定性種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種
 Ogh-hob : 好塩好塩性種
 Ogh-unk : 好塩不明種

埋没指標

- A : 外洋指標種 B : 内湾指標種 C1 : 海水深場指標種 C2 : 汽水深場指標種 D1 : 海水砂質干潟指標種 D2 : 汽水砂質干潟指標種
 E1 : 海水泥質干潟指標種 E2 : 汽水泥質干潟指標種 F : 淡水泥質指標種 (以上は山本, 1988)
 G : 淡水の蘆花指標種 H : 湖沼の蘆花指標種 J : 上流性河川指標種 K : 中～下流性河川指標種 L : 低流性河川指標種 M : 湖沼浮遊性種
 N : 湖沼浮遊性指標種 O : 湖沼底層付着性種 P : 真細菌系指標種 Q : 緑菌指標種 (以上は安藤, 1990)
 R : 好肉腐性種 U : 広適応性種 T : 好流水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)
 R : 好生性種 (A : RA群, RB : B群, RI : RI区分, 伊藤・堀内, 1991)

第6表 珪藻分析結果

好塩不定性種、好アルカリ性種、流水不定性種の *Gyrosigma acuminatum* の破片が1個体産出したのみである。

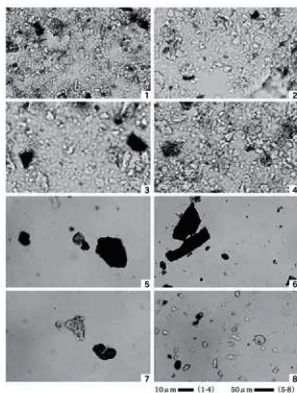
3) 花粉分析

結果を第7表に示す。花粉化石は、分析番号2でブナ属、トチノキ属、カヤツリグサ科が、分析番号8でクルミ属、コナラ亜属、ヨモギ属、キク亜科がわずかに1個体検出される程度である。また、分析番号1～3、6～8でシダ胞子が複数検出される。検出される花粉および胞子は、保存状態が悪く、外膜

が破損・溶解している状況も確認された。なお、この他、再堆積した樹族、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜族、ニレ属-ケヤキ属、フウ属、ヨモギ属が僅かであるが検出される。

種 類	49W17									
	1c 上部	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉										
クヌシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ブナ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜族	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
トチノ木属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉										
カヤツリグサ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シダ類孢子										
シダ類孢子	4	2	3	-	-	1	1	1	-	-
合 計										
木本花粉	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0
草本花粉	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子	4	2	3	0	0	1	1	1	0	0
合計	4	5	3	0	0	1	1	5	0	0
再堆積花粉										
ツグ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
マツ属	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
サワグルミ属	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ブナ属	-	2	1	-	-	-	-	1	-	-
コナラ属コナラ亜族	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-
フウ属	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-

第7表 花粉分析結果



1. 珪藻分析プレパラート内の状況 (分析番号 2 49W17 VI j ; 16)
 2. 珪藻分析プレパラート内の状況 (分析番号 4 49W17 X -1 ; 35)
 3. 珪藻分析プレパラート内の状況 (分析番号 8 49W17 X -3 ; 39)
 4. 珪藻分析プレパラート内の状況 (分析番号 10 49W17 X ; 42)
 5. 花粉分析プレパラート内の状況 (分析番号 2 49W17 VI j ; 16)
 6. 花粉分析プレパラート内の状況 (分析番号 3 49W17 Va ; 20)
 7. 花粉分析プレパラート内の状況 (分析番号 5 49W17 X -1 ; 30)
 8. 花粉分析プレパラート内の状況 (分析番号 8 49W17 X -3 ; 39)

第35図 珪藻分析および花粉分析プレパラート内の状況

D 考 察

放射性炭素年代測定を実施したところ、VIj 層で4~6世紀頃、VIIa 層で3~5世紀頃の年代値が得られており、発掘調査と矛盾がない結果が得られた。

珪藻化石の産状をみると、分析した10試料とも産出しないか、産出数が非常に少ないため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている〔千木良1995〕。また、小杉〔1986〕によると、珪藻の遺骸は、堆積する際には、その大きさからシルトと挙動と共にするとされていることから、粗粒な堆積物の場合、珪藻殻は取り込まれにくいことが推定される。そのため、これらの層準が堆積した頃は、もともと珪藻化石が取り込まれにくい環境であったか、取り込まれた珪藻化石も堆積後に分解・消失した可能性が高い。

また、花粉分析においても保存状態の悪い花粉化石が数個体検出される程度である。これらわずかに検出される花粉は、周辺植生に由来するものと考えられるが、植生を検討するまでには至らない。花粉化石の産出が悪い場合、もともと取り込まれる花粉が少ない、あるいは堆積後に分解・消失したなどの可能性が考えられる。今回の場合、花粉化石の保存状態がやや悪いことを考慮すると、上記の両方が合わさって

いる可能性が高い。なお、本試料では再堆積の可能性が高い花粉が検出されている。本地点の上流域に更新世前期～鮮新世後期の魚沼群層や中新世後期の寺泊層上部などが分布していることから、これらの再堆積した花粉はそのような後背地から流れ込んできたものと考えられる。

以上、珪化石や花粉化石の産状を考慮すると、本地点は氾濫・堆積を繰り返していたが、3～6世紀頃は離水して植物が生育できるような比較的安定した環境となり、生活の場として活用することができるようになったと考えられる。

2 木製品の用材選択

バリノ・サーヴェイ株式会社

A 試料

試料は、礎板、折敷、たが、柱根、曲物、箸、漆器椀などの木製品 21 点である。W1～3、W4-1～4-5、W5～17 までの分析番号が付されている。試料の詳細は、結果とともに表示する。

B 分析方法

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成する。生物顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 [1982]、Wheeler 他 [1998]、Richter 他 [2006] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 [1991] や伊東 [1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

C 結果

結果を第 8 表に示す。検出された樹種は、針葉樹 2 種類(スギ、ヒノキ)、広葉樹 4 種類(トネリコ属、クリ、ケヤキ、モクレン属)、その他 1 種類(樹皮)であった。以下に検出された種類の木材解剖学的所見を述べる。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 個が多い。放射組織は単列、1～10 細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかへやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または 2 個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道

管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

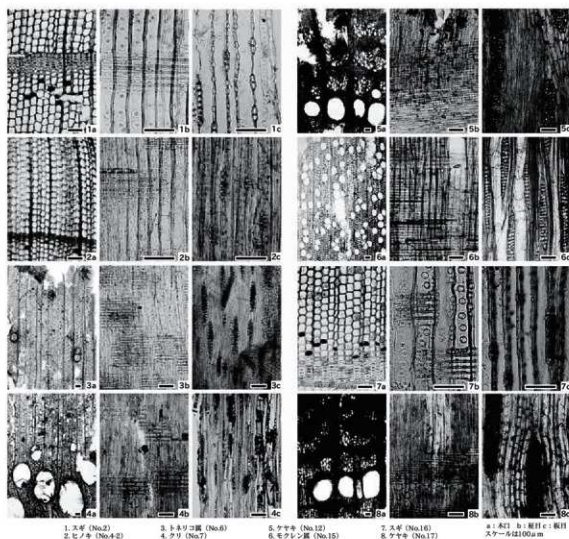
環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～40細胞高。

No.	掲載番号	遺物	樹種
W1	57	葉	スギ
W2	168	道物底板	スギ
W3	169	節叢	スギ
W4-1	167-1	道物底板	スギ
W4-2	167-2	道物側板	ヒノキ
W4-3	167-3	道物端材	榎皮
W4-4	167-4	節	ヒノキ
W4-5	167-5	へ平板(正面)	ヒノキ
W5	60	材板	スギ
W6	61	材板	トネリコ属
W7	62	材板	クリ
W8	59	壁板	スギ
W9	108	材板	トネリコ属
W10	58	材内の節	スギ
W11	109	材材	クリ
W12	163	漆面基	ケヤキ
W13	172	道物底板	スギ
W14	170	節叢	スギ
W15	171	漆面	モクレン属
W16	56	葉	スギ
W17	162	漆面樹	ケヤキ

第8表 樹種同定結果



第36圖 木材

D 考察

検出された樹種は、針葉樹2種類（スギ、ヒノキ）、広葉樹4種類（トネリコ属、クリ、ケヤキ、モクレン属）であった。いずれの樹種も現在の新潟県内に分布する種類であることから、比較的周辺で入手することが可能な種類である。針葉樹が多く、特にスギは箸、円形曲物、折敷、底板曲物、柱根、礎板、棒状材として出土しており、様々な用途で使用されている。

スギは、谷泊いや扇状地扇端部の湧水池周辺などの水分の多い場所に生育する常緑高木である。ヒノキは、山地等に生育する常緑高木で、木材は木理が通直で割裂性と耐水性が高い。これら針葉樹は樹高の高い巨木になるため太くまっすぐな材が得やすい。水湿に強く軽軟で加工も容易な良材である。このため、建築材、施設材、器具材として多用される。出土木製品用材データベース〔伊東・山田 2012〕をみると、過去の下割遺跡でもスギは多く出土しており、箸や曲物など、今回の出土器種と似通っている部分もある。

トネリコ属は温暖な山地の湿地に自生している。材は重硬で曲げに強い。農耕具や家具材として利用されていた。今回は柱根として出土している。出土木製品データベースによると、下割遺跡では過去に杭としてトネリコ属が出土している。この地域ではトネリコ属は土木材などに使われていたと考えられる。クリも柱根として出土しており、過去にも柱根として出土している。

ケヤキは漆塗り腕として出土している。ケヤキは比較的重硬なため加工しにくい、丈夫で木目が美しいことから、量産品ではなく上品に用いられることが多い。出土木製品用材データベース〔伊東・山田 2012〕をみると、ケヤキは漆塗り腕として全国から出土する。

モクレン属は農具として出土している。モクレン属の木材は、軽軟で加工しやすく、狂いは少ない。緻密で均質であるため、その特性を生かして彫刻、製図、定木、鞘、楽器材、家具、下駄、材、箱などに使われることが多い。県内のデータベースでは、モクレン属は農具としての出土は無く、建築材や下駄が多い。モクレン属の農耕具としての利用以外は既存の調査例をみても整合性のある結果であった。

3 動物利用

A 試料

バリノ・サーヴェイ株式会社

試料は、平安時代、飛鳥時代、縄文時代後期前葉の包含層、遺構覆土から採取された骨7試料である。分析番号1～7の番号が付されており、1試料中に1点～複数点の破片が入っている。なお、分析番号5～7の3試料は、1試料中に2袋が混在していたため、便宜的に枝番号を付けて管理する。試料の詳細は結果とともに表示する。

B 分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。また、必要に応じて計測する。

C 結果

確認された種類は、硬骨魚綱のサケ科・スズキ属？、哺乳綱のウマの3種類である（第9表）。同定結果を第10表に示

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthyes
末鱗亜綱	Subclass Actinopterygii
サケ科	Order Salmoniformes
サケ科	Family Salmonidae
スズキ目	Order Perciformes
スズキ亜目	Suborder Percoidae
スズキ科	Family Moronidae
スズキ属	Genus <i>Lateolabrax</i>
哺乳綱	Class Mammalia
ウマ目（奇蹄目）	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>

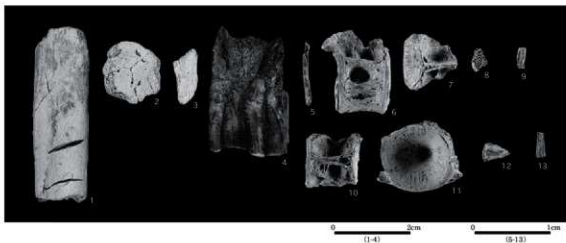
第9表 検出分類群一覧

す。以下、試料ごとに結果を記す。

- ・分析番号1 哺乳類の四肢骨の可能性ある破片である。焼けている。表面が研磨されている可能性がある。
- ・分析番号2 哺乳類の部位不明破片である。焼けている。
- ・分析番号3 ウマの左上顎第2後臼歯である。臼歯高27.26mmを測る。
- ・分析番号4 魚類の鰭棘等、骨部位不明である。いずれも焼けている。
- ・分析番号5 スズキ属の可能性ある腹椎、魚類の尾椎、サケ科の椎骨、魚類の鰭棘等、骨部位不明破片である。いずれも焼けている。
- ・分析番号6 魚類の尾椎・椎骨・鰭棘等、骨部位不明破片である。いずれも焼けている。
- ・分析番号7 骨部位不明破片である。いずれも焼けている。

採取地点	層位	時代	分析番号	種類	部位	左右	状態等	数量	重量(g)	焼熱	備考
42U18	V a 上部	平安時代	1	哺乳類	四肢骨?		破片	1	7.90	○	表面研磨?, 加工品?
SD8082	2	平安時代	2	哺乳類	不明		破片	2	1.84	○	
47W15	VI b	飛鳥時代	3	ウマ	左上顎第2後臼歯	左	略完	1	16.10	○	臼歯高: 27.26mm
SF8542	1	飛鳥時代	4	魚類	鰭棘等		破片	2	0.00	○	
				骨	不明		破片	2	0.00	○	
SD8556	2	飛鳥時代	5-1	スズキ属?	腹椎		破片	1	0.34	○	標体長: 7.73mm, 標体径: 9.87mm
				魚類	尾椎		破片	1	0.05	○	
			5-2	サケ科	椎骨		破片	3	0.00	○	
				魚類	鰭棘等		破片	2	0.00	○	
				骨	不明		破片	21	0.06	○	
				洗済				2	0.00		
SD8556	2	飛鳥時代	6-1	魚類	尾椎		略完	1	0.07	○	
				魚類	椎骨		破片	4	0.16	○	
			6-2	魚類	椎骨		破片	3	0.00	○	
				魚類	鰭棘等		破片	3	0.00	○	
				骨	不明		破片	75 +	0.06	○	
				洗済				18	0.00		
PS807	1	縄文時代 後原始期	7-1		不明			3	0.18	○	
				洗済				3	0.08		
			7-2		不明			73	0.15	○	
				洗済				21 +	0.10		

第10表 骨同定結果



1. 哺乳類四肢骨? (分析番号1:42U18 V a 層上部)
2. 哺乳類不明 (分析番号2:SD8082 2層)
3. 哺乳類不明 (分析番号2:SD8082 2層)
4. ウマ左上顎第2後臼歯 (分析番号3:47W15 VI b 層)
5. 魚類鰭棘等 (分析番号4:SF8542 1層)
6. スズキ属? 腹椎 (分析番号5-1:SD8556 2層)
7. 魚類尾椎 (分析番号5-1:SD8556 2層)
8. サケ科椎骨 (分析番号5-2:SD8556 2層)
9. 魚類鰭棘等 (分析番号5-2:SD8556 2層)
10. 魚類尾椎 (分析番号6-1:SD8556 2層)
11. 魚類椎骨 (分析番号6-1:SD8556 2層)
12. 魚類椎骨 (分析番号6-2:SD8556 2層)
13. 魚類鰭棘等 (分析番号6-2:SD8556 2層)

第37図 出土骨

D 考 察

今回の試料の中で分析番号3を除く骨は、いずれも焼けていることから、何らかの人の手が加わったことが明らかである。

縄文時代後期前葉とされるP8807の1層から出土した骨は、極めて小さな破片で特徴的な部位もないため、種類および部位ともに不明である。そのため、当時の食料資源に関する情報は得られなかった。

飛鳥時代とされるSF8542の1層、SD8556の2層、SD8556の2層では、魚類の骨が検出された。この内、スズキ属の可能性のある腹椎、サケ科の椎骨がみられる。スズキ属は、日本近海には内湾・河口域・河川などの淡水域に分布するスズキ (*Lateolabrus japonicus*)、海流が洗う外洋に面した荒磯に多いヒラスズキ (*Lateolabrus latus*) が存在する。サケ科は、椎骨の破片が検出される。微小であるため断定できないが、サケ (*Oncorhynchus keta*) やニジマス (*Oncorhynchus mykiss*) を含むサケ属に由来すると考えられる。サケ属の中には、淡水域で産卵して湖や川などに留まって繁殖を繰り返すようになった陸封型、淡水域で産卵するが一生の大部分を海洋で生活する降海型が存在する。関川流域から沿岸部にかけて漁獲されたものが食料資源として利用され、焼却・廃棄されたものと考えられる。これらの種類は、新潟県内では、糸魚川市の六反田南 [山崎 2012・2018]、胎内市の野地遺跡 [種泉 2009] など、縄文時代の遺跡から検出されており、古くから利用されてきた魚種である。なお、SD8556の2層 (分析番号6-1) で検出された魚類の尾椎は、コイ科の可能性もあるが、断定できない。仮にコイ科とすれば河川や湖沼など陸水漁を裏付けるものとなる。

飛鳥時代とされる47W15のVIb層から検出された歯は、ウマである。左上顎第2後臼歯で臼歯高27.26mmを測ることから、西中川ほか [1991] に従うと、13～14歳程度と推定される。ウマは、運搬や農耕などの使役、軍事さらに犠牲祭祀としての利用が考えられる。本試料は、歯牙1点のみが包含層から検出されている点を考慮すると、付近にウマの遺体が埋納されていたものが、その後の擾乱等によって二次的に運ばれてきた可能性がある。

平安時代とされる42U18のVa層上部、SD8082の2層では、哺乳類の四肢骨の可能性のある破片 (分析番号1) および部位不明破片 (分析番号2) が検出される。この内、42U18のVa層上部の哺乳類の四肢骨の可能性のある破片 (分析番号1) は、表面が研磨されている可能性がある。そのため、加工品の可能性があるものの、破片のため断定できない。

引用文献 第VI章 1～3

- 安藤一男 1990『淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用』『東北地理 42』 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995. *Statistical Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution* (2) *Saprophilous and saproxenous taxa*. *Diatom*, 10, 35-47.
- Bronk RC., 2009. *Bayesian analysis of radiocarbon dates*. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 千木良雅弘 1995『風化と崩壊』近未来社 204.
- Desikachary, T. V., 1987. *Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean*. *Madras science foundation*, 1-13, Plates 401-621.
- 林 昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- Hustedt, F., 1930. *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz., unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete*, in *Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz*, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

- Husted, F., 1937-1938, *Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I~III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.*
- Husted, F., 1959, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.*
- Husted, F., 1961-1966, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeres-gebiete, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.*
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』3 京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 449.
- 伊藤良永・堀内誠示 1989「古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分-」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集17』
- 伊藤良永・堀内誠示 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻誌』6 23-44.
- 小杉正人 1986「陸生珪藻による古環境の解析とその意義-わか国への導入とその展望-」『植生史研究』1 9-44.
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, *Naviculaceae, Bibliotheca Diatomologica, 9, 250p.*
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.*
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.*
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.*
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.*
- Lange-Bertalot, H., Witowski, A., and Metzeltin, D., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts, 1, 925p.*
- 西中川駿・本田道輝・松元光春 1991「古代遺跡出土骨からみたわか国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書』99.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Baizhin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich R., Koehler P., Kulsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, *The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP)*, *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosse D., Heinz J., and Gasson P.E. (編) 2006『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修)海青社 70. [Richter H.G., Grosse D., Heinz J., and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, *Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data*, *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176.
- 樋原岳二 2009『動物遺体』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第196集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXII 野地遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 169-179.
- 山崎 健 2012「六反田南遺跡Ⅳから出土した動物遺存体」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第229集 一般国道8号系魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅸ 六反田南遺跡Ⅳ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 76-87.
- 山崎 健 2018「六反田南遺跡から出土した動物遺存体」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第271集 一般国道8号系魚川東バイパス関係発掘調査報告書XII 六反田南遺跡Ⅵ(本文編)』新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 268-276.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版監修) 海青社 122. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

4 下割遺跡 10 次調査における基本層序の粒度組成と火山灰層

新潟大学災害・復興科学研究所 卜部厚志

A はじめに

本稿は、2022 年度に実施した上越市下割遺跡 10 次調査における基本層序の粒度組成と基本層序に挟在する火山灰層について検討を行ったものである。

B 試料分析

分析した試料は、市道東聖のセクションにおいて飛鳥時代から縄文時代後期と推定される年代の土層区分 (VI層～XI層) から採取した 42 試料である。これらの試料について、全体の粒度分析と構成鉱物分析のため 60 メッシュ・120 メッシュ・250 メッシュの篩を用いた分離を行った。全体の粒度分析は、レーザー回折型粒度析装置 Mastersizer3000 (Malvern Panalytical 社製：新潟大学) を用いた。構成鉱物分析用の試料は、火山灰層と推定される試料について顕微鏡を用いて構成鉱物の観察を行った。

C 粒度分析結果

レーザー回折型粒度析装置 (Mastersizer3000) は、0.01 ~ 3500 μm までの粒度測定が可能であり、0.01 ~ 3500 μm の粒度幅を 100 の粒度階に区分しそれぞれの粒度の含有率 (%) を求める方式であり、特にシルト以下の粒子サイズの含有率の測定が容易である特徴がある。粒度分析の結果について、各試料の粒度分布 (第 38 図)、メディアン値・粘土含有率・シルト含有率 (第 39 図)、メディアン (中央値: μm)・モード (最頻度粒形値: μm)・淘汰度 (GSD)・砂含有率 (%)・シルト含有率 (%)・粘土含有率 (%) (第 11 表) を示す。層位区分 Va : メディアン 11.9 μm 、砂含有率約 17%、シルト含有率約 58%、粘土含有率約 25% を示す。層位区分 Vb : メディアン 6 ~ 8.5 μm 、砂含有率約 4 ~ 8%、シルト含有率約 60 ~ 66%、粘土含有率約 29 ~ 36% を示す。

層位区分 Vc : メディアン 7 ~ 7.5 μm 、砂含有率約 6 ~ 9%、シルト含有率約 61 ~ 62%、粘土含有率約

試料名	層位区分	メディアン (μm)	モード (μm)	淘汰度 (GSD)	砂含有率 (%)	シルト含有率 (%)	粘土含有率 (%)
1	VI a	11.90	6.85	4.42	17.09	57.99	24.91
2	VI b 上	6.01	4.98	3.35	3.92	59.90	36.18
3	VI b 中	8.45	6.56	3.55	5.34	65.50	29.16
4	VI b 下	8.20	6.02	3.87	8.27	61.72	30.01
5	VI c	7.00	6.39	3.47	5.71	62.12	32.17
6		7.54	6.39	3.74	8.81	60.59	30.60
7		18.24	96.74	5.19	29.47	49.56	20.98
8	VI d	5.91	4.01	4.29	11.27	51.15	37.58
9		11.99	41.48	4.10	12.60	61.64	25.76
10	VI e	10.40	12.03	3.24	4.61	72.91	22.48
11		7.79	8.26	3.06	1.82	68.85	29.33
12	VI f	8.31	9.42	2.97	2.29	71.41	26.30
13	VI g	6.37	7.22	2.95	3.60	65.24	32.16
14	VI h	6.31	7.15	2.90	2.66	65.20	32.44
15	VI i	9.59	9.64	3.22	3.81	71.57	25.62
16	VI j	7.08	7.94	2.89	1.48	68.15	30.37
17	VI k	6.71	7.79	2.79	0.55	67.61	31.84
18	VI l	5.12	5.60	2.67	0.67	59.94	39.38
19	VI m	4.54	4.96	2.56	0.91	55.56	43.53
20	VI a	5.20	4.37	3.57	5.92	53.63	40.45
21	VI b	5.74	4.52	3.60	5.24	56.85	37.92
22	VI c	7.83	7.19	3.32	3.99	66.50	29.51
23		8.87	6.08	4.07	11.25	60.33	28.43
24	VI a	12.52	26.07	3.56	5.95	70.18	23.87
25	VI b	41.73	105.94	4.70	40.46	44.22	15.32
26		14.91	25.02	3.22	6.68	75.60	17.72
27	VI c	7.20	3.20	5.06	17.40	46.73	35.88
28	IX a top	3.81	3.75	2.89	2.32	46.62	51.05
29	IX b	5.53	5.54	2.98	2.22	66.65	37.13
30	IX c top	6.00	5.83	3.59	5.16	58.43	36.41
31	IX d	4.27	3.37	2.77	0.00	53.35	46.65
32		10.88	17.22	2.88	1.37	77.21	21.42
33	IX e	10.84	15.23	2.73	1.07	79.45	19.49
34		6.26	7.06	2.68	0.56	66.52	32.91
35	X-1	7.38	9.30	3.17	2.41	66.00	31.59
36		6.31	6.60	2.98	0.98	64.26	34.76
37		5.22	5.01	3.20	2.29	57.01	40.76
38	X-2	5.79	5.54	3.38	3.19	58.52	38.30
39		6.52	3.87	3.79	5.47	57.93	36.50
40	X-3	9.87	28.15	4.09	9.31	61.58	29.12
41	X-4	17.03	35.29	3.69	10.77	68.91	20.32
42	XI	7.90	6.49	3.82	7.49	60.98	31.53

第 11 表 粒度分析結果

31～32%を示す。

層位区分Vd (洪水砂)：メディアン6～18 μ m、砂含有率約11～30%、シルト含有率約50～62%、粘土含有率約21～38%を示す。また、モードは上部で97 μ m、中部で4 μ m、下部で42 μ mを示し、中部が細粒であるが、上下層位と比較して砂質である。

層位区分Ve：メディアン8～10 μ m、砂含有率約2～5%、シルト含有率約69～73%、粘土含有率約22～30%を示す。

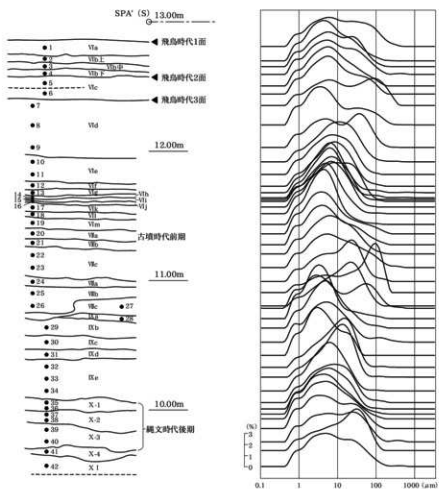
層位区分Vf～Vj：メディアン6.3～9.6 μ m、砂含有率約1.5～2.8%、シルト含有率約65～71%、粘土含有率約26～32%を示す。

層位区分Vk～Vl：メディアン5.1～6.7 μ m、砂含有率約0.6～0.7%、シルト含有率約60～68%、粘土含有率約32～40%を示す。

層位区分Vla～Vlb：メディアン5.2～5.7 μ m、砂含有率約5.2～5.9%、シルト含有率約54～57%、粘土含有率約38～40%を示す。

層位区分Vlc：メディアン7.8～8.9 μ m、砂含有率約4～11%、シルト含有率約60～67%、粘土含有率約28～30%を示す。

層位区分Vla：メディアン12.5 μ m、砂含有率約4%、シルト含有率約70%、粘土含有率約24%を示す。また、モードは26 μ mで上位層と比較してやや砂質である。



第38図 各試料の粒度組成

層位区分**VIIb** (洪水砂) : メディアン 15 ~ 42 μm 、砂含有率約 7 ~ 40%、シルト含有率約 44 ~ 76%、粘土含有率約 15 ~ 18% を示す。また、モードは上部で 106 μm 、下部で 25 μm を示し、下部が細粒である。なお、上位の**VII層**層や下位の**VIII層**層と比較すると砂質である。

層位区分**VIIIc** : メディアン 7.2 μm 、砂含有率約 17%、シルト含有率約 47%、粘土含有率約 36% を示す。

層位区分**IXa** (火山灰質) : メディアン 3.8 μm 、砂含有率約 2%、シルト含有率約 46%、粘土含有率約 51% を示す。

層位区分**Kb** : メディアン 5.5 μm 、砂含有率約 2%、シルト含有率約 61%、粘土含有率約 37% を示す。

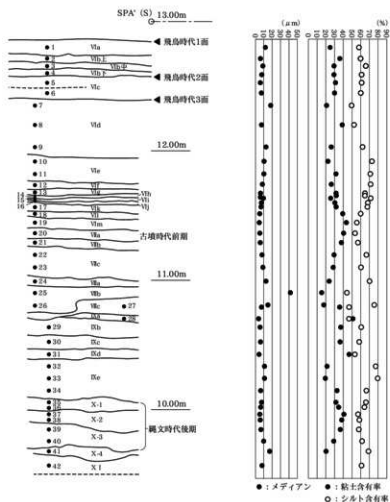
層位区分**Kc** (火山灰質) : メディアン 6.0 μm 、砂含有率約 5%、シルト含有率約 58%、粘土含有率約 36% を示す。

層位区分**Kd** : メディアン 4.3 μm 、砂含有率 0%、シルト含有率約 53%、粘土含有率約 47% を示す。

層位区分**Ke** : メディアン 6.3 ~ 10.9 μm 、砂含有率約 0.6 ~ 1.4%、シルト含有率約 67 ~ 79%、粘土含有率約 19 ~ 33% を示す。

層位区分**X-1** : メディアン 6.3 ~ 7.4 μm 、砂含有率約 1.0 ~ 2.4%、シルト含有率約 64 ~ 66%、粘土含有率約 32 ~ 35% を示す。

層位区分**X-2** : メディアン 5.2 ~ 5.8 μm 、砂含有率約 2.2 ~ 3.2%、シルト含有率約 57 ~ 59%、粘土含有率約 38 ~ 41% を示す。



第 39 図 各試料のメディアン値、粘土・シルト含有率

層位区分X-3: メディアン 6.5 ~ 9.9 μm , 砂含有率約 5.5 ~ 9.3%, シルト含有率約 58 ~ 62%, 粘土含有率約 29 ~ 37% を示す。

層位区分X-4: メディアン 17 μm , 砂含有率約 10.8%, シルト含有率約 69%, 粘土含有率約 20% を示す。

層位区分XI: メディアン 7.97 μm , 砂含有率約 7.5%, シルト含有率約 61%, 粘土含有率約 32% を示す。

D 火山灰層（火山灰質試料）の分析結果

試料 28（層位区分IXa）と試料 30（層位区分IXc）について、野外での層相（色調）や淡桃色であることから、構成鉱物の検討を行った。

試料 28（層位区分IXa）は、120 メッシュと 250 メッシュ試料の観察では火山ガラスが散見されるが含有率が非常に低い。重鉱物も含まれない。試料 30（層位区分IXc）は、120 メッシュと 250 メッシュ試料の観察では斜長石をわずかに、扁平型と中間型の火山ガラスをごくわずかに、軽石あるいは火山ガラスの付着した自形の角閃石をわずかに、斜方輝石をごくわずかに含む。比較試料として分析したSD9003-4 層ブロック試料は、120 メッシュと 250 メッシュ試料の観察では斜長石をわずかに、扁平型と中間型の火山ガラスをごくわずかに、軽石あるいは火山ガラスの付着した自形の角閃石をわずかに含む。

E 考 察

各試料の粒度組成は、野外での層相、色調等から区分された層位区分ごとに差異は小さいがメディアン値、モード値、砂・シルト・粘土含有率に特徴があり、野外での層位区分と整合的な粒度組成を示している。例えば層位区分Xでは、野外観察では全体にやや有機質な粘土質シルトの層相を示すが、X-1 ~ X-4 に細分された層位区分では、特に砂・シルト・粘土含有率に特徴があり層位区分と粒度組成の特徴が整合的である。このことから、野外での層相の特徴による層位区分の有効性を確認する方法として粒度組成の分析は有効である可能性が高い。

また、火山灰層の検討結果について、試料 28（層位区分IXa）は火山ガラスが散在するのみであるため火山灰（火山噴火起源の砕屑物）の含有する層相としての認定は困難である。試料 30（層位区分IXc）は、火山ガラスが上下層相と比較して優位に含まれることから、火山灰（火山噴火起源の砕屑物）の含有する層相としての認定できる。層相からは火山噴火起源の砕屑物を含む洪水の堆積物と推定できる。SD9003-4 層ブロック試料は、中世の溝の底面で部分的に検出したものであり、降下火山灰が溝状の低地部に再堆積したものと見られる。

これらに含まれる火山噴火起源の砕屑物の起源については、火山ガラスの形態や角閃石を含むことから、新潟県の妙高火山あるいは新潟焼山の活動が推定できる。試料 30 は、層位として、縄文時代後期から古墳時代前期の年代を示していることから、妙高火山ではなく新潟焼山の火山活動の初期とされる第 1 グループあるいは第 2 グループの火山活動 [早津 1993]、SD9003-4 層ブロック試料は考古年代との対応から高谷池火山灰層群 b (YK-KGb) [早津 1993] によるものである可能性がある。

引用文献 第VI章 4

早津賢二 1993「新潟焼山火山の歴史時代のマグマ噴火—古記録と噴出物との対応関係—」『地学雑誌』102 611-613.

第七章 ま と め

1 飛鳥時代の土器祭祀

平地建物群の東側から土器を中心とした祭祀遺構を3基検出した。いずれもVIc層上面に置かれていたものが洪水堆積層であるVIb層によって被覆された状況で検出した。祭祀が行われた時期は、出土した須恵器から7世紀初頭ころを想定している。

SX8524では須恵器甕が正位で、SX8526では土師器壺が横位でそれぞれ1点ずつ出土した。後者については、単独での出土でもあり祭祀としての評価は難しいが、周辺に遺構や遺物がまったくないことから日常とは異なる意図をもって置かれたものと解釈した。以下、多数の土器が出土したSX8503について詳述する。

SX8503では手捏ね土器や白玉をともなう15点の土器を検出した。これらの遺物は平面的なまとまりから東側と西側で2群あることがわかる。両群とも土器類は、横位で出土した土師器壺・甕や須恵器高杯を除き、つぶれながらも正位で出土している。いずれも完形ないし完形に近いものであったと推測されるが風化による細片化が著しい。

	土師器			黒色土器		須恵器		手捏ね土器	白玉
	鉢	高杯	壺	杯	高杯	杯身	高杯		
東側	1	1	1		2			4	2
西側	2	1	3	1	1	1	1	4	

第12表 SX8503の出土遺物一覧表

SX8503の東側と西側の検出状況は以下のとおりである。

【東側】 出土遺物：土師器鉢1点・高杯1点・甕1点、黒色土器高杯2点、手捏ね土器4点、白玉2点。
土器配置：手捏ね土器4点が一列に並ぶ。手捏ね土器は3点並べた延長上にもう1点配している。鉢・高杯は手捏ね土器の列と同じ方向に一列に並ぶ。

主軸方位：西偏51°前後。手捏ね土器と杯・高杯の並んでいる方向。

【西側】 出土遺物：土師器高杯2点・壺1点・甕3点、黒色土器杯1点・高杯1点、須恵器杯身1点・高杯1点、手捏ね土器4点。

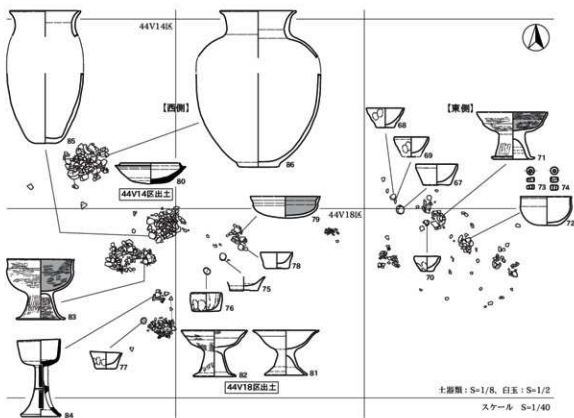
土器配置：手捏ね土器4点が一列に並ぶ。手捏ね土器は3点並べた延長上にもう1点配している。北西側の壺・甕は手捏ね土器の列と同じ方向へ倒れている。

主軸方位：東偏約53°。手捏ね土器が並んでいる方向と壺・甕が倒れている方向。

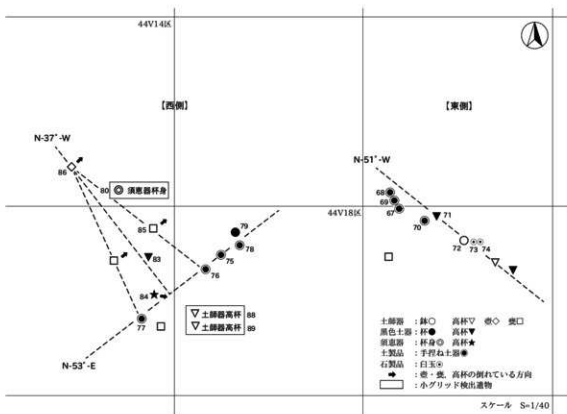
両群とも、当時の地表面であるVIc層上面において祭祀が執り行われたあと、祭祀に用いられた土器は片づけずにそのまま遺棄されたと考えられる。遺棄された土器群は、VIb層によって被覆されるまで風化しながら地表面上にあったと推定される。土器の出土状況を見ると、西側よりも東側の土器のほうが風化が著しいことから、両群は同時ではなく、東側が先行して祭祀を行っている可能性がある。

第41図は、土器が置かれていたと考えられる底部があった場所をもとに模式的に配置状況を示したものである。両群に共通する要素として手捏ね土器4点があり、ともに3点+1点の並びで直線的に配置している。東側では杯・高杯の並ぶ方向が、西側では壺・甕の倒れている方向が手捏ね土器列の方向と一致することから、両群にはそれぞれ意図した方位があったと想定される。

ここでは祭祀の内容を示唆する要素のひとつとしてこの方位を取り上げ、管見ではあるが、ランドスケ-



第 40 図 SX8503 の遺物出土平面図



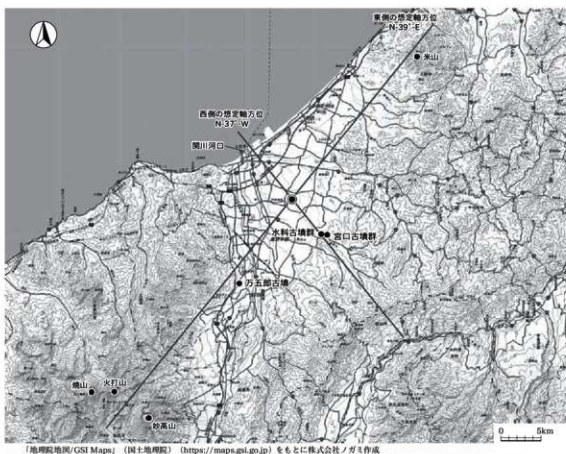
第 41 図 SX8503 の出土遺物配置模式図

ぶ的な観点から現代でもその存在が確認できるものをいくつか提示してみたい(第42図)。前提として、手捏ね土器列に直交するかたちで祭祀の主宰者がいたと仮定する。

東側では、手捏ね土器と杯・高杯を南東・北西方向へ列状に並べており、これを主軸とみると方位は西偏51°前後で、主宰者の正面に想定される軸方位は東偏39°前後となる。主宰者が手捏ね土器列の南西側にいたと仮定すると米山が、北西側にいたとすると頸城三山(妙高山・火打山・焼山)が正面遠方に見えていたことになる。いずれも古くから知られている山で信仰の対象となっている。

西側では、手捏ね土器を南西・北東方向へ直線的に並べており、これを主軸とみると方位は東偏約53°で、主宰者の正面に想定される軸方位は西偏約37°となる。主宰者が手捏ね土器列の南東側にいたと仮定すると約8km先にある関川の河口くらいしか現状では想定できないが、北西側にいたとすると正面方向には宮口古墳群や水科古墳群が存在している。両古墳群は飯田川が高田平野へ流れ出る谷口付近にあり、本遺跡からは南東へ約6km離れた位置にある。ともに古墳時代後期後半から終末期にかけて造営された群集墳〔滝沢・田中2019〕であり、本祭祀遺構の時期とも合致する。

なお、西側の土器の配置をみると、北西側にある土師器壺(86)を頂点として、土師器甕2点(85)をおって手捏ね土器の南西側の2点(76・77)を底辺とする長い二等辺三角形を形成しているようにもみえる(第41図)が、その有意性については不明である。



第42図 SX8503の想定軸方位と周辺の地形図

2 遺跡の形成過程

A 周辺地形と遺跡立地

下割遺跡は、高田平野のほぼ中央、関田山脈に源を発する飯田川左岸に形成された自然堤防上から自然堤防間の低地に立地する。総延長950mにも達する遺跡範囲には、自然堤防上に米岡集落、その外側に水田が形成される。現在と同様の景観は、1597（慶長二）年の『越後国頸城郡絵図』にすでに描かれているが、10回に及ぶ発掘調査の結果、この景観のはじまりは中世後期にまでさかのぼることが明らかになった。

自然堤防の形成時期は縄文時代にまでさかのぼる可能性があるが、その裏付けとなる堂古遺跡の磨製石斧は単独出土であり評価が難しい。自然堤防上で、確実に遺跡が形成されるのは古墳時代以降である。下割遺跡や二反割遺跡では、自然堤防上で古墳時代の遺跡が検出されており、このころに自然堤防の利用が始まったことは確実である。水害リスクを回避するため、周囲より高い土地が利用されたといえる。一方、飛鳥時代・平安時代の遺跡は、自然堤防間の低地に展開しており、埋没している旧地形を復元しながら、遺跡立地を検討する必要がある。

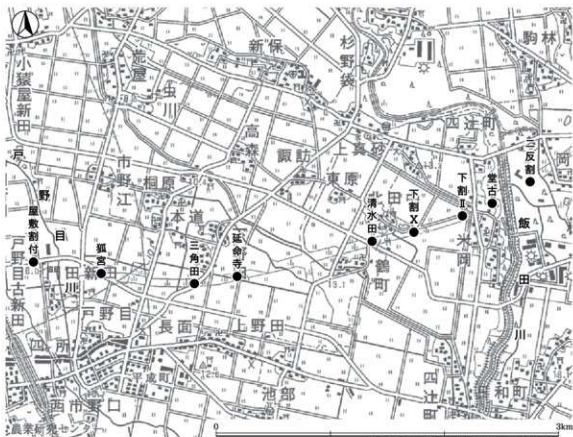
B 遺跡調査からわかる堆積環境

下割遺跡における堆積物は、粘土・シルトを主体とし、中粒砂より粒度の細かな砂を部分的に含む。周辺の地質は洪水堆積物からなり、その間に遺跡が形成されることが明らかになったが、厚さ4mの地層の中に縄文時代後期・古墳時代・飛鳥時代・平安時代・中世の遺跡が累積して発見されたことが特筆される。このことは、沖積平野である高田平野が、沈降と堆積を繰り返して形成された過程を示す可能性がある。

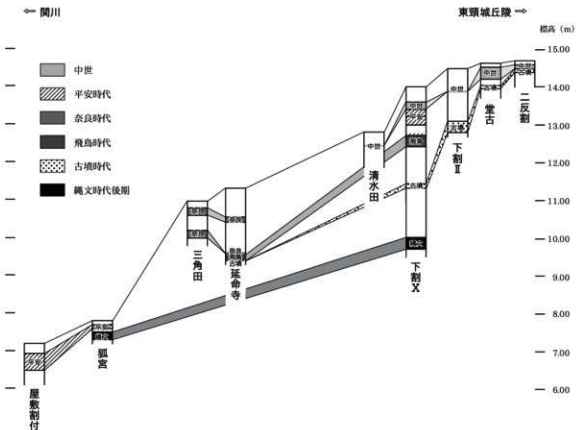
中でも、縄文時代後期前葉（約4,000年前）の遺跡が地下4mという深部で発見されたことは注目され、寺崎裕助[2002a・b]のいう「沖積地埋没型」の遺跡立地といえる。その背景を考えるうえで、西方2.7kmに位置する狐宮遺跡は重要な比較資料となる。狐宮遺跡では縄文時代後期前葉の遺跡が地下0.6mで検出されており、下割遺跡とは対照的な在り方を示す。堆積速度を年平均に単純に置き換えると、下割遺跡で1mm、狐宮遺跡では0.15mmであり、縄文時代後期以降の4,000年間の堆積量が全く異なることがわかる。

産業技術総合研究所[2006]によれば、高田平野東縁断層帯の上下変位速度は約0.9m/1,000年である。遺跡は活断層から3kmほど離れており、この変位速度をそのまま援用することはできないが、沈降の背景のひとつといえるかもしれない。また、縄文時代後期の遺物包含層X層は強くしまっており、圧密沈降も想定できる。これらの要因で沈降した可能性がある一方、平野の中央により近く、より厚い沖積層の上に立地する狐宮遺跡では顕著な沈降が認められない。より大きな沈降量を考えうる狐宮遺跡における状況を踏まえると、堆積量の相違を如何に理解するかが大きな課題といえる。

第43図は、上越三和道路建設に伴い発掘調査した遺跡の深度を示した柱状図である。同道路は、高田平野を横断するため、遺跡の深度を横断的に把握することで、平野の形成過程を知ることができる。下割遺跡と狐宮遺跡を比較すると、現地表面の標高は、狐宮遺跡が約8m、下割遺跡が約14mであり、その差は6mほどである。一方、縄文時代後期前葉の標高は、下割遺跡が約10m、狐宮遺跡が約7.5mで、標高差は2.5mほどしかない。縄文時代後期においては、遺跡間の傾斜が、現在よりも緩やかであったと見られる。縄文時代後期には、現在ほどの高低差はなく、その後の堆積量の相違により、埋没深度の違い



国土地理院発行平成19年「高田東部」1:50,000縮図



第43図 上越三和道路関連調査で発見された遺跡の深度 [加藤 2023]

が生じたと考えられよう。

すなわち、下割遺跡付近においては、縄文時代後期以降により多くの土砂が堆積し、その結果として地下深部に埋没したといえる。遺跡の東側を流れる飯田川を6kmほど遡ると、東頸城丘陵の縁辺に明瞭な扇状地が形成されている。飯田川の上流部に当たる東頸城丘陵は、不動地を捜すことが困難なほど地すべり地が集中することから〔永田¹⁹⁷⁴〕、飯田川への土砂の流入量は多く、雨降りの度に「濁り川」になるといわれる〔太田 2003〕。下流への土砂の供給量がより多い環境にあったことが、深部に埋没した要因と考えられる。一方、狐宮遺跡は、扇状地からより離れていることに加え、東側を流れる戸野目川は東頸城丘陵と直結しておらず、土砂の供給量が少ない。その結果として、遺跡の深度が浅いと考えられることができる〔加藤 2023〕。したがって、両遺跡をめぐる縄文時代後期の深度の相違は、堆積環境の相違がより反映された結果といえる。

また、第43図からは、地形形成と遺跡展開の相関関係を読み取ることもできる。①狐宮遺跡と三角田遺跡の間、②清水田遺跡と下割遺跡Xの間に傾斜変換点が認められるが、そこを境に遺跡の年代に差が認められる。①より東側では飛鳥時代・奈良時代、②より東側では古墳時代・中世の遺跡が特徴的に認められる。堆積の進行により微高地が形成されたことを受けて、各時期に新たな土地利用が始まったことを示している。洪水災害を契機として、生活領域に変化がもたらされたと考えることができよう。

C 遺跡の消長

縄文時代後期

下割遺跡における最初の生活痕跡は、縄文時代後期前葉である。第10次調査では、遺跡の外縁が調査対象であったため遺構が希薄であったが、第9次調査では明確な遺構が検出されており、高田平野における低地利用の開始を示している。遺跡の時期は堀之内2式段階であり、信越国境付近の千曲川・信濃川流域に分布するひんご2式土器が特徴的に出土した。下割遺跡と千曲川流域に所在するひんご遺跡の間には開田山脈が横たわるが、直線距離で25kmしか離れていない。加えて飯田川を遡ると、千曲川流域に通ずる峠道（牧峠など）が存在する。すなわち、千曲川流域との関係が想定されることは、自然地理的に必然といえる。一方、客体的に認められた越後系や北陸系の土器、糸魚川地域で産出する蛇紋岩製磨製石斧やヒスイ製敲石・原石、下越地方以北に産地が想定されるアスファルトの出土は、信州と日本海沿岸の接点に当たる高田平野の地域的特性をよく示している。

縄文時代後期の古環境を復元するためにX層を対象に花粉分析・珪藻分析を行ったが、ほとんど検出されなかった（第Ⅵ章1）。もともと取り込まれた珪藻殻・花粉が少なかったうえ、分解が進行した結果と見られる。好氣的環境下にあったことが想定されるが、木製遺物が出土しなかったことと整合する。すなわち、比較的乾燥した地表である期間が長かったため、有機質遺物が遺存しなかったと考えられる。

後期前葉の遺物包含層X層の上面では、後期後葉の遺物が出土した。X層出土遺物の大半は後期前葉のものであるが、第9次調査では後期中葉の土器も出土しており〔細田 2022〕、X層の堆積期間は後期前葉以降、後期後葉以前といえる。後期後葉の遺物は、後期前葉～中葉の遺物包含層形成直後の土地利用を示しているが、遺物の数量は少なく、出土範囲は局所的であった。第9次調査で後期後葉の遺物は出土しておらず、この時期の土地利用は限定的であったと見られる。

後期後葉の上位は厚い洪水堆積物IX層に覆われており、ここが遺跡形成の重要な画期となる。その後、古墳時代の遺物包含層及び相当層が堆積するまでの間は洪水堆積物からなり、遺跡は認められない。また、

そのうちIXc層(第38・39図・試料30)では、テフラを検出した。火山噴火起源の砕屑物を含む洪水の堆積物に由来すると見られ、新潟焼山の火山活動の初期とされる第1グループまたは第2グループの火山活動〔早津1993〕による可能性が考えられた(第VI章4)。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、市道区ではVIIa層、東区ではIX2層で検出した。いずれの層位も炭化物を多量に含んでおり、上下の層位と比べると極めて特徴的である。第10次調査では、市道区で遺構・遺物とも検出されなかった。相当層について年代測定を行った結果、3～5世紀の年代が得られ(第VI章1)、対応関係が明らかになった。東区では、第2次調査で検出した自然堤防状の起伏を検出した。調査対象範囲は自然堤防の頂部から緩斜面に当たり、低地に向かい堆積物が泥炭質に変質していた。緩斜面部の遺物包含層中からは古墳時代前期後半の遺物が多数出土したが、破片資料のみであった。遺構は、頂部付近のみで土坑3基を検出したが希薄であり、遺跡の縁辺に相当すると見られる。なお、下割遺跡周辺では、古墳時代の遺跡が発見されているが、第2次調査の成果を除けば、小規模な遺跡が点在する状況にある。

市道区・東区とも、古墳時代の層位の上位は洪水堆積物に覆われている。市道区においては、飛鳥時代の遺跡との間に、炭化物を含む層と含まない層が互層をなすVIf～VI m層が堆積する。VIj層の年代測定を行った結果、4～6世紀であり(第VI章1)、上下の年代観と整合する。VIf～VI m層は、炭化物を含む薄層と洪水堆積物が互層をなしており、小規模な洪水が繰り返されたと考えられる。それにより、離水して植物が生育できるような比較的安定した環境となり、生活の場として活用できるようになったと見られる(第VI章1)。この環境変化が、飛鳥時代の遺跡形成の基礎になったといえる。

飛鳥時代

第10次調査における最も注目されるのは、飛鳥時代(7世紀初頭～前半)の調査成果である。飛鳥時代の調査事例は県内でも数少なく、頸城郡衙設置につながる律令体制前夜の頸城平野の状況を知るうえで重要な資料といえる。下割遺跡では、これまでの調査でも飛鳥時代の遺物が質・量ともに相当数出土していたが、遺構を把握できず内容が不明であった〔佐藤2021、細田2022〕。第10次調査の対象範囲は、幅8m、延長127mと狭小なものの、洪水堆積物に被覆されていたため、遺構・遺物の遺存状況が極めて良好であった。遺構は、西側の建物城、東側の祭祀城から構成されることが明らかになったが、土地の使い分けを明確に把握できたことは重要な成果である。

飛鳥時代の遺構検出面は、VIb層上面(第4面)、VIc層上面(第5面)、VIc層下面(第5面)に分かれる。各層位から出土した遺物の時期は7世紀初頭～前半であり、比較的短期間のうちに3面が累積したといえる。各面の間には洪水堆積物を挟んでおり、洪水災害を契機に建物がつくりかえられたことが明らかになった。被災から復興に至る具体像を把握できる貴重な事例といえる。

狭小な調査区において、建物の調査は部分にとどまり、全体像を把握できていないが、いずれも周溝をもつ平地建物である。VIb層上面でSX8522、VIc層上面でSI8502・SI8569・SI8564、VIc層下面でSI8571を検出した。VIb層上面で検出したSX8522は建物の周溝と見られ、これと並ぶSD8515も周溝の可能性が有る。建物はいずれも方形プランで、主軸は東西南北を意識しているが、検出面ごとに建物の軸方位が異なる。軸方位は、時間の経過とともに反時計回りに変化しており、検出面ごとに計画的に建物を構築している(第24図)。また、各時期の建物は、近接するものの重複しておらず、前の時期の建物位置を回避しながら建てられたと見られる。すなわち、前の段階の建物位置を把握していると見られ、各面の時間差が短いことを意味するのであろう。

建物は、大型（SI8502、周溝の外法 13.5m）と小型（SX8522・SI8564・SI8569・SI8571、周溝の外法 5.3～7m）の 2 種類からなる。周溝は、大型が方形基調で環状にめぐりが、北西隅が部分的に浅くなっており、ここに通路が設けられた可能性がある。また、南側が途切れる可能性もあるが、調査区外であるため不明である。小型の周溝は、いずれも東側が開いた「コ」の字状であり、開口部が出入口と見られる。北西からの季節風への対策として、東側に出入口が設置された可能性がある。周溝は、内と外の境界であるとともに、湿気の強い土地において床面を乾燥させる目的で設置されたと見られる。また、SI8502 においては、床面全面に粘土の貼り床を施しているが、これも湿気対策の可能性もある。特に、建物中央付近は灰白色の粘土を円形に貼って仕上げている（図版 78 上段）、生活空間を入念に仕上げていることが分かる。

SI8502・SI8564・SI8569 の床面では焼土範囲を検出した。いずれも強く焼けており、建物内に炉またはカマドが存在したと見られる。建物の床面及び周溝からは灰・瓶・支脚が出土しており、カマドの利用を想定できるが、それを裏付ける痕跡は明瞭でない。SI8502 の東辺で認められた床面の張り出し部分の内側で細長い火床面を検出しており、ここにカマドが設置されたと見られるが、カマド本体は検出されていない。

建物構造の把握に当たっては、周溝と並行する方形プランが検出されることを念頭に調査したが、SI8564・SI8569・SI8571 では明らかな柱穴は検出できなかった。大型建物 SI8502 では、円形の貼り床の周囲をめぐるように小型のピットを検出したが、同時期の建物と比べると異質である。埋土は不明瞭で、貼り床のブロックをピットと認識した可能性もあり、いずれも小規模である。少なくとも主柱穴になり得る柱穴ではない。いずれの建物も、そもそも柱穴を持たない建物である可能性を考える必要がある。

Vic 層上面の建物域東側では、祭祀域を検出した。SX8503 は、古墳時代中期・後期に認められる土器集積遺構【金田 2020】に通じるものであるが、伴った須恵器は TK209 型式であり 7 世紀初頭まで下る。高杯を中心に土器が意図的に配置され（第 40・41 図）、祭祀に使われたとされる手捏ね土器や白玉が伴うことから、土器集積遺構と同様の在り方を示す。また、須恵器の高杯・杯身、内面黒色の高杯・杯を特徴的に伴い、生活に密着した道具から構成される建物域とは異質である。飛鳥時代における同種の遺構は、県内では初例であり、古墳時代の祭祀が、7 世紀初頭まで引き継がれたといえる。このほかにも建物の東側では須恵器座（87）が単独で出土（SX8524）するなど、居住とは異なる空間であった可能性が高い。

SX8503 については、祭祀痕跡が累積せず、祭祀の具体像を把握できる可能性があったため、前節では遺物の配列と軸方向について詳細な検討を行った（第 42 図）。小野本敦 [2018] の研究を参考に、手前に小型土器、奥に大型土器が置かれたと仮定し、祭祀の主宰者の位置と向きを想定すると興味深い状況が見える。SX8503 は東西の 2 か所に細分されるが、東側は頸城三山（妙高山・火打山・焼山）や 6 世紀後半の妙高市万五郎古墳（梨ノ木古墳群 3 号墳）【植木¹⁹⁷⁷】または米山を望み、西側は飯田川上流域に築かれた水科古墳群・宮口古墳群を背後に内水面交通の要衝となる関川河口を望むように見える。偶然の一致である可能性もあるが、遺跡とおむね同時期または若干先行する古墳群、地域におけるランドマークや交通の要衝が軸線上に当たることには留意しておきたい。今後、類型との比較などをつうじて妥当性を検証することが必要となろう。

調査区西端で検出した須恵器大甕（66）の埋設遺構 SX8311 も重要である。大甕は、口縁部に細密な楕円波状文が施され、球胴部の縦横に突帯が貼付される。頸城平野では 7 世紀前半に須恵器生産は開始されておらず、他地域からもたらされた遺物と考えらえる。供給源は定かでないが、つくりが極めて精良であることを踏まえると、遠隔地からもたらされた可能性が高い。関川河口の水門駅から高田平野に入り、

内水面交通を利用して下割遺跡にもたらされたと見ることができよう。容易に入手できない大甕をあえて埋設したことを如何に理解するか課題といえる。水などの液体の貯蔵、酒造などを目的とした施設と想定できるが、覆屋などの施設を検出できておらず、具体像は明らかでない。少なくとも特殊な遺構であることは確かであり、類例との比較検討が望まれる。

なお、大甕の口縁部は破損しているが、ここは平安時代の畑作溝に当たる。口縁部の破損面は、ほかの破損面と比べると明らかに平滑であり、平安時代の耕作によって破損したと考えられる。一方、耕作時に発生した大甕の破片は周辺に残されておらず処分されている。200年の時を超えた行為を、1点の遺物から把握できる稀有な資料といえる。

平安時代

平安時代（9世紀後半）の遺跡は、Va層上面（第2面）とVb層上面（第3面）で検出した（第17図）。これまでの調査では、封緘木簡、多数の墨書土器、転用硯、漆付着の須恵器、灰陶陶器の耳皿、鉄製紡錘車、刷毛など、稀有な遺物が多数出土しているが〔佐藤 2021、細田 2022〕、これに見合う内容の遺構は検出されていなかった。

第10次調査で検出した遺構は、これまでと同様に掘立柱建物・溝・畑作溝から構成され、9世紀後半の遺構と考えられた。各面とも多数の畑作溝が検出されており、調査対象地の広範囲に耕地が広がっていたことがわかる。一方、方形の柱穴をもつ掘立柱建物SB8259は全体像を把握できていないが大型で、村落における一般的な建物とは異なる。また、この建物と平行する溝（第19図）では、完形の須恵器杯・土師器碗が特定の範囲から集中的に出土しており、饗宴に伴う可能性がある。第10次調査で出土した遺物にも、文字関係の資料（円面硯・墨書土器）、漆工房に関する資料（漆パレット）、東頸城の窯跡との関係性をうかがわせる遺物（図版98-189）が見られ、地域における中核的な遺跡である可能性が高いといえる。

また、第2面で検出したSD8075・SD8177では多数の遺物が出土したが、焼け爛れた破損品が多量の炭化物や焼土とともに出土した。また、SD8075では製鉄に関する羽口・が壁の断片や鉄滓、SD8177では把手付長胴瓶（42・43）・突帯付四耳壺（44）などの優品とともに多量の炭化米が含まれた。SD8177から出土した炭化米は塊の状態で出土し、中には粉が付いた穂が束ねられたような状態のものも見られた（第20図）。したがって、炊飯時の失敗で炭化したのではなく、保管時に火災により炭化した可能性がより高い。優品の須恵器が被熱していることも踏まえると、倉が焼失したと考えられる。SD8075・SD8177の埋土には多量の炭化物を含んでおり、火災後の後始末で生じた廃棄物を含む土砂で埋め戻したのであろう。この火災後の整理を最後に、平安時代の遺跡は終焉を迎え、中世に水田が築かれるまでの間、土地利用は認められない。

中世

中世においては、米岡集落の縁辺に当たる東区で集落、低地に当たる市道区で水田を検出した。「越後国頸城郡絵図」に描かれた景観が、中世後期には形成されたと考えられる。また、第6次調査では、中世後期から近世にかけて集落が継続することが明らかになっている。現在の米岡集落は、中世後期に形成された集落を礎にしているといえる。

第10次調査では、中世集落の外縁を調査したため、掘立柱建物や井戸の検出数は少なかった。一方、掘立柱建物や井戸から離れた位置で検出した方形区画溝は注目される。上越市吉川区樋田遺跡に類例があり、宗教的施設など、集落の共有施設の可能性を想定した。方形区画溝の年代は、出土遺物がなく明らかでないが、溝の埋土最下層からテフラを検出している（第VI章4）。中世には、新潟焼山が1361（康安元）

年に噴火しており、そのテフラ（YK-KGb）と見られる。なお、テフラは溝底部に再堆積したものであるが、容易に視認できる量を確認できており、高田平野の村落への影響が大きかったと推察される。

D 遺跡が累積した背景

遺跡周辺の地形は、洪水堆積物により形成されている。すなわち、洪水リスクを抱えながら、遺跡が展開したといえる。大量の上砂を運搬した河川は、妙高山麓や東頸城丘陵から急勾配で下流し、勾配が緩やかになる平野部では大きく蛇行して日本海に向かう。一方、海岸部には潟町砂丘が広がることから河口が関川河口に集中しており、内水氾濫のリスクを高めている。

洪水リスクを抱えながら沖積地を利用した背景には、水田の耕作やその管理における利便性を挙げられる。中世以降は大規模な水田耕作が行われており、自然堤防上に居住域を構えた重要な要因といえる。平安時代以前の水田遺構は検出されていないが、平安時代の炭化米が多量に出土しており、中世以前に水田耕作が始まっていたと見られる。

かつて高田平野に存在した潟湖やそこに接続する河川を使った内水面交通も、沖積地が利用された背景を考えるうえで重要な要素である。砂丘の後背湿地には現在も朝日池・鶴ノ池・天ヶ池・蜘蛛池が残っているが、かつて存在した大潟や浮島潟は、内水面交通において重要な役割を担った。「越後国頸城郡絵図」に描かれた大潟の周囲には、港に関する「ひね津村」・「片津村」・「船津村」の地名が見られる。江戸時代の干拓を経た現在も、港に関する「日根津」・「舟津」・「西湊」の地名が残っている。内水面交通の拠点が潟端に設けられ、人々は舟を使って往来し、物資を運搬したと考えられる。

内水面交通は、関川河口の水門駅を経て、日本海ともつながっていたと見られる。飛鳥時代の大喪や中世の珠洲焼など、重量・体積の大きな物資は、海上交通から内水面交通に接続し、遺跡にもたらされたと考えられる。また、飛鳥時代の遺構から出土した魚骨には、サケ科、スズキ属が含まれており（第Ⅵ章3）、食糧の運搬や生業においても内水面が利用されたとみられる。

以上のように、沖積地の積極的な利用は、内水面の活用と密接にかかわると考えられる。下割遺跡で土地利用が繰り返された背景には、内水面を利用するうえでの利便性があったためといえよう。また、景観の良さも土地利用が繰り返された一因といえるかもしれない。当遺跡は、高田平野においてランドマークとなる頸城三山（妙高山・火打山・焼山）と米山を直線で結んだライン上に当たり、飛鳥時代の祭祀遺構は、これを意識している可能性がある（第42図）。また、平野の中央近くに位置することから、平野の各所を見渡すことができる。このような景観の良さも、遺跡が繰り返し築かれた重要な要素であったといえるかもしれない。

引用・参考文献

- 相沢 央 2004 「第3部 2頸城部への国府の移転」『上越市史 通史編 1自然・原始・古代』上越市
- 相羽重徳 2009 「新潟県における近世骨磁器の諸相」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛幸ほか 2007 「第Ⅱ章 遺跡の位置と環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第171集 狐宮遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀ほか 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第230集 下刈遺跡V』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 市村清隆 2004 「第3部 第6章 第6節 文禄四年検地」『上越市史 通史編 2中世』上越市
- 岩井宏實 1994 『曲物』ものと人間の文化史75 法政大学出版局
- 植木 宏ほか 1977 『新井市の古墳 新潟県新井市古墳群詳細分布調査報告書』新井市教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 貿易陶磁研究会
- 太田一成 2003 「第四章 災害と飢饉」『上越市史 通史編 3近世一』上越市
- 尾崎高宏 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集 下馬場遺跡・細田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 岡本郁栄 1999 「第1節 新潟県の地形概観」『新潟県の考古学』高志書院
- 小野 昭ほか 1988 『新潟県中頸城郡大潟町 丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会
- 小野木敦 2018 「古墳時代の間越峠超えを考える - GISを利用した最適経路と祭祀遺構の分析 -」『新潟考古』第29号 新潟県考古学会
- 春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 春日真実 2019 「第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第1項 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 加藤 学・高階敏昭 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 仲田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 用言寺遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第183集 用言寺遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2023 「沖積地から出土した縄文時代草創期資料 - 上越市狐宮遺跡から出土した尖頭器の再検討 -」『研究紀要』第13号 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内 元 2013 「南三十稲場式土器を再考する」『三面川流域の考古学』第11号 奥三面を考える会
- 金子優子 2002 「奥三面における後期前半の土器様相」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 金田拓也 2020 「祭祀遺構からみた余川中道遺跡」『新潟県考古学会2020年度秋季シンポジウム・第32回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 川添和暁 2015 「縄文時代後晩期の土製垂飾類(玉類)について - 東海地域の事例から -」『研究紀要』第16号 愛知県埋蔵文化財センター
- 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池遺跡・寺道上遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 小池義人^{はか} 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 裏山遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄^{はか} 1984 『新潟県上越市 本長者原慶寺確認調査概要』上越市教育委員会
- 小林圭一 2008 『甕付土器』『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 駒見和夫 1992 『井戸をめぐる祭祀』『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- 坂井秀弥^{はか} 1982 『栗原遺跡 第4次・5次発掘調査概報』新潟県教育委員会・新井市教育委員会
- 坂井秀弥^{はか} 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 斎野裕彦^{はか} 1987 『仙台市文化財調査報告書第98集 富沢一仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書一』宮城県仙台市教育委員会
- 笹澤正史 2002 『3. 上越地方最大の須恵器窯跡群 一未野・日向窯跡群一』『三和村史 自然・考古編』新潟県三和村
- 笹澤正史 2003 『越前遺跡』『上越市史 資料編 2考古』上越市
- 佐藤友子 2021 『下割遺跡(Ⅶ)』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 令和2年度』公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤 慎 2004 『観音平古墳群の再検討』『頸城文化』第52号 上越郷土研究会
- 佐藤 慎 2013 『妙高市埋蔵文化財調査報告書第5集 倉田遺跡』新潟県妙高市教育委員会
- 沢田 敦^{はか} 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 産業技術総合研究所 2006 『高田平野断層帯の活動性および活動履歴調査』『基盤的調査観測対象断層帯の追加・補完調査』成果報告書 No.H17-2 独立行政法人産業技術総合研究所
- 上越市教育委員会 1999 『新潟県上越市上千原地区ほ場整備事業関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』上越市教育委員会
- 白鳥 章 2005 『千葉県内出土の発火具の集成と様相』『千葉県文化財センター研究紀要』24 千葉県文化財センター
- 鈴木徳雄 2018 『縄紋後期前半における土器型式の存立構造 一関東信越地域の「型式」と諸「類型」一』『地域考古学』3号 地域考古学研究会
- 高田平原団体グループ 1962 『高田平原の沖積地について 一高田平原の団体研究・そのIV一』『研究紀要』第7号 新潟大学教育学部高田分校
- 高田平野団体研究グループ 1981 『高田平原の第四系とその形成史 一新潟県の第四系・そのXXIV一』『研究紀要』第25号 新潟大学教育学部高田分校
- 高野武男 2002 『第1章 第2節 1 沖積野の地形』『上越市史 資料編 1自然』上越市
- 高橋 勉 2021 『上越市吉川区の前方後円墳 新発見の仮称阿田古墳群から』『新潟考古』32号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2019 『第4章 第2節 第1項』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 滝沢規朗・田中祐樹 2019 『第4章 古墳時代 第6節 墓制 第1項 墳墓(古墳)の変遷』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 田中祐樹^{はか} 2022 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第291集 六日町藤塚遺跡Ⅰ・坂之上遺跡Ⅰ』公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 鶴巻康志・水澤幸一 2003 『9 至徳寺遺跡(至徳寺館跡・至徳寺跡)』『上越市史叢書 8考古 一中・近世資料一』新潟県上越市
- 寺崎裕助 2002a 『新潟平野の遺跡』『新潟県考古学談話会会報』第24号 新潟県考古学談話会
- 寺崎裕助 2002b 『沖積地における縄文時代遺跡の調査』『新潟考古』第13号 新潟県考古学会
- 戸根与八郎 2003 『第1章 中世 第1節 時代概説』『上越市叢書 8考古 一中・近世資料一』上越市
- 中川晃子 2019 『第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第7項 高田平野』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会

- 永田 聡^{はか} 1974 「新潟県の地すべり分布と地形について」『地すべり』11 (3) 日本地すべり学会
- 中村 浩 1978 「和泉陶器窯出土遺物の時期編年」『陶器田』大阪府教育委員会
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』扶養書房出版
- 西村 歩 1985 「曲物の細部技法 一綴じ方を中心として」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 能登 健 1996 「6・中・近世の農業 [3] 掘上田と掘込田」『日本考古学による日本歴史 一産業 I 狩猟・漁業・農業一』2 雄山閣
- 野村忠司^{はか} 2009 『新潟県上越市 子安遺跡』上越市教育委員会
- 早津賢二 1993 「新潟焼山火山の歴史時代のマグマ噴火 - 古記録と噴出物との対応関係 -」『地学雑誌』102-5 東京地学協会
- 古澤安史 2012a 「新潟県の後期後半の土器について」『第 25 回縄文セミナー縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
- 古澤安史 2012b 「土器から考える縄文時代後期後半の新潟の地域社会」『三河川流域の考古学』第 10 号 奥三面をを考える会
- 細田尚克 2022 「下羽遺跡 (IX)」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 令和 3 年度』公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2019 「第 6 章 2 節 6 項」『新潟県の考古学 III 新潟県考古学会
- 南 博史 1982 「絵巻物による曲物の一考察」『平安博物館研究紀要』第 7 輯 古代学協会
- 宮田進一 1997 「第 4 章 4 節 越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
- 室岡 博 1981 『頸城地方の海と海底海浜遺跡』増補改訂版上越市立総合博物館教養選書 第一篇 上越市立総合博物館
- 室岡 博 1983 「弥生時代の遺跡」『ふるさと大潟町』中頸城郡大潟町
- 室岡 博^{はか} 1990 『種田遺跡第二次発掘調査概報』新潟県中頸城郡吉川町教育委員会
- 室岡 博^{はか} 1991 『種田遺跡第二次発掘調査概報』新潟県中頸城郡吉川町教育委員会
- 安村俊史 2008 『群集積と終末期古墳』清文堂
- 山崎忠良^{はか} 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 120 集 下羽遺跡 I』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良^{はか} 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 134 集 下羽遺跡 II』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良^{はか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 201 集 延命寺遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良 2017 「第 V 章 まとめ B 遺跡の動向」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 269 集 堂古遺跡・下羽遺跡 VI・二反羽遺跡 II』公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 綿田弘実 2018 「第 4 章 総括」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 118 栄村ひんご遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 綿田弘実 2021 「堀之内式並行期の文化様相」『千曲川 - 信濃川流域の先史文化』津南町教育委員会編 ほおずき書籍

遺構観察表

【市道区】

掘立建物物

遺構番号	地味部(時)	グロッド	遺構形状	写真図説	土壁方向	間数	総幅 (m)	総行 (m)	総行 (m)	出土遺物	
SBR021	第3土室	平安 50W-X	16-20-21	64-65-66-74	N-E-W	4間×2間	40	8.1	5.0	出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR186	無	横内形	竪斗状	0.68	0.41	0.30	12.78	PR186-PR201	2.1	土壁、底面
	PR200	無	横内形	竪斗状	0.61	0.65	0.35	12.81	PR200-PR224	1.8	土壁、混合土層、底面
	PR201	無	内形	竪斗状	0.33	0.28	0.06	12.96	PR201-PR231	2.1	土壁、底面
	PR202	有	内形	U字状	0.41	0.37	0.49	12.59	PR202-PR229	1.6	土壁、底面
	PR203	無	横内形	竪斗状	0.36	0.45	0.41	12.77	PR203-PR232	1.4	土壁
	PR221	無	横内形	(U字状)	0.37	0.21	0.17	12.94	PR221-PR230	1.1	土壁、底面
	PR224	無	横内形	台形状	0.16	13.00	0.16	13.00	PR224-PR221	1.2	土壁
	PR226	有	内形	竪斗状	0.46	0.44	0.49	12.63	PR226-PR230	1.9	土壁、底面
	PR228	無	横内形	竪斗状	0.40	0.29	0.19	13.04	PR228-PR248	2.5	土壁
	PR229	有	内形	竪斗状	0.44	0.43	0.57	12.43	PR229-PR186	2.2	土壁、混合土層
	PR230	無	内形	V字状	0.41	0.41	0.38	12.72	PR230-PR201	2.4	土壁、底面
	PR231	有	内形	U字状	0.38	0.34	0.52	13.04	PR231-PR226	1.7	土壁、底面
SBR022	第3土室	平安 50W-X	16-21	64-65-66-67-73	N-E-W	2間×2間	19	7.7	3.8	出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR126	無	内形	U字状	0.88	0.74	0.64	12.45	PR126-PR214	2.4	土壁、混合土層、底面
	PR155	無	内形	竪斗状	0.77	0.74	0.32	12.78	PR155-PR126	2.1	土壁、底面
SBR023	第3土室	平安 50W-X	12-13-19	64-67-68-69	N-E-E	2間×1間	31	10.6		出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR260	有	内形	平円状	0.64	0.59	0.33	12.51	PR260-PR261	0.34	土壁
	PR261	有	隅丸方形	台形状	1.02	0.86	0.17	12.63	PR261-PR262	1.0	土壁
SBR029	第3土室	平安 50W-X	12-13-19	64-67-68-69	N-E-E	2間×1間	31	10.6		出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR262	有	内形	竪斗状	1.08	0.86	0.22	12.62	PR262-PR263	1.3	土壁
	PR263	無	隅丸方形	台形状	1.13	0.88	0.20	12.64	PR263-PR264	1.0	土壁
	PR264	無	隅丸方形	台形状	0.95	0.77	0.18	12.62	PR264-PR265	1.6	土壁
SBR035	第3土室	平安 43V	12-13-19	64-67-68-70	N-E-W	2間×2間	9.3	3.9	2.4	出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR266	無	横内形	平円状	0.28	0.22	0.13	12.70	PR266-PR267	1.8	土壁
	PR267	有	横内形	平円状	0.36	0.28	0.14	12.75	PR267-PR268	1.9	土壁
SBR036	第3土室	平安 43-44V	12-13-19	64-67-70-71	N-E-E	2間×3間	9.2	6.8		出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR272	有	内形	台形状	0.52	0.45	0.29	12.58	PR272-PR273	1.5	土壁
	PR273	有	内形	台形状	0.36	0.34	0.14	12.72	PR273-PR274	1.9	土壁
	PR274	有	内形	竪斗状	0.40	0.37	0.23	12.58	PR274-PR275	2.0	土壁
SBR037	第3土室	平安 44V	12-13-19	64-67-68-71	N-E-W	2間×2間	8	5.6		出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR275	有	横内形	竪斗状	0.24	0.12	0.09	12.75			土壁
	PR276	有	内形	竪斗状	0.68	0.68	0.22	12.69			土壁
SBR038	第3土室	平安 46V-W	12-13-15	71-72	N-E-E	2間×1間	33	3.5-3.8	3.3-3.8	出土遺物	
	柱穴	柱根	平面形	裏面形	長幅 (m)	短幅 (m)	底面積(m ²)	柱径(m)	柱高(m)	出土遺物	
	PR281	無	内形	平円状	0.21	0.20	0.14	12.80	PR281-PR282	1.5	土壁
	PR282	無	内形	V字状	0.35	0.22	0.17	12.73	PR282-PR283	1.3	土壁
	PR283	無	内形	V字状	0.25	0.25	0.16	12.74	PR283-PR284	1.5	土壁
	PR284	無	内形	V字状	0.29	0.25	0.22	12.64	PR284-PR285	1.4	土壁
	PR285	無	横内形	V字状	0.26	0.19	0.13	12.74	PR285-PR293	1.3	土壁
	PR289	無	横内形	V字状	0.21	0.16	0.17	12.76	PR289-PR290	1.8	土壁
	PR290	無	横内形	U字状	0.28	0.22	0.28	12.63	PR290-PR281	1.7	土壁
	PR293	無	内形	平円状	0.21	0.20	0.13	12.74	PR293-PR289	2.1	土壁

観 察 表

平地建物

通称番号	地目	用途	通称面積	写真図面	グリッド	平面形状	屋根形状	階数	長軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	内部 (m)	面積 (㎡)	出工	出工建物		
																北緯	東経
SBS02	第1面	中野	SK	8028	6	55-56	49W18-19	内形	縦4枚	水平	1.70	2.20	11.26	1.1階	土庫・黒色土庫・薬倉庫		
																第3面	平安
	SBS544	第1面	中野	SK	8062	3	42V1-2	横内形	縦状	単層	0.76	0.45	0.05	13.28	7月	土庫	
																	第1面
		第1面	中野	SK	8069	3	42U12-17	横内形	平円状	1.5階	土庫	土庫・黒色土庫					
		第1面	中野	SK	8072	5	56	47V21	横内形	縦状	1.5階	土庫	土庫・黒色土庫				
		第2面	平安	SK	8094	8	42V5-10	(内形)	縦状	1.5階	土庫	土庫					
		第2面	平安	SK	8113	10	46W9-10-14-19	横内形	縦状	単層	0.77	0.52	0.10	13.10	<SKR100	土庫	土庫・黒色土庫
		第2面	平安	SK	8184	9	45V25, 45W5, 46V21, 46W1	(横丸形)	(縦状)	(1.5階)	1.09	0.57	0.22	12.82		土庫・薬倉庫・石製店	半扉は縦状に切られる
		第3面	平安	SK	8129	17	51X8-9-13-14	横内形	縦状	1.5階	0.85	0.72	0.61	12.48		土庫	土庫・黒色土庫・薬倉庫
		第3面	平安	SK	8150	17	51W25-52W21	(内形)	水平	(3.11)	(0.75)	0.18	12.93		土庫	土庫・薬倉庫	
		第3面	平安	SK	8188	14+16+18	49X	(内形)	(縦状)	(1.5階)	(3.49)	(1.18)	(0.19+0.32)	12.90	<P8253	土庫	土庫・黒色土庫・薬倉庫
		第3面	平安	SK	8218	10	50X13	内形	台形	1.5階	0.84	(0.81)	0.20	12.94	<P8225	土庫	土庫・薬倉庫
		第3面	平安	SK	8233	10	50W22-23	(横内形)	(台形)	(1.5階)	1.24	(0.83)	0.16	13.03	<P8207, <SKR243	土庫	土庫・薬倉庫
		第3面	平安	SK	8234	14+16	50W21, 50X1	不整形	(縦4枚)	1.5階	1.74	0.84	0.60	12.48		土庫	土庫・黒色土庫・薬倉庫
第3面	平安	SK	8236	16	50W24	不整形	平円状	1.5階	0.76	0.24	0.18	12.98		土庫	土庫・薬倉庫		

井戸

地目	用途	通称面積	通称面積	写真図面	グリッド	平面形状	屋根形状	階数	サイズ (cm)			高さ (m)	切り合い	屋根方向	出工建物	備考	
									北緯	東経	深さ						
第1面	中野	SK	8028	6	55-56	49W18-19	内形	縦4枚	水平	1.70	2.20	11.26		1.1階	土庫・黒色土庫・薬倉庫		
第3面	平安	SK	8123	17	72	52W25-52E5	横形	縦4枚	1.5階	1.40	1.14	1.26	11.85		1.1階	土庫・薬倉庫・石製店	

土坑

地目	用途	通称面積	通称面積	写真図面	グリッド	平面形状	屋根形状	階数	サイズ (cm)			高さ (m)	切り合い	屋根方向	出工建物	備考	
									北緯	東経	深さ						
第1面	中野	SK	8062	3	57	42V1-2	横内形	縦状	単層	0.76	0.45	0.05	13.28	7月	土庫		
第1面	中野	SK	8066	3	56	42V9	内形	縦状	1.5階	0.82	0.74	0.14	13.24		土庫	土庫・黒色土庫	
第1面	中野	SK	8069	3		42U12-17	横内形	平円状	1.5階	1.20	0.98	0.24	13.08	>2.80H1	N9°W	土庫	土庫・黒色土庫
第1面	中野	SK	8072	5	56	47V21	横内形	縦状	1.5階	0.66	0.48	0.13	13.28	<SKR072	N30°W	土庫	土庫・黒色土庫
第2面	平安	SK	8094	8		42V5-10	(内形)	縦状	1.5階	(0.97)	(0.89)	0.24	13.06			土庫	土庫
第2面	平安	SK	8113	10		46W9-10-14-19	横内形	縦状	単層	0.77	(0.52)	0.10	13.10	<SKR100		土庫	土庫・黒色土庫
第2面	平安	SK	8184	9		45V25, 45W5, 46V21, 46W1	(横丸形)	(縦状)	(1.5階)	1.09	0.57	0.22	12.82			土庫	土庫・薬倉庫・石製店
第3面	平安	SK	8129	17	74	51X8-9-13-14	横内形	縦状	1.5階	0.85	0.72	0.61	12.48			土庫	土庫・黒色土庫・薬倉庫
第3面	平安	SK	8150	17		51W25-52W21	(内形)	水平	(3.11)	(0.75)	0.18	12.93			土庫	土庫・薬倉庫	
第3面	平安	SK	8188	14+16+18		49X	(内形)	(縦状)	(1.5階)	(3.49)	(1.18)	(0.19+0.32)	12.90	<P8253	土庫	土庫・黒色土庫・薬倉庫	
第3面	平安	SK	8218	10		50X13	内形	台形	1.5階	0.84	(0.81)	0.20	12.94	<P8225	土庫	土庫・薬倉庫	
第3面	平安	SK	8233	10		50W22-23	(横内形)	(台形)	(1.5階)	1.24	(0.83)	0.16	13.03	<P8207, <SKR243	土庫	土庫・薬倉庫	
第3面	平安	SK	8234	14+16	74	50W21, 50X1	不整形	(縦4枚)	1.5階	1.74	0.84	0.60	12.48			土庫	土庫・黒色土庫・薬倉庫
第3面	平安	SK	8236	16		50W24	不整形	平円状	1.5階	0.76	0.24	0.18	12.98			土庫	土庫・薬倉庫

柱穴・ビット(1)

掘削 順位	時期	掘削 番号	掘削 深さ	写真 掲載	グリップ	平面形	断面形	経路分類	サイズ (mm)		掘削高さ (m)	切り欠き名称	出土遺物	備考
									長さ	幅	深さ			
第1面	中野	P 8042 6			49W19 - 20	円形	扇4枚	柱状	0.26	0.24	0.26	13.12		
第1面	中野	P 8048 6			49X10	円形	扇4枚	柱状	0.24	0.21	0.30	13.27		土層部・底土部
第1面	中野	P 8049 6			49X5	円形	円筒状	傘形	0.25	0.21	0.10	13.47		
第1面	中野	P 8050 6			49W24	円形	扇4枚	柱状	0.27	0.22	0.42	13.08		土層部
第2面	平安	P 8098 9・10			46V17	楕円形			0.10	0.04	0.22	12.98		柱状 柱状
第2面	平安	P 8099 9・10			46V22	楕円形	V字状	(柱状)	0.28	0.18	0.27	13.92		
第2面	平安	P 8175 16			45V22	円形	扇状	レンズ状	0.28	0.22	0.10	13.10		
第2面	平安	P 8176 9			45V23 (楕円形)	楕円	プロック状	傘状	0.31	0.30	0.30	12.91	<SXR210>	土層部
第3面	平安	P 8125 17	74		51X9	円形	U字状	水平	0.44	0.36	0.43	12.62		土層部
第3面	平安	P 8134 17			52X6	円形	扇4枚	水平 レンズ	0.35	0.30	0.46	12.84		土層部・底土部
第3面	平安	P 8143 17			51X13	円形	扇4枚	柱状	0.26	0.22	0.24	12.86		
第3面	平安	P 8144 16・17			51X13	円形	扇4枚	レンズ状	0.21	0.19	0.12	12.99		黒色土層
第3面	平安	P 8145 17			51X9	円形	U字状	レンズ状	0.20	0.16	0.20	12.91		
第3面	平安	P 8146 16・17			51X8	楕円形	円筒状	扇状	0.21	0.18	0.11	13.00		
第3面	平安	P 8147 16・17	75		51X7-12	円形	扇4枚	レンズ状	0.64	0.50	0.50	12.60	<PR041>	土層部・底土部
第3面	平安	P 8158 16			50X15	円形	扇筒状	柱状	0.34	0.24	0.51	12.63		土層部・黒色土層 ・底土部
第3面	平安	P 8161 16・17			51X7-12 (円形)	(扇筒状)	傘状	水平	0.54	0.10	0.59	12.73	<PR047>	土層部
第3面	平安	P 8178 17			51X10	円形	V字状	レンズ状	0.24	0.19	0.16	12.92		
第3面	平安	P 8179 16・17			51X3-8	円形	円筒状	扇状	0.54	0.43	0.10	12.98	<SXR31>	土層部
第3面	平安	P 8182 14			48W18 - 23	(楕円形)	(円筒状)	傘形	(0.65)	(0.40)	0.15	12.99	<SDR105> <SDR164>	土層部・黒色土層
第3面	平安	P 8204 16	75		50X7	円形	U字状	水平	0.27	0.25	0.38	12.82	<PR025>	
第3面	平安	P 8205 14・16			49W24・25, 49X4・5	楕円形	扇4枚	柱状	0.53	0.44	0.72	12.38		土層部・底土部 柱状あり
第3面	平安	P 8208 16・18			49X22, 50X2	円形	扇筒状	水平	0.45	0.34	0.30	12.86	<PR248>	土層部・底土部・ 瓦片陶器
第3面	平安	P 8209 16			50X10 (U字)	円形	U字状	レンズ状	0.18	0.17	0.21	12.89		
第3面	平安	P 8210 14・16			50W21	円形	円筒状	プロック状	0.24	0.18	0.34	12.86	<SDR243>	土層部
第3面	平安	P 8211 16			50X10	円形	扇4枚	柱状	0.36	0.34	0.34	12.68		
第3面	平安	P 8212 16			51X6-11	円形	扇4枚	レンズ状	0.52	0.48	0.41	12.70		土層部・底土部
第3面	平安	P 8213 16			50X15	円形	円筒状	傘形	0.28	0.22	0.09	13.46		土層部
第3面	平安	P 8216 16	75		50X8-9	楕円形	扇筒状	扇状	0.61	0.50	0.29	12.78		土層部・底土部
第3面	平安	P 8216 16・17			51X6	円形	円筒状	水平	0.22	0.19	0.18	12.92		
第3面	平安	P 8217 16・17			51X8	円形	扇4枚	レンズ状	0.23	0.20	0.11	12.93		
第3面	平安	P 8219 16			50X13 (円形)	(円形)	扇状	水平	0.38	(0.19)	0.06	12.74		
第3面	平安	P 8220 16・17			51X7	楕円形	V字状	レンズ状	0.54	0.31	0.37	12.80		
第3面	平安	P 8223 14・16			50W21	楕円形	U字状	柱状	0.20	0.13	0.21	13.08	<SXR218> <PR0222>	土層部
第3面	平安	P 8225 16			50X8-13	円形	V字状	レンズ状	0.49	(0.31)	0.29	12.88		
第3面	平安	P 8227 16			50X6	円形	円筒状	傘形	0.27	0.22	0.06	13.18		土層部
第3面	平安	P 8232 14・16			50X6	楕円形	扇状	傘形	0.50	0.39	0.08	13.11		土層部
第3面	平安	P 8233 16			50X7-8	楕円形	扇筒状	レンズ状	0.40	(0.31)	0.22	13.01	<PR204>,<PR221>	
第3面	平安	P 8240 16			50X9	楕円形	V字状	水平	0.31	0.26	0.28	12.91		土層部・底土部
第3面	平安	P 8241 16			50X14	円形	円筒状	レンズ状	0.48	0.45	0.33	12.83		
第3面	平安	P 8242 16			50X14	円形	U字状	柱状	0.24	0.24	0.21	12.95		
第3面	平安	P 8244 14・16	75		50W21	円形	U字状	柱状	0.44	0.43	0.64	12.20		土層部
第3面	平安	P 8245 14・16			49W23・24, 49X3-4	楕円方形	扇4枚	柱状	0.60	0.35	0.54	12.64		土層部・底土部
第3面	平安	P 8250 17			51X10	円形	円筒状	傘形	0.39	0.36	0.19	12.94		
第3面	平安	P 8253 14・16			49W19-20	円形	U字状	水平	0.38	0.33	0.38	12.62	<SXR188>	底土部
第3面	平安	P 8254 14・16			49W20, 50W16	円形	V字状	柱状	0.55	0.46	0.27	12.64		土層部・底土部
第3面	平安	P 8256 14・16			49X2	円形	円筒状	レンズ状	0.36	0.35	0.15	12.80		
第3面	平安	P 8257 14・16			49W22	楕円形	V字状	扇状	0.28	0.18	0.14	12.79		
第3面	平安	P 8258 12			43V12	楕円形	円筒状	傘形	0.47	0.38	0.09	12.73		
第3面	平安	P 8279 12-13			45W3, 46V1	楕円形	扇状	レンズ状	0.80	0.55	0.13	12.80		土層部・底土部
第3面	平安	P 8287 12-13			43V14	楕円形	V字状	柱状	0.44	0.34	0.30	12.68		
第3面	平安	P 8288 12			46W4	楕円形	(円筒状)	傘形	0.26	0.19	0.08	12.86		
第3面	平安	P 8291 12			46V21	円形	扇状	傘形	0.16	0.14	0.06	12.86		
第3面	平安	P 8292 12			46W2	円形	扇筒状	柱状	0.22	0.18	0.10	12.82		
第3面	平安	P 8294 12	75		46V22	円形	V字状	傘形	0.26	0.23	0.27	12.60		
第3面	平安	P 8295 14・16			49W23・24	楕円形	扇状	プロック状	0.25	0.19	0.26	12.70		
第3面	平安	P 8296 14・16			49W24・25	円形	V字状	柱状	0.27	0.23	0.10	12.81		
第3面	平安	P 8297 14・16			49W20-25	楕円形	扇状	柱状	0.46	0.35	0.09	12.83		
第3面	平安	P 8298 14・16			49W20	円形	V字状	レンズ状	0.17	0.16	0.14	12.82		
第3面	平安	P 8299 12			45V22-23	楕円形	扇状	傘形	0.69	0.54	0.09	12.91		
第3面	平安	P 8301 12-13			45V22-23	楕円形	円筒状	柱状	0.88	0.62	0.36	12.62		土層部
第3面	平安	P 8303 12			45V21	楕円形	円筒状	傘形	0.22	0.18	0.14	12.85		
第3面	平安	P 8304 12-13			45V12-17	楕円方形	扇状	柱状	0.95	0.83	0.36	12.62		土層部
第3面	平安	P 8309 17	75		52X3	円形	U字状	水平 レンズ	0.27	0.25	0.47	12.29		
第3面	平安	P 8310 16・17			51X8	楕円形	扇4枚	柱状	0.36	0.26	0.31	12.54		土層部
第4面	飛鳥	P 8501 23			52X4・5	楕円形	扇状	傘形	0.40	0.33	0.03	12.63		
第4面	飛鳥	P 8504 23			51X9	円形	扇状	扇状	0.23	0.22	0.06	12.78		
第4面	飛鳥	P 8505 23			52X6	円形	扇4枚	(柱状)	0.25	0.22	0.48	12.32		
第4面	飛鳥	P 8506 23			51X4	楕円形	円筒状	傘形	0.59	0.22	0.16	12.26		土層部
第4面	飛鳥	P 8507 23			52X1	円形	円筒状	傘形	0.19	0.19	0.09	12.27		
第4面	飛鳥	P 8508 23			52X2-7	楕円形	扇4枚	柱状	0.47	0.37	0.38	12.37		土層部・底土部
第4面	飛鳥	P 8509 23			52X2	円形	扇4枚	扇状	0.33	0.29	0.18	12.6		土層部

観察表

柱・ビット(2)

階出 層位	時期	遺構の 種類	番号	遺構 形状	写真 図説	グリッド	平面形	断面形	埋積分類	サイズ (cm)			底面傾角 (%)	切り欠き 深さ	土壌・埋 入土	備考	
										長	幅	厚さ					
第4面	縄文	P	8510	23		51X10-15	楕円形	円筒状	柱状	0(5.1)	0.35	0.34	12.6	>P8511			
第4面	縄文	P	8511	23		51X10	楕円形	円筒状	柱状	0.5	0.39	0.5	12.5	>P8540, >P8510	土壌層・底土層		
第4面	縄文	P	8512	23		52W21, 52X1	楕円形	筒状	壱脚状	壱脚	0.4	0.20	0.23	12.55		土壌層	
第4面	縄文	P	8513	23		51X5	円形	扁円状	柱状	0.37	0.31	0.48	12.3	>P8514			
第4面	縄文	P	8514	23		51X5	(楕円形)	扁円状	柱状	0.33	0.22	0.28	12.2	>P8513			
第4面	縄文	P	8517	23		51X20	楕円形	扁円状	柱状	0(4.2)	0.25	0.38	12.44				
第4面	縄文	P	8518	23		51X18	楕円形	U字状	筒状	0.34	0.27	0.26	12.56				
第4面	縄文	P	8519	24・28		47W5	楕円形	扁円状	筒状	0.37	0.28	0.23	12.53			SD8552内	
第4面	縄文	P	8521	22		50X4	円形	筒状	柱状	0.41	0.36	0.33	12.49			褐色土層	
第4面	縄文	P	8525	22		50X14	楕円形	V字状	壱脚	0.30	0.18	0.21	12.63				
第4面	縄文	P	8527	22		50W23・24		扁円状	柱状			0.34	12.5			土壌層	
第4面	縄文	P	8528	22		50X3	円形	筒状	壱脚	0.29	0.28	0.16	12.65				
第4面	縄文	P	8531	22		49W18	円形	扁円状	柱状	0.36	0.35	0.32	12.53				
第4面	縄文	P	8532	22		50X4	楕円形	円筒状	筒状	0.61	0.27	0.33	12.5				
第4面	縄文	P	8536	22		50W21・22	楕円形	扁円状	筒状	0.4	0.25	0.33	12.51				
第4面	縄文	P	8537	22		50W16	円形	円筒状	柱状	0.53	0(5.0)	0.26	12.76			土壌層	
第4面	縄文	P	8538	22		50W11・16	楕円形	(円筒状)	柱状	0(5.2)	0.41	0.3	12.64			土壌層・底土層	
第4面	縄文	P	8540	23		51X10	楕円形	(扁円状)	壱脚	0.19	0.13	0.43	12.38	>P8511			
第4面	縄文	P	8547	24・28		47W4	円形	筒状	壱脚	0.18	0.1	0.1	12.7			SD8552内	
第4面	縄文	P	8548	22		50X1	円形	扁円状	筒状	0.18	0.16	0.1	12.74				
第4面	縄文	P	8549	22		49W17	楕円形	円筒状	柱状	0.44	0.39	0.31	12.57				
第4面	縄文	P	8557	22		51X15	(楕円形)	U字状	筒状	0.32	0(2.0)	0.34	12.42	>SX0522	土壌層		
第5面	縄文	P	8516	24		44V9	楕円形	V字状	筒状	0.32	0.25	0.18	12.6				
第5面	縄文	P	8533	24		45W5	円形	円筒状	壱脚	0.25	0.23	0.1	12.62				
第5面	縄文	P	8534	24		45W5	楕円形	円筒状	壱脚	0.27	0.22	0.14	12.58				
第5面	縄文	P	8535	24		45W5	円形	円筒状	壱脚	0.21	0.20	0.12	12.6				
第5面	縄文	P	8555	24・28		47W7	円形	V字状	ブロック状	0.35	0.31	0.29	12.36				
第5面	縄文	P	8570	23		49W17	楕円形	円筒状	壱脚	0.36	0.31	0.1	12.2				
第5面	縄文	P	8572	25		49W11・12	楕円形	筒状	壱脚	0.36	0.25	0.07	12.34				
第5面	縄文	P	8573	25		49W16	円形	円筒状	壱脚	0.21	0.20	0.17	12.26				
第6面	縄文 後期 遺構	P	8801	30・31	85	51X7	楕円形	円筒状	レンズ状	0.28	0.22	0.14	9.67			縄文土層	
第6面	縄文 後期 遺構	P	8806	30・31	85・86	53W7・8	円形	V字状	レンズ状	0.57	0.54	0.29	9.46			縄文土層	
第6面	縄文 後期 遺構	P	8807	30・31	86	50X15	円形	扁円状	壱脚	0.44	0.38	0.15	9.51			縄文土層	
第6面	縄文 後期 遺構	P	8808	30・31	86	51X11	円形	V字状	壱脚	0.22	0.22	0.2	9.4			縄文土層	

溝(1)

階出 層位	時期	遺構の 種類	番号	遺構 形状	写真 図説	グリッド	平面形	断面形	埋積分類	サイズ (cm)			底面傾角 (%)	切り欠き 深さ	土壌・埋 入土	備考
										長	幅	深さ				
第1面	中世	SD	8023	7	56	52W, 53W	直線	溝状	壱脚	9.10	1.40	0.08	13.34	N-51' W	底土層	
第1面	中世	SD	8024	7	56	52W, 53W	直線	溝状	壱脚	9.80	1.30	0.10	13.28	N-52' W	土壌層・底土層	
第1面	中世	SD	8026	6	56	60, 49W, 49X	直線	溝状	ブロック状	6.90	0.70	0.10	13.43	N-56' W	土壌層・底土層	
第1面	中世	SD	8027	6	56	49W21	直線	溝状	壱脚	2.00	0.18	0.04	13.46	N-29' W		
第1面	中世	SD	8029	6	56	49W	直線	溝状	壱脚	3.77	1.06	0.08	13.42	N-13' W		
第1面	中世	SD	8031	6	56	50W, 50X	直線	溝状	壱脚	5.35	0.34	0.04	13.46	N-2' E		
第1面	中世	SD	8032	8	56	50W, 50X	直線	溝状	壱脚	5.30	0.30	0.04	13.47	N-1' W		
第1面	中世	SD	8033	6	56	50W, 50X	直線	溝状	壱脚	6.80	0.54	0.08	13.36	N-15' W		
第1面	中世	SD	8035	5・6	57	51X13・17	直線	溝状	壱脚	2.44	0.36	0.04	13.44	N-54' W		
第1面	中世	SD	8036	5・6	57	51X2・7	直線	溝状	壱脚	3.20	0.30	0.005	13.4	>22表10	N-22' E	
第1面	中世	SD	8037	5・6	57	51X6	直線	溝状	壱脚	1.62	0.24	0.03	13.46	>22表15	N-22' E	
第1面	中世	SD	8038	5・6	56	50W, 50X	直線	溝状	壱脚	3.80	0.52	0.10	13.4	N-3' E		
第1面	中世	SD	8041	6	57	49W25	直線	溝状	レンズ状	0.76	0.27	0.20	13.28	N-13' E		
第1面	中世	SD	8064	3	57	42U21	直線	溝状	壱脚	1.76	0.28	0.06	13.28	>22表10	N-0' E	土壌層・褐色土層
第1面	中世	SD	8065	3	57	42U21	直線	溝状	壱脚	0.75	0.27	0.05	13.29	>22表10	N-8' W	土壌層
第1面	中世	SD	8070	3	57	42U21・22	直線	溝状	ブロック状	3.66	0.56	0.09	13.23	>22表11	N-80' W	土壌層・褐色土層・底土層
第1面	中世	SD	8071	5	57	47W	直線	溝状	壱脚	3.80	0.86	0.06	13.38	>横野 8078, 8079	N-1' E	土壌層
第1面	中世	SD	8072	5	57	47W, 47V	直線	溝状	壱脚	5.90	0.36	0.06	13.33	>SK8073	N-13' W	土壌層
第1面	中世	SD	8074	4		45W4	直線	溝状	レンズ状	2.00	0.34	0.07	13.24	N-29' W	土壌層・底土層	
第1面	中世	SD	8080	4		44V17・18	直線	溝状	壱脚	3.10	0.40	0.10	13.18	>22表15	N-66' W	土壌層
第1面	中世	SD	8085	4		44V15	直線	溝状	壱脚	1.80	0.25	0.04	13.21	>22表17	N-79' W	土壌層・褐色土層
第1面	中世	SD	8086	4		44V14・15	直線	溝状	壱脚	0.80	0.28	0.06	13.16	>22表17	N-80' W	土壌層
第1面	中世	SD	8090	4		44V, 45V	直線	溝状	壱脚	11.00	0.66	0.07	13.22	>22表18	N-85' W	土壌層・底土層
第1面	中世	SD	8093	5		47W, 48V	直線	溝状	レンズ状	7.70	0.70	0.20	13.09	N-44' W		
第2面	平安	SD	8025	10	60	49W・X	直線状	溝状	ブロック状	(6.87)	1.56	0.46	12.96	0.68	N-1' E	土壌層・褐色土層・底土層・埋入土
第2面	平安	SD	8051	8		41U15, 42U11	直線状	(円筒状)	壱脚	(1.54)	(0.28)	(0.07)	(13.26)		N-84' E	土壌層・底土層
第2面	平安	SD	8052	8		41U15, 42U11	直線状	-	-	(1.34)	0.22	-	-		N-81' E	
第2面	平安	SD	8053	8	60	41・43U	直線状	筒状	レンズ状	(4.14)	0.25	0.17	13.14		N-83' E	土壌層・褐色土層・底土層
第2面	平安	SD	8054	8	60	41U20, 42U16	直線状	-	-	(2.11)	0.24	-	-	>SD8055	N-75' E	土壌層・底土層
第2面	平安	SD	8055	8	60	41U20, 42U11・17	直線状	溝状	筒状	(4.89)	0.33	0.12	13.24	>SD8054	N-85' E	土壌層・褐色土層・底土層

溝 (2)

線位 標位	時期	溝別	番号	連続区画	写真区画	グッド	平面形	断面形	増設分加	サイズ (mm)	底面積高 (cm)	切り欠き 深さ	1層方向 幅	出土遺物	備考	
第2面	平安	SD	8056 8			41-43U	直線状	板状	単層	(5.37, 0.29, 0.07)	13.28		N84 E	土層跡、赤色土層		
第2面	平安	SD	8057 8			41U25	直線状	板状	単層	(1.21, 0.14, -)	-		N80 W	土層跡、赤色土層		
第2面	平安	SD	8058 8			41U24-25, 42U21	直線状	板状	単層	(2.55, 0.17, 0.04)	13.32	<SD8059	N80 E	土層跡		
第2面	平安	SD	8059 8			41U24-25, 42U21	直線状	板状	単層	(2.62, 0.24, 0.03)	13.34	>SD8058	N85 E	土層跡		
第2面	平安	SD	8060 8			41U24-25, 42U21	直線状	板状	単層	(3.82, 0.31, 0.07)	13.30	<SD8061	N88 W	土層跡、灰色土層		
第2面	平安	SD	8061 8			41-42U, 41-42V	直線状	板状	レンズ状	(3.67, 0.34, 0.08)	13.30	>SD8060	N87 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第2面	平安	SD	8063 8	60		41V25, 42V1	直線状	板状	レンズ状	(2.98, 0.19, 0.05)	13.26		N84 E	土層跡、赤色土層		
第2面	平安	SD	8075 8-9	60		43-44V	直線状	平円状～板状	単層～レンズ状	(13.65, 0.82)	0.28～0.46	12.64		N86 E	土層跡、赤色土層、灰色土層	
第2面	平安	SD	8076 8	60-61		43V11-12, 13-14	直線状	溝状	単層～レンズ状	(6.52, 0.93)	0.18～0.17	13.10	<SD8096	N85 E	土層跡、赤色土層、灰色土層	
第2面	平安	SD	8082 8-9, 11	59-61, 62-73		43-44-45V	直線状	溝状～板状	単層～レンズ状	(31.94, 0.44)	0.98～0.54	12.72	<SD8095	N85 E	土層跡、赤色土層、灰色土層	
第2面	平安	SD	8083 8			43V15-20, 44V11-16	直線状	板状	レンズ状	(1.59, 0.47, 0.19)	13.11		N14 E	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第2面	平安	SD	8084 8-9	62		44V11-12, 15-17	直線状	平円状	レンズ状	(1.81, 0.73, 0.44)	12.84		N6 E	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第2面	平安	SD	8091 8			41V4-5, 42V1	直線状	-	-	(2.30, 0.36, -)	-	-	N85 E	土層跡		
第2面	平安	SD	8095 8	61-62		42V8-9, 10, 43V6	直線状	平円状	単層	(5.46, 0.21)	0.98～0.10	13.20	>SD8082	N87 E	土層跡、赤色土層、灰色土層	
第2面	平安	SD	8096 8	60		43V13	直線状	板状	単層	(0.50, 0.38, 0.12)	13.11	>SD8076	N81 E	土層跡		
第2面	平安	SD	8109 9	73		45V20, 46V16-17	直線状	V字状	単層	(3.73, 0.22, 0.15)	13.07	>SD8082	N82 E	土層跡、灰色土層		
第2面	平安	SD	8110 9	73		43V20, 46V16	直線状	台形状	水平	(3.48, 0.17, 0.18)	13.04		N87 W	土層跡		
第2面	平安	SD	8111 9			45V17-24, 25	直線状	台形状	水平	7.25, 0.35, 0.22	12.97		N80 E	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第2面	平安	SD	8112 9			45V22-23, 43V2-3, 4	直線状	平円状	レンズ状	3.74, 0.30, 0.18	13.03		N75 E	土層跡、灰色土層		
第2面	平安	SD	8114 10			46V4-15, 47V11	直線状	板状	単層	(3.73, 0.31, 0.04)	13.14	<SK8113	N87 E	土層跡、灰色土層		
第2面	平安	SD	8172 9-10, 11	62-63		46V-W	直線状	板状	単層～水平	6.59, 0.62, 0.18	13.03	<SK8100	N81 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第2面	平安	SD	8187 9-10	63		46V-W	直線状	-	-	6.74, 0.24, -	-	-	<SK8100	N4 W	土層跡	
第3面	平安	SD	8108 17	73		51X5, 52X1-6, 11	直線状	板状	単層	(4.59, 1.02, 0.05)	13.01		N12 E	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8115 17-18	73		52W12-13	直線状	台形状	単層	(2.23, 0.16, 0.12)	12.98		N66 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8116 17-18	73		52W12-13, 17	直線状	平円状	単層	(2.62, 0.26, 0.14)	12.96		N65 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8117 17-18			52W	直線状	平円状	単層	(5.47, 0.18, 0.15)	12.94		N78 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第3面	平安	SD	8118 17-18			52W17-18, 19	直線状	平円状	単層	2.63, 0.17, 0.10	13.00		N75 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8119 17-18			52W	直線状	溝状～平円状	単層	(8.09, 0.13)	0.10～0.21	12.89		N71 W	土層跡、灰色土層	
第3面	平安	SD	8120 17-18	73		52W18-19, 23	直線状	板状	単層	2.26, 0.27, 0.10	12.97		N70 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8121 17-18	73		52W19-23, 24	直線状	平円状	単層	1.81, 0.26, 0.13	12.95		N74 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8122 17-18			52W16-17	直線状	平円状	単層	(3.95, 0.18, 0.09)	13.12		N83 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第3面	平安	SD	8124 17-18			51W, 52W	直線状	平円状	単層	(5.03, 0.39, 0.15)	13.06		N77 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第3面	平安	SD	8127 16-17, 18			51X1-12, 13-16	直線状	板状	単層	(4.34, 0.17, 0.05)	13.10		N71 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8128 16-17, 18			51X16-17, 18	直線状	板状	単層	(3.08, 0.24, 0.07)	13.07		N76 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8130 17-18			52X1-2	直線状	平円状	単層	1.24, 0.10, 0.06	13.04		N86 E	土層跡		
第3面	平安	SD	8131 17-18			51X4-5	直線状	平円状	単層	1.79, 0.12, 0.05	13.04		N77 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8132 17-18			51, 52W, 52V	直線状	板状	単層	(8.01, 0.60, 0.14)	13.00		N76 E	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第3面	平安	SD	8133 17-18	73		52X2-7, 8	直線状	板状	単層	(2.24, 0.26, 0.02)	13.08		N77 E	土層跡		
第3面	平安	SD	8135 17-18			53W12-13	直線状	台形状	単層	(2.16, 0.14, 0.08)	12.95		N73 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8136 17-18			53W12-13	直線状	平円状	単層	(2.49, 0.28, 0.12)	12.91		N83 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8137 17-18			53W12-13, 17	直線状	台形状	単層	(3.88, 0.23, 0.08)	12.94		N83 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8138 17-18			53W9-10, 53W6	直線状	平円状	単層	(3.90, 0.33, 0.16)	12.90		N75 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8139 17-18	73		53W9-10, 53W6	直線状	平円状	単層	(5.16, 0.29, 0.16)	12.90		N79 W	土層跡、赤色土層		
第3面	平安	SD	8140 17-18			52-53W	直線状	台形状	単層	7.49, 0.22, 0.12	12.96		N72 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8141 17-18			52-53W	直線状	平円状	単層	7.02, 0.20, 0.11	12.97		N75 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8142 17			52W5-10	直線状	板状	単層	(6.63, 0.21, 0.04)	12.96		N53 E	土層跡		
第3面	平安	SD	8148 17-18			52W5, 53W1	直線状	平円状	単層	(2.61, 0.21, 0.10)	12.96		N74 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8149 17-18			52-53W	直線状	台形状	単層	5.28, 0.57, 0.16	12.94		N73 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8152 16-17, 18			51X3-4, 5-6, 7	直線状	板状	単層	(7.04, 0.26)	0.04～0.11	12.97	<SK8151, SK8152	N64 W	土層跡、赤色土層、灰色土層	
第3面	平安	SD	8153 17-18			51X8-9, 10	直線状	板状	単層	(3.88, 0.27, 0.04)	13.06	<SK8153	N81 W	土層跡		
第3面	平安	SD	8154 17	73		51X18	直線状	台形状	レンズ状	(1.75, 0.26, 0.08)	12.93	>PH155	N81 E	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8156 16-17			50X0, 51X1-2, 3	直線状	板状	溝状	(6.73, 0.68, 0.15)	12.95	<SD8185	N85 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		
第3面	平安	SD	8157 17-18			51W24-25, 51X4-5	直線状	板状	単層	(2.06, 0.42, 0.11)	12.97	<SD8198, SK8152	N85 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8159 14-16			49-50X	直線状	板状	単層	(11.89, 0.23, 0.08)	13.12	<SD8189	N85 W	土層跡、灰色土層		
第3面	平安	SD	8160 16-18			50X6-7, 8	直線状	溝状	単層	(5.36, 0.29, 0.14)	13.12		N81 W	土層跡、赤色土層、灰色土層		

観 察 表

溝 (3)

線区 種別	時期	遺構名 埋蔵 番号	遺構 形状	遺構 規模	写真図例	グリッド	平面形	断面形	埋蔵分層	サイズ (cm)			底面傾斜 (%)	切り合い 関係	土層方向 傾	出土遺物	備考
										長	幅	深さ					
第3期	平安	SD 8162	14・15	74		49W21・22 23	直線状	板状	単層	(3.37)	0.48	0.06～ 0.13	12.93		N8°E	土層部	
第3期	平安	SD 8163	14・15	74		49W16・21・ 22・23	直線状	板状	単層	(4.88)	(0.24)	0.12	12.98	<SDR164	N8°E	土層部	
第3期	平安	SD 8164	14・15	74		47W20, 48W16・17・ 18	直線状	台形状	単層	(5.69)	0.25	0.11	13.00	<SK163, <SDR163	N8°E	土層部	
第3期	平安	SD 8165	14・15			49W17・18	直線状	板状	単層	(3.54)	0.23	0.04	13.04	>PR183	N40°W		
第3期	平安	SD 8166	14・15・ 16			47・48・49 50W	直線状	板状	単層	(8.05)	0.26	0.07	13.05		N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8167	14・15			47・48・ 49W	直線状	平円状	単層	(4.61)	0.19	0.07	13.07		N8°E	W	
第3期	平安	SD 8168	14・15・ 16			47・48・ 49W	直線状	板状	単層	(1.94)	0.16	0.22	12.92		N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8169	14・15			47・48・ 49W	直線状	板状	単層	(12.98)	0.29	0.13	13.00	<SDR170	N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8170	14			47・48・ 49W	直線状	平円状	単層	(11.90)	0.22	0.15	12.98	>SDR169	N8°E	土層部・遺色土層・底面部	
第3期	平安	SD 8171	14・15			47・48・ 49W	直線状	平円状	単層	(12.12)	0.14	0.26	12.86	<SDR172	N8°E	土層部・遺色土層・底面部	
第3期	平安	SD 8172	14・15			49W17・7・ 11・12	直線状	台形状	単層	2.85	0.28	0.10	12.99	<SDR171	N8°E	土層部	
第3期	平安	SD 8173	14	74		49W22・23	直線状	板状	単層	(1.56)	0.24	0.07	13.02	<SDR163	N8°E	土層部	
第3期	平安	SD 8174	14・15			47・48W	直線状	平円状	レンズ状	(8.61)	0.38	0.28	12.86	<SDR180	N8°E	土層部・遺色土層・底面部	
第3期	平安	SD 8180	14・15			48W	直線状	V字状	鈔瓦	(4.20)	0.27	0.39	12.78	<SDR181, <SDR174	N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8181	14・15	74		47・48W	直線状	平円状	単層～水平	(5.14)	0.24	0.13～ 0.29	12.88	>SDR180	N8°E	W	
第3期	平安	SD 8182	12・14			47W4・5, 48W1	直線状	平円状	単層～水平	(3.77)	(0.36)	0.18	12.88		N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8185	16・18			50W・X, 51W・X	直線状	板状	水平	(3.43)	0.32	0.14	13.08	>SDR156	N1°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8189	14・16			49W・X, 50W	直線状	V字状	単層	(5.48)	0.17	0.22	12.96	<SDR159	N43°W	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8190	14・16			48・49W	直線状	平円状～ 台形状	単層	(8.94)	0.35	0.1～ 0.22	12.96	>PR295	N8°E	W	
第3期	平安	SD 8191	14・16			49W1・2・3・ 4	直線状	平円状	単層	(5.82)	0.22	0.08～ 0.16	13.03		N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8192	14・16			48W・X, 49W・X	直線状	板状～ 台形状	単層	7.28	0.36	0.08～ 0.18	12.98	>SDR193	N8°E	土層部	
第3期	平安	SD 8193	14・16			49W・X	直線状	板状	単層	7.37	0.28	0.1～ 0.12	12.96	>SDR194	N8°E	土層部・遺色土層・底面部	
第3期	平安	SD 8194	14・16			49W1・3・4	直線状	平円状	単層	(2.81)	(0.16)	0.10	12.96	<SDR193	N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8195	16・17・ 18			51W21, 51X1	直線状	板状	水平	1.26	0.63	0.14	13.10	>SKR199	N16°E	土層部	
第3期	平安	SD 8197	14・16・ 18			49・50W	直線状	板状	単層	(14.99)	0.27	0.18	12.96		N8°E	土層部・遺色土層・底面部	
第3期	平安	SD 8206	18			50W	直線状	(板状)	単層	(2.67)	(0.24)	0.30～ 0.24	12.86		N8°E	土層部・遺色土層	
第3期	平安	SD 8207	14・16・ 18			49・50W	直線状	平円状	水平	(7.81)	0.32	0.26	12.82	>SKR223	N8°E	土層部・底面部	
第3期	平安	SD 8222	16			50X8	直線状	板状	単層	(0.99)	0.34	0.07	13.13	<SDR160, PR225	N3°E	土層部	
第3期	平安	SD 8243	16・18			49W3, 50W21・22, 50X1	直線状	板状	単層	(4.46)	0.29	0.09	13.07		N6°E	W	
第3期	平安	SD 8246	12・13			42・43W, 42V	直線状	平円状	レンズ状	(6.55)	0.41	0.33	12.59		N30°E		
第3期	平安	SD 8280	12			45V14・15・ 19・20	直線状	板状	単層	0.71	0.18	0.06	12.95		N7°E	W	
第3期	平安	SD 8300	12			45V12・13	直線状	板状	単層	0.90	0.26	0.04	12.97		N7°E	W	
第3期	平安	SD 8302	12			45V17・18	直線状	板状	単層	1.95	0.39	0.04	12.96		N5°E	土層部・底面部	
第4期	飛鳥	SD 8515	23	76・83		51X12・13・ 14・17・18・ 19	直線状	台形状	水平	4.47	0.57	0.33	12.66	>SKR229	N81°E	遺色土層	
第4期	飛鳥	SD 8559	24・25			47W1・2・7	直線状	板状	レンズ状	4.08	0.69	0.12	12.52		N35°E	土層部・遺色土層	

趾群

線区 種別	時期	遺構名 埋蔵 番号	遺構 形状	遺構 規模	写真図例	グリッド	平面形	断面形	埋蔵分層	サイズ (m)			底面傾斜 (%)	切り合い 関係	土層方向 傾	出土遺物	備考
										長	幅	深さ					
第1期	中世	趾群 趾群	8021	7	55	51X3・8・9	L字状	平円	-	0.34	0.30	-	-	-	-	-	-
第1期	中世	趾群 趾群	8022	6	58	50W, 50X	直線	平円	-	0.36	-	-	-	-	-	N1°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8030	7	56	52W, 53W	直線	平円	-	0.90	1.30	-	-	-	-	N52°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8034	7	58	51W, 52W, 51X, 52X	直線	台形状	-	0.67	1.70	-	-	-	-	N15°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8238	5	46V, 47V, 46W, 47W		直線	平円	-	-	-	-	-	>SKR072, SKR073	N15°E		
第1期	中世	趾群 趾群	8239	5	46W		-	平円	-	-	-	-	-	-	-	-	
第1期	中世	趾群 趾群	8040	7	58	51W, 51X	直線	平円	-	0.40	-	-	-	-	-	N70°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8043	6	51X		直線	平円	-	0.62	0.50	-	-	-	-	N30°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8044	6	51X		直線	平円	-	0.48	1.14	-	-	-	-	N57°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8047	6	50X, 51X		直線	平円	-	0.40	-	-	-	-	-	N60°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8067	3	42U, 42V		直線	平円	-	0.80	0.80	-	-	-	-	N90°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8068	3	42U		直線	平円	-	0.63	0.40	-	-	-	-	N4°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8077	4	46V		L字状	平円	-	0.81	0.94	-	-	-	-	N67°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8078	5	47W		直線	板状	-	0.43	0.68	-	-	-	-	N3°E	
第1期	中世	趾群 趾群	8079	5	47W		直線	板状	-	0.65	1.50	-	-	>SKR071	-	N5°E	土層部
第1期	中世	趾群 趾群	8081	4	44V		直線	平円	-	0.70	0.50	-	-	>SKR071	-	N7°E	土層部
第1期	中世	趾群 趾群	8088	4	44V, 45V		直線	平円	-	0.92	0.60	-	-	-	-	N8°E	土層部
第1期	中世	趾群 趾群	8089	4	44V		直線	平円	-	0.58	0.48	-	-	-	-	N2°E	土層部

性格不明遺構

検出部位	時期	遺構名 種類	遺構 番号	遺構 形状	写真 図版	グリッド	平面形	断面形	規模分類	サイズ (cm)			底面傾高 (m)	切り合い 形状	主軸方向 斜	出土遺物	備考
										長	短	深さ					
第1面	中世	溝	SX 8039	7	58	52X	不整形	不整形	—	260	280	—	—	—	—	—	—
第1面	中世	溝	SX 8046	6		50X・51X	直線	平形	—	282	48	—	—	—	N74°E	—	—
第1面	中世	溝	SX 8046	6		50X	直線	平形	—	236	80	—	—	—	N71°E	—	—
第1面	中世	溝	SX 8087	3	58	42V10	不整形	弧状	レンズ状	2.00	0.78	0.13	13.15	—	—	土師器・黒色土器・灰皿 器・石製品	—
第1面	中世	溝	SX 8097	3		42V9	不整形	弧状	—	1.80	0.83	—	—	—	—	土師器・黒色土器	—
第2面	平安	溝	SX 8100	9・10	62・63	40W4・5・ 9・10	不整形	弧状	単層～水平	—	—	—	0.18	15.03	>SK8113	土師器・黒色土器・灰皿 器・瓦動物器	—
第2面	平安	溝	SX 8151	16		51X3・7・8	楕円形	弧状	水平	1.76	0.93	0.19	12.92	>P8179	—	土師器・黒色土器・灰皿 器・石製品	—
第3面	平安	溝	SX 8199	16		50W・X・ 51W・X	(円形)	階段状	水平	(2.09)	(1.61)	0.200	13.00	—	—	土師器・灰皿類	—
第4面	平安	溝	SX 8311	23	76	53W1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	灰皿類	—
第4面	飛鳥	溝	SX 8522	23	77・83	51X10・15・ 52N6・7・ 11・12	(長方形)	弧状	レンズ状	(5.58)	1.33	0.22	12.56	>P8557	N76°W	土師器・黒色土器	—
第4面	飛鳥	溝	SX 8526	24・25	82	45V22・23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	土師器	遺物集中
第4面	飛鳥	溝	SX 8529	23		51X14	楕円形	弧状	単層	0.33	0.29	0.04	12.86	>SD8515	—	土師器・石製品	—
第4面	飛鳥	溝	SX 8541	—		47W4・5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦片	—
第5面	飛鳥	溝	SX 8563	24・27	81・82	44V	—	—	—	—	—	—	—	—	—	土師器・黒色土器	遺物集中
第5面	飛鳥	溝	SX 8524	24	82	47W6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦片	—
第6面	縄文晩期 古墳	溝	SX 8802	30・31	86	50X	不整形	(弧状)	ブロック状	4.69	(2.7)	0.2	9.62	—	—	縄文土器	銅・鉄
第6面	縄文晩期 古墳	溝	SX 8803	30	86	51X12・13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文土器	遺物集中
第6面	縄文晩期 古墳	溝	SX 8804	30・31	86	50・51X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文土器・縄文石器	遺物集中
第6面	縄文晩期 古墳	溝	SX 8809	30・31		50X9・14	不整形	凸形状	単層	1.76	0.40	0.18	9.42	—	—	縄文石器	銅・鉄

【東区】

掘立柱建物

遺構番号	検出部位	時期	遺構名 種類	遺構 番号	遺構 形状	写真 図版	グリッド	平面形	断面形	規模分類	サイズ (m)			底面傾高 (m)	切り合い 形状	主軸方向 斜	出土遺物	備考	
											長	短	深さ						
	上層	中世	柱穴	31・32T	36・39		89・90	N37°E	2間×2間	15.4	4.1	3.8	—	—	—	—	—	—	—
	P1	有	柱穴			平面形	断面形	直線	短縮	深さ	(m)			柱穴深淵 (m)				出土遺物	
	P2	有	内形			U字状		0.30	0.25	0.40	13.57			P1-P2	2.2				
	P3	有	内形			U字状		0.29	0.25	0.34	13.29			P2-P3	1.9				
	P4	有	内形			U字状		0.23	0.27	0.23	13.62			P3-P4	2.1				
	P4	無	内形			U字状		0.27	0.21	0.31	13.61			P4-P5	1.7				
	P5	有	内形			U字状		0.29	0.25	0.31	13.61			P5-P6	1.9				
	P6	有	内形			U字状		0.32	0.31	0.36	13.76			P6-P7	1.8				
	P7	有	内形			U字状		0.16	0.16	0.27	13.61			P7-P2	1.9				
	P9053	無	平円状			扇状		0.24	0.22	0.31	13.62			—					
	P9073	無	内形			弧状		0.19	0.16	0.07	13.81			—					

井戸

検出部位	時期	遺構名 種類	遺構 番号	遺構 形状	写真 図版	グリッド	平面形	断面形	規模分類	サイズ (cm)			底面傾高 (m)	切り合い 形状	主軸方向 斜	出土遺物	備考	
										長	短	深さ						
上層	中世	溝	SE 9006	34・35	90	30P4・9	円形	扇状	レンズ状	0.93	0.82	1.37	12.45	—	—	N24°E	—	足跡付 小鉄片あり
上層	中世	溝	SE 9010	34・35	90・91	30G9・14	円形	扇状	レンズ状	0.97	0.89	1.06	12.70	—	—	—	灰皿類	—
上層	中世	溝	SE 9011	34・35	91	31P24	楕円形	扇状	レンズ状	0.88	0.73	0.75	13.07	—	—	N34°E	—	足跡付 小鉄片あり
上層	中世	溝	SE 9024	36・37・38	91	31S19・20・ 24・25	楕円方形	扇状	レンズ状	0.86	0.75	1.49	12.47	—	—	N29°E	—	土師器・灰皿類
上層	中世	溝	SE 9025	36・37	91	31S23・24	円形	扇状	レンズ状	0.70	0.68	0.61	13.30	—	—	N30°E	—	土師器
上層	中世	溝	SE 9032	36・37・38	92	32T20・25	円形	U字状	レンズ状	1.39	1.28	1.72	12.13	>S09019	—	N24°W	土師器・黒色土器・灰皿類 器・石製品	
上層	中世	溝	SE 9034	36		32U1	円形	扇状	レンズ状	0.76	0.73	0.98	12.87	>P9033	—	N10°E	—	—
上層	中世	溝	SE 9037	36・37		32U5・ 10,33U1・6	円形	扇状	レンズ状	0.87	0.81	1.16	12.71	>P9036	—	N8°E	—	土師器
上層	中世	溝	SE 9087	36・37・38	92	32U5	円形	扇状	レンズ状	0.89	0.79	1.62	12.21	>P9072	—	N17°E	—	土師器

土坑

検出部位	時期	遺構名 種類	遺構 番号	遺構 形状	写真 図版	グリッド	平面形	断面形	規模分類	サイズ (cm)			底面傾高 (m)	切り合い 形状	主軸方向 斜	出土遺物	備考	
										長	短	深さ						
上層	中世	溝	SK 9004	34・35	93	32P6	楕円形	平円状	単層	1.20	0.65	0.21	13.62	—	—	N66°W	—	—
上層	中世	溝	SK 9007	34・35		30P9	円形	扇状	単層	0.65	0.61	0.09	13.72	—	—	N22°E	—	—
上層	中世	溝	SK 9008	34	93・94	30U18・ 23	楕円形	扇状	レンズ状	1.02	0.89	0.62	12.68	>SD9009	—	N13°E	—	SK9005 底層 の遺物
上層	中世	溝	SK 9009	34	94	30U23	楕円形	扇状	レンズ状	0.69	0.55	0.25	13.03	>SD9008	—	N40°E	—	SK9005 底層 の遺物
上層	中世	溝	SK 9017	34・35	94	30P13	楕円形	扇状	レンズ状	0.78	0.70	0.37	13.26	—	—	N6°E	—	漢朝瓦片・石製品
上層	中世	溝	SK 9037	36・37・ 39		32S9・10・ 14・15	楕円形	扇状	単層	1.38	0.90	0.06	13.81	—	—	N49°W	—	—
下層	古墳前期	溝	SK 9088	41	95	32U7	楕円形	平円状	レンズ状	1.58	0.66	0.16	13.25	—	—	N63°E	—	土師器
下層	古墳前期	溝	SK 9091	41	95	32U2・3・ 7・8	楕円形	扇状	レンズ状	1.99	1.55	0.36	12.70	—	—	N16°E	—	土師器・丸底器
下層	古墳前期	溝	SK 9092	41	95	32T14	円形	凸形状	レンズ状	1.50	1.32	0.29	12.74	—	—	N76°W	—	土師器・石製品

観 察 表

柱穴・ビット

掘立 層位	時期	遺構名 発見番号	遺構 形状	写真 図説	グリッド	平面形	断面形	埋藏分類	サイズ (cm)		底面標高 (m)	切り欠き 図説	出土遺物	備考
									長径	短径				
上層	中群	P 9012 34-35			30Q24	円形	U字状	柱眼	0.28	0.27	0.20	13.24		
上層	中群	P 9013 34-35			30Q15	円形	U字状	柱眼	0.37	0.31	0.35	13.43		通して3.6m、N-67 W 柱眼とて3.6m
上層	中群	P 9014 34-35			31Q6	円形	U字状	柱眼	0.28	0.27	0.25	13.52		
上層	中群	P 9022 36			31S4-9	楕円形	平円状	単眼	0.35	0.30	0.15	13.75		
上層	中群	P 9023 36			31S5	円形	U字状	レンズ状	0.20	0.19	0.35	13.54		
上層	中群	P 9026 37			32U15	円形	平円状	柱眼	0.22	0.21	0.19	13.70		
上層	中群	P 9028 37			32U19	円形	平円状	単眼	0.20	0.19	0.08	13.78		
上層	中群	P 9029 36			31S9	円形	U字状	単眼	0.34	0.32	0.28	13.63		
上層	中群	P 9030 37			33U7	楕円形	U字状	フロツク状	0.24	0.18	0.36	13.46		
上層	中群	P 9033 36			33U1	円形	U字状	レンズ状	0.27	0.26	0.25	13.58	>SK9034	
上層	中群	P 9035 37			32T25	円形	平円状	レンズ状	0.48	0.47	0.30	13.55		
上層	中群	P 9036 36-37			32U19	円形	U字状	単眼	0.26	0.24	0.42	13.45	>SK9037	
上層	中群	P 9038 37			33U11	円形	V字状	柱眼・柱眼	0.29	0.25	0.73	13.16		
上層	中群	P 9039 37			33U13-18	円形	U字状	レンズ状	0.21	0.19	0.28	13.58		
上層	中群	P 9040 36			32T15	円形	U字状	レンズ状	0.22	0.22	0.44	13.25	>SK9019	
上層	中群	P 9041 36-37			32T11	円形	U字状	斜位	0.19	0.17	0.42	13.45		縦断面
上層	中群	P 9042 37			33U2-9	楕円形	V字状	柱眼	0.31	0.25	0.42	13.22		
上層	中群	P 9043 37			33U2-9	楕円形	平円状	単眼	0.35	0.25	0.15	13.58		
上層	中群	P 9044 37			32U5	楕円形	V字状	レンズ状	0.37	0.28	0.48	13.38		
上層	中群	P 9048 36-37			32S16	楕円形	U字状		0.19	0.16	0.19	13.67		
上層	中群	P 9049 36			32R16	円形	台形状	柱眼	0.26	0.22	0.17	13.69		
上層	中群	P 9050 37			32T21-22	楕円形	台形状	レンズ状	0.64	0.42	0.52	13.19		土層部
上層	中群	P 9051 37			32T24	円形	U字状	柱眼	0.27	0.23	0.33	13.51		
上層	中群	P 9054 36			32R22	楕円形	平円状	単眼	0.23	0.18	0.15	13.60	>SK9019	
上層	中群	P 9055 36			31R24	円形	平円状	柱眼	0.30	0.29	0.27	13.61		
上層	中群	P 9056 36-37			32T1	楕円形	台形状	単眼	0.24	0.19	0.14	13.68		
上層	中群	P 9057 36-37			32T11	円形	平円状	単眼	0.21	0.18	0.14	13.25		
上層	中群	P 9058 37			32T25	円形	U字状	単眼	0.20	0.19	0.25	13.50	>P9059	
上層	中群	P 9059 37			32T25	楕円形	平円状	柱眼	0.35	0.23	0.30	13.55	>P9058	
上層	中群	P 9060 37			32T2-9・12-13	楕円形	U字状	柱眼・柱眼	0.22	0.19	0.35	13.35	>P9061	
上層	中群	P 9061 37			33U8-12	楕円形	U字状	柱眼	0.26	0.21	0.28	13.33	>P9060	
上層	中群	P 9063 37-39 94			32T21, 32U1	円形	U字状	柱眼	0.22	0.22	0.53	13.50		
上層	中群	P 9064 37-39			32T21	楕円形	U字状	柱眼	0.25	0.19	0.32	13.68		
上層	中群	P 9065 37-39 94			32T21-22	円形	U字状	柱眼	0.30	0.26	0.26	13.73		
上層	中群	P 9066 37-39			32U2	楕円形	台形状	柱眼	0.22	0.17	0.17	13.81		
上層	中群	P 9067 37-39 94			32U2	円形	平円状	柱眼	0.23	0.21	0.10	13.87		
上層	中群	P 9068 36-37			32T4-9	円形	U字状	レンズ状	0.25	0.25	0.22	13.63		
上層	中群	P 9069 36-37			32R21	楕円形	U字状	柱眼	0.24	0.17	0.24	13.61		
上層	中群	P 9070 37			33U2-7	楕円形	表状	単眼	0.23	0.19	0.07	13.68		
上層	中群	P 9071 37			33U2	円形	平円状	柱眼	0.30	0.26	0.15	13.62		
上層	中群	P 9072 37-38			32U5	円形	表状	柱眼	0.25	0.24	0.09	13.76		
上層	中群	P 9073 37			31T14	円形	表状	単眼	0.19	0.16	0.07	13.81		
上層	中群	P 9074 37			33U1+2	楕円形	台形状	柱眼	0.25	0.18	0.16	13.61		
上層	中群	P 9075 37			32T21	円形	台形状	柱眼	0.29	0.27	0.23	13.55		
上層	中群	P 9076 37			32T21	円形	平円状	柱眼	0.31	0.30	0.21	13.63		縦断面
上層	中群	P 9077 37			32T22	円形	U字状	柱眼	0.27	0.24	0.19	13.61		
上層	中群	P 9078 37			32T22	円形	台形状	柱眼	0.29	0.25	0.19	13.56		
上層	中群	P 9079 37			33U6	円形	U字状	レンズ状	0.25	0.23	0.39	13.45		
上層	中群	P 9080 37			33U2	円形	U字状	柱眼・柱眼	0.36	0.33	0.55	13.21		
上層	中群	P 9081 37			32T21, 33U1	円形	U字状	柱眼	0.28	0.25	0.40	13.47		
上層	中群	P 9082 37			32T22	円形	楕円状	柱眼	0.30	0.28	0.37	13.41		
上層	中群	P 9083 37			33U2	円形	台形状	柱眼	0.23	0.20	0.16	13.59		
上層	中群	P 9084 37			32T22	円形	U字状	柱眼	0.35	0.34	0.29	13.49		
上層	中群	P 9085 37			32T16	楕円形	台形状	斜位	0.29	0.24	0.11	13.70		
上層	中群	P 9086 37			32T21	円形	平円状	フロツク状	0.22	0.20	0.33	12.48		
上層	中群	P 9094 36-37			32S21	円形	U字状	レンズ状	0.23	0.22	0.27	13.64		
下層	古墳遺構	P 9099 41			33U6+11	円形	U字状	レンズ状	0.22	0.19	0.52	12.58		土層部
下層	古墳遺構	P 9090 41			32T17	円形	U字状	斜位	0.21	0.20	0.27	12.99		
下層	古墳遺構	P 9093 41			32T12	円形	表状	単眼	0.23	0.21	0.08	12.74		土層部

溝 (1)

掘立 層位	時期	遺構名 発見番号	遺構 形状	写真 図説	グリッド	平面形	断面形	埋藏分類	サイズ (cm)		底面標高 (m)	切り欠き 図説	T断面内 径	出土遺物	備考	
									長径	短径						
上層	中群	SD 17 34-35	32P	直線状	溝状	レンズ状			(5.63)	(1.16)	0.12	13.76	>SD21	N17-E	下層1のSD17	
上層	中群	SD 21 34-35	32P	直線状	溝状	レンズ状			(6.99)	(0.92)	0.13	13.73	>SD17	N9'-E	最古層(F・土層部) 下層1のSD21	
上層	中群	SD 9000 34-35 92	32P-P	直線状	台形状	本ヤ-			(9.31)	0.84- 1.08	0.54	13.31	>SK9001-9002- 9003	N8'-E	土層部	
上層	中群	SD 9001 34-35 93	31-320, 31U	1字状	台形状	本ヤ-			(15.05)	0.83- 1.31	0.55	13.29	>SK9002-9003, >SK9000	N8'-E	土層部・縦断面	
上層	中群	SD 9001A 34-35	31-320	直線状	台形状	本ヤ-			(5.64)	0.89- 0.96	0.48	13.33		N87'-W	縦断面	SD9001の北辺
上層	中群	SD 9001B 34-35	310-P	直線状	台形状	本ヤ-			(9.41)	1.03- 1.31	0.55	13.29		N1'-W	縦断面	SD9001の東辺
上層	中群	SD 9002 34-35 93	31-32P	直線状	台形状	本ヤ-			(3.88)	0.86- 1.13	0.40	13.45	>SK9000-9001	N87'-W	縦断面	
上層	中群	SD 9003 34-35 93	31-32P	直線状	台形状	レンズ状			(4.20)	0.81- 1.15	0.55	13.29	>SK9000-9001	N83'-W		1301年頃
上層	中群	SD 9005 34	29-310, 29-30P	直線状	台形状	レンズ状			(17.92)	2.48	0.61	13.22		N79'-W	縦断面 最古層・土層部 片立層部	下層VのSD1023

溝 (2)

線号 掘削 時期	通称名 種類 番号	溝幅 深さ	写真 撮影	グリッド	平面図	断面図	地層分類	サイズ (cm)		底面傾斜 (%)	切りかゝり電極	土質の調査 項目	出土遺物	備考		
								長さ	幅							
上層	中世	SD 9015	34	29P, 29 30Q	直線状	弧状	レンズ状	(12.84)	0.74 1.03	0.20	13.57	-SD0016	N14° E	上層部 埴輪類 注(1)見取	下層VのSD1022 (近接記録)	
上層	中世	SD 9016	34	29Q	直線状	弧状	レンズ状	(3.49)	0.55 1.02	0.10	13.65	-SD0015	N77° W			
上層	中世	SD 9018	34-35	95	31-32P	直線状	台形状	斜位	(6.62)	0.66 0.84	0.33	13.49		N88° W		
上層	中世	SD 9019	36-38		31-32P, 32S-U	コ字状	弧状	レンズ状	28.20	(9.45)	0.20	13.81	-SD0020, SD0022, PD40- 9049-9054	N22° E	底層部・磁石・ 鉄・磁材	
上層	中世	SD 9020	36	90	31-33R	直線状	平内-U字状	斜位	(14.94)	0.37 0.44	0.19	13.74		N78° W		
上層	中世	SD 9021	36		31-32R	直線状	弧状	半環	(A7)	0.42 0.97			-SD0045	N78° W	海神鏡・漆器	鏡丸
上層	中世	SD 9045	36	32R	直線状			(4.02)	0.45 0.65			-SD0021	N81° W		鏡丸	
上層	中世	SD 9046	36	32R	直線状			(0.49)	0.27 0.34			-SD0047	N60° W		鏡丸	
上層	中世	SD 9047	36	31-32R	直線状			(6.62)	0.50 0.86			-SD0046	N83° W		鏡丸	

遺物観察表

【市道区】

土器・陶磁器観察表 (1)

(注) 1:石・瓦, 長=長石, 長=長石, 長=長石, 長=長石, チャ=チャート, 白=白色磁子, 黒=黒色磁子, 赤=赤色磁子, 薄=薄, 黒=粘土, 濁=濁, 海苔色, 灰=灰化層)

掘削 番号	種類	時期	品名	グリッド	遺構	層位	品量		色調		出土層内	調査		備考	
							口徑	底径	器高	器径		内径	外径		内径
1	洗滌筒	中世	壺	50W25		IV			灰	灰	灰	石・黒・赤	9号弁	ワタロコナ	
2	土師器	古代	瓶白陶	49X	SI06025	6	13.5	7.0	2.7	洗滌	洗滌	石・赤・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面
3	底層部	古代	瓶白陶	49X	SI06025	6	13.2	6.4	2.4	灰白	灰白	石・赤・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
4	黒色土師	古代	瓶白陶	49X	SI06025	6	(20.0)	(8.0)	6.1	洗滌	洗滌	黒・石・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
5	土師器	古代	壺	49X	SI06025	6			(13.7)	にぶい・洗滌	洗滌	長	ワタロコナ	ワタロコナ	裏面裏面
6	底層部	古代	壺	43-44V	SI06075	1	(11.2)			灰白	オリーブ黒	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	
7	土師器	古代	小鉢	42-44V	SI06075	3	12.4			灰白	にぶい	長・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	
8	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06075	2	11.6	4.6	4.0	黒陶	灰白	長・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面, 9号磁器手 取
10	底層部	古代	瓶白陶	43V	SI06076	1	12.4	6.4	3.0	灰	灰	長	ワタロコナ	ワタロコナ	両面へろり
11	灰陶陶器	古代	有台陶	43V11	SI06076	1	(8.2)			灰白	灰白	長	ワタロコナ	ワタロコナ	
12	底層部	古代	瓶白陶	43V10	SI06082	2	12.4	6.6	3.0	灰白	灰白	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	へろり口縁へろり起こ し, 粗面
13	底層部	古代	瓶白陶	44V11	SI06082	2	13.0	7.0	3.0	灰白	灰白	長・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転へろり, 粗面
14	底層部	古代	瓶白陶	43V10	SI06082	2	12.6	8.0	2.9	灰白	灰	長	ワタロコナ	ワタロコナ	両面へろり磁子手, 黒色
15	底層部	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	2	12.8	7.5	3.1	灰白	灰白	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面へろり磁子手, 黒色
16	底層部	古代	瓶白陶	43V10	SI06082	2	12.8	8.0	3.0	灰白	灰白	黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面へろり磁子手, 黒色
17	底層部	古代	瓶白陶	45V15-20, 46V11-16	SI06082	2	13.8			灰白	灰	長	ワタロコナ	ワタロコナ	黒色
18	底層部	古代	鉢陶器	44V10	SI06082	3			(7.2)	灰	灰白	長・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	
19	底層部	古代	鉢陶器	43-44V	SI06082	3	(11.7)		(13.7)	灰	灰	長	ワタロコナ	ワタロコナ	
20	土師器	古代	瓶白陶	42-44V	SI06082	3	12.0	5.9	3.4	洗滌	洗滌	石・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面
21	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	2	11.5	5.0	3.7	にぶい・洗滌	にぶい・洗滌	長	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面
22	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	2	(12.8)	6.0	3.2	にぶい・洗滌	にぶい・洗滌	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面
23	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	3	(12.0)	4.8	3.9	にぶい・洗滌	にぶい・洗滌	石・赤・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
24	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	2	(13.0)	4.8	4.0	洗滌	洗滌	長・白・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
25	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	2	(12.0)	5.0	4.2	洗滌	洗滌	長・赤・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面
26	土師器	古代	瓶白陶	43V10	SI06082	2	12.2	5.2	3.6	灰白	灰白	長	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
27	土師器	古代	瓶白陶	43V10	SI06082	2	12.6	3.6	5.0	にぶい・洗滌	洗滌	長・赤・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
28	土師器	古代	瓶白陶	43V10	SI06082	2	12.0	5.1	3.8	灰白	洗滌	石・赤・赤, 赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
29	土師器	古代	瓶白陶	43-44V	SI06082	4	(12.0)	(5.5)	4.6	にぶい・洗滌	にぶい・洗滌	長・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面
30	黒色土師	古代	瓶	43-44V	SI06082	2	12.6		(3.2)	にぶい・洗滌	洗滌	長・黒・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面, 9号磁器手 取
31	黒色土師	古代	小鉢	44V6	SI06082	5	(22.0)	(8.5)	にぶい・洗滌	粗灰	長	ワタロコナ	ワタロコナ	黒色「丸」	
32	土師器	古代	小鉢	43-44V	SI06082	4	10.3	(6.4)	にぶい・洗滌	洗滌	長	ワタロコナ	ワタロコナ		
33	灰陶陶器	古代	瓶	43V	SI06082	2	(3.5)	粗オリーブ黒	オリーブ黒	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ			
34	底層部	古代	内面陶	43V1	SI06095	1	130.0	(7.0)	粗灰	粗灰	長・黒	ワタロコナ	ワタロコナ		
35	土師器	古代	瓶白陶	46W2	SI06177	2,3	(12.0)	(5.2)	3.7	灰白	洗滌	石・黒・赤, 赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面, 9号磁器手 取
36	土師器	古代	瓶白陶	46V18	SI06177	2	(12.3)	4.5	3.6	洗滌	洗滌	長・赤・赤, 赤	ワタロコナ	ワタロコナ	右回転表面, 9号磁器手 取
37	黒色土師	古代	有台陶	40W7	SI06177	2	(13.0)	(5.0)	2.6	灰白	黒	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	両面表面, 9号磁器手 取
38	黒色土師	古代	瓶	40V18	SI06177	2	(15.8)	(6.4)	にぶい・洗滌	粗灰	長・赤・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	9号磁器手取	
39	灰陶陶器	古代	瓶	40W7	SI06177	2	17.8	(4.7)	粗オリーブ黒	オリーブ黒	長・黒	ワタロコナ	ワタロコナ		
40	底層部	古代	鉢陶器	46W2	SI06177	2	14.4			粗灰	灰	長・赤	ワタロコナ	ワタロコナ	
41	底層部	古代	鉢陶器	40W7	SI06177	2	(13.6)	(16.1)		粗灰	灰	長	ワタロコナ	ワタロコナ	
42	底層部	古代	熊手付長胴鏡	40W7	SI06177	2		(22.7)		灰白	灰白	長	ワタロコナ	ワタロコナ	

土器・陶磁器観察表 (3)

検出番号	種類	時期	器種	グリッド	遺構	群位	法量 (cm)			色澤		胎土混入物	装飾		備考
							口径	底径	器高	外側	内側		外側	内側	
132	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	52W	22-3T	X-1				にがい焼	にがい焼	長			
133	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	50X7	SX8809					黒陶	黒陶	長・白			アスファルト付着
134	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	50X9		X-3				にがい焼	にがい焼	長・白	ミガキ		
135	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	53X8		X-1				黒陶	にがい焼	長		ナデ	鎌倉時代
136	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	52W14		X-2				黒陶	灰黒陶	白	ミガキ	ナデ	伊豆御所・注口部アスファルト付着
137	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	51X12		X-2				明赤陶	明赤陶	長・白	ミガキ	ナデ	
138	縄文土器	縄文後期前半	注口土器	51X2		X-3				明赤陶	明赤陶	長・赤	ナデ	ナデ	
139	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	52W20		X-1				にがい焼	にがい焼	長・白		ナデ	海二十稲巻式
130	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	52W20		X-1				にがい焼	にがい焼	白	ミガキ	ナデ	海二十稲巻式・内面コゲ・焼入スス
131	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	52W12		X-1				灰黒陶	浅黄陶	長・白	ミガキ	ナデ	海二十稲巻式・内面コゲ・焼入スス
132	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	52W5		X-2				にがい焼	黒陶	長	ナデ・ミガキ	ナデ	海二十稲巻式・内面コゲ・焼入スス
133	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	50X14		X-3 (14.4)				にがい焼	黒陶	石・長	ミガキ		
134	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	50X7	SX8802	1				黒	黒		ミガキ		軽白陶土器
135	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	51X8		X-2				黒					軽白陶土器
136	縄文土器	縄文後期前半	深鉢	50X7	SX8809	1		(10.2)		灰白	灰白		ナデ		軽白陶土器
138	縄文土器	縄文後期後半	深鉢	53W13		X-1				橙	黒陶	長	ミガキ		軽白陶土器
139	縄文土器	縄文後期後半	深鉢	53W13		X-1				橙	黒陶	長・長			内面コゲ
140	縄文土器	縄文後期後半	深鉢	53W13		X-1				にがい焼	にがい焼	長・チヤ・白・赤			
141	縄文土器	縄文後期後半	深鉢	53W13		X-1				にがい焼	にがい焼	長・チヤ・白・赤			

土製品観察表

検出番号	種類	器種	グリッド	遺構	群位	法量 (cm)			重量 (g)	色澤	胎土混入物	備考
						長さ	幅	厚				
9	平安土製品	印付	43-44V	SX8875	Va			29.9	黒灰	長		
24	縄文土製品	支脚	47-48W	SX8502	VIc	11.4	3.7	148.4	にがい焼	石・長		
25	縄文土製品	支脚	47-48W	SX8502		10.3	4.8	148.6	灰白	長		
107	縄文土製品	支脚	47W15		VIc	7.4	0.0	202.2	橙	石・長		
106	縄文土製品	支脚	49X8		VIb	6.4	5.1	161.1	赤橙	石・長		
95	縄文土製品	支脚	47W14	SX8502	VIc	10.3	(5.3)	195.3	灰白	長		
137	縄文土製品	巻物	51X7		X-3	3.9	(3.6)	1.7	18.2	灰白	長	

木製品観察表

検出番号	時期	種類	グリッド	遺構	群位	法量 (cm)			本取り	備考
						長さ	幅	厚		
58	平安	葉	42-43V	SX8882	5	(13.6)	(0.5)		榎目	スギ
57	平安	葉	42-43V	SX8882	5	(16.2)	(0.5)		榎目	スギ
60	平安	杉板	44V17	PH098		(37.8)	13.6		榎目	スギ・榎材混用
61	平安	杉板	49W24-25-40X4-5	PH205		42.3	20.4		丸木取付	トネリコ混
62	平安	杉板	50W21	PH244		(60.6)	23.6		丸木取付	クワ
58	平安	納付の刺	52W25-SX5	SX8123	8	(60.9)	1.9		丸木取付	スギ
59	平安	檜板	44V6-7	PH262	1	38.1	10.2	2.3	榎目	スギ
108	縄文	杉板	52X6	PH905		43.0	9.3		丸木取付	トネリコ混
109	縄文	榎材	47W10	PH581		43.3	26.2	5.3	榎目	クワ

石器・石製品観察表

検出番号	時期	種類	石材	グリッド	遺構	群位	法量 (cm)			重量 (g)	備考
							長さ	幅	厚		
73	縄文	白玉	滑石	44V17	SX8853	VI b	4.1		2.4	0.06	磨痕
74	縄文	白玉	滑石	44V17	SX8853	VI b	4.2		2.9	0.07	磨痕
142	縄文	硬形石器	チャート	50X14		X-2	4.0	2.4	0.7	7.3	
143	縄文	硬形石器	チャート	50X5		X-3	2.9	3.5	0.8	8.3	
144	縄文	硬形石器	チャート	50X9	SX8809		2.1	3.0	0.8	4.2	
145	縄文	硬形石器	チャート	50X9-14	SX8809		2.3	1.0	0.8	1.8	
146	縄文	石器	ヒスロ	51X11		X-3	4.2	3.4	0.5	9.0	
147	縄文	磨製石斧	硬砂岩	19W20		X-2	(4.0)	2.2	2.0	11.1	
148	縄文	磨製石斧	硬砂岩	50X14		X-3	(3.7)	3.4	1.1	21.9	
149	縄文	磨製石斧	輝緑岩	50-51X	SX8804	X-3	(12.3)	6.0	2.8	311.1	
150	縄文	磨製石斧	輝緑岩	50-51X	SX8804	X-3	9.9	5.2	2.5	180.2	
151	縄文	磨石	ヒスロ	50-51X	SX8804		5.7	5.0	4.9	114.9	
152	縄文	磨石	片岡石安山岩	52W5		X-1	(14.6)	(9.6)	6.5	1122.7	
153	縄文	磨石	安山岩	51X13		X-3	(8.4)	7.1	4.3	254.9	
154	縄文	磨石	安山岩	52W25		X-3	7.8	6.8		422.7	
155	縄文	磨石	安山岩	52W13		X-2	7.9	5.4		364.6	
156	縄文	砥石	安山岩	53W13		X-1	7.0	4.5	5.0	215.8	
157	縄文	磨石	ヒスロ	50-51X	SX8804		3.1	2.4	2.3	40.4	

観 察 表

【東区】

土器・陶磁器観察表

(単位：上=石瓦、長=長石、黄=黄鉄石、赤=赤鉄石、青=青銅石、白=白色磁子、黒=黒色磁子、赤=赤色磁子、黒=黒灰岩、黒=黒土塊、黄=黄面砂利、灰=灰化物)

報告番号	時期	種別	形状	グリッド	透視	部位	法量			色調		胎土混入物	産地		備考
							内径	高さ	径	外側	内側		外側	内側	
158	中世	越前陶	煎	32T20-25	SK9032	2		1.0	4.4	浅黄褐色	にがい焼	黒			10世紀末～17世紀初め、尾山ハに相当文
159	中世	若狭	煎	32T20-25	SK9032	8		(2.7)	5.4	灰黄	灰チヤーブ				ロクロナデ
160	中世	越前陶	片口鉢	32T20-25	SK9032	4		(7.1)	(13.2)	灰	黒	黒・白・黄			ロクロナデ
161	中世	越前陶	片口鉢	32T20-25	SK9032	6		(5.6)	(10.0)	灰黄褐色	焼灰	黒・白			ロクロナデ
173	中世	越前陶	片口鉢	32P10	SK9017	3		(1.8)	12.2	にがい焼	焼赤褐色	黒・黒			ロクロナデ
174	中世	越前陶	片口鉢	32P9-13	SK9017	3		(5.3)	(15.2)	灰	灰	黒・黒・白・黒			ロクロナデ
175	中世	若狭	煎	32S20		4		(1.4)	5.8	灰黄	灰チヤーブ				ロクロナデ
178	古墳	土師器	太鼓壺	32U2	SK9091	4		(13.2)		焼	焼	黒			ロクロナデ
177	古墳	土師器	壺	32U3	SK9091	4	(12.0)			にがい焼	にがい焼	黒・赤・赤			ハケメ
178	古墳	土師器	壺	32U3	SK9091	4	17.2			灰白	浅黄褐色	白			ハケメ
179	古墳	土師器	壺	32S23		2	23.0	(7.8)		にがい焼	にがい焼	黒・赤・赤			ハケメ
180	古墳	土師器	壺	32T6		2	16.4	8.5		灰黄褐色	にがい焼	黒・白・赤			ハケメ
181	古墳	土師器	壺	32S23		2	16.0	(10.0)		にがい焼	焼	黒・赤・白			ハケメ
182	古墳	土師器	壺	32S21		2	11.3	8.9	3.4	浅黄褐色	浅黄褐色	黒			タテヤケナデ
183	古墳	土師器	壺	32U12		2	16.6	(5.1)		にがい焼	にがい焼	黒・黒			ナデ
184	古墳	土師器	壺	32U1		2	(8.6)	(2.8)		浅黄褐色	浅黄褐色	白・赤			ナデ
185	古墳	鉢	鉢	32T10		2	(3.0)	(3.8)		灰黄褐色	黒褐色	黒・白			ハケメ
186	古墳	土師器	高杯	32U5		2	(10.3)			黄灰	焼	黒・赤・黒・赤・黒			ハケメ
187	古墳	土師器	高杯	32U7		2	(7.5)	(10.0)		浅黄褐色	浅黄褐色	黒・赤			ハケメ

木製品観察表

報告番号	時期	種別	グリッド	透視	部位	法量 (cm)			本取り	備考
						長	短	厚		
162	中世	漆器	32T20-25	SK9032	7	(10.0)	(7.1)	(2.2)	縦目	ツヤキ
163	中世	漆器	32T20-25	SK9032	7	(10.0)	(7.4)	(1.8)	縦目	ツヤキ
167	中世	檜内器	32T20-25	SK9032	9	30.3	18.4	1.0	縦目	既製スチ、磨粉、黒ヒノキ内面既製漆
168	中世	漆物	32T20-25	SK9032	8	22.2	20.4	0.8	縦目	スチ、既製既、貫孔4箇所
169	中世	漆物	32T20-25	SK9032	8	28.6	8.2	0.8	縦目	スチ、既製既あり
170	中世	漆物	32U5	SK9087	10	(37.3)	9.0	1.8	縦目	ヒヤレン既
171	中世	漆物	32U5	SK9087	10	28.4	(10.5)	0.7	縦目	スチ、既製既あり
172	中世	漆物	32U5	SK9087	10	(34.7)	(14.4)	(1.1)	縦目	スチ

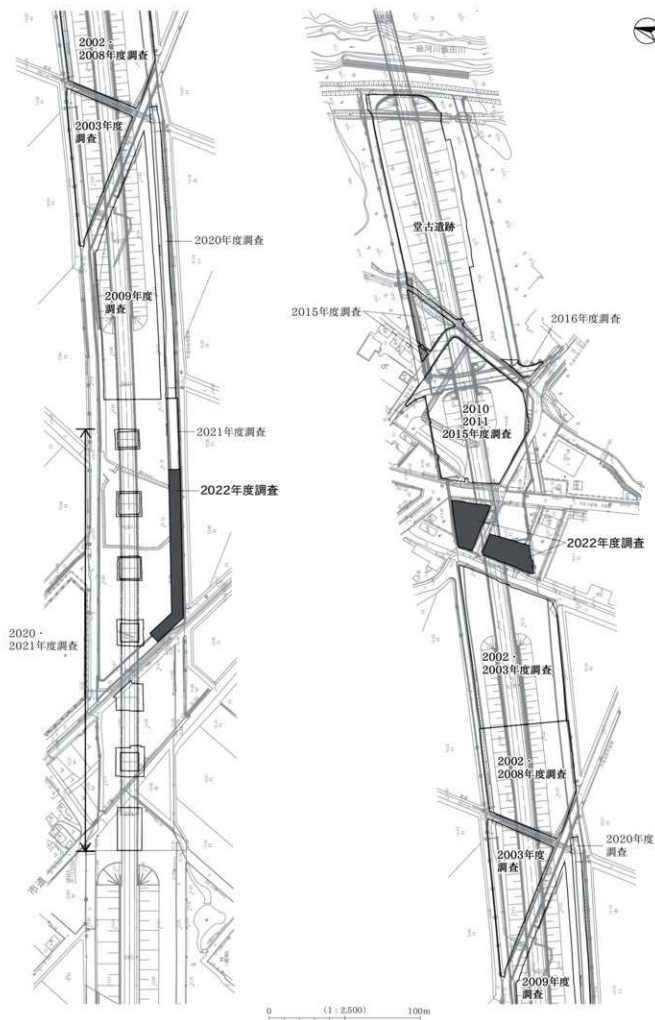
石製品観察表

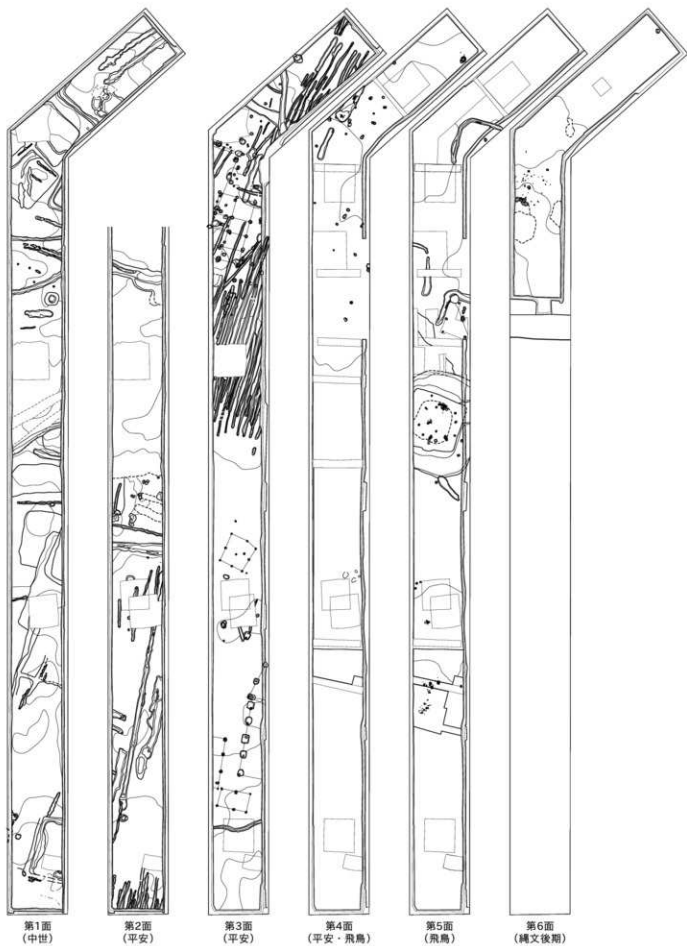
報告番号	時期	種別	材質	グリッド	透視	部位	法量 (cm)			重量	備考
							長	短	厚		
164	中世	石製品	磁石	SK9032	32T20-25	SK9032	8	10.0	3.6	2.0	93.9
165	中世	石製品	火打石	チャート	32T20-25	SK9032	8	4.7	3.0	2.3	29.0
168	中世	石製品	研石	砂	32T25	SK9032	8	7.4	7.1	3.0	39.4

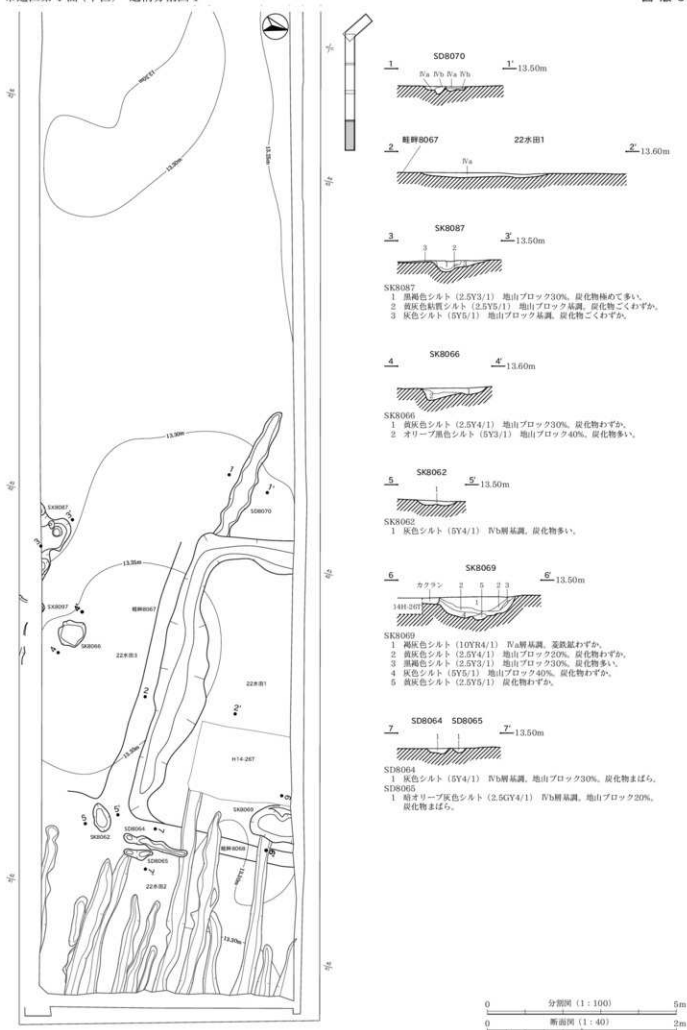
金属製品観察表

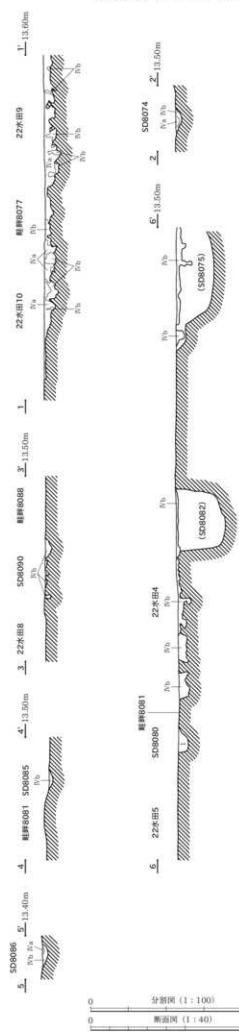
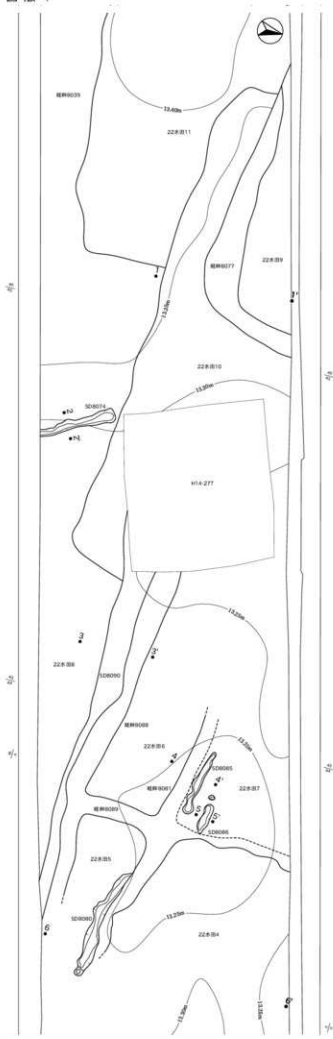
報告番号	時期	種別	材質	グリッド	透視	部位	法量 (cm)			重量	備考
							長	短	厚		
166	中世	鉄製品	水打金	32T20-25	SK9032	8	(4.7)	(2.2)	(0.2)	4.3	

圖 版



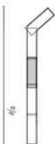
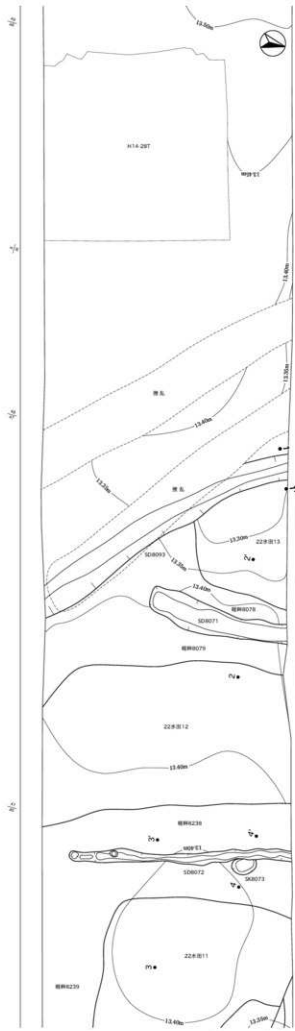






S20808 1 黄灰色シルト (2.0Y5/1) 地行プロック30% 灰化物ごくわずか





5
1 灰褐色シルト (10YR6/2) V層を基準とする
層上
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

6
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8073
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

7
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8072
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

8
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8071
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

9
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8070
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

10
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8069
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

11
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8068
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

12
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8067
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

13
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8066
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

14
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8065
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

15
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8064
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

16
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8063
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

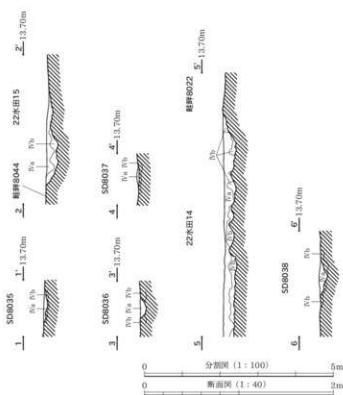
17
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8062
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

18
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8061
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

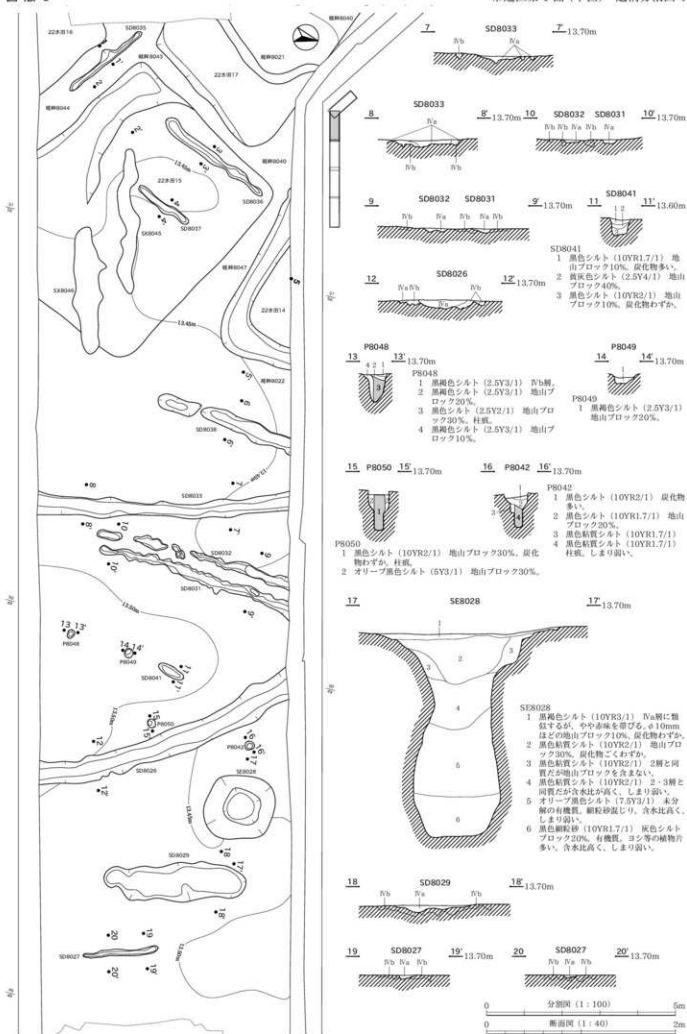
19
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8060
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

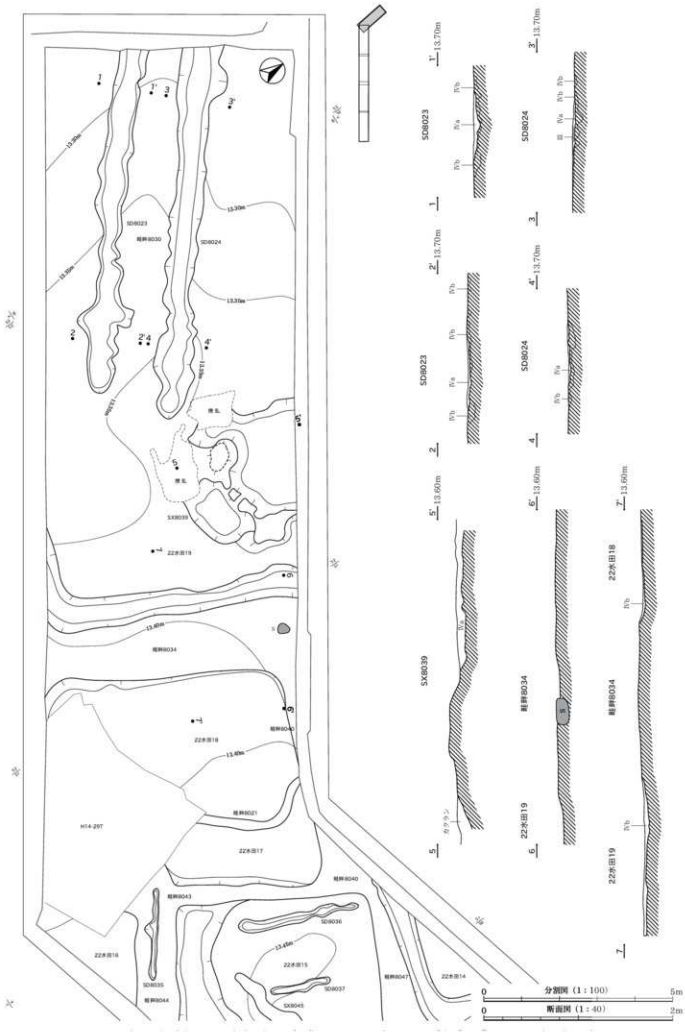
20
1 灰褐色シルト (10YR6/1) Fa層を基準とする、灰化物まばら、
SK8059
2 赤色粘質シルト (10YR5/1) 地山プロック30%、灰化物ごくまばら、
厚さ10cm程、柱状土片、

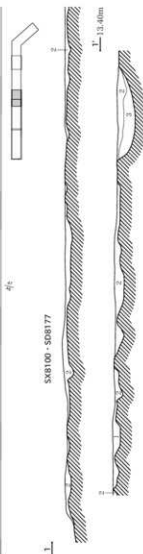
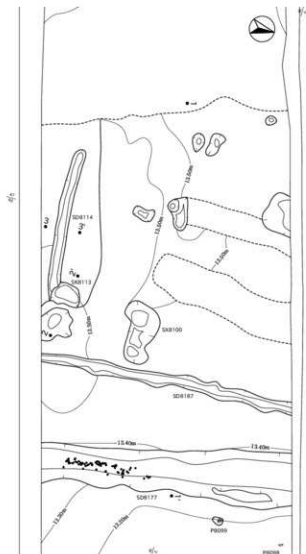
分割図4



0 5m
分割図 (1:100)
0 2m
断面図 (1:40)





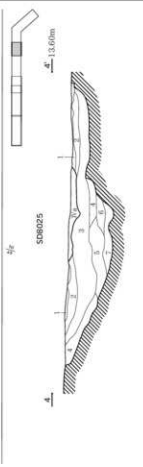
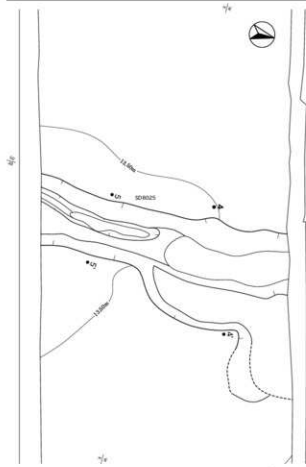


SD8100、SD8177、SD8187
 1 灰色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ20%、炭化物多い。
 2 黒色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ30%、炭化物多。
 3 黒色シルト (7.5Y4/1) 堀山プロッタ30%、炭化物多。土層内には二次堆積を受けたもの特徴的。土層に伴う動物相が、土層には二次堆積を受けたもの特徴的。土層に伴う動物相が、土層には二次堆積を受けたもの特徴的。土層に伴う動物相が、土層には二次堆積を受けたもの特徴的。
 4 黒色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ20%、炭化物多い。
 5 黒色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ20%、炭化物多い。

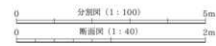
SD8113
 1 灰色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ40%、炭化物多くわずら。

SD8114
 1 灰色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ40%、炭化物多くわずら。

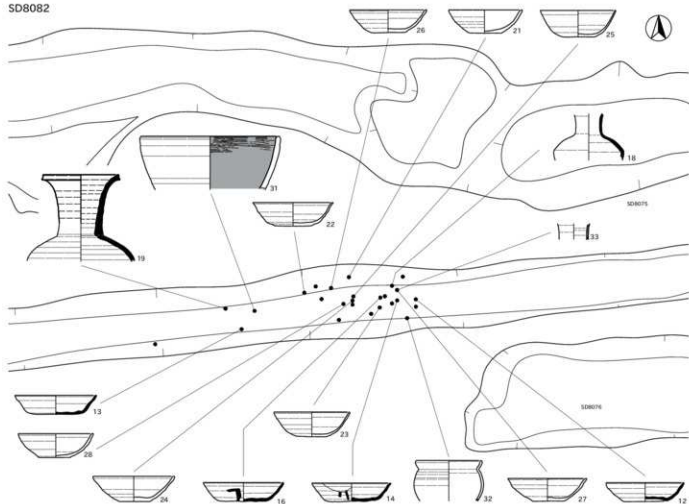
SD8110
 1 灰色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ40%、炭化物多くわずら。



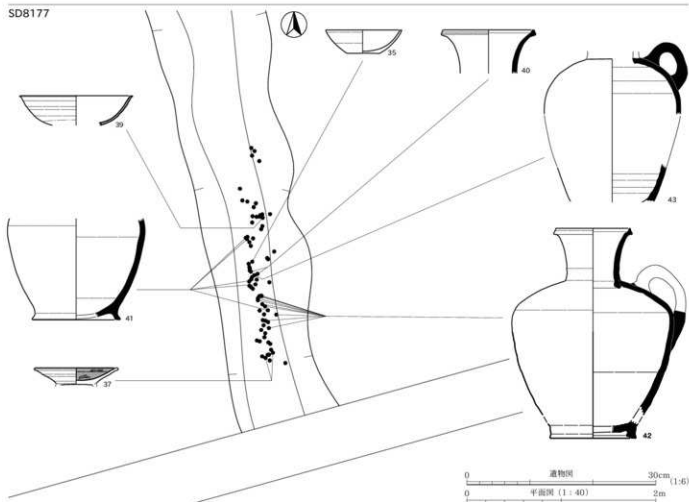
SD8025
 1 オートグラフ黒色シルト (5Y3/1) 炭積埋没後の埋積、N.A面に切られ、より明るい。
 2 灰色シルト (5Y5/1) 遺構埋没後の埋積、N.A面に切る。
 3 黒色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ20%、炭化物多。
 4 黒色シルト (7.5Y4/1) 堀山プロッタ20%、炭化物多。
 5 灰色シルト (7.5Y5/1) 堀山プロッタ20%、炭化物多。
 6 灰色シルト (7.5Y5/1) 5層よりやや粘性強く、炭化物多。
 7 灰色シルト (10Y4/1) 4層より明るく、しまり強い、炭化物多。

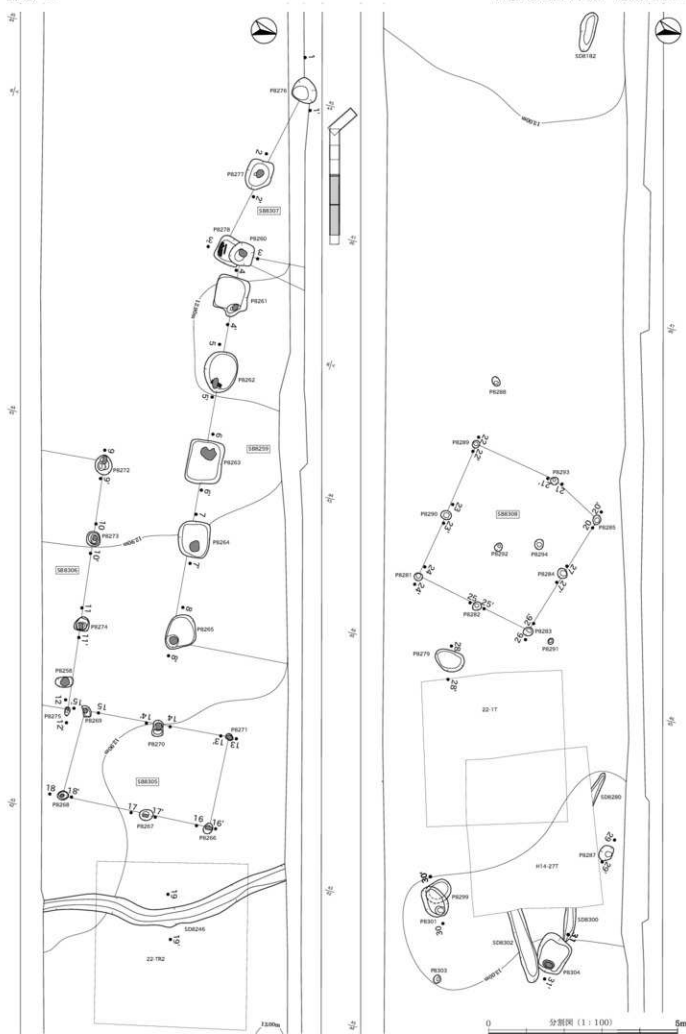


SD8082

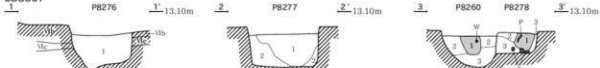


SD8177





SB8307



P8276

- 1 灰色粘質シルト (7.5V4/1) 地山ブロック50%、炭化物ごくわずか、

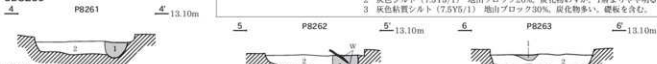
P8277

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
2 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック50%、炭化物わずか、

P8260

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 炭化物わずか、白色粒子わずか、柱状、
2 灰色シルト (7.5V5/1) 粒子の大きい炭化物 (5-10mm) 稀で多い、
3 オリーブ黒色シルト (7.5V3/1) 地山ブロック20%、炭化物稀で多い、

SB8259



P8261

- 1 暗黄灰色シルト (2.5V4/2) 地山ブロック40%、炭化物わずか、有機質を含む、柱状、
2 黄灰色シルト (2.5V5/1) 地山ブロック50%、中粒砂混じり、炭化物多い、

P8262

- 1 黄灰色粘質シルト (2.5V4/1) 灰色シルトブロックの混入、炭化物わずか、
2 灰色粘質シルト (7.5V4/1) 灰色シルトブロックと黄灰色シルトブロックの混入、炭化物多い、

P8263

- 1 灰色粘質シルト (5V5/1) 地山ブロック50%、炭化物多い、柱状、
2 暗黄灰色シルト (2.5V4/2) 灰色シルトブロック (50%) と黒褐色ブロック (50%) の混入、炭化物わずか、
3 黄灰色粘質シルト (2.5V4/1) 地山ブロック混入、炭化物多い、

P8264

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロックと細粒砂の混入、炭化物ごくわずか、柱状、
2 黄灰色粘質シルト (2.5V5/1) 地山ブロック混入 (炭化物混入率約3%)、炭化物ごくわずか、
3 灰色粘質シルト (7.5V4/1) 灰色シルトブロックと中粒砂の混入、

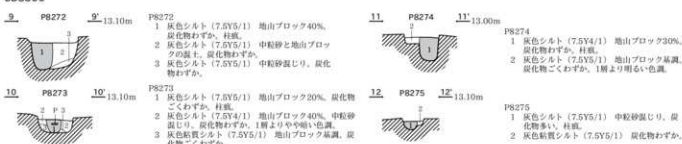
P8265

- 1 灰色粘質シルト (5V5/1) 地山ブロック50%、炭化物多い、柱状、
2 暗黄灰色シルト (2.5V4/2) 灰色シルトブロック (50%) と黒褐色ブロック (50%) の混入、炭化物わずか、
3 灰色シルト (7.5V5/1) 炭化物ごくわずか、

P8266

- 1 黄灰色シルト (2.5V4/1) 地山ブロック50%、中粒砂混じり、炭化物稀で多い、
2 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 灰色シルトブロック30%、
3 灰色シルト (7.5V5/1) 炭化物ごくわずか、

SB8306



P8272

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物わずか、柱状、
2 灰色シルト (7.5V5/1) 中粒砂と地山ブロックの混入、炭化物わずか、
3 灰色シルト (7.5V5/1) 中粒砂混じり、炭化物わずか、

P8273

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック20%、炭化物ごくわずか、柱状、
2 灰色シルト (7.5V4/1) 地山ブロック40%、中粒砂混じり、炭化物わずか、
3 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック混入、炭化物ごくわずか、

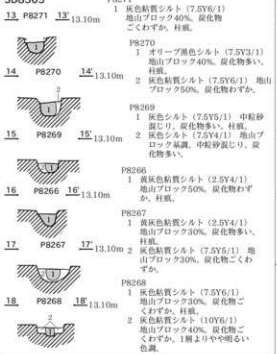
P8274

- 1 灰色シルト (7.5V4/1) 地山ブロック30%、炭化物わずか、柱状、
2 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック混入、炭化物ごくわずか、1層より明るい色調、

P8275

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 中粒砂混じり、炭化物多い、柱状、
2 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 炭化物わずか、

SB8305



P8271

- 1 灰色粘質シルト (7.5V6/1) 地山ブロック40%、炭化物ごくわずか、柱状、

P8270

- 1 オリーブ黒色シルト (7.5V3/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、柱状、
2 灰色粘質シルト (7.5V6/1) 地山ブロック50%、炭化物わずか、

P8269

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 中粒砂混じり、炭化物多い、柱状、
2 灰色シルト (7.5V4/1) 地山ブロック混入、中粒砂混じり、炭化物多い、

P8266

- 1 黄灰色粘質シルト (2.5V4/1) 地山ブロック50%、炭化物わずか、柱状、

P8267

- 1 黄灰色粘質シルト (2.5V4/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、柱状、
2 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック30%、炭化物ごくわずか、

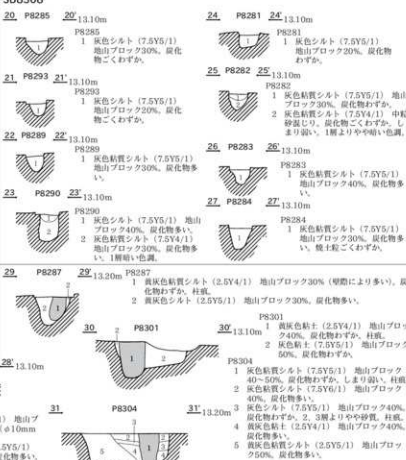
P8268

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック30%、炭化物ごくわずか、柱状、
2 灰色粘質シルト (10V6/1) 地山ブロック40%、炭化物ごくわずか、1層よりやや明るい色調、

SDB246

- 1 灰色粘質シルト (2.5GV6/1) 中粒砂の混入、炭化物わずか、
2 暗オリーブ灰色粘質シルト (2.5GV4/1) 地山ブロック混入、
3 オリーブ灰色粘質シルト (2.5GV6/1) 炭化物わずか、

SB8308



P8285

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック30%、炭化物ごくわずか、

P8293

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック20%、炭化物ごくわずか、

P8289

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、

P8290

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
2 灰色粘質シルト (7.5V4/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、1層より色調、

P8281

- 1 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック20%、炭化物わずか、

P8282

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック30%、炭化物わずか、
2 灰色粘質シルト (7.5V4/1) 中粒砂混じり、炭化物ごくわずか、しまり強い、1層よりやや明るい色調、

P8283

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
2 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、

P8284

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40-50%、炭化物わずか、しまり強い、柱状、
2 灰色粘質シルト (7.5V6/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
3 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物わずか、2、3層よりやや砂質、柱状、
4 黄灰色シルト (2.5V4/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
5 黄灰色粘質シルト (2.5V5/1) 地山ブロック50%、炭化物多い、

P8287

- 1 黄灰色粘質シルト (2.5V4/1) 地山ブロック30% (層間により多い)、炭化物わずか、柱状、
2 黄灰色シルト (2.5V5/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、

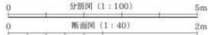
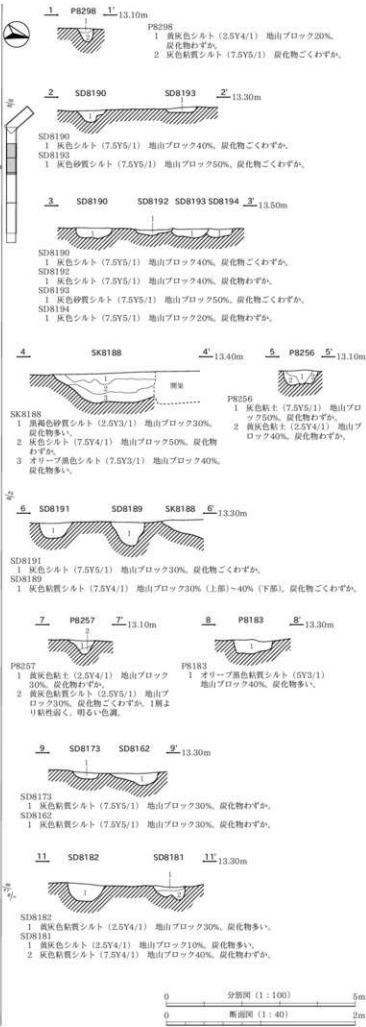
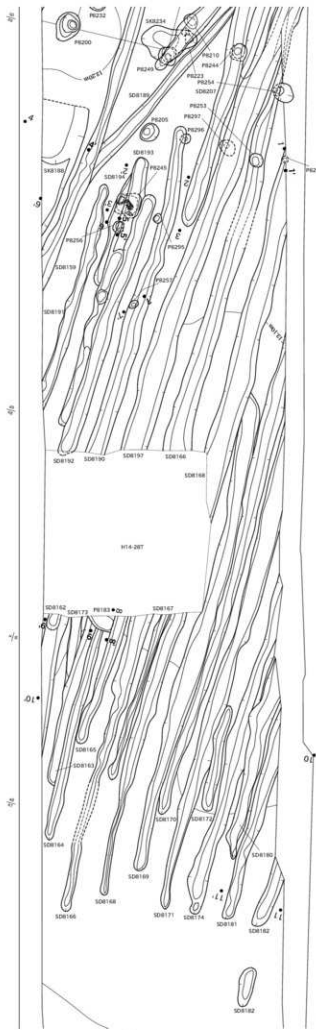
P8301

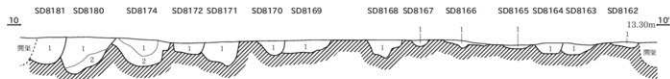
- 1 黄灰色粘土 (2.5V4/1) 地山ブロック40%、炭化物わずか、柱状、
2 灰色粘土 (7.5V5/1) 地山ブロック50%、炭化物わずか、

P8304

- 1 灰色粘質シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40-50%、炭化物わずか、しまり強い、柱状、
2 灰色粘質シルト (7.5V6/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
3 灰色シルト (7.5V5/1) 地山ブロック40%、炭化物わずか、2、3層よりやや砂質、柱状、
4 黄灰色シルト (2.5V4/1) 地山ブロック40%、炭化物多い、
5 黄灰色粘質シルト (2.5V5/1) 地山ブロック50%、炭化物多い、

断面図 (1:40) 2m





SD8181

1 黄灰色シルト (2.5V4/1) 地山ブロック10%。炭化物多い。

SD8180

1 暗緑灰色シルト (10GY4/1) 地山ブロック40%。炭化物ごくわずか。

2 黄灰色シルト (2.5V4/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

SD8174

1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。

2 オリーブ黒色粘質シルト (7.5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

SD8172

1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

SD8171

1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物多い。SD8172よりしり強く明るい色調。

SD8170

1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック40%。炭化物わずか。

SD8169

1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。SD8170よりしり強く明るい色調。

SD8168

1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック20%。炭化物多い。

SD8167

1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

SD8166

1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック60%。炭化物多い。

SD8165

1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物多い。

SD8164

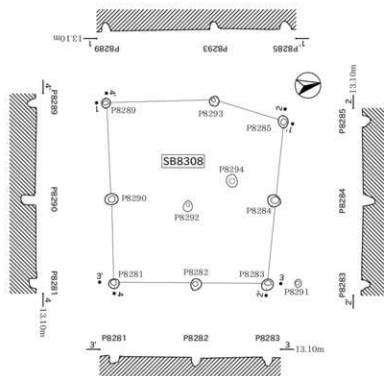
1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック10%。炭化物多い。

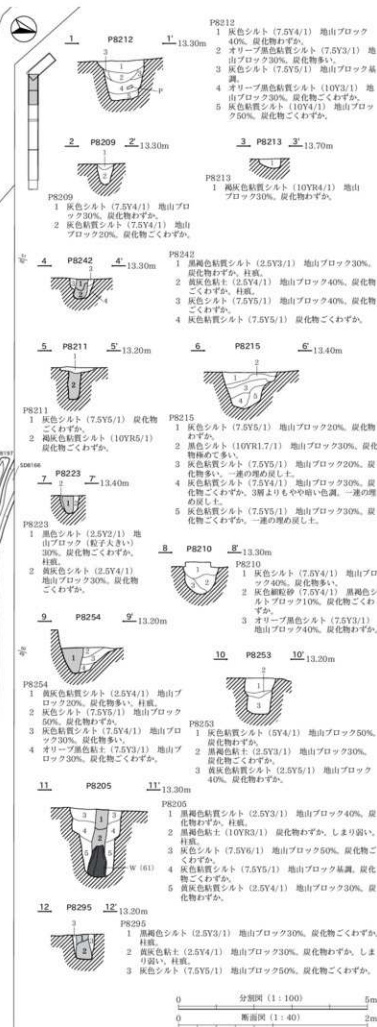
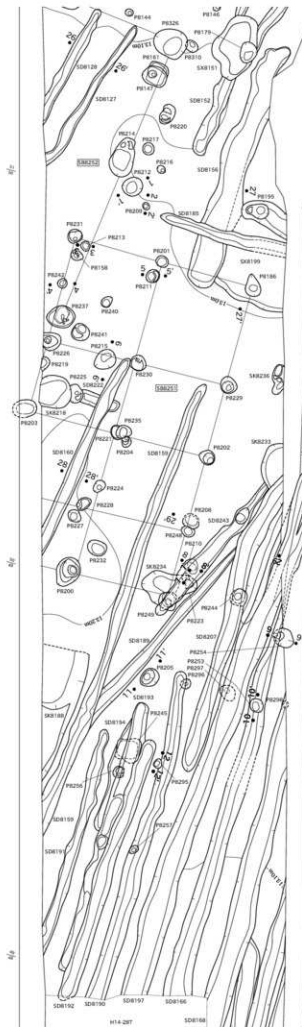
SD8163

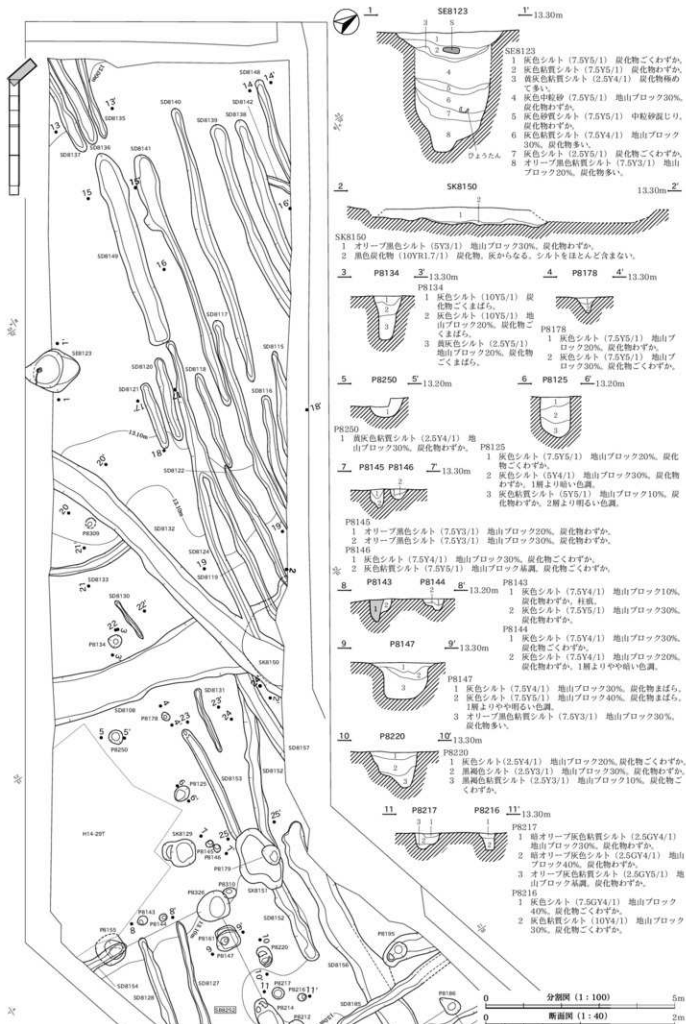
1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

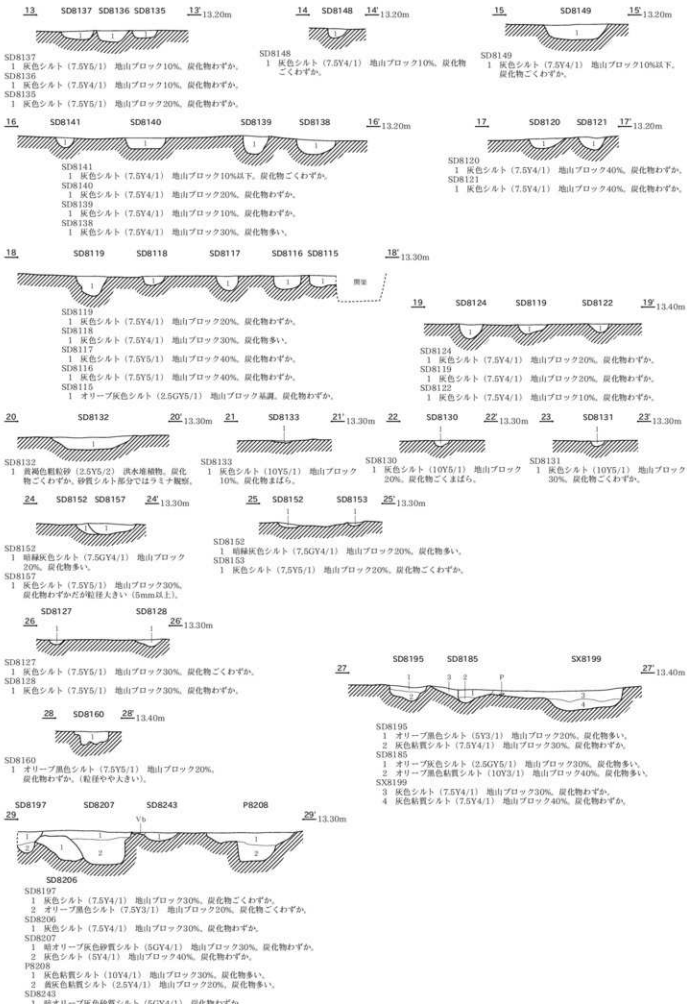
SD8162

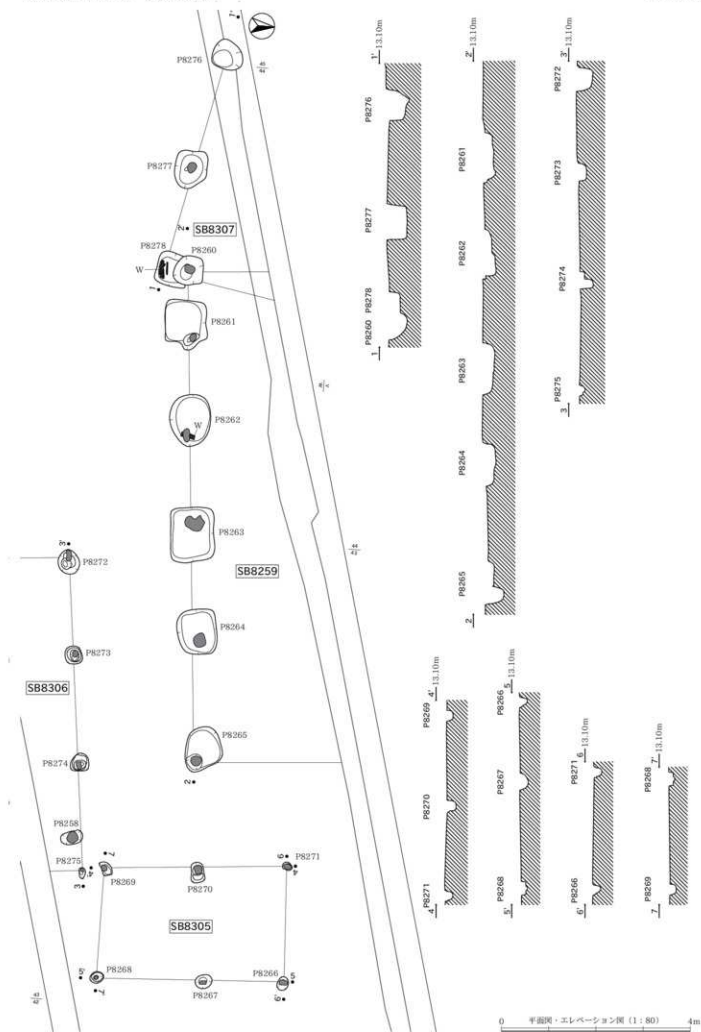
1 灰色粘質シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。

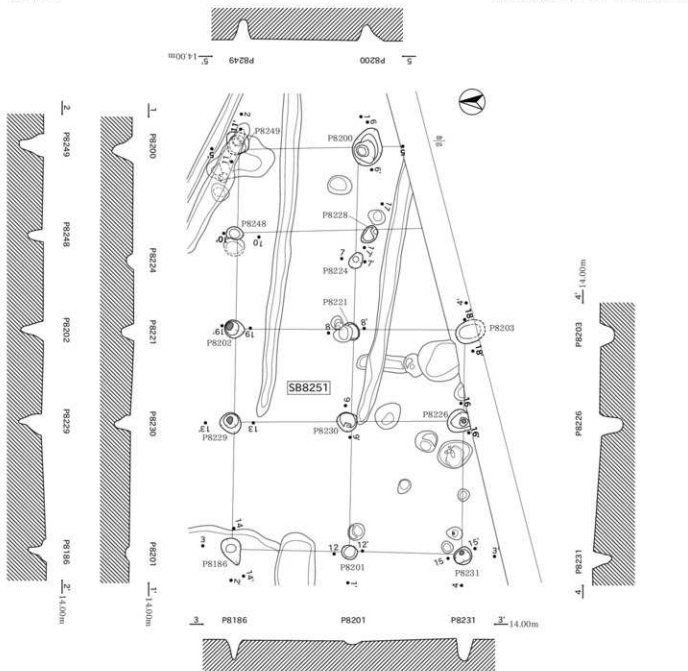












6 P8200 6' 13.40m



- P8200
- 1 灰色砂質シルト (10Y5/1) 炭化物ごくわずか。
 - 2 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物多い。
 - 3 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

7 P8224 7' 13.40m



- P8224
- 1 オリーブ灰色砂質シルト (2.5GY5/1) 地山ブロック40%。炭化物ごくわずか。
 - 2 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック50%。炭化物ごくわずか。

8 P8235 8' 13.40m



- P8235
- 1 暗オリーブ灰色砂質シルト (2.5GY4/1) 地山ブロック50%。炭化物わずか。
 - 2 オリーブ灰色シルト (2.5GY6/1) 地山ブロック50%。炭化物多い。

9 P8230 9' 13.30m



- P8230
- 1 灰色シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック40%。炭化物ごくわずか。
 - 2 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
 - 3 灰色粘質シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
 - 4 黄灰色粘質シルト (2.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。しまり強い。

10 P8248 10' 13.30m



- P8248
- 1 灰色粘土 (7.5Y4/1) 地山ブロック10%。炭化物わずか。柱眼。
 - 2 灰色砂質シルト (7.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
 - 3 灰色粘質シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック10%。炭化物わずか。

11 SK8234 P8249 11' 13.30m

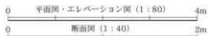


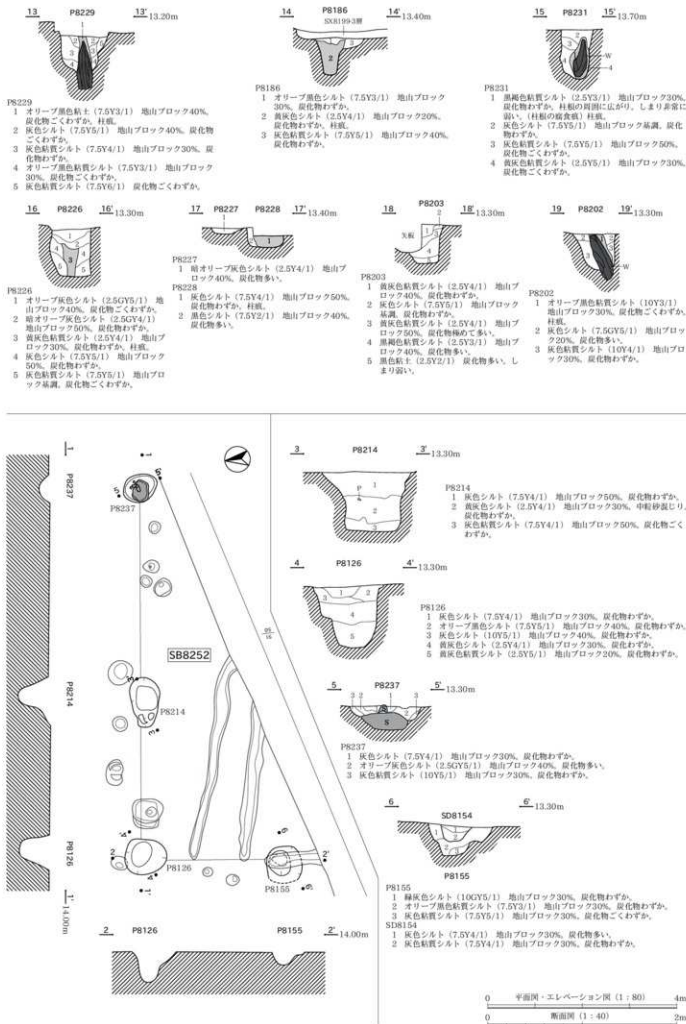
- SK8234
- 1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物多い。
 - 2 灰色粘質シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック20%。炭化物わずか。
 - 3 黒色粘質シルト (10YR1.7/1) 炭化物極めて多い。
 - 4 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
 - 5 灰色粘質シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック40%。炭化物ごくわずか。
 - 6 オリーブ黒色粘土 (7.5Y3/1) 地山ブロック40%。炭化物わずか。
- P8249
- 1 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
 - 2 灰色シルト (7.5Y4/1) 地山ブロック40%。炭化物わずか。
 - 3 オリーブ黒色シルト (7.5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物多い。

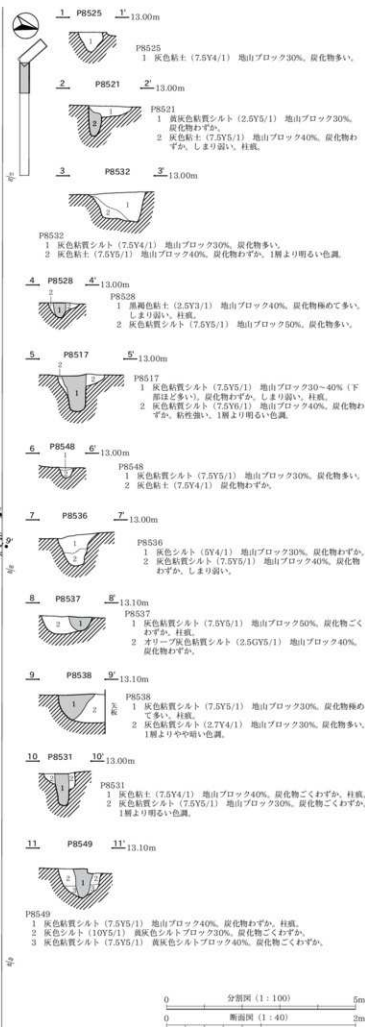
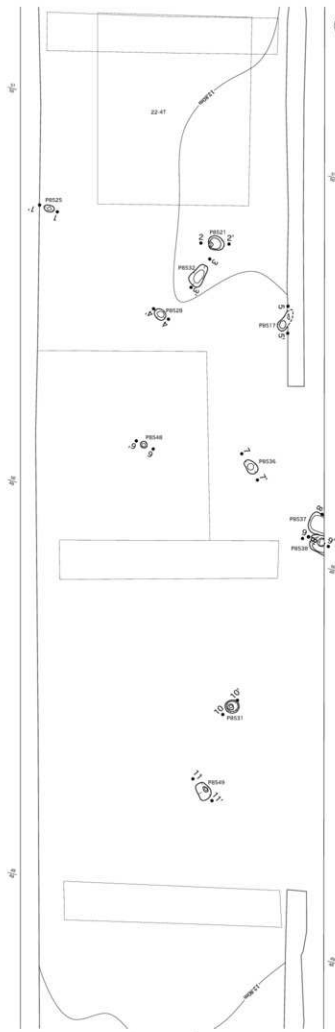
12 P8201 12' 13.30m

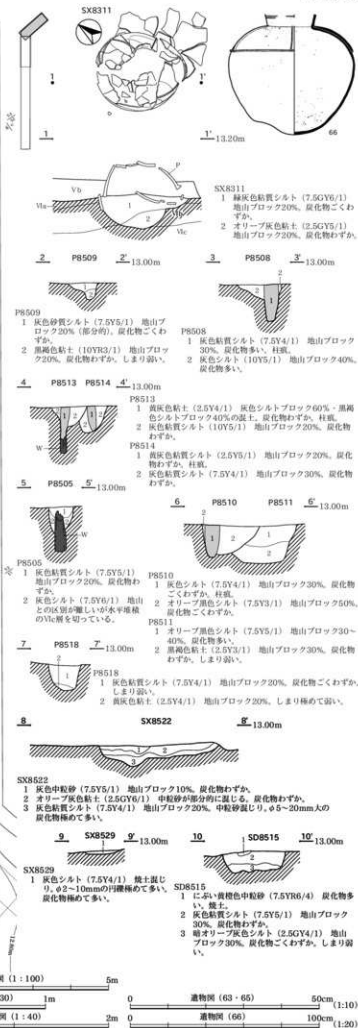
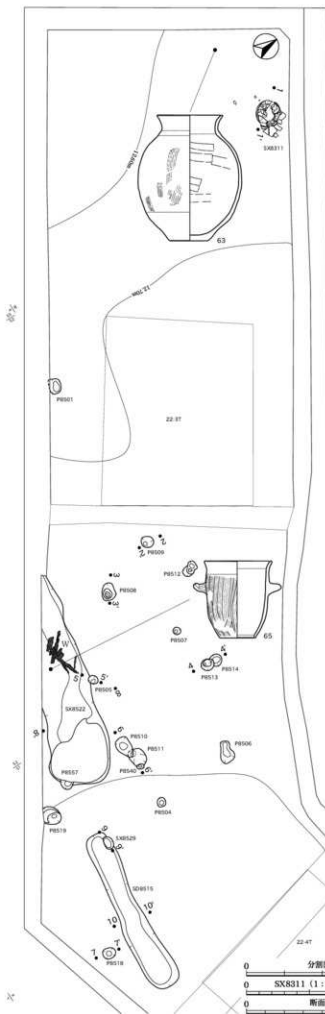


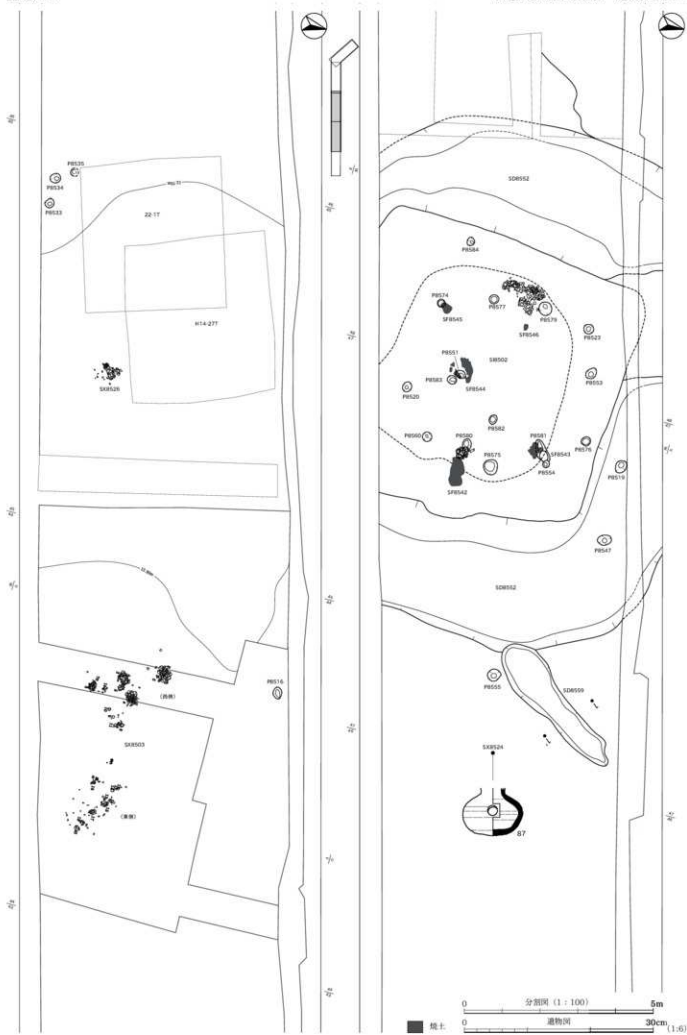
- P8201
- 1 黄灰色粘質シルト (2.5Y5/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。

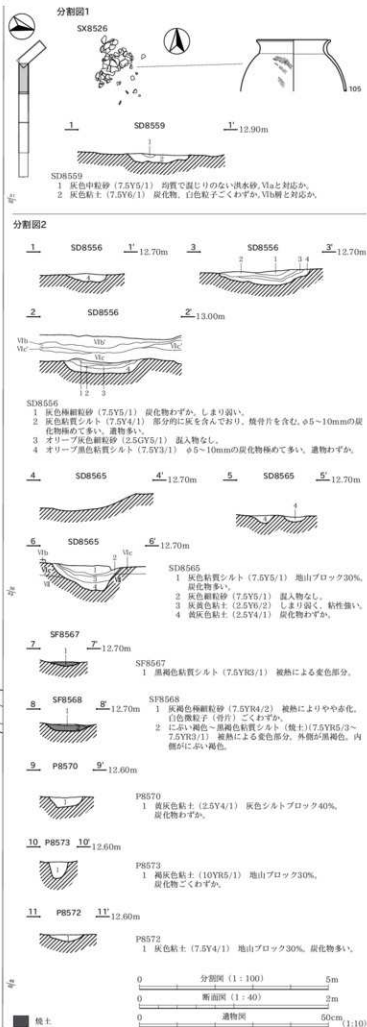
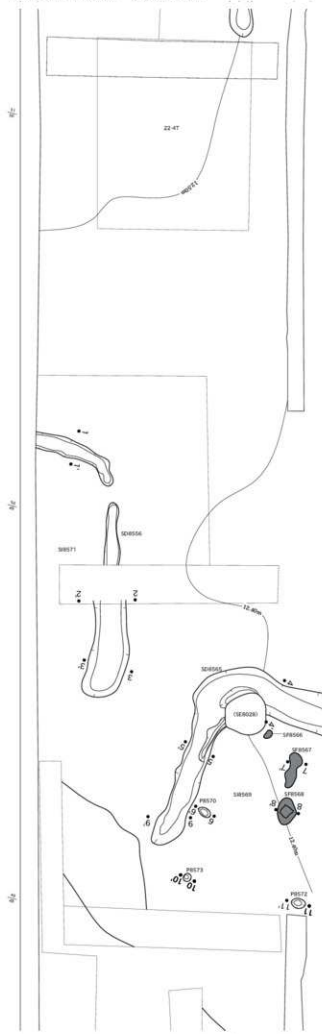




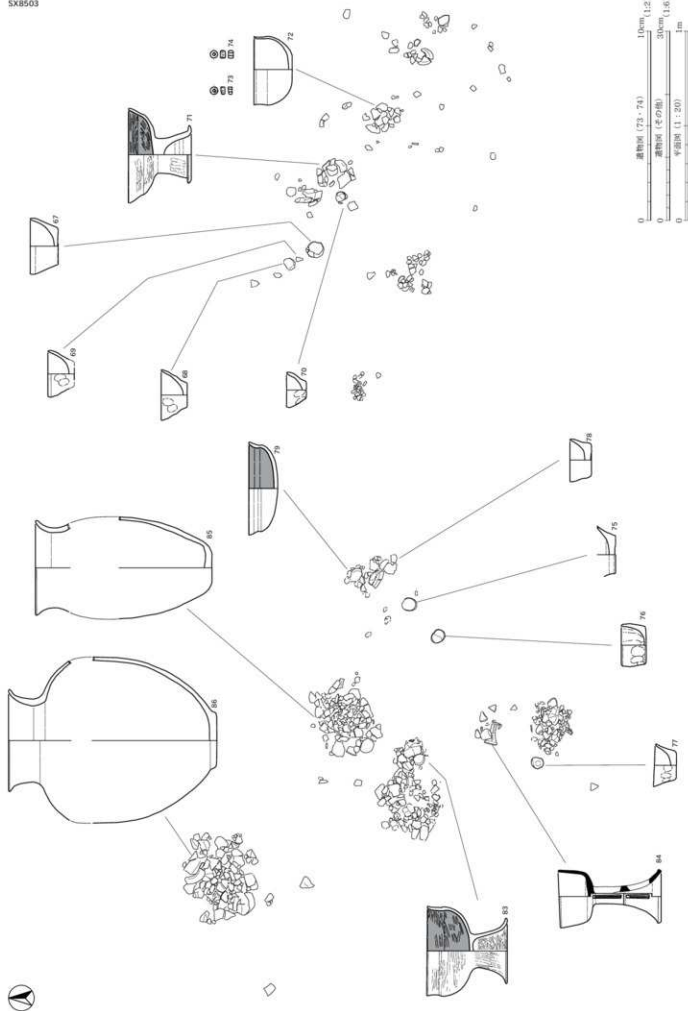


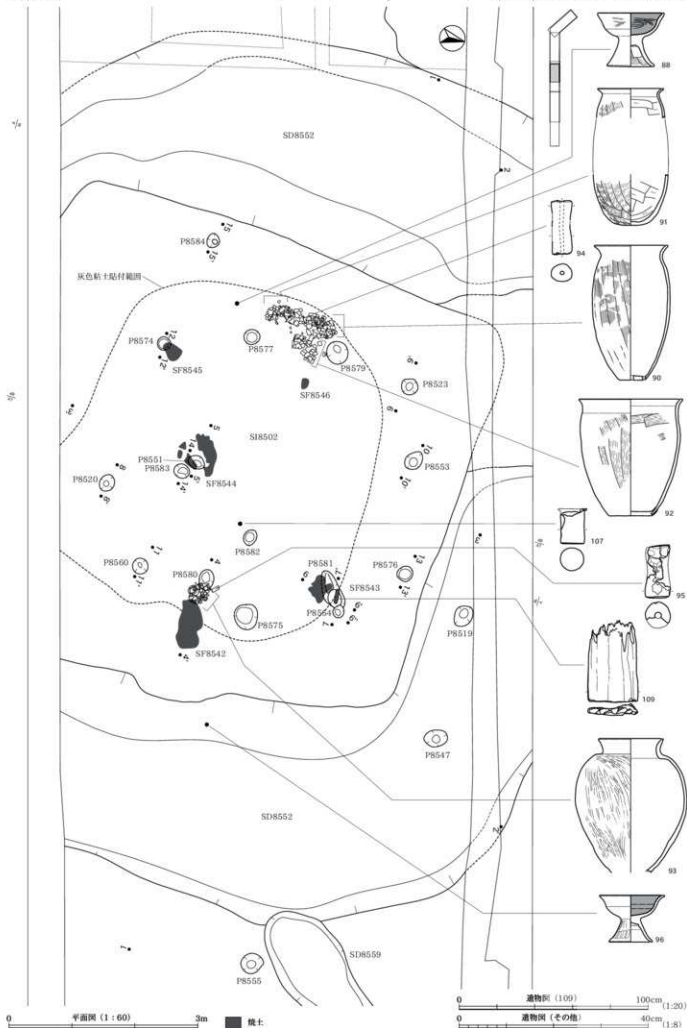


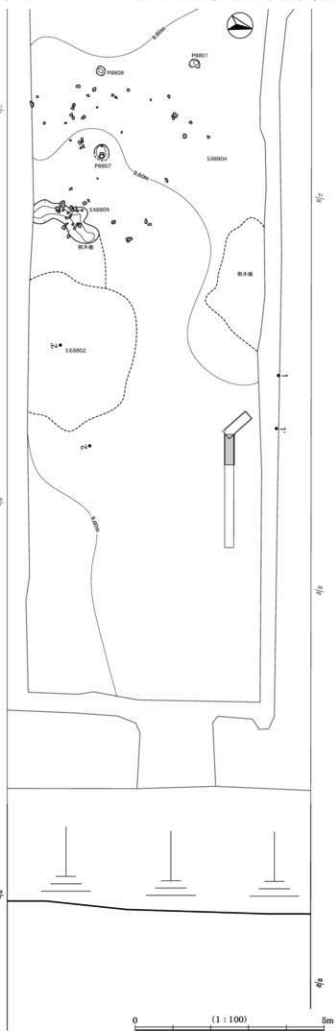
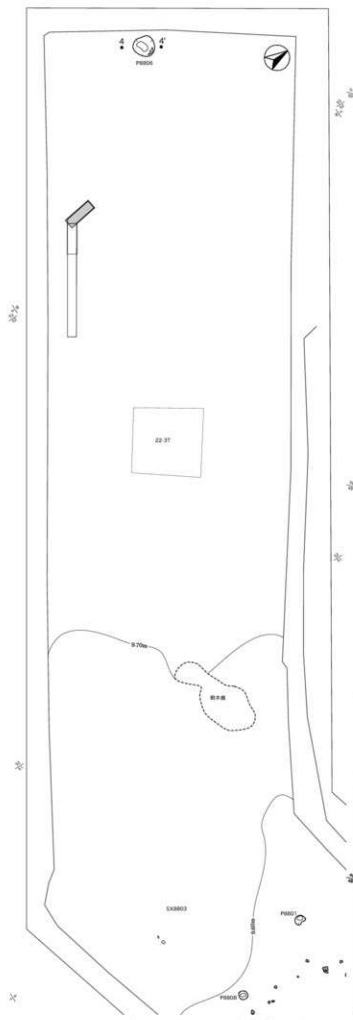




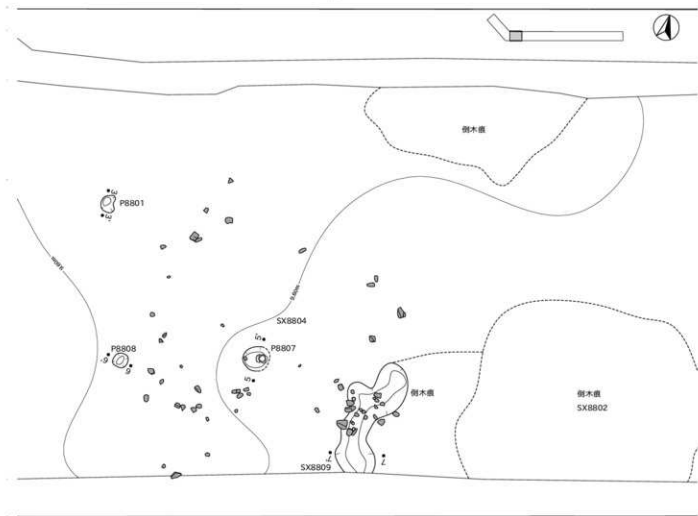
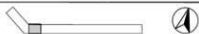
SKB503





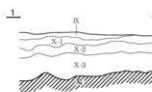


北



北

0 平面図 (1:60) 3m



1 10.20m 2



2 10.00m

3 P8801 3 10.00m



P8801
1 灰色粘土 (7.5Y5/1) 地山ブロック20%、炭化物、白色粒子多い。
2 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック30%、炭化物極めて多い、白色粒子わずか。

4 P8806 4 9.90m



P8806
1 灰色粘土 (7.5Y4/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、しまり強い。
2 灰色粘土 (7.5Y4/1) 地山ブロック20%、炭化物わずか、白色粒子多い、しまり強い。
1層より明るい色調。
3 灰色粘土 (7.5Y5/1) 炭化物ごくわずか、しまり強い、地山より暗い色調で明確に区別できる。

5 P8807 5 9.80m



P8807
1 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 地山ブロック30%、炭化物わずか、完形土器を含む。



110

6 P8808 6 9.90m



P8808
1 黒褐色粘土 (2.5Y3/2) 地山ブロック20%、炭化物わずか。

7 SX8809 7 9.80m

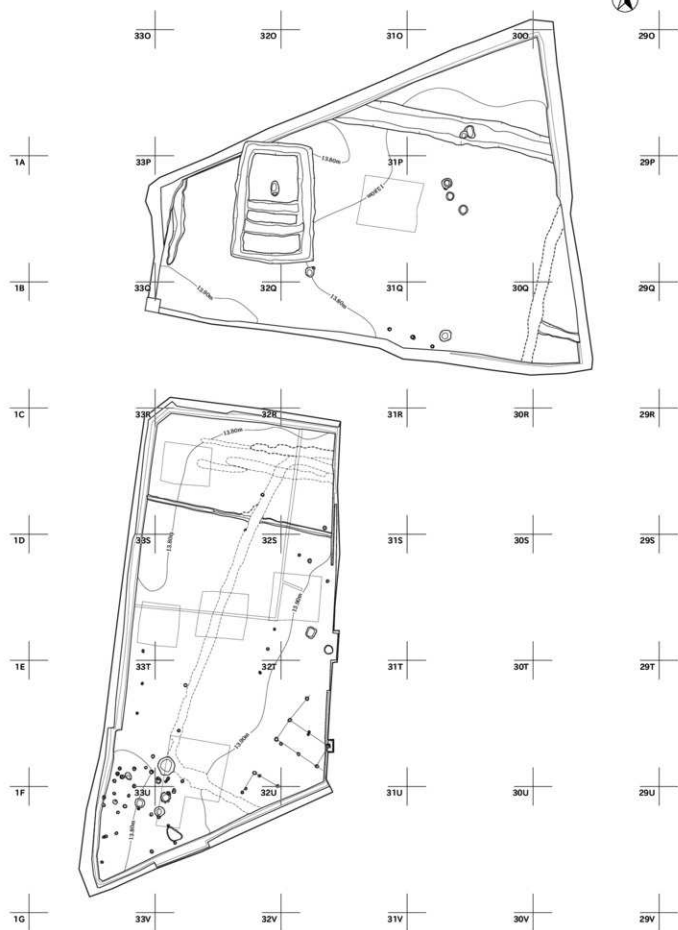


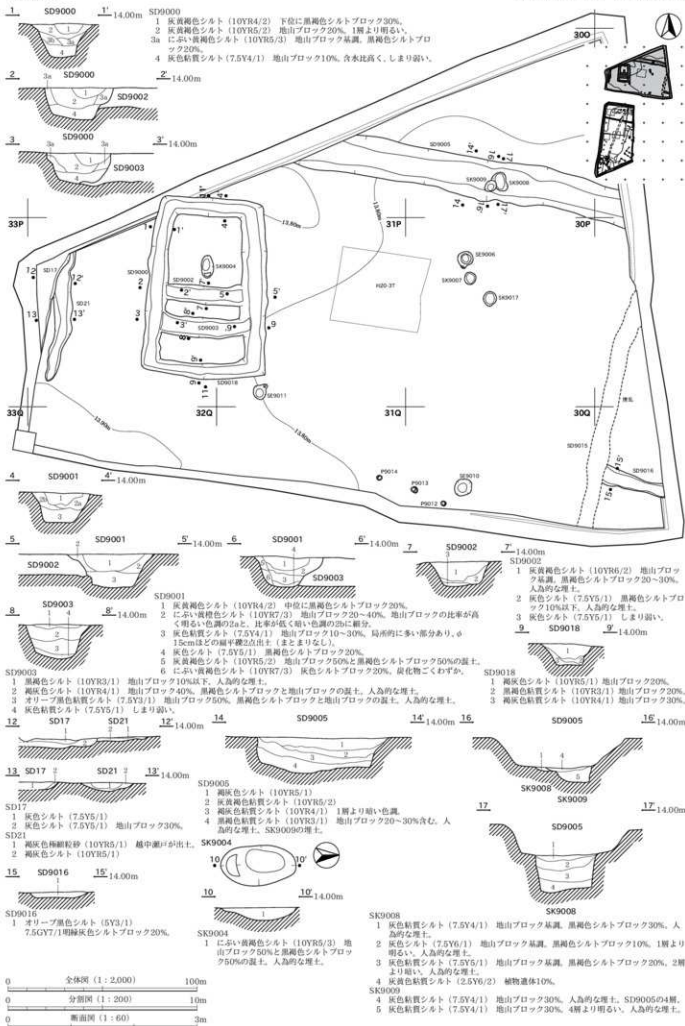
SX8809
1 灰色粘土 (7.5Y4/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、しまり強い。

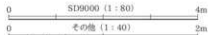
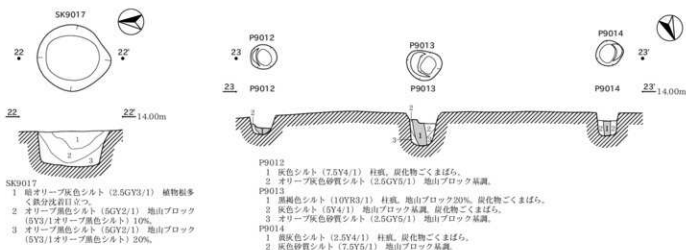
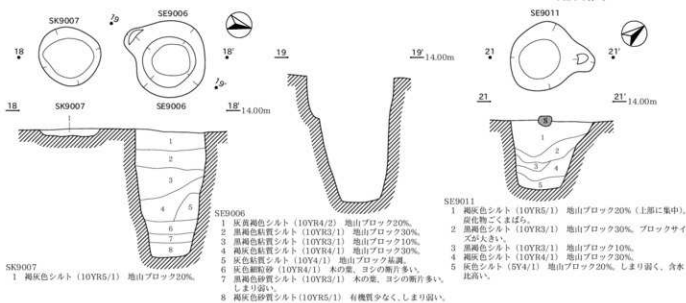
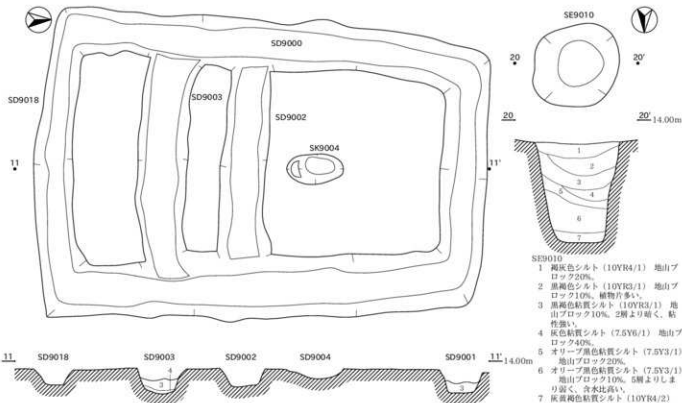
0 遺構図 30cm (1:6)

0 断面図 (1:40) 2m









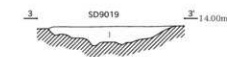
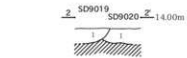
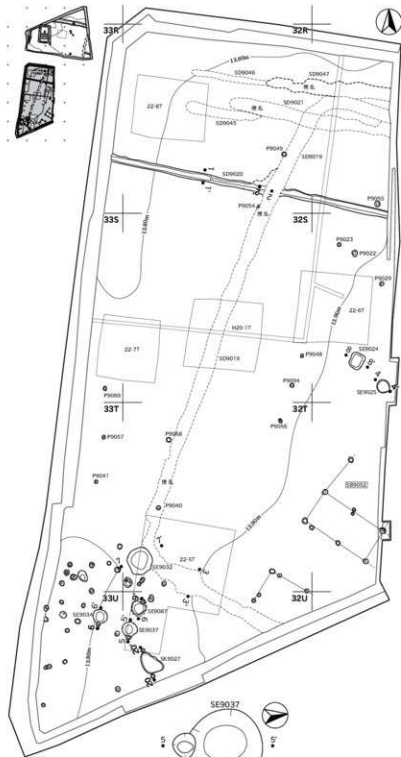
SK9007
1 褐色シルト(10YR5/1) 地山ブロック20%.

SE9006
1 灰褐色シルト(10YR4/2) 地山ブロック20%。
2 黒褐色粘質シルト(10YR3/1) 地山ブロック30%。
3 黒褐色粘質シルト(10YR3/1) 地山ブロック10%。
4 褐色粘質シルト(10YR4/1) 地山ブロック30%。
5 灰粘質シルト(10Y4/1) 地山ブロック基礎。
6 灰色粘砂(10YR4/1) 木の葉。ヨシの断片多い。
7 黒褐色粘質シルト(10YR3/1) 木の葉。ヨシの断片多い。
8 褐色粘質シルト(10YR5/1) 有機質少なく、しまり弱い。

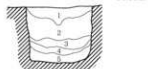
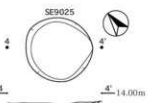
SE9011
1 褐色シルト(10YR5/1) 地山ブロック20%(上部に集中)。炭化物ごくまばら。
2 黒褐色シルト(10YR3/1) 地山ブロック30%。ブロックサイズが大きい。
3 黒褐色シルト(10YR3/1) 地山ブロック10%。
4 褐色シルト(10YR4/1) 地山ブロック30%。
5 灰色シルト(5Y4/1) 地山ブロック20%。しまり弱い、含水比高い。

SK9017
1 粘オリーブ灰色シルト(2.5GY3/1) 植物残多く炭分沈着目立つ。
2 オリーブ黒色シルト(5GY2/1) 地山ブロック(5Y3/1オリーブ黒色シルト)10%。
3 オリーブ黒色シルト(5GY2/1) 地山ブロック(5Y3/1オリーブ黒色シルト)20%。

P9012
1 灰色シルト(7.5Y4/1) 柱痕。炭化物ごくまばら。
2 オリーブ灰色砂質シルト(2.5GY5/1) 地山ブロック基礎。
P9013
1 黒褐色シルト(10YR3/1) 柱痕。地山ブロック20%。炭化物ごくまばら。
2 灰色シルト(5Y4/1) 地山ブロック基礎。炭化物ごくまばら。
3 オリーブ灰色砂質シルト(2.5GY5/1) 地山ブロック基礎。
P9014
1 褐色シルト(2.5Y4/1) 柱痕。炭化物ごくまばら。
2 灰色砂質シルト(7.5Y5/1) 地山ブロック基礎。



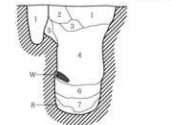
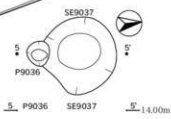
- SD9019
1 灰色粘質シルト (2.5Y5/1) 地山ブロック10%。炭化物わずか。
1層をベースとしており、視認の可能性。
- SD9020
1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック10%。炭化物ごくわずか。
2 暗黄灰色砂質シルト (2.5Y5/2) 地山ブロック40%。炭化物ごくわずか。
3 黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。



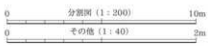
- SE9025
1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
2 にぶい黄褐色砂質シルト (2.5Y6/3) 地山ブロック70%と黄灰色シルト30%の混土。
3 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
4 オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
5 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック (灰色シルトブロック) を部分的に混入。炭化物ごくわずか。

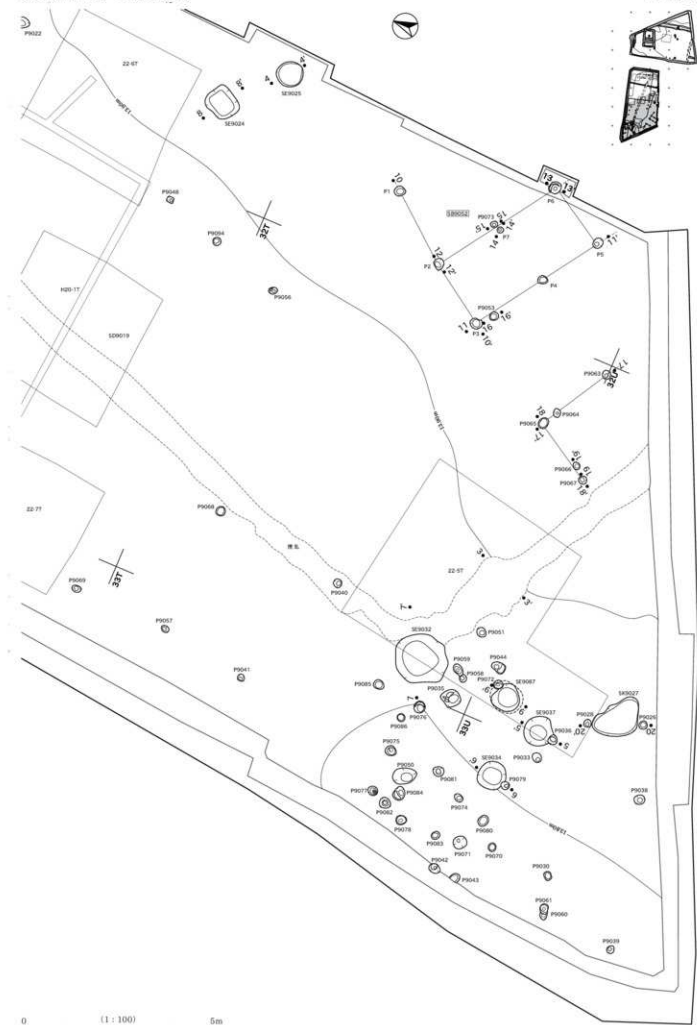


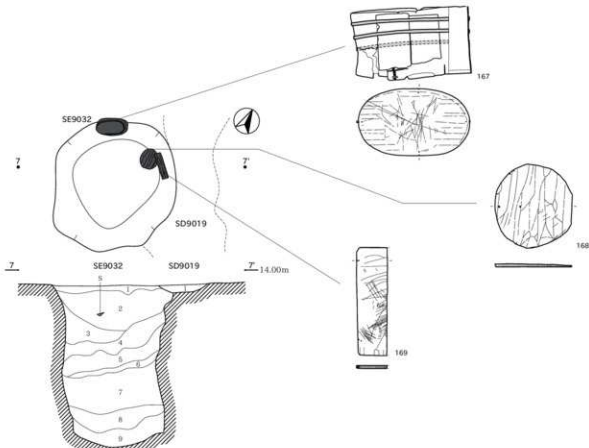
- P9033
1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック20%。炭化物わずか。
- SE9037
1 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
2 黄灰色粘質シルト (2.5Y5/1) 地山ブロック40%。炭化物多い。
3 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
4 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 地山ブロック20%。炭化物わずか。
5 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
6 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロック20%。泥炭質。
7 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロック30%。しり強い。泥炭質。
8 黄褐色粘土 (10YR4/1) 地山ブロック30%。泥炭質。



- P9033
1 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 粒子の細かい地山ブロック20%。炭化物ごくわずか。
2 オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 地山ブロック10%。炭化物ごくわずか。
- SE9034
1 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
2 灰オリーブ色シルト (7.5Y6/2) 地山ブロック70%。炭化物多い。
3 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 地山ブロック10%。炭化物ごくわずか。
4 オリーブ灰色シルト (5GY6/1) 地山ブロック80%。炭化物わずか。
5 オリーブ黄褐色粘質シルト (5Y3/1) 地山ブロック10%。炭化物わずか。
6 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 地山ブロック20%。炭化物ごくわずか。

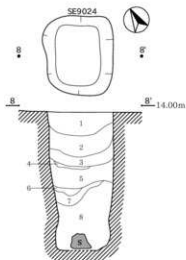






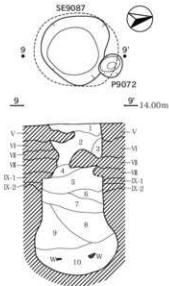
SE9032

- 1 暗黄灰色砂質シルト (2.5Y5/2) 1層に似ており、覆瓦の可能性。
- 2 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 地山ブロック20%。炭化物わずか。漆洲様多く出土。越中瀬戸横1点出土。
- 3 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 地山ブロック40%。炭化物わずか。しまり弱い。
- 4 灰色粘土 (5Y4/1) 地山ブロック70%。炭化物ごくわずか。
- 5 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
- 6 灰色粘土 (7.5Y5/1) 地山ブロック基調。下部に炭化物を顆粒に含む。含水比高く、しまり弱い。
- 7 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 地山ブロック40%。炭化物わずか。木製品を含む。
- 8 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。しまりやや強い。未分解のコシを多く含む。その上からφ3cmほどの円筒が多く出土。遺物を多く含む。
- 9 灰色粘土 (7.5Y5/1) 地山ブロック70%と黒褐色シルトブロック30%の混土。炭化物ごくわずか。粘性強く、しまりやや弱い。



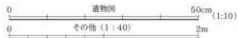
SE9087

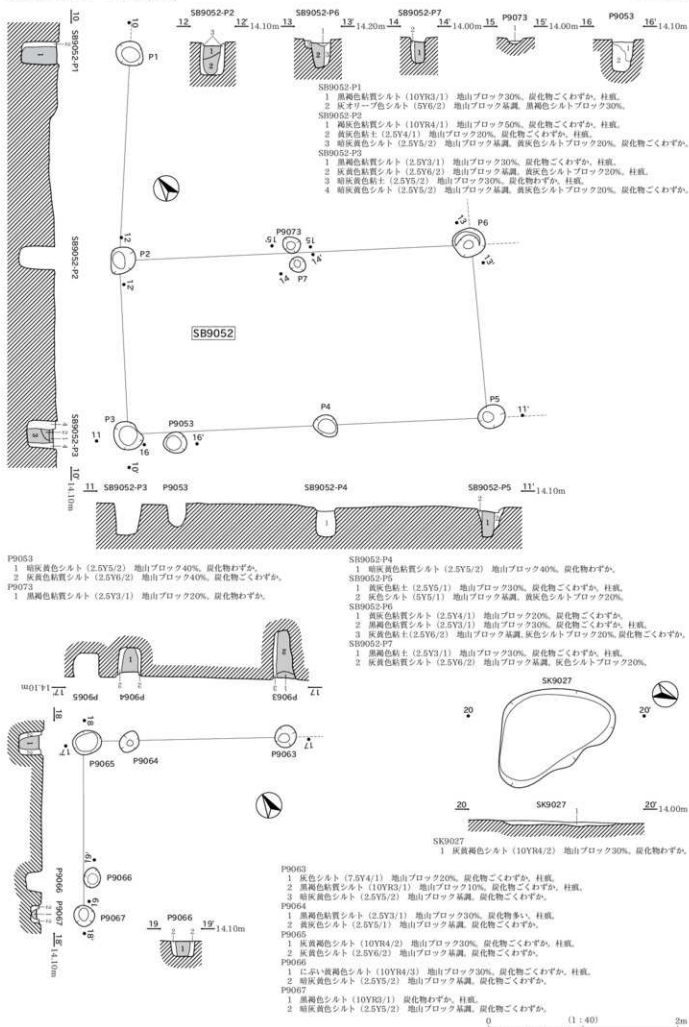
- 1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物ごくわずか。
- 2 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 地山ブロック50%。炭化物わずか。
- 3 灰色粘質シルト (7.5Y6/1) 地山ブロック基調。炭化物ごくわずか。
- 4 灰色粘質シルト (7.5Y6/1) 黒褐色シルトブロック30%。炭化物ごくわずか。
- 5 灰白色粘質シルト (7.5Y7/1) 地山ブロック基調。炭化物ごくわずか。地山に散在するが、瓦割を切っているため把握できた。
- 6 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック40%。炭化物わずか。
- 7 灰色粘土 (7.5Y6/1) 黒褐色粘土ブロック20%。炭化物ごくわずか。
- 8 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック40%。炭化物ごくわずか。
- 9 灰色粘土 (7.5Y6/1) 地山ブロック基調。黒褐色粘土ブロック20%。炭化物ごくわずか。
- 10 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 地山ブロック (灰色シルト) 30%。炭化物多い。しまり弱い。木製品多数出土。

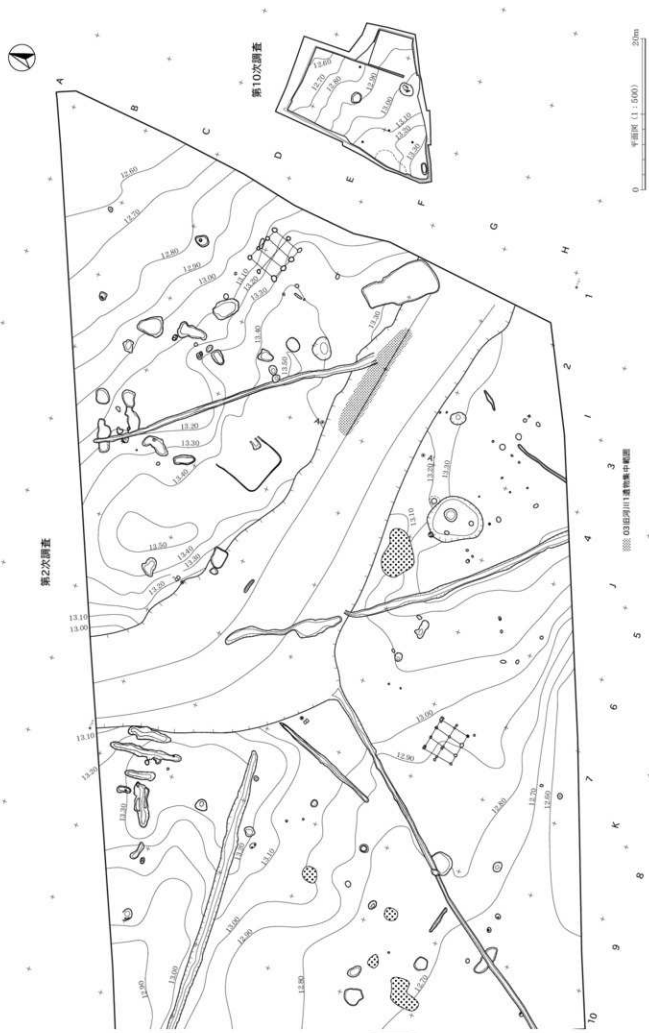


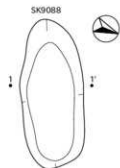
SE9024

- 1 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 地山ブロック20%。炭化物ごくわずか。
- 2 オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物わずか。
- 3 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物多し。
- 4 オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 地山ブロック20%。炭化物除けが多い。しまり弱い。
- 5 オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 地山ブロック30%。炭化物多し。しまり弱い。
- 6 黒褐色粘土 (5Y2/1) 地山ブロック30%。炭化物極めて多い。しまり弱い。
- 7 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 地山ブロック20%。炭化物多し。しまり弱い。
- 8 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック30%。炭化物多し。含水比高く、しまり極めて弱い。





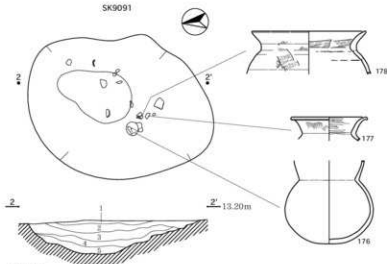




SK9088

- 1 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 地山ブロック20%、炭化物ごくわずか、IV-2層を基調とする。
- 2 灰色粘土 (7.5Y6/1) 地山ブロック基調、黄灰色シルトブロック20%、炭化物わずか、遺物わずか。

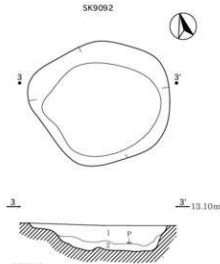
SK9091



SK9091

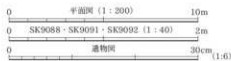
- 1 赤色粘土 (7.5Y2/1) 地山ブロック10%、炭化物わずか、IV-1層に対応。
- 2 オリーブ黒色粘土 (7.5Y3/1) 地山ブロック30%、炭化物多い、IV-2層に対応。
- 3 灰色粘土 (7.5Y6/1) 地山ブロック基調、炭化物多い。
- 4 オリーブ黒色粘土 (7.5Y3/1) 地山ブロック30%、炭化物極めて多い、遺物を多く含む。
- 5 灰色粘土 (7.5Y5/1) 炭化物ごくわずか。

SK9092



SK9092

- 1 灰色粘土 (7.5Y5/1) 黒褐色シルトブロック10%、炭化物多い、遺物を含む。
- 2 灰色粘土 (7.5Y4/1) 炭化物多い、1層より粒子がやや粗く、暗い色調。

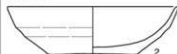


V層



1

SD8025



2



3



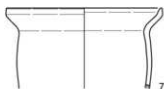
4

■ 黒色処理

SD8075



6



7



8

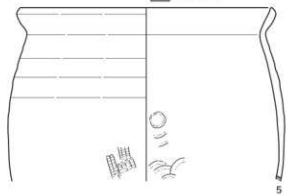


ガラス質



9

■ ガラス質



5

SD8076

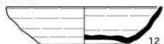


10



11

SD8082



12



14



16



13



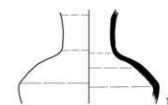
15



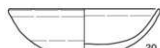
17



22



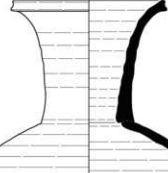
18



20



23



19



24



21



23



25



SD8082



26



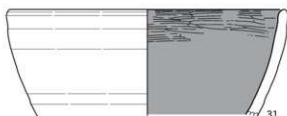
27



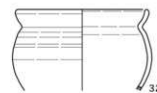
28



29



31



32

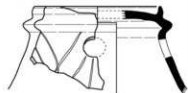


30



33

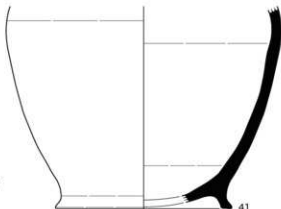
SD8095



34



40



41

SD8177



35



37



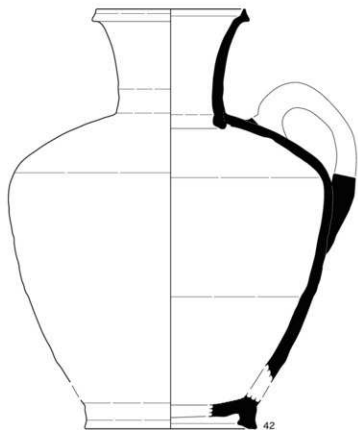
36



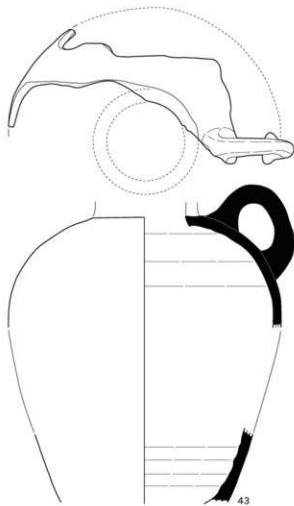
38



39



42

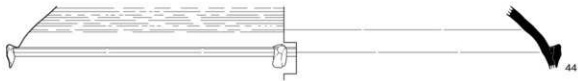


43

■ 黑色処理

0 15cm (1:3)

SD8177

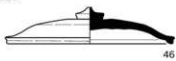


SE8123



■ 黑色処理

P8229



46

P8200



47

SD8117



48

SD8156



49



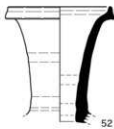
51

SD8188



50

遺構外



52



53



54

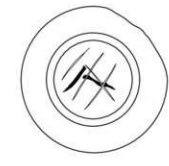
P8309



55



漆



SD8082



○ 56



○ 57

P8244



SE8123



58

P8262



59

P8098



60

P8205



61



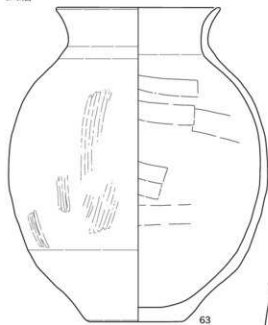
62

■ 樹皮

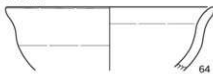
0 (44~57) 15cm (1:3)

0 (58~62) 40cm (1:8)

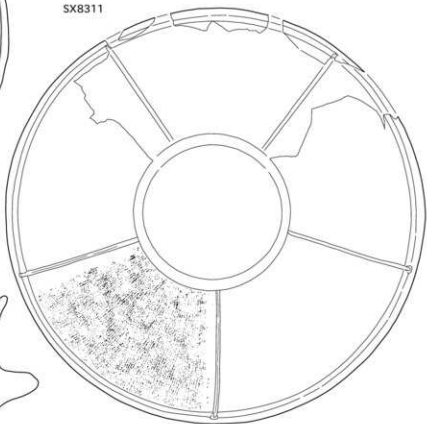
Ma層



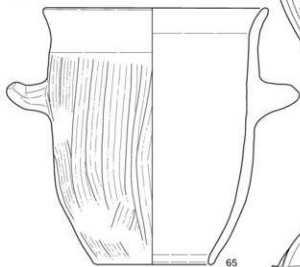
SD8515



SX8311



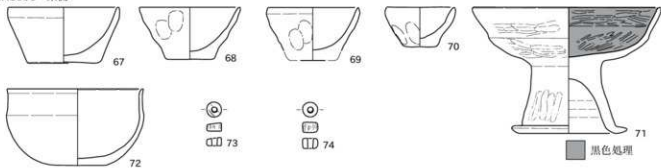
SX8522



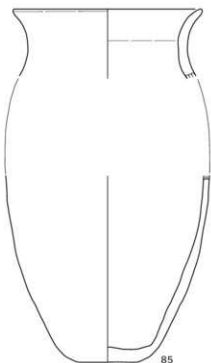
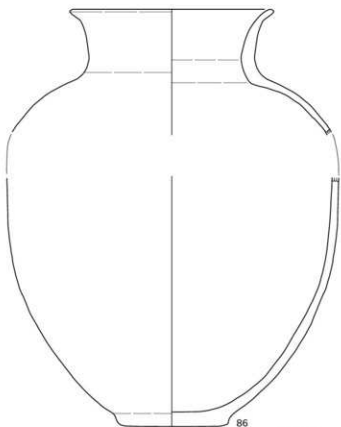
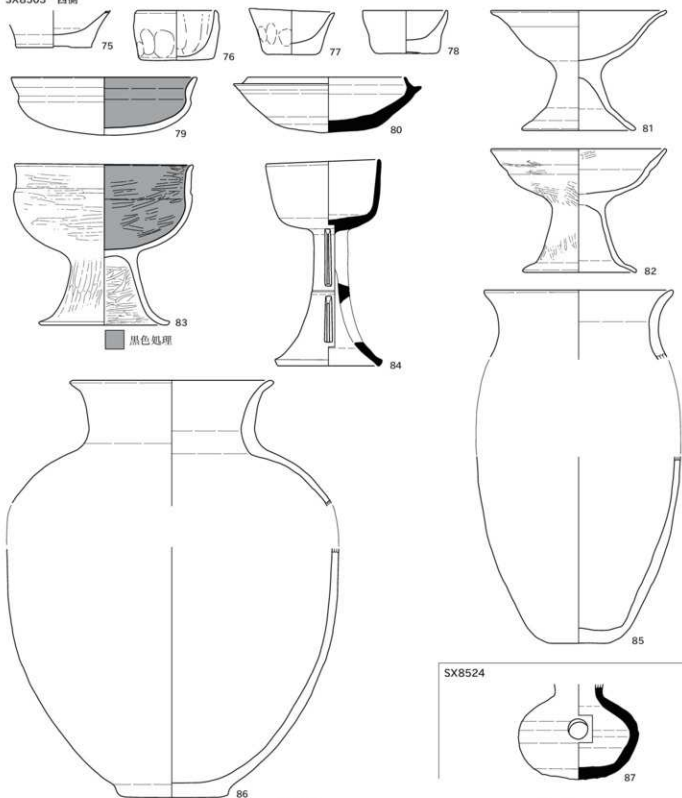
66類部拓本 (1:3)



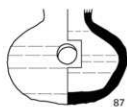
SX8503 東側



SX8503 西側



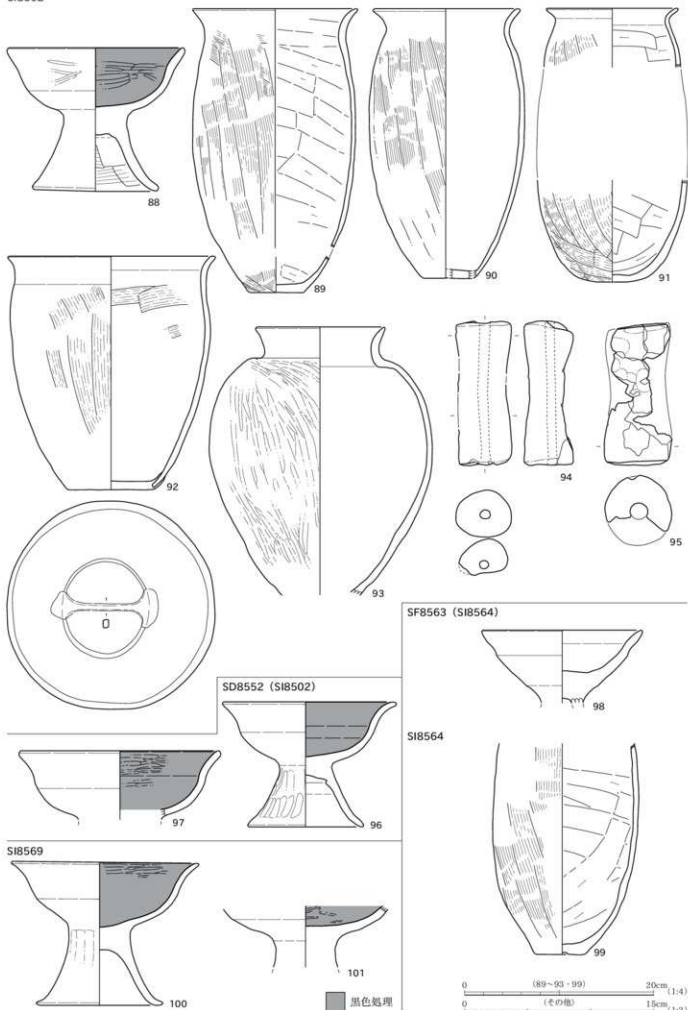
SX8524



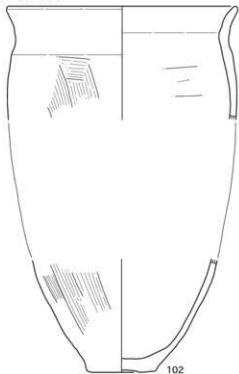
0 (73・74) 5cm (1:1)

0 (その他) 15cm (1:3)

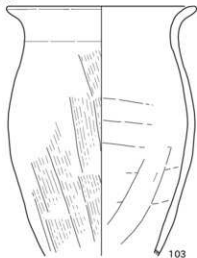
SI8502



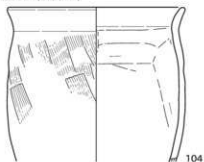
SF8566 (SI8569)



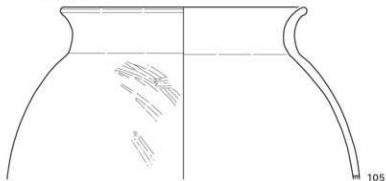
SI8569



SD8556 (SI8571)



SX8526



VIb層



106



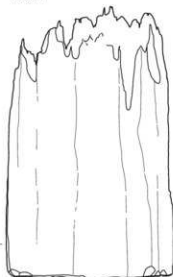
107

P8505



108

P8581

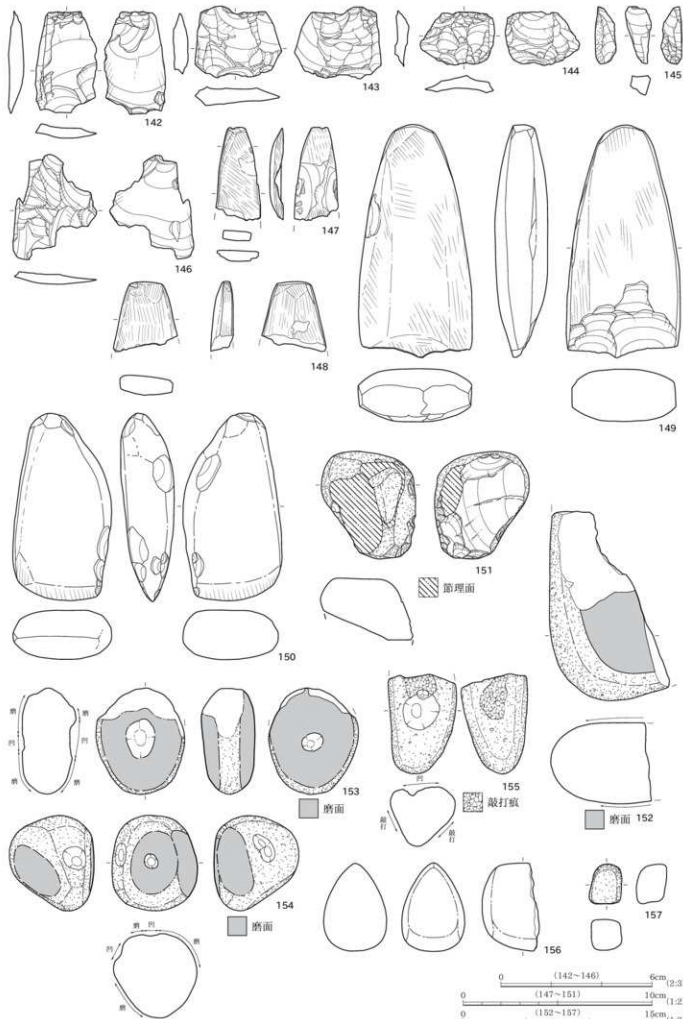


109

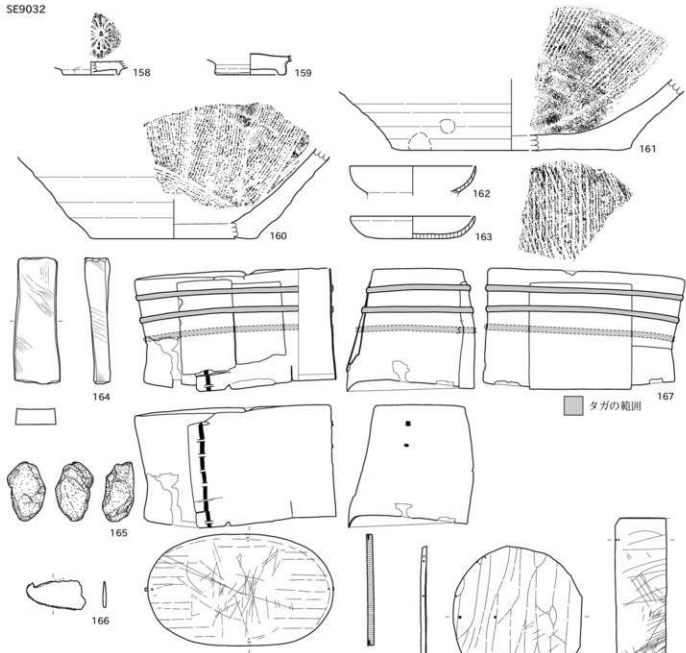
0 (108 - 109) 30cm (1:6)

0 (その他) 15cm (1:3)

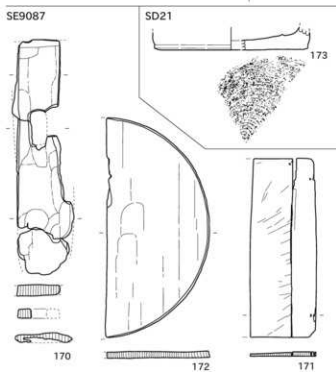




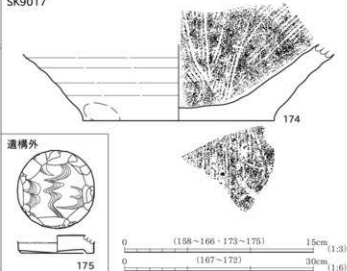
SE9032



SE9087

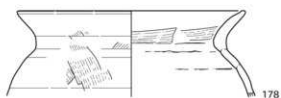
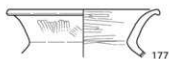
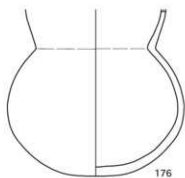


SK9017

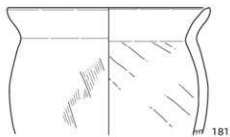
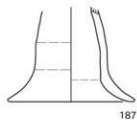
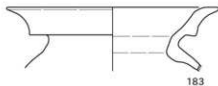
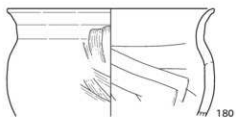
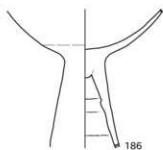
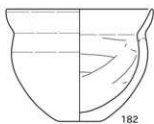
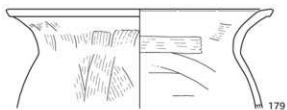


0 (158~166・173~175) 15cm (1:3)
0 (167~172) 30cm (1:6)

SK9091



遺構外





市道区・東区 遠景(南西から)



市道区 遠景(北東から)



第1面 全景(上空南西から)



第1面(49～53W、49～52X区) 検出状況(上空南東から)



第1面 全景(北東から)



第1面 全景(南西から)



第1面(48～53W、49～52X区) 完掘(上空北西から)



第1面(51・52W、51・52X区) 完掘(上空北東から)



第1面(49・50W、49・50X区) 完掘(北から)



第1面(45～47V・W、48W、49W・X区) 完掘(上空北西から)



第1面(41～43U・V、44V、45V・W区) 完掘(上空北西から)



SE8028 上部 完掘(北東から)



SE8028 完掘(北から)



畦畔 8021・SD8023・畦畔 8030・SD8024(左から順) 完掘(南東から)



SD8024・畦畔 8030・SD8023・畦畔 8021(左から順) 完掘(北西から)



SD8026 完掘(南から)



SD8027 完掘(南から)



SD8029・8027 完掘(南西から)



SD8031・8032・8033・8038 完掘(北西から)



SD8033・8032・8031(左から順) 完掘(南から)



SD8035 完掘(南東から)



SD8037 完掘(東から)



SD8041 完掘(西から)



SD8064・8065 完掘(西から)



SD8070 完掘(東から)



SD8071 完掘(北から)



SD8072 完掘(北から)



SK8062 完掘(南東から)



SK8066 完掘(北から)



SK8073 完掘(北から)



SX8039 断面(南東から)



SX8087 完掘(北西から)



畦畔 8022 完掘(北から)



畦畔 8034 断面(南から)



畦畔 8034 曝出土状況(南から)



畦畔 8034・8040 完掘(南西から)



第2面(41～43U・V、44V、45～47V・W区) 完掘(上空南東から)



SD8082(43V10・15区) 出土状況(南から)



SD8025・8026 断面(南東から)



SD8025 出土状況(南東から)



SD8053 断面(東から)



SD8054・8055 断面(東から)



SD8063 断面(西から)



SD8075 断面(東から)



SD8075 完掘(東から)



SD8076・8096 断面(西から)



SD8076 先掘(西から)



SD8082 断面(西から)



SD8082 (左)・8095 (右) 断面(西から)



SD8082 (43V10・15区) 出土状況(西から)



SD8082 (43V10・15区) 出土状況(南から)



SD8082 (43V10・15区) 出土状況(北西から)



SD8082 (43V8区) 出土状況(西から)



SD8082 (43V7区) 出土状況(西から)



SD8082 (奥)・8095 (手前) 完掘 (東から)



SD8082 完掘 (西から)



SD8084 完掘 (北東から)



SD8177 (右)、SX8100 (左) 断面 (南東から)



SD8177 (46W2・3・7・8区) 出土状況 (北から)



SD8177 出土状況 (東から)



SD8177 出土状況 (東から)



SD8177 炭化米出土状況 (東から)



SD8177 (右)・8187 (左) 完掘(北から)



SX8100 断面(南から)



SX8100、SD8177・8187 完掘(東から)



平行溝群(42・43U・V区) 完掘(東から)



第3面(49～53W、49～52X区) 完掘(上空南東から)



S88251・8252 完掘(北から)



S88259・8305・8306・8307 完掘(東から)



平行溝群 (47～50W、49・50X区) 完掘 (北東から)



SB8251・8252 完掘 (上空南西から)



SB8251・8252 完掘 (西から)



SB8251-P8202 断面 (南東から)



SB8251-P8202 出土状況 (東から)



SB8251-P8202 完照(東から)



SB8251-P8229 断面(東から)



SB8251-P8229 完照(東から)



SB8251-P8231 断面(南西から)



SB8251-P8231 完照(西から)



SB8251-P8249 断面(南から)



SB8251-P8249 完照(南から)



SB8252-P8126 断面(南から)



SB8252-P8126 完掘(南東から)



SB8252-P8155 完掘(北から)



SB8252-P8214 断面(南から)



SB8252-P8214 完掘(南西から)



SB8252-P8237 掘出土状況(西から)



SB8252-P8237 完掘(西から)



SB8259・8305・8306・8307 完掘(南東から)



SB8259・8307 完掘(南西から)



SB8259-P8260, SB8307-P8278 断面(西から)



SB8259-P8260, SB8307-P8278 完掘(西から)



SB8259-P8261 断面(南から)



SB8259-P8261 完掘(南から)



SB8259-P8262 断面(南から)



SB8259-P8262 礎板(59) 出土状況(南から)



SB8259-P8263 断面(南から)



SB8259-P8263 完掘(南から)



SB8259-P8264 断面(南から)



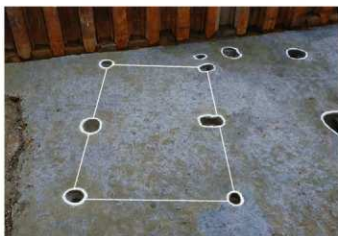
SB8259-P8264 完掘(南から)



SB8259-P8265 断面(南から)



SB8259-P8265 完掘(南から)



SB8305 完掘(北から)



SB8305-P8266 断面(東から)



SB8305-P8266 完掘(東から)



SB8305-P8267 断面(東から)



SB8305-P8267 完照(東から)



SB8305-P8270 断面(西から)



SB8305-P8270 完照(西から)



SB8305-P8271 断面(西から)



SB8305-P8271 完照(西から)



SB8306-P8272 断面(南から)



SB8306-P8272 完照(南から)



SB8306-P8273 断面(南から)



SB8306-P8273 完掘(南から)



SB8306-P8274 断面(南から)



SB8306-P8274 完掘(南から)



SB8307-P8277 断面(南から)



SB8307-P8277 完掘(南から)



SB8308 完掘(南東から)



SB8308 完掘(南から)



SB8308-P8281 断面(南から)



SB8308-P8283 断面(北から)



SB8308-P8290 断面(南から)



SE8123 瓢箪出土状況(東から)



SE8123 柄杓の柄(59)、碗(45) 出土状況(北西から)



SE8123 完掘(北東から)



平行溝群(48・49W区) 完掘(西から)



平行溝群(52・53W区) 完掘(西から)



平行溝群(52・53W、52X区) 完掘(東から)



SD8108 完掘(南から)



SD8110・8109・8082 完掘(東から)



SD8115(右)・8116(左) 断面(東から)



SD8120(左)・8121(右) 断面(西から)



SD8133 完掘(南西から)



SD8133 完掘(東から)



SD8139 断面(東から)



SD8154、P8155 断面(北から)



SD8162 (右)・8173 (左) 断面 (西から)



SD8164 (左)・8163 (右) 断面 (西から)



SD8181 断面 (西から)



SK8129 断面 (南東から)



SK8129 完照 (南東から)



SK8234 (左)、P8249 (右) 断面 (南から)



SK8234 完照 (南から)



P8125 断面 (南から)



P8147 断面(南東から)



P8147 完掘(南東から)



P8204 断面(南東から)



P8215 断面(南から)



P8215 完掘(北から)



P8244 断面(東から)



P8294 断面(南から)



P8309 鉢(55) 出土状況(南東から)



SX8311 突帯付の甕(66) 出土状況(東から)



SX8311 突帯付の甕(66) 出土状況(東から)



SX8311 断面(西から)



SX8311 突帯付の甕(66) 出土状況(東から)



SD8515 断面(東から)



SX8522 検出状況(東から)



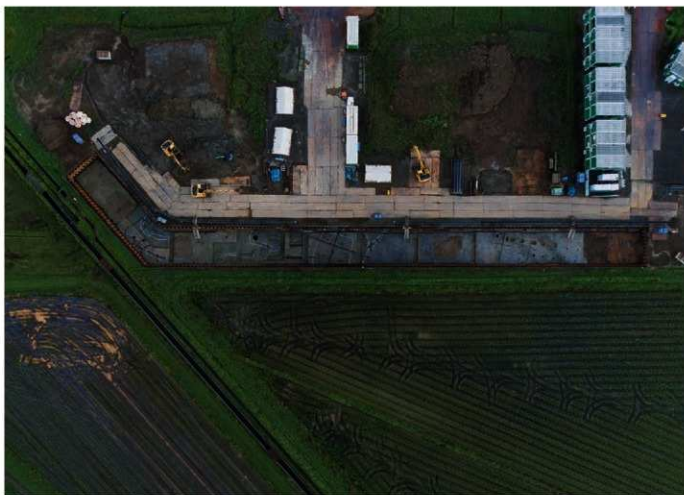
SX8522 断面(西から)



SX8522 甗(65)、炭化材 出土状況(東から)



SX8522 出土状況(東から)



第5面 全景(南東から)



SI8502 検出状況(南東から)



SI8502 完照(南東から)



S18502 出土状況(南から)



S18502 完掘(西から)



S18502 甕(90・91)、甗(92)、支脚(94) 出土状況(南から)



S18502 甕(93)、支脚(95) 出土状況(南から)



S18502-SF8542 検出状況(南から)



S18502-SF8543 検出状況(南から)



S18502-SF8544 検出状況(東から)



S18502-P8520 断面(南から)



SI8502-P8520 完掘(南から)



SI8502-P8523 断面(北から)



SI8502-P8554 断面(東から)



SI8502-P8554 完掘(東から)



SI8502-P8560 断面(南から)



SI8502-P8560 完掘(南から)



SI8502-P8581 断面(東から)



SI8502-P8583 断面(南から)



SX8503 (西側) 出土状況 (西から)



SX8503 (西側) 高杆 (B4) 出土状況 (南西から)



SX8503 西側 出土状況(西から)



SX8503 西側 出土状況(東から)



SX8503 西側 壺(86) 出土状況(西から)



SX8503 西側 手捏ね土器(75・76・78)、杯(79) 出土状況(北東から)



SX8503 東側 出土状況(南から)



SX8503 東側 出土状況(南から)



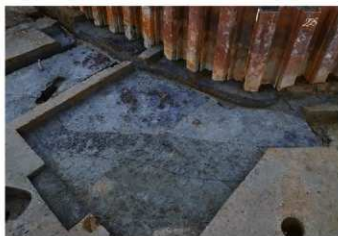
SX8524 罎(87) 出土状況(北から)



SX8526 壺(105) 出土状況(南西から)



S18564 断面(西から)



S18564 出土状況(南から)



S18564-SF8563 検出状況(南西から)



S18564-SF8563 出土状況(北東から)



S18564-SD8562 断面(北から)



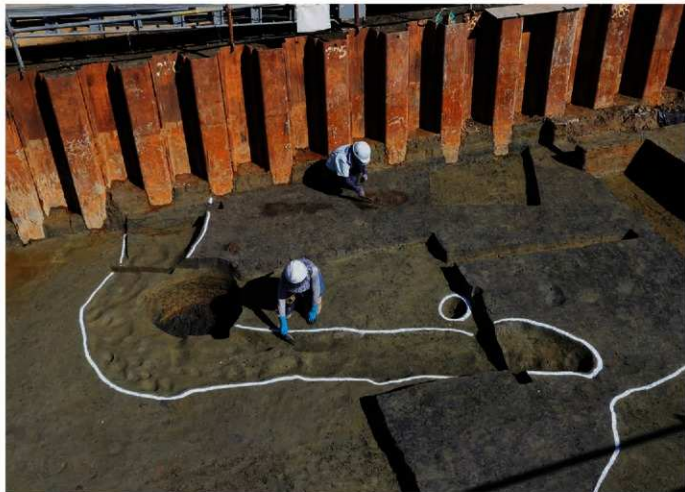
S18564 完掘(南から)



SD8515、SX8522、S18564 完掘(南から)



S18569-SD8565、S18571-SD8556 完掘(南東から)



SI8569 作業風景(南から)



SI8569-SF8567 検出状況(南から)



SI8569-SF8568 検出状況(南から)



SI8569-SF8568 断面(西から)



SI8569-SD8565 断面(西から)



SI8571-SD8556 断面(西から)



SI8571-SD8556 (49X4・5、50X1区) 出土状況(北から)



SI8571-SD8556 (49X4・5区) 出土状況(北から)



SI8571-SD8556 完掘(北から)



第6面 完掘(南東から)



第6面 完掘(南西から)



P8801 断面(西から)



P8806 断面(南東から)



P8806 完壺(南東から)



P8807 鉢(110) 出土状況(東から)



P8807 完壺(東から)



P8808 断面(北から)



P8808 完壺(北から)



SX8802 断面(北西)



SX8803 鉢(111) 出土状況(北西)



SX8804 出土状況(北から)



市道区基本層序② (南西から)



市道区基本層序③ (南から)



市道区基本層序④下部 (南西から)



市道区基本層序④ (南から)



市道区基本層序⑦ (南から)



東区基本層序⑨ (西壁) (南東から)



東区基本層序⑫ (西から)



東区上層合成写真(上空南東から)



東区上層方形区画満 完掘(上空東から)



東区 遠景（西から）



東区上層 完掘（東から）



東区上層 完掘（西から）



東区上層 完掘（西から）



東区上層（32・33T、32・33U区）完掘（南西から）



SB9052 完掘（南西から）



SB9052-P1 断面（北西から）



SB9052-P2 断面（北西から）



SB9052-P3 断面(北西から)



SB9052-P4 断面(北西から)



SB9052-P5 断面(南西から)



SB9052-P6 断面(西から)



SB9052-P7 断面(南から)



SE9006 断面上部(東から)



SE9006 完掘(西から)



SE9010 断面上部(北から)



SE9010 上部 完掘（北から）



SE9010 完掘（北から）



SE9011 断面上部（南東から）



SE9011 完掘（南東から）



SE9024 断面上部（南西から）



SE9025 断面上部（南西から）



SE9025 上部 完掘（南西から）



SE9025 完掘（北東から）



SE9032 断面上部(南東から)



SE9032 曲物底板出土状況(北東から)



SE9032 砥石出土状況(西から)



SE9032 木製品(167~169) 出土状況(南東から)



SE9087 断面(東から)



SE9087 木製品(171・172) 出土状況(東から)



SE9087 完掘(東から)



SD9000 断面(南から)



SD9001 断面（南から）



SD9002 断面（東から）



SD9003 火山灰検出状況（西から）



SD9003 断面（東から）



SD9018 断面（東から）



SD9020 断面（東から）



SK9004 断面（東から）



SK9008 断面（西から）



SK9009 断面(西から)



SK9008・9009 完掘(西から)



SK9017 断面(西から)



P9063 断面(北東から)



P9065 断面(北西から)



P9067 断面(北西から)



東区下層合成写真(上空南から)



東区下層 完掘(南東から)



東区下層基本層序④(東から)



東区下層 高杯(186) 出土状況(南東から)



SK9088 完甕(東から)



SK9091 断面(西から)



SK9091 丸底甕(176) 出土状況(西から)



SK9091 出土状況(北西から)



SK9092 断面(南から)



SK9092 完甕(南から)

IV層 (1)

SD8025 (2~5)



SD8075 (6~9)

SD8076 (10・11)

SD8082 (12~33)



SDB095 (34)



34



38



39



SDB177 (35~44)



35



36



37



41



40



44



43



42

SE8123 (45)



45

P8200 (47)



47

SDB117 (48)



48

遺構外 (51~54)



51



P8229 (46)



46

SDB156 (49)



49

SDB188 (50)



50



52



54



53

全て (1:3)

P8309 (55)



透構外 (189)



SE8123 (58)

P8262 (59)

P8098 (60)

P8205 (61)

P8244 (62)

SD8082 (56・57)



Va層 (63)

SX8522 (65)



SD8515 (64)



58~62 (1.8)
その他 (1.3)

SX8311 (66)



66

SX8503 東側 (67~74)



73

74

SX8503 西側 (75~84)



81



82



83



84

66 (1:6)
73・74 (1:1)
その他 (1:3)

SX8503 西側 (85・86)



SX8524 (87)



S18502 (88~92)



S18502 (93~95)



93

SD8552 (S18502) (96・97)



96



97

SF8563 (S18564) (98)



98

S18564 (99)



99

S18569 (100・101)



100



101



94



95

SD8556 (S18571) (104)



104



106

SF8566 (S18569) (102)



102



S18569 (103)



103

SX8526 (105)



105



107

全て (1/3)



縄文時代後期 出土遺物 (142~157)



SE9032 (167~169)



SE9087 (170~172)



SD21 (173)



SK9017 (174)



SK9091 (176~178)



遺構外 (179~188)



167~172 (1.6)
その他 (1.3)

報告書抄録

ふりがな	しもわりいせき なな だいじゅうじちようさ								
書名	下朝遺跡Ⅶ 第10次調査								
副書名	一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書								
巻次	15								
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第298集								
編者名	加藤 学・中島愛理（以上、公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、湯原勝美・細田尚克・斎藤泰洋・高尾将矢（以上、株式会社ノガミ）、赤堀店人・金井慎司・田中義文・斉藤崇人・井上智仁・東澤 翔（以上、バリノ・サーヴェイ株式会社）、卜部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所）								
編集機関	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団								
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津 93番地 1 TEL 0250 (25) 3981								
発行年月日	2024（令和6）年3月15日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
下朝遺跡 第10次調査	新潟県上越市 米岡・北田中 ほか	15222	266	市道区 37° 07' 54"	市道区 138° 18' 40"	20220421～ 20221117	5,436㎡ 市道区：4,033.83 第1面：995.68 第2面：224.01 第3面：995.68 第4面：435.42 第5面：995.68 第6面：387.36 東区：1,402.35 上層：1,174.33 下層：231.02	一般国道 253号 上越三和 道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
下朝遺跡 第10次調査	集落	縄文	ピット4基、遺物集中範囲2か所		縄文土器、土製品、楔形石器、磨製石斧、鍛石、石皿、磨石類、石冠		縄文時代後期前葉を中心とする。		
			古墳	土坑3基		土師器、軽石製研磨具		古墳時代前期後半を中心とする。	
			飛鳥	平地建物5棟、祭祀遺構3基、溝2条、費埋設遺構1基		須恵器、土師器、手捏ね土器、文脚、白玉		7世紀初頭～前半の建物域と祭祀域を検出した。	
			平安	掘立柱建物7棟、井戸1基、土坑10基、溝92条		須恵器、土師器、黒色土器、灰陶軸器、鉄洋、羽切、木製品（箸、柱根など）、炭化米		9世紀後半の遺構検出面を2面確認した。	
			中世	水田19枚、畦畔16条、溝29条、方形区画溝1基、掘立柱建物1棟、井戸10基、土坑10基		青磁、珠洲焼、越中瀬戸焼、木製品（漆器、曲物、折敷、柱根など）、火打金、火打石、砥石		東区では集落の外縁部、市道区では水田を検出した。	
要約	<p>第10次調査の調査区は、市道区と東区の2か所に分かれる。市道区は、中世、平安時代、飛鳥時代、縄文時代後期の6面の遺跡が累積する。中世は水田遺構を中心に検出した。平安時代（9世紀後半）は、上下2面の遺構検出面からなり、掘立柱建物や畑作溝等を検出した。掘立柱建物には大型が認められ、漆工房や文字に関連する資料が出たことから、地域における中心的な遺跡であったとみられる。また、火災を契機に、平安時代の遺跡が焼却を避えたと考えられた。飛鳥時代（7世紀初頭～前半）は、洪水堆積物をさき3面の遺構検出面からなる。周溝をもつ平地建物を検出した範囲の東側では祭祀域を検出した。土器の意図的な配置が認められ、手捏ね土器や白玉が出土したことから、土器集積遺構に通ずる祭祀遺構と考えた。また、つくりの精良な須恵器大衆の埋設遺構も注目される。縄文時代後期は、地下4mから検出した。遺跡の縁辺に当たり、遺構・遺物とも希薄であったが、後期前葉の遺物は信越国境の千曲川流域に共通性を見いだせた。ほかには北陸系や越後系の遺物も認められ、信州と日本海沿岸の接点に当たる高田平野の地域的特性を把握できた。</p> <p>東区は、上層と下層の2面の遺跡が累積する。上層では中世後期の集落の外縁部を検出した。井戸・掘立柱建物のほか、方形区画溝が注目される。下層では自然堤防の頂部付近で古墳時代前期後半の土坑を検出した。</p>								

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第298集
一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書 15
下朝遺跡Ⅶ 第10次調査

2024（令和6）年3月14日印刷
2024（令和6）年3月15日発行

編集・発行 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地 1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 株式会社ウィザップ
〒950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1番25号
電話 025 (285) 3311

頁	位置	誤	正
37	下から3行目	土師器甕(105)	土師器壺(105)
74	上から5行目	米山が、北西側に	米山が、北東側に
86～93	遺構観察表 (91頁 SX8039・8045・8046を除く)	サイズ(cm)	サイズ(m)
93～96	遺物観察表	法量	法量(cm)
94	土器・陶磁器観察表 報告番号75 備考欄	上げ底上	上げ底状
図版3	3-3'	SK8087	SX8087
図版8	3-3'	SD8082	SD8095
図版45	左上	Ⅳa層	Ⅵa層
図版97	報告番号43	(写真の配置誤り)	左へ90度回転